
交錯戦記 CROSS OF DESTINY

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

【Nコード】

N3834N

【作者名】

飛鳥

【あらすじ】

ある世界で事件が起きた

その事件とはある一人の少年の逃走である

その少年はその世界から抜け出した

この事件により全ての世界の『歴史』が大きく変化することになる

本来の『歴史』なら決して出会わなかった者達

本来の『歴史』なら既に死んだ者達

これは

世界に嫌われ運命に翻弄され、仲間を失った少年

人の『無限の欲望』によつて生み出された少女
かつて自分の犯した罪を贖罪し、消えていった少年
自分が信仰する2人の神の信仰の為に奮闘する少女
これ以上自分と同じ存在を作らない為に戦い死んだ少年
自分の能力だけを見られ、最後には見捨てられた少女
が数多の世界を駆け巡る物語である

ブローグ シン・アスカ編

CE74・・・

後に『メサイア戦役』とよばれるこの戦いが終結した。

この戦いの後、ラクス・クラインは『プラント』最高評議会議長に就任し、世界は平和に進みつつあるように見られた。

しかし、その裏ではかつてデュランダル前議長の旗の下で戦った者達や現在でもデュランダル前議長を支持する者達に対し徹底的な弾圧、また非人道的な実験が数多く行われていた。

少年『シン・アスカ』もまたかつてデュランダル前議長の下で戦ったパイロットである。その中でもFAITHであったシンを憎むクライン派も多くクライン派に捕えられた後最も残酷で非人道的な実験の実験台とされた。

それは不老不死の薬の実験台と現時点でのプラントでは禁止されている人体実験の実験台であった。

シンはそんな環境でもなんとか生き延びていた。しかしCE78・・・とある実験により悲劇は起きた。

それはデュランダル前議長実験室で発見された『デバイス』呼ばれる兵器の実戦テストであった。

その相手はシンのパートナーであったルナマリア・ホークであり、実験終了の方法はどちらかが死亡するまでである。

このとき2人に渡されたデバイスはデュランダル前議長が異世界の技術を使い、開発した物であり2人が乗っていたMSを基に製作され、性能も破壊力もMSと同等というあまりにも危険過ぎる代物であった。そして、お互いを戦わせることにより戦闘データの収集とデュランダル前議長派である2人を抹殺するために行われた。その結果シンは自分がパートナーであり、守ると誓った少女をこの手で殺してしまったのである。

これによりシンの壊れかけていた心は壊れてしまい暴走した。事態

を知ったキラ・ヤマトが駆け付けた時に見たものは屍の山・・・そしてルナマリアの亡骸を抱きながら慟哭するシンのみだった。

この悲劇の後、シンはキラによって保護される。

しかし、この行動によってキラは命を狙われ、最後はシンを庇い、命を落とした。シンにある願いを託して・・・

CE80・・・キラの願いを託されたシンはキラが用意していた『携帯型次元転送装置』を使い、このCEから旅立った。

シンが最初にたどり着いた世界は人間と魔族が戦争している世界であり、シンはこの戦争を『デバイス』を使用し終結させ、その世界を去った。

悠久の時を経て数多の世界を旅したシンはある世界で1人の少女と出会い、共に世界を旅することになる。

その旅の途中シンは新しくできたパートナーと共に傭兵として海底にある『レリクス』と呼ばれる遺跡の調査をすることになり、かつて死別した親友との再会と新たな仲間と出会うことになる。

その再会と出会いの後に全ての世界を賭けた戦いが始まりその戦いのリーダーになってしうことを知らずに・・・。

ブログ シン・アスカ編（後書き）

はじめまして飛鳥です。

今回初めて小説を書きました。

この小説の主人公であるシンは自分が最も好きなキャラクターです。原作では主人公の座から落とされたシンですがこの小説では主人公をしていけるように頑張りたいと思います。

こんな厨二的な展開の駄文ですが今後ともよろしくお願いします。

ブローグ スバル・ナカジマ編

新暦71年7月29日ミッドチルダ臨海第8空港・・・

今ここはロストギアと呼ばれる物によって大火災が発生し、必死の消火活動と救出活動が行われていた。しかし、全ての人が救出されたわけではなく、ある1人の少女が空港の奥に閉じ込められていた。その少女の名はスバル・ナカジマ・・・陸士108部隊隊長ゲンヤ・ナカジマの娘であり、戦いを好まぬ優しい少女である。

スバルは姉であるギンガと共に父であるゲンヤを迎えに来ていたが火災が発生した際にギンガと逸れてしまい、1人空港の奥まで来てしまう。

元の道に戻ろうにも激しく燃え上がる炎のせいで戻ることが出来ず、さらには進行方向にも炎の壁が出来てしまい動くことができなくなってしまう。

燃え上がる炎に恐怖を感じ、動けなくなったスバルに追い打ちを掛けるように近くにあった像がスバルの方に倒れてくる。

スバルは悲鳴を上げながら自分の死を直観した。

そして倒れてきた像がスバルを押し潰そうとした瞬間ひとつの影が現れ、倒れてきた像を切り裂いた。

その時スバルが見たものは機械の赤い翼を背負った少年であった。

その後、スバルはこの少年・・・シン・アスカと共に数多の世界を旅することになる。

それから4年後シンと共に色々な世界を旅したスバルは一人前のパイレーターとなり、シンと共にとある世界で傭兵として海底にある『レリクス』と呼ばれる遺跡の調査をしていた。

その調査の最中スバルはシンに次ぐ新たな仲間と出会う。

その出会いの後に全ての世界を掛けた戦いの中心人物となるとはこの時スバルは知らなかった・・・。

ブログ スバル・ナカジマ編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はスバル編となっております。

原作ではなのはに助けられるスバルですが今回はシンがスバルを助
けました。

個人的にシンとスバルは相性がよさそうなのでくつつけてみました。
こんな文が続きますがよろしく願います。

ブローグ リオン・マグナス編

かつて少年は少年大切な人を守るために仲間を裏切りその命を落とした。

その後エルレインと名乗る女性に蘇らせられた少年は彼女に背き1人の少年と出会う。

その少年はかつて自分が裏切った仲間スタン・エルロンの息子であるカイル・デユナミス達と出会い、カイルから新たな名前『ジューダス』という名を貰う。一度彼らと別れた少年であったがストレイズ大神殿にて再会し共に旅をすることになり、歪まれた歴史を正す為にエルレインと彼女を創った神フォルトゥナと戦い倒すことに成功する。

そして少年は歴史の修正作用によってこの世界から去った。

少年・・・リオン・マグナスは目を覚ますと自分が生きていることに疑問を感じていたが自分の服装と鞘に納まっている剣を見た瞬間驚愕した。

なぜなら今リオンが持っている剣は神の眼を破壊するために消滅したソーディアン・シャルティエ（以降シャルティエ）だったのである。

シャルティエは自分が存在していることに大いに混乱したがそれ以上に自分のマスターであるリオンが生きていることを喜んだ。

今の状況を確認するために行動するリオンだったがそこで見たことのないモンスターに遭遇する。いきなりのことです惑ったリオンだったがそのモンスター事態は想像以上に弱かったためすぐに倒せた。さらに探索を進めていたら突然悲鳴が聞こえたので悲鳴の聞こえる方向でリオンが見たものはモンスターが武器を持っていない少女に襲いかかっているところであった。

以前の彼ならそのまま放っておいただろうがスタンやカイルの影響

を少なからず受けていたのと、少女に襲いかかっているモンスターはさっき自分が倒した雑魚だったのでリオンは少女に襲いかかっているモンスターを両断し、少女を助けた。

少女を助けたリオンはそのまま去ろうとするが少女に頼まれ仕方なく共に行動することになり、さらにそこで新たな仲間と出会うことになる。

この出会いの後、全ての世界を賭けた戦いの中心人物になるとは知る由もなかった・・・。

ブローグ リオン・マグナス編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はリオン編を書きました。

リオンは個人的に好きなキャラクターの1人です。

この小説の中心人物の1人として登場してもらいました。
そしてリオンが助けた少女とは？

ヒントは東方プロジェクトの登場キャラクターです。

プロローグ 東風谷 早苗編

ある世界に2柱の神を祭っている神社がある。

そこには2柱の神を信仰している少女がいた。

今この神社・・・守矢神社ではある大きな問題に苛まれていた。

その問題とは信仰である。

この世界では思うように信仰が集まらず、神である八坂 神奈子と洩矢 諏訪子にとって信仰がないことは命に直結することになる。

八坂 神奈子と洩矢 諏訪子は思慮の末にある決意をする。

それは今この地にある信仰を代償に守矢神社を幻想にし、人と妖怪が共存している世界・・・『幻想郷』へ移動し、人と妖怪から信仰を獲得するというものであった。それは少女・・・東風谷 早苗にとつて自分が今まで住んでいたこの世界から離れるということであった。

早苗は長い葛藤の末に2柱の賭けに乗る事を決意し、自分が今まで住んでいた世界から去った。

だがここで大きなトラブルが発生する。それは次元移動をしている際に大きな歪みが発生し、早苗はその歪みの中に吸い込まれてしまったのである。

その後、目を覚ました早苗であったがまるで見覚えのない場所に自分がいて、神奈子と諏訪子の気配が感じられず、さらには早苗の秘術も使用できない状態であり、見たことのない異形に遭遇してしまう。

目を覚ました早苗であったがまるで見覚えのない場所に自分がいて、神奈子と諏訪子の気配が感じられず、さらには早苗の秘術も使用できない状態で見ただけのことのない異形に遭遇してしまう。

戦う術を持たない早苗は自分の死を覚悟した瞬間突然現れた少年によつてモンスターは倒され、九死に一生を得た。

助けられた後は助けてくれた少年と共に行動するようになり、遺跡を探索をしている途中で新たな仲間と出会う。

この出会いの後に全ての世界を賭けた戦いが始まり、自分がその戦いの中心人物になることになるとは今の早苗には知る術が無かった・
・。

プロローグ 東風谷 早苗編（後書き）

ども飛鳥です。

今回は早苗さんのお話です。

この作品の設定ではしばらくの間彼女は一子相伝の秘術を使えませ
ん。

なぜ彼女に登場してもらった理由としてはマリ안의代わりにリオ
ンの支えとなるのは彼女かなと思いつきました。

さて、今回は種死からもう1人登場してもらいます。

ヒントはシンにとって親友でありライバルである彼です。

では、失礼します。

ブローグ レイ・ザ・バレル編

少年は生まれた時から寿命が短かった。

なぜなら少年・・・レイ・ザ・バレルはある男のクローンとして生まれ生まれ時からテロメアが短く今では数年位までしか生きることができなかった。

彼と同じ存在であつた男は世界の全てを憎み最後は自由の剣によって倒され果てた。

レイはこれ以上自分と同じような存在を創りださせない為にデュランダル議長の下で戦う決意をし、アカデミーの仲間のシンとルナマリアと共に世界を駆け巡った。

そして、デュランダル議長の夢のあと一歩までに近づいた。しかし、最終決戦の際に自分を創りだした原因であるキラに敗れ、最後には自らの手でデュランダル議長を撃つてしまう。悲しみと後悔に苛まれたレイはやってきたタリアと撃ってしまったデュランダル議長と共に散ることを決意するが、シンの言葉に覚悟を揺さぶられ、最早虫の息であるデュランダル議長からある物を渡された瞬間眩い光に包まれ、CEから姿を消した。

その時デュランダル議長の口はこう動いていた。

『私達の分まで精一杯生きてくれ』と・・・

眩い光に包まれ意識を失っていたレイは目を覚ますと記憶にはない場所に自分が倒れていた。

身体を起こしたレイは状況を確認するために周囲を探索していたら1人の少女と出会う。

その少女は見たことのないなぞの異形に襲われており、レイは少女を助けようとするが自分は装備を持っていない状態であることを知っているため何もすることができない。

そんな状況を齒痒く思っていたレイだったがデュランダルから渡さ

れた物が光りだしたと思ったらしいの間にか自分の姿がMSのレジ
エンドを鎧として来ているような姿になっていることに当惑するが
武器があると分かりその異形を倒した。

異形を倒した後奥へと進むレイと少女だったが見たことのない人型
兵器に襲撃される。辛くも撃退した2人だったがレイは持病が再発
し、動けなくなつたところを再起動した人型に再度襲撃される。レ
イは身体を張つて少女を守るが致命傷を負つてしまい倒れてしまう。
レイが守つた少女は何かを言っているがあまり聞き取れず意識が闇
の中に落ちていく中少女とは違う声が最後に聞こえた。

『あなたを死なせはしません・・・』と

その後、意識を取り戻したレイは自分の親友と再会する。
再会の後さらなる出会いがレイを待っていた。

その出会いの後に全ての世界を賭けた戦いに参加し、自分がその中
心になるとはこの時のレイは知らなかった・・・。

プロローグ レイ・ザ・バレル編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はレイに登場してもらいました。

シンを出すならレイもつとということで彼に登場してもらいました。

次回でプロローグは終わりです。

プロローグ最後に登場するキャラクターは、ファンタシースターポ
ータブル2から天才少女が登場します。

ではありがとうございました。

プロローグ エミリア・パージパル編

母なる太陽とパルム・モトウブ・ニューデイズの3つからなるグラール太陽系……

この星系は3年前『SEED事変』と呼ばれる謎の生命体の襲撃とそれを利用しグラールを滅ぼそうとしたハウザーらの事件からの傷跡は未だに残されていた。

今、グラールでは資源枯渇等による危機的な状況から脱出するためにインヘルト社の代表ナツメ・シュウの唱えた亜空間航行理論の研究とそれへの資金援助開発が進められていた。全てはグラールの新しい未来のために……。

パルム海底レリクス

SEEDの襲来の後多数発見されたレリクスの中でも最近見つけられたもので数多の企業はこの未開のレリクスに新たな発見を求めるために傭兵を雇い調査を進めようとしており、ここにはたくさんの傭兵が来ていた。

そんな中この場には似つかわしくない少女が1人いた。

その少女……エミリア・パージパルは自分の引き取り手であるクラウチ・ミユラーによって無理矢理民間軍事会社……『リトルウイング』に加えられ、今回このレリクスの調査に参加させられることになる。

依頼を探してくる言ったクラウチを見送った後突然エミリアは頭痛に苛まれる。

そして、気が付いたらいつの間にか自分1人となっており、何もできないまま立ちつくしていたらいきなり原生生物に襲われてしまう。戦闘経験のないエミリアはただ逃げ回ることしかできず、とうとう追い詰められ、死を意識した瞬間突然現れた少年が現れ、原生生物

は彼の手によって倒された。

助けられたエミリアはその少年に礼を言う。エミリアを助けた少年はレイと名乗りここから脱出するために行動を共にし、レリクスの最深部に到着する。

最深部について安心したエミリアだったが、機能停止していた筈のスタテイリアが突如起動し、エミリア達に襲いかかってきた。

なんとか応戦し撃退したエミリア達だったが、突然レイが苦しみだし心配になったエミリアがレイの方に注意が向いた時、再起動したスタテイリアがエミリアを攻撃しようとした。

エミリアは今度こそ死んだと思った瞬間、レイがエミリアを突き飛ばし身代りになった。

このあとの記憶はエミリアには無くレリクスで起こったことは夢の中だと自己完結した時、クラウチから呼び出される。最初は拒否したエミリアだったが結局クラウチに押し切られ、リトルウイングへ向かうことになる。

その時エミリアは新たな仲間と出会うことになる。

その出会いの後に全ての世界を賭けた戦いになりエミリアがこの戦いの中心人物になるとは彼女は知らなかった・・・。

プロローグ エミリア・パージパル編（後書き）

ども飛鳥です。

今回でプロローグはラストになります。

最後に登場してもらったキャラクターはエミリアです。

彼女はファンタシースターポータブル2では欠かすことのできないキャラです。

この小説ではレイやシン達と共に依頼をこなして成長していくという過程を書きたいと思います。

では次から本編に移りたいと思います。

第1話前編『海底レリクス』

シン・スバル side

ホルテスシティシンとスバルの家

シン

「『海底レリクスの調査』？」

スバル

「うん。なんでも最近発見されたレリクスらしくて今回の依頼者はどの会社よりも早くこのレリクスを調査したいんだって」

ここはグラール太陽系の惑星パルムのホルテスシティ。
拠点としている街である。

シンとスバルはグラールで起きた『SEED事件』と呼ばれる事件の直後にこのグラールを訪れ、SEEDに汚染された原生生物に襲われている女の子をスバルが独断で倒し、その時の言い訳で傭兵だと名乗ったのがきっかけで傭兵を始め、小さな依頼をこつこつとこなししていく内に信頼を得ていた。

そんなある日にある依頼がシンとスバルの元に届いた。

依頼主は最近急成長をしているインヘルト社からの依頼で、『近年発見された海底レリクスが他の会社が海底レリクスを調べられる前に他の会社より先行して調査をしてほしい』

という内容であった。

シン

「先行しての調査か……。報酬もそれなりに高いし、受けるか！
スバル

「うん！」

報酬も相応の額であるため、シンとスバルはこの依頼を受けることにした。この後大量のステイリアを相手にする羽目になるとは知

らずに。

海底レリクス

シン

「で、この結果かよ！」

スバル

「ちょっとこれ洒落にならないよ・・・（汗）」

シンとスバルが遭遇したのは30機のスヴァルティアであり、スヴァルティアは侵入者であるシンとスバルを追い返そうと斧で威嚇している。

スバル

「どうするシン？」

スバルがシンにどうするかと尋ねたらシンの返事はこうだった。

シン

「逃がしてくれるとは思えないから・・・一気に倒すぞ！」

スバル

「だよね！じゃあ・・・」

シン

「デステイニー！」

スバル

「インパルス！」

シン・スバル

「「セットアップ！！」」

シンとスバルはデバイスを起動させスヴァルティアの方へ突撃していった。

リオン・早苗 side

海底レリクス

このレリクスはSEED事件の後最近になって発見され、人の手が届いていない未開のレリクスである。

そう、ここには人はいないはずである。

しかしそこにはふたつの人影があった。

リオン

「武器を持たずに遺跡を歩くとは・・・お前は馬鹿か？」

早苗

「そんなこと言われても無い物は無いんですから仕方ないじゃないですか！」

シャルティエ

『まあまあ、早苗さん。落ち着いて下さい』

ふたつの人影の持ち主であるリオンと早苗はつい先ほど早苗が襲われている所をリオンが助けたのはいいが早苗が武器を持っていないことにとことん呆れているリオンとそれに対してムキになって反発している早苗とそんな早苗を宥める剣、シャルティエという状況である。

そんなこんなで仲のいい(?) 2人だったが、シャルティエが何かを見つけたようである。

シャルティエ

『坊ちゃん！早苗さん！敵を発見しました！』

リオン

「わかった。僕の後ろにいろ」

早苗

「え？で、でも・・・」

リオン

「武器を持っていない奴が前に出ても足手まといになるだけだ」
早苗

「うう……。わかりました……」

シャルティエ

『坊ちゃん敵の数は2体です!』

早苗がリオンの後ろに隠れた瞬間、モンスターダヴァラスが突撃してきた。

リオンはシャルティエを抜き放つと

リオン

「幻影刃!」

すれ違いざまに切りつけダヴァラスを両断し、さらにもう一体のダヴァラスを

リオン

「グレイブ!」

土の昌術で尖った岩をダヴァラスの下に発生させ下から上へ尖った岩で貫いた。

リオン

「勝てると思っているのか?」

リオンはそう呟いて後ろを振り返ると早苗が何かを拾っているのを見た。

リオン

「おい。何をしている？」

早苗

「あ、リオンさん実はリオンさんがさっき倒したモンスターから何か出たのでそれを拾ったんです」

早苗は拾った物をリオンに見せるがリオンにはこれが何なのか分からなかった。

リオン

「なんだそれは？」

早苗

「たぶん銃だと思います」

リオン

「銃？」

シャルティエ

『僕も聞いたことがありますね』

リオンとシャルティエの世界には銃というものは無い。
そのため何に使う物なのかはもちろん知っている筈がない。
そこで早苗は銃について簡単な説明をすることにした。

早苗

「えっと……。銃というのは遠くの敵に攻撃ができる武器です」

リオン

「弓のようなものか？」

早苗

「まあそれを誰でも使えるようにした物だと考えてもらってもいいですよ」

シャルティエ

『便利な武器もあるものですねえ……。』

リオン

「そうか……。ならそれはお前が使える」

早苗

「えっ？」

リオン

「誰にでも使えるのだろう？なら武器を持っていないお前がもっておけ」

早苗

「は、はあ……」

リオン

「ならさっさと行くぞ」

早苗

「えっ、ちよっ、待ってくださいーい！」

シャルティエ

『（仲いいなあ……）』

そんな2人をシャルティエは微笑ましく見ていた。

レイ・エミリア side

海底レリクス

レリクスを出る手がかりを探して周囲を探索していたレイはモンスターに襲われていたエミリアを助けた。

レイ

「大丈夫か？」

エミリア

「う、うん……」

エミリアが無事だということが判断したレイはここがどこなのかを尋ねてみることにした。

レイ

「そうか。すまないがここはどこだか知らないか？」

エミリア

「え・・・？」

当然そんな事を聞かれることを想定していなかったエミリアは大いに戸惑った。

エミリア

「あんた・・・ここがどこだか知らないの！？」

レイ

「ああ。いきなり光に包まれたらいつの間にかここにいた」

レイの眼を見て嘘を言っているわけではないと判断したエミリアはとりあえずここがどういう場所なのかと、自分達がおかれている状況を説明した。

レイ

「なるほど・・・。つまり頭痛にうなされている間に閉じ込められたということか？」

エミリア

「う、うん・・・」

レイ

「となると奥に進むしかないようだ・・・」

エミリア

「ええ！？ムリムリ！ヤダヤダ危ないって！ここは未開のレリクスなんだよ！スッゴイ危ないんだよ！」

レイ

「だがこのままこの場においても事態は好転しないぞ？」

そう言ったレイはそのまま奥へと進んでいく。

エミリア

「ええ！？本当に1人でいっちゃうの！？」

レイ

「ああ。そのつもりだ」

エミリア

「あつ！待って！行くから！」

レイ

「そうかでは行くぞ」

エミリア

「あ、ちょっと待って？」

そう言つて再び先へ進もうとするレイだったが再びエミリアに呼び止められ振り返る。

レイ

「今度はなんだ？」

エミリア

「名前、聞いてなかったから。あ、私はエミリア。エミリア・パ
ジパル。あんたは？」

レイ

「レイ。レイ・ザ・バレルだ。よろしく頼むエミリア」

互いの自己紹介を終えたレイとエミリアはレリクスの奥へと進むの
であつた・・・。

第1話前編『海底レリクス』（後書き）

ども飛鳥です。

今回から本編に突入します。

会話とかを考えるのは難しいですね（汗）

スバルの使用しているデバイスですがプロローグの時点ではマッハキャリバーを持ってないためシンが持っていたデバイス『インパルス』を使用しています。

では失礼します。

第1話中編『海底レリクス』

シン・スバル side

海底レリクス

30機のスヴァルティア遭遇から1時間後

シン・スバル

「これで！終わりだ！！」

30機のスヴァルティアを相手にしていたシンとスバルだったがスヴァルティアの攻撃を見切り、1機ずつ確実に倒していき最後のスヴァルティアも斧を振り降ろして隙ができた所をそれぞれ持っていたアロンダイトとエクスカリバーで突き刺し、二人同時に斬り払って倒した。

シン

「ぜえっぜえっ・・・やつと片付いたか・・・」

スバル

「はあっはあっ・・・っ、疲れた・・・」

シン

「さすがに少しキツかったな・・・」

スバル

「30機相手はシンドイ・・・」

シン

「スバル。動けるか？」

スバル

「まだまだ戦えるよ！・・・というわけじゃないけど動くだけなら大丈夫だよ」

シン

「そつか……。じゃあ奥へ行くか！」

スバル

「うん！」

1機を1分で倒していたとはいえ30機を相手に戦っていただけにスバルの疲労は激しかったが動けない程ではなかったので2人はそのまま奥へ進むと行き止まりになっていた。

海底レリクス

スバル

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

行き止まりになっていたことに硬直するスバルだったがシンは部屋の中央に端末らしきものと箱らしきものを発見した。

シン

「この端末は……」

スバル

「どうしたの？シン？」

シン

「ああ。この端末なんだがおかしくないか？」

スバル

「どこがおかしいの？」

シンが言ったことがイマイチ分からなかったスバルだったがシンが次に言った言葉によってシンがなにを言いたいのかが分かった。

シン

「この端末、俺の見間違いじゃなければスバルの居たミッドチルダ

の物じゃないか？」

スバル

「確かに言われてみればこれミッドチルダで使われてる端末だよ！」
シン

「しかも放置されてからあまり時間が経ってない・・・だいたい2週間から3週間くらいだな・・・」

スバル

「なんでこんな物がこんなところにあるんだろ？」
シン

「詳しいことは俺には分からない。ただミッドチルダの人間がここにいた。そして・・・」

そう言いながらシンは端末を起動させるとそこには何かの研究レポートが記録されていた。

少年少女閲覧中・・・

スバル

「『ロストギア【エルシディオン】と【レヴァンティン】の威力と効果に関する結果と考察』？」

シン

「『報告先・・・時空管理局』だと・・・」

スバル

「時空管理局ってお父さんとギン姉が働いている組織だよ？」
シン

「ああ。となると時空管理局は2週間から3週間前にここに来てそのロストギアの研究を行っていた」

スバル

「となると箱の中身ってもしかして・・・」

レポートの内容を見てまさかと思って端末の近くにあった箱を開けたスバルが見た物は4振の剣であった。

シン

「たぶんこの剣が【エルシディオン】と【レヴァンティン】だろうな」

スバル

「どうするの？」

シン

「この端末のデータをコピーしたらこの端末を破壊してこの剣は俺達が持つていこう」

スバル

「ええっ！？それって思いっきり泥棒なんじゃ？」

シン

「元々この剣は時空管理局の物じゃない。それに・・・」

スバル

「それに？」

シン

「こいつは時空管理局が持つていていい物じゃない」

シンは今までの戦いで培ってきた勘でこの剣が時空管理局の手に渡るのは危険だと判断した。

シン

「データも取れたことだし俺は【レヴァンティン】を持つていくからスバルは【エルシディオン】を頼む」

スバル

「うっやっぱり人の物を盗むのは気が引けるなあ・・・」

シン

「誰かに悪用されて力の無い人が苦しむよりはいいだろ？」

シンは今まで愚かな権力者が大きな力を持ち、それによる弾圧などで苦しんでいる力のない人々を見てきたシンだからこそ導きだした結論である。

その後、シンとスバルは端末のデータを消して破壊し、依頼主へ報告をするために戻る為に元来た道に戻っていたらそこで1人の男とあった。

男

「すまねえ！あんたらは見た所傭兵のようだが頼みがある！」

スバル

「えっ？」

いきなりのこととで混乱するスバルだったが男はそんなことを無視して話を続ける。

男

「ウチの会社の奴がポカッて行方不明になっちまったんだ。そいつを探すのを手伝ってくれねえか？」

シン

「分かりました。その依頼を受けます」

男

「すまねえ！助かる！俺はクラウチ・ミューラー民間軍事会社リトルウイングの代表をやってるもんだ」

シン

「俺はシン・アスカです。で、こっちがスバル・ナカジマです」

クラウチ

「わかった。じゃああんたらはこのレリクスの北の最深部へ向かってくれ！俺は西の最深部まで探す！」

シン

「分かりました！いくぞ！スバル！」

スバル

「う、うん！」

依頼の受諾と自己紹介とパートナーのスバルの紹介を終えたシンは
やっと混乱から復帰したスバルを連れ最深部へと向かった。

1時間後

シン

「ここが最深部か・・・」

スバル

「シン！あそこに人が！」

海底レリクスの最深部へ着いたシンとスバルは倒れている2人の少年と少女を発見した。がそれはシンにとってはあまりにも意外過ぎる人物だった。

シン

「ウソだろ・・・」

スバル

「シン？」

シンからただならぬ雰囲気を感じ取ったスバルが声を掛けるが今のシンには聞こえなかった。なぜなら・・・

シン

「なんでレイがこんなところにいるんだ！」

その少年はかつて死別した親友レイ・ザ・バレルだったのだから・
・。

リオン・早苗 side

海底レリクス西部

探索開始から1時間後

早苗

「はあ・・・はあ・・・リオンさん少し休憩しませんか？」

リオン

「だめだ。あれから1時間しかたっていないんだぞ？」

早苗

「1時間も歩き続ければ普通は疲れます！」

シャルティエ

『坊ちゃん。僕も早苗さんの意見に賛成です』

リオン

「シャル！お前まで！」

シャルティエ

『確かに急ぐ旅路ですけど早苗さんが戦闘の時に動けなくて坊ちゃん
の動きに制限が掛かってしまいます』

リオン

「それもそうだな・・・仕方ない10分だけだぞ」

1時間ずっと歩いていたリオンと早苗だったがついに早苗が根を上げた。リオンも最初は無視していたが早苗がだんだんしつこくなってきたのとシャルティエの助言もあったので小休止をとることにした。

少年少女小休止中・・・

早苗

「そつえばリオンさんはどこから来たんですか？」

リオン

「それを聞いてどうする？」

早苗

「いえ・・・少し気になっただけです」

リオンは話そうかどうか迷ったが早苗の眼を見ているうちに今はもう会うことのできない仲間とその息子・・・スタンとカイルを思い出した。

そしてこの眼をしている奴はいくら言っても聞こうとすると判断した。

リオン

「セインガルドだ」

早苗

「セインガルド・・・ですか？」

リオン

「なんだ？」

早苗

「いえ・・・なんでもないです！」

リオン

「もう10分たった。いくぞ」

早苗

「は、はい！」

10分ばかりの小休止を終えたりオンと早苗は探索を再会しようとしたがそこに1人の男が現れた。

男

「お、あんたらも傭兵か？」

早苗

「えっ？ええつと・・・」

いきなりのことで戸惑う早苗だったがそこにリオンが割って入る。

リオン

「ああ。そうだ」

早苗

「（ちよつ、リオンさん！？）」

リオン

「（今は口裏を合わせろ。いいな？）」

早苗

「（は、はい）」

男

「どうしたんだ？」

リオン

「いや、なんでもない」

男

「そうかい。あんたらも傭兵なら依頼したいことがあるんだがいいか？」

リオン

「内容にもよる」

男

「ああ実はウチの社員がヘマしちまってな。このレリクス内に閉じ込められちゃったらしくてそのまま奥へ行っちゃったらしい」

リオン

「つまり僕たちはその社員を救出すればいいんだな？」

男

「ああ。それで引き受けてくれるか？」

リオン

「報酬は？」

男

「これくらいでいいか？」

男が見せた金額は15000メセタ。1人の社員を救出する依頼としては破格の値段である。

リオン

「わかった。引き受けよう」

男

「そうか！ありがたい！」

早苗

「えっと名前を教えてもらってもいいですか？」

男

「そういや自己紹介がまだだったな。俺はクラウチ・ミユラーだ」

リオン

「リオン・マグナスだ」

早苗

「東風谷早苗です」

クラウチ

「そんじゃ早速あのバカタレの救出に行くか！」

早苗

「あっ！待って下さい！」

クラウチはそう言って先へ進もうとするが早苗がそれを止めた。

クラウチ

「ああん？まだなんかあるのか？」

早苗

「その先には誰もいませんよ！」

リオン

「僕たちはここ最深部まで行ってきたが誰もいなかった。別の方
向を探すべきだろう」

クラウチ

「あんたらしいの間にそこまで行ってたんだ？」

クラウチが痛いところを指摘してきたがこれに対してリオンは冷静
に応対した。

リオン

「これだけのレリクスだ。先に調査をしている奴がいてもおかしく
はないだろう？」

クラウチの疑問はまだ残っていたがさつき会った少年と少女を思い
出し深く追求をすることはしないことにした。

クラウチ

「ここにはいねえとなると北側の最深部か・・・」

リオン

「東側にはいなかったのか？」

クラウチ

「東側はあんたらと同じく先に調査をしてた奴らがいたがそこには
いなかったらしい」

早苗

「南側はどうなんです？」

クラウチ

「あっちの方はもう調査済みだ」

リオン

「そうなる後は北側か・・・」

早苗

「行きましょう!」

リオン

「ああ」

クラウチ

「おう!」

早苗がそう言うところ人は北側最深部へ向かった。

海底レリクス北側最深部

クラウチ

「ここが最深部らしいな」

リオン

「そのようだな」

早苗

「あつ!あそこを見てください!」

最深部に着いたりオン達が見たものは折り重なるように倒れている少年と少女、そして彼らを助け起こそうとする少年と少女だった。

クラウチ

「やっと見つけたぜ!あんたらも手間を掛けたな」

リオン

「依頼を受けたのは僕達だ。気にしないでいい」

早苗

「そうですよ!困った時はお互い様です!」

クラウチ

「そう言ってくれると助かるがこれじゃあ俺達にとってしめしがつかねえ」

リオン達はそう言ったがクラウドは納得できなかったらしくしばらく考え込んでいたら何かを思いついたらしい。

クラウド

「そうだあんたら俺の会社で働かねえか？」

クラウドの提案とはリオン達をリトルウイングへ入社させることだった。

クラウド

「衣食住は保障するし給料も働きに応じて出すぜ」

クラウドの提案は今のリオン達にとっては非常に魅力的な内容だった。

早苗

「どうしますかりオンさん？」

リオン

「今、僕達が必要な内容は全て揃っている。この申し出は受ける価値はある筈だ」

早苗

「そうですね！クラウドさん、その申し出はありがたく受けさせていただきます！」

クラウド

「おっ、そうか！それじゃあ俺達の本拠地クラッド6へ案内するぜ！で、もう一方のあんたらはどうするんだ？」

シン

「俺達もその申し出を受けさせてもらいます」
スバル

「でも先に依頼主への報告と家の片づけをしないといけませんから」
シン

「正式な手続きはまた今度でよろしいでしょうか？」
クラウチ

「ああ。俺は構わないぜ。それじゃ行きますか！」

こうしてリオンと早苗はクラッド6へ入りリトルウイングへ入社したのだった。

レイ・エミリア side

海底レリクス

シン達がクラウチと出会う2時間ほど前

互いの自己紹介を終えたレイとエミリアは敵を倒しながら奥へ進んでいた。

エミリア

「すごい・・・」

レイ

「これくらいなら造作もない」

エミリア

「なんか安心したよ！あんと一緒に安全っぽいし！」

レイ

「そうか？」

エミリア

「うん！」

そこでふとレイは疑問に思ったことを口にした。

レイ

「なぜエミリアはこんなところにいたんだ？」

レイがそれを地雷だと気付いたのは言うてからすぐのことだった。なぜならそのことを言った瞬間エミリアの機嫌が一気に悪くなっていたのである。

エミリア

「ああ・・・そのことね。」

レイ

「エミリア？」

エミリア

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで戦うつつもりはこれっぽちもないし！そもそも軍事会社に登録されたのもおっさんに強引に登録させられただけだし！それに今回のレリクス調査だってもうSEEDがないからもうレリクスは安全だって言うて強引に連れてこられただけだし！」

レイ

「落ちてエミリア。お前は少し錯乱している」

エミリア

「ぜえっぜえっ！ごめん。ついカッとなって」

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「そう。ありがとう」

レイ

「すこしここで休憩にしよう」

エミリア

「サンセー・・・」

さっきまで慣れない戦闘続きでかなり体力を消耗していたレイとエミリアはすこし休憩することにした。

少年少女休憩中・・・

エミリアは今レイが装備している鎧を不思議そうに見ながらレイに話しかけた。

エミリア

「ねえ。あんたのその鎧ってなに？」

レイ

「ああ。これか？」

エミリア

「そそ。大抵傭兵といってもシールドラインがあるから私服で戦っている人がほとんどだからね」

レイ

「シールドライン？聞くだけだと一種のバリア発生装置のようだが？」

エミリア

「ええっ！？あんたシールドラインをしらないの！？」

レイ

「ああ。」

エミリア

「信じられない・・・。よく生きてたね・・・」

レイ

「ああ。おそらくはこの鎧のおかげだな」

エミリア

「ナノトランサーも無いのにどこからともなく武器を出しているし・

・・・」

??????

『そのことなら私が説明しましょう』

レイ・エミリア

「「!?!」」

いきなり知らない声が聞こえたので警戒をするレイとエミリアだったがその声に敵意はないので声のする方向をすると

??????

『こちらです』

声のしてきた場所はレイの鎧に着いている緑色の球からだった。

レイ

「そうか。いくつか質問があるがいいか？」

??????

『はい』

レイ

「一つ目。お前は何者だ？」

??????

『私はデバイス・レジェンドと申します』

レイ

「レジェンド？MSのレジェンドか？」

レジェンド

『武装に関してはそう考えてもらってもよろしいかと』

レイ

「二つ目。デバイスとはなんだ？」

レジェンド

『デバイスとは異世界の技術であり、対人戦闘を想定して創られた兵器です』

レイ

「三つめ。デバイスのエネルギー源とはなんだ？」
レジェンド

『ある特定のエネルギーをエネルギー源としています。これの技術を発明した世界では【魔法】と呼ばれています』

レイ

「四つ目。この装備は外せるのか？」

レジェンド

『はい。可能です』

レジェンドはそう言うのと騎士甲冑を解き、レイはザフトの赤服を着た状態になった。

エミリア

「わっ！服が変わった！？」

レジェンド

『騎士甲冑を装備する時はセットアップと言ってください』

レイ

「わかった。では最後の質問だ。」

レイはそう言うのと深呼吸をして最後の質問をした。

レイ

「お前を創ったのはギルなのか？」

レジェンド

『はい。私を創造したのはギルバート・デュランダル博士です』

レイ

「そうか。長々とすまないな」

レジェンド

『いえ。当然の疑問です。気にしないでください。私は気にしません』

レイとレジェンドとの会話をずっと聞いていたエミリアはそこである結論に至った。

エミリア

「ってなるとレイって異世界の人？」

レイ

「そうなるな」

エミリア

「だったらシールドラインを知らないのは頷けるね」

レイ

「というわけで俺達はこの世界に着いて何も知らない。よければ教えてもらってもいいか？」

エミリア

「う、うん。あたしの知ってることなら・・・」

少女説明中・・・

レイ

「なるほど。SEEDとはどこからともなくやって来た未確認生物で、そのモンスターや汚染されたモンスタのことをSEEDフォームというのか・・・」

レジェンド

『しかしSEEDですか・・・。これも何かの因果でしょうか？』

エミリア

「レジェンド？」

レジェンド

『我々の世界でもSEEDと呼ばれる概念があるのです』

エミリア

「へー。そんなこともあるんだね」

レイ

「まったくだな……。そういえばエミリア」

エミリア

「ん？どうしたの？」

レイ

「先程の話でSEEDはいないからここは安全だと言われてここに連れてこられたのだろう？」

エミリア

「うん。おっさんにはそう言われた」

レイ

「ならこのレリクスが安全なのはおかしいのではないか？」

レイからの指摘にエミリアは今自分が考えていたことと同じ内容だった。

エミリア

「そうだよな。今まで発見されてきたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ」

レイ

「そうらしいな。それで」

エミリア

「でも全部がそうだったかっというところというわけじゃなかったんだよな」

レイ

「確かに話に行く限りではSEED襲来以外にも機能を覚醒されているレリクスがあるらしいな。続きを頼む」

エミリア

「わかった。だけど、同時に地場の乱れも観測されるからどうもそれだけじゃないと思うのよね」

レイ

「SEEDは3年前に一掃されているのならこのレリクスや他の

レリクスも機能を停止している筈だな」

エミリア

「うん。レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上はトリガーとなるものも、それに準じた」

レジエンド

『となると、おそらくレリクスの機能を覚醒させる要因はSEED以外にも存在するということですね』

エミリア

「ってこんな話をしたけど今の説明は忘れて」

レイ

「なぜだ？」

エミリアが悲しそうな顔をしたのでレイは疑問に思い何故かと尋ねた。

そして、その解答はレイが想定していたものと一致した。

エミリア

「だってあたしが何を言っても誰も信じてくれないから・・・」

レイ

「（やはりか・・・となると俺が言えるのはただ一つだ）俺は信じよう」

レイはエミリアの言ったことを信じることにした。誰にも信じてもらえない悲しみを持った彼女が哀れに見えたのそうだが、なによりも彼女の言っていることは非常に説得力があったからである。

エミリア

「え・・・？信じて・・・くれるの？」

レイ

「ああ。信じよう」

エミリア

「ってこんな話を長々してる場合じゃないよ！いいこ！」

レイ

「ああ。そうだな」

エミリア

「でも、信じてくれて・・・ありがと・・・」

レイ

「エミリア？」

エミリア

「なんでもない！さっさと奥へいこ！」

レイ

「ああ。わかった」

この時レイが見たエミリアはすごくいい笑顔だった。

海底レリクス北側最深部

休憩終了から1時間半後

エミリア

「だいぶ奥に着いたけど出口はまだかな」

レイ

「いや・・・おそらくここが最深部だろう」

あれからモンスター・・・原生生物になんども襲われたがレイがその度に撃退をしていく内にこの海底レリクスの最深部へたどりついていた。

レイ

「もしかしたらここを出る手掛かりがある筈だ。それを探すぞ」

エミリア

「うん。わかった!」

少女少女探索中・・・

レイ

「これは?」

レイが探索をしている時ある箱を発見した。

レイ

「レジェンド。この箱にトラップは無いか分かるか?」

レジェンド

『可能です。スキャン開始・・・』

していたら何やら人の形をした像?があった。

レジェンド

『スキャン完了。罫は無いようです』

レイ

「わかった。では開けるか」

そして、レイが箱を開け中身を見たら長杖が入っていた。

レイ

「どうやら杖のようだが・・・。俺には必要無い物だな」

レジェンド

『どうしますかマスター?』

レイ

「エミリアに渡すでしょう。エミリア!」

箱に入っていた杖を見てどうするか悩んだレイだったがエミリアに

渡すことにした。

エミリア

「レイ？どうしたの？」

レイ

「箱の中にこの杖があつた。お前が使える」

エミリア

「え？でもいいの？」

突然のことに困惑するエミリアだったがレイは構わずに話を続ける。

レイ

「どうやら特殊な杖らしいからな。お前の方が使えるだろう？」

エミリア

「う、うん。ありがとう！」

初めてのプレゼント？に喜ぶエミリアが周りを見るとエミリアの顔がサーと青くなった。

レイ

「エミリア？」

エミリア

「ねえ。ここにあるの全部自律人型機動兵器だよ？」

レイ

「自律人型機動兵器？」

エミリア

「うん。主にレリクスを守護している奴。見てるだけでも怖い動き出したらと考えると・・・ねえ。早く別のところに行こうよ・・・」

「

レイ

「ああ。そうだな・・・」

エミリアの話を聞いているうちにレイはここにある人型兵器の戦闘能力について考察した。

旧文明を滅ぼしたSEEDに対抗していたのだから余程戦闘能力が高いのだろう。そう判断したレイとエミリアはここを離れようとするがさつきまで機能を停止していた筈の自立人型兵器・・・スヴァルティアがいきなり起動した。

エミリア

「って、ちょっと！言ったそばから動かないでよ！」

エミリアは泣きそうになりながら叫ぶがスヴァルティアはそんなことなどお構いなしにレイとエミリアに斧を構えた。

しかし、レイはレジエンドを起動させ臨戦態勢をとった。

レイ

「大丈夫だ」

エミリア

「【大丈夫】ってあんな奴と戦うの！？」

レイ

「それしか方法がないからな・・・」

エミリア

「うー！うううー！分かったよあたしも戦う！レイの【大丈夫】って言葉、信じるからね！」

レイ

「ああ。ではいくぞ！」

それからの戦闘は熾烈を極めるものだった。

レイ

「レジェンド！ビームライフルで奴を牽制するぞ！」

レジェンド

『了解です。ビームライフル展開！』

レイ

「そこだ！」

レイはレジェンドが精製したビームライフルでスヴァルティアの頭部を狙い撃つが特殊なバリアによってそのビームが防がれた。

レイ

「なに！？」

エミリア

「どうやらこいつには射撃が利かないみたいだよ！」

レイ

「ちいいっ！厄介な！」

そんなレイとエミリアに対してスヴァルティアが斧を振り降ろすがスピードが遅いためレイはエミリアを抱えて難なくかわした。

レイ

「しかし射撃が聞かないとなると厄介だな」

レジェンド

『マスター。私に提案があります』

レイ

「その提案はなんだ？レジェンド？」

レジェンド

『はい。実は・・・』

レイ

「なるほどな。エミリア！」

レジェンドが説明した方法を聞いたレイはすぐに行動に移した。

エミリア

「なに！？今こっちはキツイんだけど！」

レイ

「悪いが時間を稼いでくれ！一発で決める！」

エミリア

「ええ！？そんな無茶な！」

レイ

「俺を信じる！」

エミリア

「うつゝ！わかったよ！だけど絶対に決めてよね！」

レイ

「無論だ！」

レイは精神を研ぎ澄ませ始める。

無論スヴァルティアはこれを妨害しようとするが、

エミリア

「カミナリ！！！」

エミリアが出したギ・ゾンデによって足を止められる。

エミリア

「レイ！今だよ！」

レイ

「今だ！貫け！」

エミリアはレイにチャンスだと伝え、レイはドラグーンをスパイク

モードに変更させスヴァルティアへ特攻させる。
スヴァルティアは特攻してきたドラグーンに胸部を貫通させられひるんだところを

レイ

「終わりだ」

ビームサーベルを抜いたレイによって斬り裂かれ、機能を停止させた。

エミリア

「い、生きてる？あたし達本当に生きてるの？」

レイ

「そのようだな」

放心しているエミリアにレイが騎士甲冑を解きエミリアに近づくとエミリアがいきなりレイに抱きついてきた。

エミリア

「レイ！あんたすごいよ！あんなのを本当に倒しちゃった！」

レイ

「俺だけじゃない。エミリアもしっかり戦ってくれたからだ」

エミリア

「でも本当にすごいよ！レイの言葉を信じてよかった！」

レイ

「そうか・・・」

エミリア

「あたしたち本当にやったんだ！やったあ！やったあ！」

生還による喜びをかみしめていたエミリアだったがその時、突然も

う1機のスヴァルティアが動き出した。

レイも気がついたがレジエンドを起動させる時間が無かったのでレイはエミリアをその身で庇い、スヴァルティアのクローに引き裂かれた。

レイ

「かはっ！」

エミリア

「レイ！やだよ！どうしてあたしなんかを庇って……。ねえ起きてよ！起きて！起きてっばあ！！」

エミリアはレイに問いかけるがレイからは返事がこず、レイを揺さぶるが感じたのはドロツとした血の感覚だけだった。

エミリア

「どうして……。どうしていつもそうなの！皆あたしを置いてっちやうの！あたしを1人にしないでよ！」

エミリアは叫ぶがレイはどんどん冷たくなっていく。エミリアはレイを起こそうとするがやはりレイは答えてくれなかった。

エミリア

「お願いだから！目を開けてよ！」

スヴァルティアはそんな2人を斧で押しつぶそうとするが、その時エミリアの身体に異変が起きた。

エミリア

「誰か！誰でもいいから！レイを助けてよ！」

エミリアの身体が輝いた瞬間その輝きでスヴァルティアは消えていった。

??

『あなたを・・・死なせはしません!!』

この時レイは自分の不甲斐無さとエミリアの言った言葉への疑問を持ちながら意識を完全に失った・・・。

第1話中編『海底レリクス』（後書き）

ども飛鳥です。

投稿が遅くなって済みません^^；

今回も海底レリクス編です。

デバイスなどの設定ですがまたの機会に設定集として投下します。
それでは！

次話も期待せずにお待ち下さい！

第1話後編『リトルウイング』

クラッド6リトルウイング管轄下 カフェ

海底レリクス調査から4日後

海底レリクスの一件から民間軍事会社『リトルウイング』に所属するようになったシン・スバル・リオン・早苗・レイと前から社員であったエミリアは自己紹介をするという流れになった。

シン

「俺はシン・アスカ。ここに来る前はこっちのスバルと一緒にフリーの傭兵をやっていた。これからよろしく頼む」

スバル

「私はスバル・ナカジマです！シンと一緒に傭兵をやっていました！よろしくお願いします！」

リオン

「リオン・マグナスだ。一応よろしく頼む」

早苗

「私は東風谷 早苗です。リオンさんと一緒にリトルウイングでお世話になることになりました。よろしくお願いします」

レイ

「レイ・ザ・バレルだ。成り行きでリトルウイングに所属することになった。これからよろしく頼む」

エミリア

「あたしはエミリア・パージパル！よろしく！」

マイルーム レイの部屋

自己紹介を終えたシン達は各自の部屋をエミリアに案内され、レイの部屋でマイルームの使い方をエミリアから教わった後、エミリアがレイのベッドで寝てしまったのでアイテムを買おうと部屋からで

ようとした時、突然シン達を呼び止める声がした。

??

『待つて』

スバル・リオン・早苗・レイ

「「「「!?!?!?!」」」」

??

『ここでなら落ち着いてお話しができます』

スバル達はまったく聞いたことが無い声で警戒するがその前にシンがその声に話しかけた。

シン

「あんたは、ミカさんか？」

ミカ

『やはりあなただったのですね』

シン

「あんたもな。まさかエミリアの中にいるとは思わなかった」

いきなりのこととで動揺するスバル達だったがレイはすぐに冷静さを取り戻し、シンに尋ねた。

レイ

「シン。お前は彼女が何者なのかを知っているのか？」

シン

「ああ。彼女はミカ。今は滅亡している旧文明時代の人だ」

ミカ

『はい。シンの言うとおりです』

スバル

「旧文明って……。今から1万年以上前じゃん!？」

旧文明と聞いたスバルはもう滅亡している種族の人物が目の前にいることに更に動揺した。

しかし、それは無理もない話である。1万年以上前の人物が自分の目の前にいるのだから。

だが、シンはそんなスバルを気にも留めずに話を続けた。

シン

「あなたがここで覚醒をしているとなると・・・」

ミカ

『はい。私の同朋が【あの作戦】を始めようとしています』

シン

「【復活計画】のことか？」

ミカ

『はい。あなたもその内容を知っている筈です』

レイ

「【復活計画】とはなんだ？」

いきなり聞きなれない単語が出てきたのでレイが質問するとミカはすぐに説明した。

旧文明人説明中・・・

リオン

「つまり、その復活計画とは僕らの抹殺計画と考えてもいいんだな？」

ミカ

「はい。そう感じとっていただいて結構です」

レイ

「俄かには信じられない話だが・・・」

ミカ

『突拍子もない話ですが、どうか信じて下さい!』
スバル

「皆はどうするの?」

いきなり突拍子もない内容だったので他のメンバーはどうするのか
スバルが聞いたら反応はバラバラだった。

リオン

「まだ本当だとは分からないから僕はパスだ」

早苗

「罪の無い人達を殺すなんて私は許せません!絶対に阻止します!」
レイ

「俺も今は信用できない」

やはり、リオンとレイは信用できなかった。しかし、次のミカの言葉で信じざるをえなくなった。

ミカ

『実は私は何のかわりの無い人には声が聞こえないのです』

リオン

「どういうことだ?」

ミカ

『レイさん。海底レリクスで起こったことは夢だと思っていますか?』

レイ

「いや、レジェンドの戦闘記録に奴と戦った記録があった。だから俺は1度死んだのだろう」

リオン

「だが僕と早苗とスバルはお前に会うのは初めてだぞ?」

ミカ

『あくまで私の推測なのですが、皆さんにはそれぞれ何らかの能力を持っているのだと思います』

20分後

リオン

「わかった。お前の言ったことを信じよう」

最後まで否定を続けていたリオンだったが、遂に現実が起こっていることだと判断した。

ミカ

『そろそろ彼女が起きます』

シン

「分かった。またな」

ミカ

『はい・・・』

エミリア

「ふわあゝ。ちょっと寝ちゃってた。って、みんないたの？」

レイ

「ああ。エミリアの寝顔を見ていた」

エミリア

「ちよっ、みんな私の寝顔を見ていたの!？」

早苗

「はい。かわいい寝顔でしたよ」

エミリア

「うっ。恥ずかしい・・・」

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「私が気にするの!!」

ミカの気配が消え、エミリアが起きたのでマイルームの説明は終わりを告げた・・・。

第1話後編『リトルウイング』（後書き）

ども、飛鳥です。

今回はかなり更新が遅れて申し訳ありませんでした！！

今回はミカが登場しました。

なぜシンたちもミカを認識できたのかはおいおい書いていくつもりです。

今回はフリーミッションとクラウチの借金取り立て依頼（？）編です。

こんな駄文ですがこれからもよろしくお願いします。

第2話前編『ドラゴン退治／草原の支配者／準備編』

リトルウイング管轄区

ミカとの出会いから10分後

エミリア

「ここはマイシップと言って依頼を受けるところで、この船で現地まで行くところだよ」

レイ

「ほう。では今から依頼を受けることができるのか？」

エミリア

「うん。それで・・・」

少女説明中・・・

ミカとの対面を終え、エミリアが目を覚ましたので、シン達はエミリアからマイシップの説明を受けていた。
ちなみにエミリアからミカのことを聞いたら

エミリア

「ミカ？誰それ？」

と返され、シン達はこれ以上追及することはしなかった。

エミリア説明終了後

シン

「じゃあ早速依頼を受けないか？」

レイ

「賛成だが、生憎俺と早苗は武器を持っていないぞ？」

早苗

「あつ。そうでした」

シンは早速依頼を受けようとしたが、レイに装備が無いと言われ、シン達は一旦武器を揃えることにした。

少女少女準備中・・・

シン・レイ組

シン

「レイ。大分前にGRM社から報酬で貰った武器があるけど使うか？」

レイ

「ああ。この武器か？」

シン

「ああ。なんでも試作のライフルらしいけど俺は使わないからな。狙撃もできるだろ？」

レイ

「問題無い」

シン

「あと、スバルも使っている双剣と俺が使っているダブルセイバーの同型を使ってくれ」

レイ

「すまない。ここまで準備してくれるとはな・・・」

シン

「CEでは大分迷惑を掛けたからな。そのお礼だよ」

レイ

「俺がお前を利用していたのか？」

シン

「たえそうだったとしても俺は議長について行ったからな」
レイ

「そうか……。この武器はありがたく使わせてもらっぞ」
シン

「ああ」

レイはシンからエンシェントクォーツ、ティーガ・ド・ラガン、インフィニットコランダムを受け取った。

リオン・早苗組

リオン

「お前は撃たれ弱いからなシールドを装備した方がいい」

早苗

「分かりました」

リオン

「あとセイバーとレスタ、デバンド、シフタを購入する」

早苗

「そんなにも必要なのですか？」

リオン

「お前はサポートが得意らしいからな。これくらいは準備しておいた方がいいだろう」

シャルティエ

『そうそう！早苗さんは後方支援に向いているんだから！』

早苗

「そこまでおっしゃられるのなら……」

リオン

「ふん。じゃあ今から購入しに行くぞ」

早苗

「はい！」

早苗はセイバーとシールド、各補助テクニックのディスクを購入した。

スバル・エミリア組

スバル

「私達は回復アイテムの購入だね！」

エミリア

「うん。そうだね」

スバル

「ええっと、スターアトマイザー、モノメイト、ディメイト、トリメイト……」

スバルとエミリアは回復アイテムの調達の為に道具屋を訪れていた。

エミリア

「うっわ、すごい数になってる……」

スバル

「そりゃあ、6人分あるからね……」

エミリア

「とりあえず買い終わったからシン達のところに戻る？」

スバル

「うん。そうだね」

回復アイテムを買い終えた2人は一足先に合流地点へ向かった。

マイシップ

買い出しから1時間後

シン

「みんな準備はできたみたいだな」

リオン

「ああ。早苗に必要な物は全て揃えた」

スバル

「こつちもOKだよ！」

買い出しが終わり、準備が完了したシン達はマイシップに集合し、受ける依頼を探していた。

しかし、リトルウイングはあまり有名になっておらず、見つかった依頼はたったふたつだけだった。

レイ

「海底レリクスの調査とディ・ラガンの討伐依頼か・・・」

エミリア

「うう、ちょっと海底レリクスには行きたくないな・・・」

エミリアは海底レリクスでの出来事（エミリア曰く夢）のことを思い出し、顔色が悪くなってしまった。

早苗

「エミリアさんも辛そうですし、もう一方のディ・ラガンの討伐の依頼にしませんか？」

スバル

「賛成！」

リオン

「異論は無い」

レイ

「問題無い」

シン

「よし。じゃあ、ディ・ラガンの討伐に行くぞ！」

結果、早苗の提案により、シン達はディ・ラガンの討伐依頼を受けることになった・・・。

第2話前編『ドラゴン退治／草原の支配者／準備編』（後書き）

どうも、飛鳥です。

更新が遅れて申し訳ございません・・・；；

今回はディ・ラガン討伐ミッションの一つ「草原の支配者」を受ける前の準備で、早苗、レイはそれぞれオンとシンから武器を購入してもらったり、譲ってもらったりしています。

レイの武器ですが私の好きな武器のシリーズで、よく使う武器のひとつです。

次回はディ・ラガンと対決の予定です。

では失礼します（・ー・）ノシ

第2話中編『ドラゴン退治／草原の支配者／前編』

レイと一緒に行動するなんてひさしぶりだな・・・

メサイア戦役が終わってから色々あった

30億年過ぎてからは年なんて数えてなかったからな

レイと再会できたのは非常に嬉しかった

だが、どうしてもひっかかる

海底遺跡で見つけたあの剣を管理局が一時的にとはいえ確保して
て解析していたこと

本人達は言っていないが早苗とリオンもそれぞれ違う世界の出身だ
ろう

確かに色々な世界の人々が集まる世界もあったが、そこでは必ず共
通点があったり、それぞれの世界が繋がっている世界だけだ

これはある種の奇跡かまたは何か危険なことがおこる兆候なのかも
しれない

だとしたら俺は・・・

スバル

「シン！目的地に着いたよー！！」

そして

シン

「わかった！今行く！」

いや、このことを考えるのはやめよう

俺が今することは新たにできた大切な人達を守るだけだ・・・

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

（世界を駆け巡る者達）

第2話『ドラゴン退治／草原の支配者／前編』

パルム

ラフォン草原

ブロック1

クラッド6から出発したシン達は問題となっているディ・ラガンが生息しているラフォン草原に来ていた。

早苗

「うわゝ！自然が豊かでいいところですね！！」
レイ

「かつて500年続いた戦争で傷ついた自然を回復させた人工的なものだな」

早苗

「へえゝ。そうなんですか」
リオン

「自分が赴く場所のことくらい覚えておけ、馬鹿者」

ラフォン草原の自然を目の当たりにして感動している早苗に対し、レイが補足するがリオンの小言を入れる。

早苗

「ひどい！馬鹿とまで言う必要は無いじゃないですか！！」

こんな感じでわいわい騒ぎながら進むシン達だが、ちょっとした洞窟の前についたところで突然何かが飛び出て来た。

エミリア

「あつ！可愛い！」

シン

「ポルティだな。皆はそこで俺の戦いを見ていてくれ」

飛び出て来たのはパルムに生息する原生生物の一種であるポルティで、シンはそういうなり武器を取り出し、ポルティの群れに突っ込んでいった。

エミリア

「ゲッ……。あれライティングエスパーダじゃない！」

早苗

「ライティングエスパーダ？」

エミリアはシンの取り出した武器に驚き、どういふ物かは分からない早苗はエミリアに聞いたらエミリアは説明を始めた。

エミリア

「GRM社の最新鋭のテスト武器のひとつで、まだ少数しか生産されていないGRM社最新鋭の武器だよ！」

早苗

「さ、最新鋭……」

リオン

「何故奴がそんな物を持っているんだ……」

エミリアの説明を聞いたリオンと早苗はシンが何故そんな物を持っているのか疑問に思った。

が、その疑問もレイによって解かれた。

レイ

「シンはリトルウイングに入社する前にGRM社で新型の試作武器

のテストを行う依頼を受けていたようで、あの武器は報酬で貰った物のひとつらしい」

レイはシンから今自分が装備している武器を渡された時にその武器を手に入れた経緯を聞き、そのことをリオン達に話した。
リオン達がレイの話の話を聞いている頃、戦闘はどうなっていたかという

シン

「はあっ！！」

シンの一太刀でポルティは断末魔をあげながらまっぴたつになり、斬ったところから大量の血液が噴出、草原の一部を赤く染めた。
これに逆上したポルティ達はシンを取り囲んで一斉に攻撃をしようとするが

シン

「遅いんだよ！！」

シンは回転しながらライトニングエスパーダを横に振り回し、襲いかかって来たポルティ達をことごとく薙ぎ払った。

薙ぎ払われたポルティは皆まっぴたつになって絶命した。

その場に残ったのは絶命したポルティの群れと無傷のシンのみだった。

シン

「これで全部片付いた。先へ進もう」

レイ

「見事な腕だな」

エミリア

「すつこ。あの大群相手に無傷だなんて・・・」
スバル

「いつ見てもシンは凄いよね」

ポルティの群れを無傷で全て倒したシンに賛辞を送っていたレイ、スバル、エミリアだった。

リオン・早苗 side

早苗

「なんだか可哀想ですね・・・」

そんななかシン達から少し離れている所で倒されたポルティを見ていた早苗は悲しそうな表情で呟いたが、それを聞いたリオンはその考えを諭そうとした。

リオン

「だが僕達を襲ってくる以上倒さなくてはならない」

早苗

「ですが・・・」

しかし、早苗は納得していなかった。今まで自分の手で生き物を殺したことが無い生活を送っていたために自分の勝手で生き物を殺すことに戸惑いを持っているからである。

だがこのままだといずれ早苗に大きな災いが起きると判断したシャルティエはまだ納得できていない早苗に対しシャルティエはこう諭した。

シャルティエ

『可哀想かもしれないけど坊ちゃんも早苗さんも生きているんだ。』

ふりかかる火の粉を払わないといけないんだ・・・」

早苗

「それが相手の命を奪うことでもですか？」

シャルティエ

「うん。確かに早苗さんの持っている感情はとても大切なものなんだ。けどそのことばかりに気を取られ過ぎているといつかは自分や他の人達に大きな災いをもたらしてしまうかもしれない」

リオン

「シャル・・・」

シャルティエ

「僕は早苗さんにそんなことになるのはどうしても避けたい。もしその災いで早苗さんが大変なことになったら悲しむ人がいるでしょう？」

早苗

「！」

それを聞いた早苗は今まで自分と一緒に暮らしていた2人の神を思い出した。

シャルティエ

「だから例え相手が可哀想だったとしても僕は全力で坊ちゃんを支える。それだけだよ」

早苗

「シャルティエさん・・・。私・・・」

シャルティエ

「すぐに結論は出さなくてもいいよ。こういう答えはゆっくり考えて出すものだから。でも、僕の言ったことを頭の片隅に入れておいてほしいんだ」

早苗

「はい。わかりました。この問題の私の答えは必ず出します！」

リオン

「もう話をついたか？ならさっさとシン達と合流するぞ」

シャルティエの言葉である程度迷いが無くなった早苗はリオンと共にシン達と合流する為に先へ進んだ。

リオン・早苗 side end

ラフォン草原 デイ・ラガンの巢

遅れていたリオンと早苗と合流したシン達はさらに奥へ進み、デイ・ラガンの巢へたどりついた。

シン

「ここに今回のターゲットのデイ・ラガンがいる筈だ」

レイ

「そのような。警戒を強めた方がいいだろう」

シン達が警戒を強めようとしたところでなにかの咆哮が聞こえた。

??? ???

「ギャオオオオン!!」

シン

「デイ・ラガンだな。よし!一気に奴を叩くぞ!」

スバル

「うん!」

レイ

「ああ!」

早苗

「はい!」

リオン

「わかった」

エミリア

「オッケー！」

シンの呼びかけに答えたスバル達は各々に武器を取り出し、**戦闘態**
勢をとる。

ディ・ラガン

「ギャオオオオオン！！」

それに対しディ・ラガンは先制とばかりに突進してきた。
今、シン達のディ・ラガンとの戦いが始まったのだった。

第2話中編『ドラゴン退治／草原の支配者／前編』（後書き）

ども、飛鳥ですあけましておめでとうございます！

そして投下が遅くなつて済みません！！

今回はディ・ラガンとのエンカウトまでです。

道中早苗は自分たちの都合だけで生き物を殺してしまうことに戸惑いを持ち、

シャルティエはそんな彼女を説得する話となっています。

今回シンが使った武器はP S P O 2に登場するG R M製の最高水準の大剣です。

次回はディ・ラガンとの決着までを描きます。
ではノシ

第2話後篇『ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜』

シンと出会ってから大体4年くらいたった。

最初の時はずっと迷惑をかけっぱなしで少しでも役に立ちたいと頑張って戦う術を学んでいた。

今では背中を任されるくらいにはなっていると思いたいなー

海底レリクスの調査以来の時にシンのパートナーだった人にあつてからなんでか分からないけど胸がチクチクするんだ・・・

シン

「スバル！ぼつとするな！来るぞー！！」

スバル

「う、うん！！」

まあ、いいや

この仕事が終わったらレイさんと色々話したいなあ・・・

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〜世界を駆け巡る者達〜

第2話「ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜」

ラフォン草原

ディ・ラガンの巣

ディ・ラガンは自分の巣に侵入してきた敵を察知すると、炎の塊を吐いてきた。

これに対してシンはライトニングエスパーダで炎の塊を真っ二つにしてこれを防いだ。

しかし、戦闘経験がほとんどないエミリアはまともに炎の塊に直撃してしまった。

エミリア

「あ、熱いいいいい!!」

シールドラインがあつたおかげで命に別状は無いが、炎によって服が燃え、燃焼状態になってしまった。

シン

「チイツ!! スバル! エミリアを頼む! レイは俺の援護を!!」

レイ

「わかった!」

スバル

「りょーかい!!」

スバルはすぐさまソルアトマイザーを取り出し使用する。ソルアトマイザーの効果によってエミリアは燃焼状態から脱出した。

エミリア

「アチチ……。よくもやったわねえ!!」

自分を燃焼状態にしたことにキレたエミリアはハンドガンを連射する。

早苗

「エミリアさん! 落ち着いて下さい!!」

エミリアが連射した弾を掠めた早苗は抗議の声を上げた。

リオン

「馬鹿者！！今は戦闘に集中しろ！！」

リオンはそんな2人をいさめつつ、ディ・ラガンの頭を

リオン

「空襲剣！！」

連続で斬りつける。

ディ・ラガンの弱点は頭である。シンとスバルは陽動し、レイ達が頭を集中攻撃する。

その最中にレイが呟いた。

レイ

「これは時間がかかりそうだな」

その後、ディ・ラガンとの激戦が続いた。

ディ・ラガン戦闘開始から1時間後

シン

「これで！！終わりだ！！！！」

シンの斬撃がディ・ラガンの頭にクリーンヒットし、ディ・ラガンは崩れ落ちた。

スバル

「よっしゃあ！！勝った！！！！」

レイ

「さすがに疲れたな」

リオン

「まったくだ。とくにこの馬鹿者のせいだな」

早苗・エミリア

「ごめんなさい・・・」

勝利に喜ぶスバルと生身で長時間の戦闘で疲れているレイ、疲れという意味で同意するリオン、リオンの言葉でへこんでいる早苗とエミリアとそれぞれが思ったことを口にしていた。

シン

「任務も終わったことだし帰るか」

その後、シンの号令の後シン達はマイシップに戻り、クラッド6へ帰還した。

こうして、シン達のリトルウイングでの初仕事は終わりを告げた・・・。

第2話後篇『ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜』（後書き）

どうも、飛鳥です。

色々と遅くなった割にこんな短いhamnしですみません！！（土下座）
今回はディ・ラガンとの戦いを書きましたが、短くなってしまいました・・・。

さて、次回で第2話は終了です。

内容は今回の戦闘での反省とクラウチからの依頼です。
では（・v・）ノシ

第3話『依頼完了の報告と新たな依頼』

まったく…この世界に来てからは色々と疲れることが多い…
あいつらとの旅で少しは耐性がついたと思っていたがここの奴らは
更に上をいくとはな…
が、こんなやりとりも悪くないと思っている僕がいる…

早苗

「リオンさん。そろそろクラッド6に着きますよ」
リオン

「わかった。すぐに下船の支度する」

…どうやら僕もあいつらの影響を大いに受けているらしい…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

〈世界を駆け巡る者達〉

リトルウイング管轄区

デイ・ラガン討伐から3時間後

チエルシー

『確かに依頼の完了を確認したワ。ミナナお疲れ様ダヨ!』

シン

「みんなお疲れ!今から1時間自由時間で、集合場所は俺の部屋な」
リオン・レイ

「わかった」

スバル

「オッケー!」

早苗

「わかりました」

エミリア

「りょーかい！」

チエルシーに依頼の完了をしらせ、マイシップから降りたシン達は1時間自由時間とし集合場所はシンの部屋と決め、解散した。

S i d e レイ&エミリア

エミリア

「ふいー。やっと終わったあ…。あつ、あたしはオレンジジュースとパフェね！」

レイ

「初めてのミッションとしては上出来だと思うぞ。俺は紅茶とロールケーキをお願いします」

レイとエミリアはシン達と別れた後はカフェに来ていた。まず身体の疲労を考えたレイが提案したのだ。

エミリア

「うん！やっぱりここのパフェはおいしい！」

レイ

「このロールケーキもなかなかだな」

レイは紅茶とロールケーキをエミリアはオレンジジュースとパフェを注文し、舌鼓をうっていた。

S i d e シン&スバル

シンとスバルはレイ達と別れた後クラッド6のショップエリアに来

ていた。

スバル

「ふわゝ…疲れたあ…。シンはこれからどうするの？」

シン

「今回の依頼で消耗したアイテムの購入は今終わったからあとは今回の依頼の報告書の作成と新たな依頼の確ⁿ…」

スバル

「ええゝ…そんなことは後にしてアイスを食べに行こうよゝ」

スバルの質問をそう返したシンはそのまま報告書を作成しようとする
とスバルは抗議の声を上げた。

スバルにとっては依頼が終わった後はゆっくり休憩…というより自分の大好物であるアイスを食べに行きたいのである。

シン

「スバルがアイスを食べ始めると1時間じゃすまないだろ。ほら、さっさと報告書をまとめに行くぞ！」

スバル

「いゝやゝだゝ！！アイスを食べたいのゝ！！！」

スバルはシンに抵抗したが、シンはスバルの服の襟首を掴みそのままズルズルとシンの部屋にまで連行されていった。

スバル

「アイスを食べたー！ーい！ー！！！」

S i d e リオン&早苗

リオンと早苗はシン達と別れた後、まっすぐ自室へと向かった。

部屋についたあと早苗に待っていたものはリオンの説教だった。

リオン

「お前は色々と無知過ぎる。依頼に行く場所くらいのことを知らないのなどはもつてのほかだ!!」

早苗

「あうっ…」

リオン

「もう一つはせっかく購入したシールドを何故使わん!!あれを使っただけでもダメージをかなり軽減できるんだぞ!」

早苗

「ひええ…」

リオン

「他にも…」

40分後…

リオン

「ふん。まあこのくらいで勘弁しておこう…」

早苗

「はい…」

やっと説教が終わった早苗はそのまま倒れこみ、足の痺れで動けな
いでいた。

しかし早苗はこの説教は嫌だとは思わなかった。

何故なら今回の依頼でリオンも疲れている筈なのである。

それなのにリオンが自分の為に態々時間を割いてまでしてくれたもの
なのだと思うていたからである。

実際リオンも2回の長い旅で自分の仲間が危機に瀕していたことが
たびたびあり、早苗にもそのような空気があったためである。だが

ら少しでも早苗が大怪我をする確立を少しでも下げるために今回のような説教をした。

リオン

「足の痺れがとれたらのならシンの部屋へ行け。僕も後から行く」

早苗

「分かりました。では先に行っていますね」

早苗がリオンの部屋へ出て行ったあと、リオンはショップエリアに行き、ある物を買っていた。

リオン

「フツ…僕もすっかり甘くなったな…」

シャルティエ

『坊ちゃんも丸くなって僕は嬉しいですよ。できればディムロス達にも見せたかったなあ…』

リオンが自嘲的な笑みを浮かべながらそう呟くとシャルティエが横から口を出し

リオン

「（うるさいぞシャル!!）」

シャルティエ

『アイタツ!!!!』

リオンに思いっきりコアクリスタルを叩かれるのであった。

リトルウイング管轄区―シンの部屋―

解散後から1時間後

シン

「よし、みんな集まったな」

シンは自分の部屋に全員揃っていることを確認するとすぐにミーティングを始めようとするがそこにリオンのツツコミが入った。

リオン

「おい。お前の後ろにいる燃え尽きたスバルは何だ？」

そう。シンの後ろにはまるで「燃え尽きたぜ……」みたいな状態のスバルがいた。

シン

「ああ。コイツは報告書の作成をした後は大抵こうなる」

エミリア

「でもだからって普通はこうならないっしょ!？」

レイ

「あんな状態で大丈夫か？」

シン

「大丈夫だ。問題無い」

早苗

「ほ、本当に大丈夫なんですか？」

本気で心配しているエミリアと早苗をよそにシンはスバルに何かを呟くとスバルは

スバル

「ふっかーっ!」

と叫びながら復活した。

シン

「と、じゃあ改めてミーティングを始めるぞ」

少女少女ミーティング中…

シン

「と、まあこんなもんだな。じゃあ今日はこれで解散な」

リオン・レイ

「ああ」

早苗

「分かりました」

スバル・エミリア

「りょくかい！」

翌日

リトルウイング管轄区

シン達はクラウチに呼ばれリトルウイングのオフィスへ来ていた。

クラウチ

「よう！よく来てくれたな」

シン

「新しい依頼ってなんですか？」

シンはクラウチに依頼の内容を聞くとクラウチはこう答えた。

クラウチ

「コイツは緊急かつ重要な依頼だ」

それを聞いてごくりと喉を鳴らす早苗。
そして

クラウチ

「今回の依頼は俺の借金の取り立てだ」

シン達は盛大にずっこけたのだった…。

第3話『依頼完了の報告と新たな依頼』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は依頼終了後のシンたちの動向とクラウチの新たな依頼です。

原作ではツケに関して抗議に行ったエミリア達に依頼されたものですが今回は正式な依頼として依頼されます。

まあシン達はずつこけましたがね^^;

この依頼を契機にいろんな事件に巻き込まれ+原作とは違う話になっていきます。

では失礼します（・・）ノシ

スクリーンチャット集1

chat1「初めての共同任務」 任務開始直後

エミリア

「うー。ちゃんとアタシついていけるかなあ…?」

レイ

「できる限りはおれもサポートする」

エミリア

「ありがと…」

リオン

「気にするな」

エミリア

「リオン…」

リオン

「もとよりお前を戦力として見ていないからな」

エミリア

「ヒドッ!？」

早苗

「容赦ないですね……」

chat2「シンって何者? (1)」 シンがポルティを瞬殺した

直後

エミリア

「ねーねー早苗」

早苗

「なんですか? エミリアさん」

エミリア

「いやさーGRM社の最新鋭の試作品を持ってたっしょ? 一体何者なのかなーって」

早苗

「そうですよね〜あんなすごい武器を持ってますしね〜」

刹那、ナイフが飛んできてエミリアを掠めながら後ろにいたヴァーラの心臓に突き刺さる

ヴァーラ即死

シン

「2人ともぼさつとしてると置いて行くぞ」

シン、ヴァーラに刺さったナイフを回収して先へ進む

早苗

「は、はい!」

エミリア

「ちよつ、ちよつと待って!」

エミリア

「(シンって一体何者?)」

chat3「シンって何者?(2)」 chat2「シンって何者?(1)」終了直後

エミリア

「ねーねースバル」

スバル

「どしたのエミリア?」

エミリア

「スバルっていつからシンと一緒にいたの?」

スバル

「う〜ん。だいたい4年ぐらいかな〜」

エミリア

「ふ〜ん。どんな経緯で会ったの?」

スバル

「えーと。空港にお父さんを迎えに行った時に事故に巻き込まれて死にそうになったところを助けてもらってそれからずっと着いていつてる」

エミリア

「じゃあ何かシンについて知ってることってある？」

スバル

「知ってる限りでは色々と仕事をしててそれが原因で何者かに追われているってことかな」

エミリア

「そ、そう。ありがとね」

スバル

「いいっていいって！」

エミリア

「（シンってまします何者なの？）」

chat 4「何これ？」　ディ・ラガン撃破直後

早苗

「ふうやつと終わりましたね…」

リオン

「フン。まだまだだな」

早苗

「うー…」

早苗、近くにある岩に腰かけようとする。

早苗

「あいたっ！！」

早苗、何かに引っかかってこける。

早苗

「いた〜い…」

リオン

「まったく馬鹿者が。自分の足元くらいしっかり確認しろ」

早苗

「あう〜…。これってなんでしょう？」

早苗、自分の足に引っかけた物を拾う。

リオン

「何かの短刀のようだな」

早苗

「これも何かの縁ですしもらっておきましょう」

早苗、何かの短刀をゲット。

chat5「奇跡を起こす程度有能力」 chat4「何これ？」

終了直後

早苗

「（この短刀って何でしょう？）」

早苗、試しに目の前にある岩を手にとった短刀で斬ってみる。
岩石が真っ二つになる。

早苗

「え…？」

早苗、顔面蒼白になる。

「遅いぞ早苗！さっさとしないと置いていくぞ！」

リオン

早苗

す、
すごい切れ味ですね… ;’

「おい！早くしないと置いてくぞ！」

シ
ン

早苗

シ
ン

早苗

シ
ン

早苗

リオン

「まさかとは思ったがそこまでの大業物だったとはな……」
シャルティエ

『とんでもない運の持ち主ですね……』

早苗、短刀「カムイ」をゲット

chat 6「休ませて」 パーティ解散後
スバル

「シン…これで勘弁して…」

スバル、疲労困憊した顔をしている。

シン

「いゝや。駄目だ」

シン、人の悪い笑みを浮かべる

スバル

「ひえ…」

シン

「みんなが揃うまでに報告書が完成しなかったらアイスは1週間抜きな」

スバル

「うわーん!!!」

スクリーンチャット集1（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は短編集となります。

本編でなくてすみません。

今回の chat 4・5 に出てくるカムイは高レベルのディ・ラガン
を倒した後に出てくるクリア箱にごく稀に出てくるかなりレアなダ
ガーでかなりの強さをほこります。

では次回からはクラウチの依頼編になります。

では（・・・）ノシ

第4話『借金回収〜前編〜』

私は何をやってるんだろう…

元の世界にいた時もお父さん、お母さん、神奈子様、諏訪子様に迷惑を掛けて…

私が中学校に入った時に事故でお父さんとお母さんが死んで、

私の友達だった人達も戦争で皆死んで、幻想郷へ行く途中では神奈子様と諏訪子様ともはぐれて一人ぼっちになって

いきなり異形に襲われて殺されそうになった時にリオンさんに助けてもらって…

助けてもらった時にこの人と一緒に行きたいと言って無理矢理ついてきて…

最初の依頼だつて結局みんなの迷惑を掛けちゃって…

リオンさんとシンさん、スバルさんの高い戦闘能力…

レイさんとエミリアさんのような高い洞察力と記憶力…

でも私にはそんな能力なんか持っていない…

やっぱり私って必要ないのかな…

リオン

「早苗、さつさと準備してシン達と合流するぞ」

早苗

「は、はい！」

でも私は今ここにいる…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉

リトルウイング管轄区 マイシップ

クラウドの依頼から30分後

エミリア

「うがー！！おっさんの奴隷には依頼も私物化してるじゃん！！」

早苗

「まあまあエミリアさん」

レイ

「落ち着けエミリア。俺達はまだまだリトルウィングではルーキーだ。前回の依頼を受託できたのは運がよかっただけだ」

リオン

「当然だな。ぽつとでの僕達をあのような依頼がくるだけでも優遇されているな」

スバル

「もしかしたらクラウドさんも何か考えがあるのかもしれないよ？」

エミリアが不満の叫びを上げ、それを4人がかりで宥めていると依頼の詳細を聞いてきたシンが入って来た。

シン

「みんな揃ってるな。じゃあ今回の依頼を説明するな」

傭兵説明中…

レイ

「なるほどな…。もういつでも発信できるようにしてある」
シン

「サンキュー。レイ」

スバル

「じゃあ出発進行！！」

傭兵移動中…

惑星モトウブ クロウドツク地方
発進から1時間後

スバル

「さーて！着きましたよクロウドツク地方！！」

シン

「見渡す限り密林ばかりだな」

目的地に着き、周りの様子を見てみるとエミリアとレイはある事に気がついた。

エミリア

「ねえレイ。なんかここおかしくない？」

レイ

「ふむ。かなりの数の宇宙船がいるようだな」

エミリア

「でもさあ…これだけ船があるのに人っ子1人もいないなんて変じゃない？」

それは移動用の宇宙船はかなりあるのに肝心の人がまったくみあたらないのである。
それを不審に思いながら探索を始めようとするとシン達を呼び止める声が上がった。

???

「おい、お前らここの住人じゃなさそうだな」
リオン

「何者だ？」

その声に対してリオンはシャルティエを抜こうとするが先に呼び止めた声が自己紹介をする。

???

「俺はトニオ・リマ。ここでフリーの傭兵をやっている」
エミリア

「あたし達はリトルウイングの社員です一応…」

エミリアが代表として自分達の紹介をする（一言余計だったが）。そこにもう1人トニオを呼びながらやって来た人影がいた。

???

「駄目だよトニオ。こっちには人っ子1人いなかったよ!!…そっちの人達は？」

トニオ

「こいつらは俺達の同業者だよ…」

???

「そうかい…。あつ、あたしはリイナ・リマ！トニオと一緒に夫婦で傭兵をやってるんだ」

トニオ

「で、お前らは何の用でここに来たんだ？」

シン

「それは…」

傭兵説明中…

リイナ

「なるほどねえ。じゃあそっちは人探しに来たんだ」
スバル

「はい。そうですねです」

トニオはシンから説明を聞いた後シン達にある提案をした。

トニオ

「行く場所は同じか…。よっし、じゃあ俺達と一緒に行動しないか？」

エミリア

「えっ…？」

トニオの提案はシン達にとっては魅力的な提案であった。断る理由もないのでシン達はトニオ達と共に行動することにした。

早苗

「（なんだろう…すごく嫌な感じがする・・・）」

一方早苗は凄く奇妙な感覚に囚われていた。

しばらくした後、この感覚の正体が明らかになることはこの時早苗は知る由もなかった…。

第4話『借金回収〜前編〜』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はトニオ達と合流までのお話になりました。

次回はカーシュ族の少年との対決と事件の黒幕、そして異世界からの介入者の遭遇となる予定です。

では（・・・）ノシ

キャラ設定1（前書き）

この小説に登場する主要人物の設定です。
よろしければどうぞ。

*原作のネタばれ？もあります。

キャラ設定1

シン・アスカ（特定不明）

本作主人公その1。

免疫能力のみ調整されたコーディネーター。

メサイア戦役の後彼に恨みを持つクライン派により捕まり、現在プラントでは表向きには禁止されている実験の実験台となり不老不死の薬を投与され、死ぬことができなくなってしまった。

デュランダル前議長の研究所にて発見された兵器『デバイス』のテストに参加させられたために彼の身に更なる悲劇が訪れる。

テストの内容とは相手の息の根が止まるまで戦闘を続けるという危険過ぎる内容で、しかもその相手は自分のパートナーであり守ると誓ったルナマリア・ホークであった。

激闘の末にシンは生き残ることができたがその代償として、ルナマリアの命を自身の手で断ってしまった。

今までの過酷な実験で憎しみを抑えていたシンだったがこの実験に起きた悲劇により完全にタガが外れ、自分以外の全ての物を破壊しつくした。

実験の内容を知ったキラ・ヤマトが駆け付けた頃にはシンを除く全ての研究員が殺害されており、その惨劇の中心には亡骸となったルナマリアを抱きながら慟哭を上げるシンだけであった。

この事件の後、シンはキラに保護されたがこの件がラクス・クラインの耳元に届き、キラもまた命を狙われるようになり、結果キラはシンを凶弾から庇い命を落とした。

この後、シンはキラから渡された『携帯型次元転送装置』を使いC.Eを離れた。

シンが転移した場所は人間と魔族が戦争をしている世界で、シンは

この戦争を止めるためにあの実験以来封印していた『デバイス・デステイニー』の封印を解き戦争を終結に導き、再び世界を旅する。そして悠久の時を経て数多の世界を旅したシンはミッドチルダ臨海第8空港にやってくるが丁度その時ロストギアという物によって大火災が発生している時であつた。

その時シンが見たものはその場に取り残されていた少女・・・スバル・ナカジマが倒れていく像に押しつぶされそうになるという場面であつた。

シンはすぐにデステイニーを起動させ倒れてくる像を両断し、スバルを命の危機から救つた。

スバルを助けた後すぐに去ろうと次元転移をしようとするがスバルがシンの方に走ってきてしまったせいでスバルも転移に巻き込んでしまう。

すぐにスバルを帰そうとするシンだったが、スバルの決意の固さに遂に折れ、共に旅をすることになる。

スバルが共に旅をするようになって4年がたった時、2人はグラール太陽系と呼ばれる星系にやってきていた。

パルムを本拠地にし、傭兵を始めた2人は簡単な依頼を確実にこなしてある程度有名になった時ある依頼が届く。

その依頼を受けた時にかつて死別した親友とスバルに次ぐ新たな仲間達と出会う。

依頼が完了し、報酬を受け取った後にクラウチのスカウトを受けリトルウイングに入社することになる。

使用デバイスはデステイニー。

普段の依頼遂行時ではライトニング・エスパーダとエンシェント・クォーツ、オブシディアン（ブラックカラー）を使う。

スバル・ナカジマ（15）

本作ヒロインその1。

シンの新たなパートナー。

『無限の欲望』というコードネームで創りだされた男・・・ジュエル・スカエリッティによって創りだされた『戦闘機人タイプゼロ・セカンド』。

父のゲンヤを迎えに行くために姉のギンガと共にミッドチルダ臨海第8空港を訪れるが、ロストギアによる大火災が発生しギンガと逸れてしまう。

安全な場所を求めて空港の奥へ向かうスバルだったが、そこは既に火の手が回っており、戻ろうにも元来た道は炎の壁によって塞がれ動くことができなくなる。

そして、崩れた像がスバルを押しつぶそうとした瞬間、突然現れた少年・・・シン・アスカに助けられる。

シンはスバルを助けた後すぐに去ろうとするがスバルはお礼を言っていないかったためお礼を言おうとシンに向かって走り出しシンを引き留めようとするがそのまま転移に巻き込まれ、ミッドチルダから離れることになる。

シンはスバルをすぐにミッドチルダへ帰そうとするが、9日にわたる説得の末に旅の動向を許される。

スバルがシンと旅をするようになって4年後、スバルは順調に成長し、今ではシンの背中を任せられる新たなパートナーとなっている。使用デバイスはインパルス（出会った時はマッハキャリバーを持っていない為）。

普段の依頼遂行時使用武器はティーガ・ド・ラガンとティーガ・ラガン、サーペンティン（シルバーカラー）を使う

リオン・マグナス（16）

本作主人公その2。

本名エミリオ・カトレット。

元セインガルド王国客員剣士。

かつて自分の大切な人であるマリアンをミクトランの手から救い出すために仲間であったスタン・エルロン達を裏切り、スタンに未来を託し、濁流に飲み込まれ命を落とした。

しかしリオンはフォルトウナから生み出された聖女エルレインの力により蘇生されてしまう。

その後、スタンの息子であるカイル・デュナミスと出会い、彼から『ジューダス』という名を貰う。

カイル達と別れたりオンはカイル達を見守っていたがあまりにも頼りないのでストレイイズ大神殿にて再び手を貸し、そのままカイル達と行動することになる。

その旅の中エルレインは過去へ向かい歴史を歪ませた世界へ来たりオン達は自分達の歴史を取り戻すべくエルレインと戦い神の卵にてエルレインとフォルトウナを倒すが歴史の修正作用によりリオンのいた世界から去った。

リオンは目を覚ますと自分が生きていることと現在の自分の服装、そして鞘の中に納まっていた剣が歴史を正す戦いの時に消滅した筈のソーディアン・シャルティエであることに驚愕したがシャルティエとの相談の末現状の確認の為に周囲を探索することにした。

その時にモンスターに襲われていた少女・・・東風谷 早苗を助け彼女の頼みにより仕方なく早苗と共にレリクスの探索をしている時に新たな仲間と出会う。

レリクスを脱出した後はクラウドにスカウトされ早苗と共にリトルウイングへ入社することになる。

使用する武器はソーディアン・シャルティエ。

東風谷 早苗（16）

本作ヒロインその2。

守矢神社の風祝。

早苗のいた世界は神への信仰が薄れ信仰がないと存在することができない八坂 神奈子と洩矢 諏訪子は今後どうやって生き残るかを話し合った結果ある賭けに出た。

その賭けとは今早苗が住んでいる世界の信仰を代償に人間と妖怪が共存する世界『幻想郷』へ転移し、そこで人間と妖怪から信仰を得るというものであった。

早苗は長い葛藤の末に2柱の賭けに乗ることを決意し、自分がいた世界に別れを告げ転移した。

しかし、転移している最中に大きな歪みが発生し、早苗は歪みの中に吸い込まれてしまい、2柱から逸れてしまった。

目を覚ました早苗は自分が見慣れない場所にいることに混乱し、その状態でモンスターに襲われ迎撃しようとするが秘術を使用することができず絶体絶命の危機におそわれる。

しかし、偶然現場にいた少年・・・リオン・マグナスに助けられる。

助けられた後早苗はリオンと一緒に行動してほしいと頼み、結果リオンは同行してくれることになる。

その後、海底レリクスを脱出した2人はクラウチにスカウトされリトルウイングへ入社することになる。

なお、早苗の両親は事故で死亡し、友人達は戦地へ駆り出され全員戦死している。

装備は入社後にリオンと相談して購入したセイバーとシールド、探索時に拾ったハンドガンとウオンド。

レイ・ザ・バレル（17）

本作主人公その3。

シンの親友。

スーパーコーディネーターを創る資金源として創りだされたアル・

ダ・フラガのクローン。

クローンのため寿命が極端に短くメサイア戦役前には後数年しか時間が残されていなかった。

そのためレイはデュランダル議長の創る世界を創りだすためにキラ・ヤマトと戦い、敗れ、しかもデュランダル議長を自分の手で撃ってしまう。

悲しみと後悔に苛まれたレイはこのまま死ぬことを決意したがその直後にシンの呼びかけに覚悟が揺さぶられてしまう。

その時デュランダル議長からデバイス『レジェンド』を受け取った瞬間デュランダル議長によってC Eから転移させられた。

転移したレイは現状の確認をすると今自分が持っている物は今着ているザフトの赤服とデュランダル議長から託された物のみだった。

何か使える物はないかと探索していくうちに、モンスターに襲われている少女・・・エミリア・パージパルを発見する。エミリアを助けようとするレイだったが、今自分は非武装状態であることを歯痒く感じたがその時デバイス『レジェンド』が起動する。

レジェンドを起動したレイはエミリアを襲っていたモンスターを倒し、エミリアと共にレリクスから脱出するために奥へと進み再起動したスヴァティアと遭遇し、辛くも撃退するが、レイの持病が再発し、心配になったエミリアの注意がレイに向けた瞬間にスヴァルティアが再び起動し、エミリアを庇い致命傷を負う。

薄れゆく意識の中最後に聞こえた声は

『あなたを死なせはしません・・・』という声であった。

目を覚ましたレイは近くにいた女性・・・チエルシーにここはどこかと尋ねここがクラッド6と呼ばれるコロニーでこの部屋は民間軍事会社リトルウイングだということを知る。

その直後クラウチにスカウトされ、リトルウイングの社員となるこ

とを決意する。

その後シンと再会し新たな仲間の出会うことになる。

尚、ミカがレイの身体を修復する際にテロメアも修復したため、寿命の心配はなくなった。

使用デバイスはレジェンド。

普段の依頼遂行時はエンシエント・クォーツとティーガ・ド・ラガン、インフィニットコランダム（シルバーカラー）を使う。

エミリア・パージバル（16）

本作ヒロインその3。

記憶喪失の少女。

元ガーディアンズ。

（かつては孤児だったが非常に高い記憶力と演算能力に注目され、ガーディアンズの研究部に所属していたがリュクロスの調査隊のメンバーとして参加した時に見捨てられてしまい、命を落とした。その瞬間リュクロスに眠っていたミカが覚醒し、エミリアを蘇生するが、エミリアは見捨てられたショックで記憶を失ってしまう。

また、非常に高い演算能力を持つエミリアを生体パーツとして稼働するテンマのコアとして利用されていた。これによってエミリアは無意識のうちにガーディアンズに対する不信任を持っている）

家でいつもぐうたらしていたために自分の引き取り手であるクラウドに強引にリトルウイングに加入させられ、海底レリクスの調査が初任務となる。

クラウドが依頼を探しに行くのを見送った後突然頭痛に苛まれ、気が付いたら自分1人になっていた。

いつの間にか1人になったことにオロオロしていたエミリアは突然モンスターに襲われてしまう。

戦闘経験の無い彼女は逃げるので精一杯だったが追い詰められ、自

分の死を意識した瞬間、突然現れた少年・・・レイ・ザ・バレルによって助けられる。

レイはここから脱出するために奥へ向かうと言うがエミリアはこれに反対し引き留めようとするがレイはそのまま奥へ向かっていったため渋々ついていくことにした。

最深部に着いて一安心するエミリアだったが機能を停止していた筈のスヴァルティアがいきなり再起動しエミリアとレイに襲いかかれるが辛くも撃退に成功する。

しかし、レイが突然苦しみだし、心配になったエミリアが注意を逸らした時スヴァルティアがいきなり再起動しエミリアへ襲いかかるがレイがエミリアを庇い致命傷を負うこの時からエミリアの記憶は無いが彼女の中で眠っていたミカが再び覚醒し、レイを蘇生した。

目を覚ましたエミリアはここは自分とクラウドの部屋だと認識するとさっきまでの出来事が夢だったと自己完結する。

その直後にクラウドに呼び出され渋々リトルウイングへ向かった。

そこでエミリアは夢で会った筈のレイと再会する。

そして、新たな仲間と出会うことになる。

使用する武器は入社時に支給されたセイバーとハンドガン・海底レリクスを搜索している時にレイが発見したクラーリタ・ヴィサスを使う。

ソーディアン・シャルティエ

リオンの居た世界でかつて行われていた天地戦争で製作された決戦兵器。

シャルティエという人物の人格が埋め込まれており、自我を持っている。

リオンが「ジューダス」として行動している時に歴史修正の際に失われていたがフォルトウナが消滅したことによって『なかったこと

に』されたため、リオンと共にグーラルへ流れ着いた。
流れ着いた後もリオンと共に行動しており、自分の声が聞こえるシ
ン達の話相手になったり、相談役をしていたりしている。
今のリオンの雰囲気がいい方向に向かっていることをとても喜んで
おり、リオンを変えてくれた人々には常に感謝している。

特殊設定

早苗の故郷について

早苗の故郷はシンとレイと同じC・E。

しかし、ラクス・クラインの行った政策に反対した結果戦争状態と
なり、その為友人は全員戦地へ駆り出され、全員死亡し、早苗が離
れた直後にラクス・クライン直属の部隊通称『歌姫の騎士団』によ
って壊滅している。

キャラ設定1（後書き）

どうも飛鳥です。

少し話が進んだので本編に出てくる7人の紹介と独自の設定を書きました。

早苗に関しては9割以上が早苗の設定をみて独自解釈をした結果こうなりました。

宗教が壊滅的な打撃を受けたC・Eなら2柱の神の存在が危険な状態に納得できるので…）ヲイ
では（・・・）ノシ

第4話『借金回収〜後編〜』

今更だが世界は広いと思っている…

本当ならあの場で死ぬはずだった俺が今この場で生きている。

あの時ギルからレジエンドという名のデバイスを託されてから色々なことが起きた…

エミリアを庇い死んだと思えば何故か生きていて、更にはもう寿命が尽きてもおかしくなかった筈なのに人並み位には生きられるようになったりと…

それだけではなく、二度と会えないと思ったシンとの再会もできた…
事実は小説よりも奇なりというがまさにこのことだな…

エミリア

「お〜い。レイ！準備が終わったよー！！」

レイ

「わかった。すぐに出発するぞ」

今俺ができることはここにいる仲間と共に戦うことだな…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

〜世界を駆け巡る者達〜

惑星モトウブ クロウドック地方

出発から10分後

トニオ達と共に行動し、カーシュ族の村を目指して進むシン達は襲いかかる原生生物を倒しながら進むと1つの分岐道にあたった。

スバル

「わわ！前の道は炎に遮られてて進めないよ！！」

リイナ

「たぶんカーシュ族がやったんだね。仲間にしか道を分らないようにするために」

トニオ

「近くに何かオブジェクトが無いか確認するしかないな」

レイ

「周辺の搜索をする組と周囲の警戒をする組と分けるべきだろう」

リオン

「同感だな。搜索はシン、レイ、エミリア、リイナの4人、周囲の警戒は僕と早苗、スバル、トニオでいいだろう」

スバル

「よーし！頑張るぞー！！」

傭兵搜索中…

早苗

「？これは何だろ？」

シン達が探索をしている間、周囲の警戒をしていた早苗だったが、変な形の塊を2つ見つけ、それを拾った。

早苗

「何かの剣のようだけど…」

早苗は自分が拾った2振りの剣を眺めながら

早苗

「でも何か変な形…」

そう拾った2振りの剣を酷評しながら周囲の探索をしていると何か変な暗号らしきものを発見した。

早苗

「これって…」

早苗はまさかとは思いつつもリイナを呼びに行くことにした。

惑星モトウブ クロウドック地方 分岐エリア
探索から20分後

リイナ

「まさかここに暗号があるなんてね…」

レイ

「まさに灯台下暗しだな」

早苗が見つけた暗号のあった場所とはエリアの中央にあった紫の花の中にあつたのである。

傭兵解読中…

リイナ

「えーと読むよ。『我ら火を怖れぬ者なり。怖れる抱く者怖れに焼かれるであろう』って書いてあるよ」

リイナがそのメッセージを読み終わると同時にレイは答えを導き出した。

レイ

「おそらくは火に怯えて別の道に行くと待っているのは灼熱地獄。

つまり正解は炎のある方だろう」

エミリア

「ええっ！？でも本物の炎だったらどうするのさ！」

レイの回答に対して進むことをためらっていたエミリアを見て、早苗はそのままつつきることにした。

早苗

「あれ？まったく熱く無いですよ？」

早苗の勇気ある行動もあってこの道が確実に正解だと判断したシン達は炎の遮る道を進んだ。

傭兵進行中…

惑星モトウブ クロウドック地方

レイ

「ここまで順調に進むことができたな」

トニオ

「だな。おっ、これも目印だな。リイナ、解読を頼む」

リイナ

「あいよ。…うーん、これは…」

エミリア

「あ、これこの先の道のりについてだ」

リイナ

「え？」

エミリア

「今までの目印と違ってかなり詳細に書いてあるね」

レイ

「おそらくこれが最後の目印だろう」

エミリア

「だね。とすると…」

レイ

「ふむ、どうやら割と近い場所にあるようだな」

先程のような分岐エリアに何度か遭遇したがその度に解読し、順調に進み続けたシン達はまた新たなメッセージを発見して解読しようとする。エミリアとレイがすぐに解読して見せた。

リイナ

「…なんで読めるんだい？」

エミリア

「なんで…って」

リイナに質問されてレイはこう返した。

レイ

「先程からリイナが読んでいる所を後ろから見ただけだが…」
リオン

「だとしても理解が早すぎないか？僕にはさっぱりわからんが…」
エミリア

「そ、そんなことないって。誰にだってできるよ、これくらい！」

リオンにも言われてしどろもどろになりながら答えを濁したエミリアは近くにいたスバルに助けを求めたが。

スバル

「うん！全然わかんない！！」

スバルは堂々と分らないと返した。

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「レイは気にしなくても私は気にするの！！ホラホラこつちだよ！早くいこー！」

レイのフォローになってないフォローに突っ込みを入れながら先へ進もうとするとエミリアの目の前にフォトンの矢が刺さった。

エミリア

「え、なに！？」

トニオ

「あいつか！」

エミリアいきなりのものでパニックになる。そんなエミリアをよそにトニオは矢を放った犯人と思われる少年を発見した。

トニオ

「もらったぜ！！」

？？？

「ッ！ハアアアア！！！！」

トニオ

「なに！？」

リイナ

「危ない！！」

スバル

「大丈夫ですか！？」

トニオはその犯人である少年に対しクローで斬りかかろうとするがそれに対し、何かの魔法陣を展開し迎撃、リイナがトニオに飛びかかって回避できたがその炎の影響で2人とも大ダメージを受けた。もし回避できなかつたら完全に2人の肉体が溶けていたかもしれない。

リオン

「あれはミラージュブラストか、厄介だな…」

早苗

「ミラージュブラスト？」

リオン

「擬似的に精霊を呼び出して攻撃をする攻撃方法のことだ」

早苗

「そんな物が…」

シン

「俺達は2人の治療に入るから2人は奴を頼む！」

早苗

「は、はい！！」

シン達はトニオとリイナの治療をされていて手が離せない為、リオンと早苗は2人で戦うことになった。

???

「はあ！！」

リオン

「遅い。幻影刃！」

少年は槍を使ってリオンを突き刺そうとするがリオンは難なく回避し少年を斬りつけた。

???

「うつ…」

まさかの反撃に少年は少し態勢を崩したが、それが命取りであった。

リオン

「一気に畳み掛ける！爪竜連牙斬！月閃光！月閃虚崩！飛燕連斬！崩龍斬光剣！！消えろ！雑魚が！！」

早苗

「す、すごい…」

少年に待っていたのはリオンの剣技のラッシュであった。早苗はリオンの独壇場を見て呆然とする。

早苗

「（皆これだけ頑張っているのに私は何もできないまま…）」

がそれと同時に強い自己嫌悪に陥り、最初の分岐エリアで拾った剣を強く握りしめた。

早苗が自己嫌悪に陥っている間にリオンは少年にトドメを掛けに入った。

リオン

「塵も残さん！！奥義！！浄破滅焼闇！！！！」

????

「僕は…まだ…」

リオン

「闇の炎に焼かれて消えろ！！！！」

リオンの放った奥義によって少年は気を失い、リオンの勝利となった。

た。

リオン

「勝てると思ってたのか？」

惑星モトウブ クロウドック地方

カーシュ族の少年との戦闘から30分後

シン

「これでよしと」

トニオ

「わりいな。まさかここまでやられるとは思わなかったぜ」

トニオとリイナの応急処置を終えたシン達はリオンに負けて気を失っている少年を見ながら今後の方針について考えることにした。

スバル

「この子をどうするの？」

レイ

「おそらく彼はカーシュ族の者で、カーシュ族の村に何か異変があったのだろう」

トニオ

「仕方ねえ。ここは分担するか」

エミリア

「でも、あたし達の船に医療用の施設は無いし…」

リイナ

「じゃあ、あたい達がこの子を運ぶよ」

トニオ

「俺達の船には医療用の設備もあるからな」

スバル達はその提案に賛成しようとしたがそこにシンが異論を唱えた。

シン

「でもトニオ達もさっきのミラージュブラストのダメージを受けているだろ？俺と一緒に同行するけどいいか？」

エミリア

「ええ！？それじゃあこっちの戦力はほぼ半減じゃん！！」

レイ

「しかし、傷だらけの彼らでも不安は残るからな」

スバル

「うん。わかった！じゃあトニオさん達はよろしくね！！」

エミリア

「うー…分かったよ！でも早く追いついてきてね！」

エミリアはそれに対して不満を漏らしたが傷だらけのトニオ達をこのままにすることにも抵抗があつたため渋々承諾した。

傭兵進行中…

惑星モトウブ クロウドック地方 カーシュ族の村

カーシュ族の少年との戦闘から10分後

シン達と別れ、先へ進んでいたスバル達は襲いかかる原生生物達を蹴散らしながら進み、カーシュ族の村にたどりついた。

スバル

「やっとカーシュ族の村に着いたね！」

レイ

「途中の原生生物も大したことはなかったな」

しかし、ここでエミリアはある異変に気がついた。

エミリア

「でもなんか凄く焦げ臭くない？」

そう。エミリアの気付いた異変とは焦げ臭さであったのである。

カーシュ族の話を聞く限りここまで焦げ臭くなるような事はしないし、なによりもシン達と別れる前に襲ってきたカーシュ族の少年の事を考えるとここで何か事件が起きている筈である。

そう思ったエミリア達が先へ進むと彼女達の眼に映ったのは村全体が炎で覆い尽くされており、その中心に黒服の男とエミリア達が探していたワレリー・ココフをはじめとする逃走している集団、そして明らかに場違いの服装を着た女性と少女と子供2人であった。

??????

「まさか貴様らが動いているとはな」

??????

「——あなたを次元犯罪者として逮捕、及びあなたの持つているソレを渡してもらいます！」

??????

「ふん！これはこの世界を貴様達の手から守る希望なのだ！貴様達などに渡すような物ではない！！！」

黒服の男が忌々しげにどこかの組織の名前を呼び、その組織の所属している人物が黒服の男の名を呼び男の逮捕と同時に彼の持っている赤いノートのような物を渡せと言うが無論、男はこれを拒否し、戦闘が始まった。

目の前で繰り広げられている戦闘はとてもではないが人間ができるような動きではない。

しかし、これをただ黙ってみている訳ではないエミリアが叫んだ。

エミリア

「あんだ達ね！！ここをこんなにもした奴らは！！」

「?????&?????」

「！」

エミリアの叫びを聞いて戦闘を中断してエミリア達に目がいった。

「?????」

「こんなところにまだ人が居たのか！早くこの場から立ち去れ！」

エミリア

「いやそうはいかないね！ここをこんなにした犯人が目の前にいるんだから……」

エミリアが黒服の男に対して反論していたらいきなり女性の方がビームのような光線を放ち、エミリアに直撃した。

早苗

「エミリアさん！！」

早苗が悲鳴にも似た叫びを上げてエミリアのもとに駆け寄ると、エミリアは気を失っていた。

が、ひとつ違和感があった。

早苗

「（傷が付いていない？）」

それはエミリアの身体に傷が1つもついていなかったのである。

「?????」

「あなた達もこの場を見た者なら『保護』させてもらいます」
リオン

「ふん。『保護』よりも『確保』だろう?」
シャルティエ

『(うわー…坊ちゃん滅茶苦茶怒ってるよ…)』
レイ

「お前達のような奴に『保護』されるのはごめんだな」
?????

「仕方ない…ならあなた達を『保護』させてもらいます!!皆準備
はいい?」
????

「は、はい!」

女性の言葉に対してリオンとレイは反抗の意思を見せ戦闘が始まった。

????

「落ちなさい!!」

レイ

「遅いな。こんな弾などすぐに撃ち落とせる」

まず女性の傍らにいた銃らしきものを持った少女が銃らしき物を構え光弾を放つがレイはインフィニットコランダムを使って全て撃ち落としました。

更にお返しとばかりに逆に少女の持っている銃を狙撃して破壊した。

?????

「ウソ!?クロスミラージュが!!」
レイ

「この程度か?」

一方リオンはというと少年と少女2人を相手にしていた。

???

「はあ!」

リオン

「遅い。幻影刃!」

???

「フリード!お願い!」

フリードと呼ばれたドラゴン

「ぎゃおおん!」

リオン

「チッ!」

少年が繰り出した槍を難なくかわしたりリオンだが少女が召喚したドラゴンのブレスを受けそうになって回避したが苦戦していた。

早苗

「リオンさん!」

倒れたエミリアを介抱していた早苗は自分の無力を呪っていた。

早苗

「(なんで私には力が無いの!?またあの時のような事を見ているだけしかないの!?)」

早苗はかつて自分の居た故郷のことを思い出していた。戦争によって戦地へ駆り出されて死んでいった友人達。そして、それをただ見送ることしかできなかった自分。

早苗

「（もうあんな思いはしたくない！私だってリオンさんと一緒に戦いたい！！）」

そう自己嫌悪している早苗に聞きなれない言葉が頭に響いた。

??????

『（お前。力が欲しいのか？）』

早苗

「（誰！？）」

スバル

「早苗？」

??????

『（力が欲しいのなら我の名を呼べ！）』

その内容は早苗にとって最も欲しい答えだった。

スバルは早苗を心配そうな目で見ていたが、早苗はスバルの視線を無視し、自分の頭の中に響く言葉に呼応するかのようにその声がする剣を掲げその剣の名…

スバル

「ちよつと！早苗！？」

??????

『（我が名は…）』

早苗

「（あなたの名前は…）」

??????&早苗

『「デイルロス！！」』

リオンの世界で失われた筈だった天地戦争の切り札としてシャルテ

イエと共に開発されたソーディアン…
『ディムロス』の名を叫んだ。

リオン

「ディムロスだと!？」

シャルティエ

『うそ!? 確かに懐かしい気配がすると思ってたけどまさかディムロスだったなんて!!』

驚愕するリオンとシャルティエを余所に早苗とエミリアのいた場所を中心に巨大な炎の柱が立った。

惑星モトウブ クロウドツク地方

ディムロスの覚醒によって発生した炎の柱はスバル達と合流する為に移動していたシン達も見えた。

トニオ

「おいおいあそこは…」

リイナ

「カーシュ族の村がある所だよ!!」

シン

「まさかスバル達に何かあったのか!？」

炎の柱を見たシンはそのまま走りだした。

トニオ

「お、おい!! 待てって!!」

シン

「(スバル、みんな! 無事でいてくれ!!)」

シンを追うようにトニオとリイナも走り、シンはスバル達の無事を願いながら全力で走って行った。

惑星モトウブ クロウドツク地方 カーシュ族の村

正体不明の敵との戦いは早苗がディムロスを覚醒させたことにより危険と判断して正体不明の敵が撤退し、黒服の男もいつの間にかいなくなったことにより終息した。

その最大の功労者である早苗は敵が撤退した直後に気を失い、リオンに支えられていた。そこに別れていたシン達が出てきた。

トニオ

「おいお前ら！無事かって…なんじゃこりゃ…！」

リイナ

「ひどい…」

やって来たシン達もカーシュ族の村の惨状を見て思わず息を飲んだ。その後事後処理をしてシン達はトニオ達と別れクラッド6へ帰還することとなった。

シンを除く全員が依頼失敗という最後に顔を歪めながら…。

第4話『借金回収〜後編〜』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回もこのような小説を読んでいただきありがとうございます。

さて、今回はカーシュ族の少年との戦い黒幕の男と異世界からの介入者の遭遇と早苗と彼女が道中に拾ったソーディアン「デймロス」の覚醒ともう1つの謎の剣の獲得というお話です。

いきなりデймロスが出ることにびっくりしているかもしれません。何故デймロスが存在しているのかは後に明らかになります。

では（．．．）ノシ

第5話『動き出した影』

あたしが何を行っても信じてくれる人なんかいなかった。

あたしが言うことはみんな子供の戯言だと言って聞く耳を持つてくれる人なんていなかった。

でも、最近はあたしの言うことを信じてくれる人ができた。

シン…早苗…スバル…リオン…そしてレイ…

この人達はあたしが言うことを信じてくれた。

早苗やスバルなんかはこんなあたしと友達だと言ってくれている。まるで夢みたいに感じるんだ。

でもこれは現実だと信じたいの。

チエルシー

「あ！エミリア！やっと気がついたのネ！！」

エミリア

「チエルシー？あたし…」

そうしないとあたしの心が壊れてしまうから。

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

（世界を駆け巡る者達）

リトルウイング管轄区 カフェ

モトウブ帰還から10分後

モトウブから帰還したシン達はまだ気を失っている早苗とエミリア、カーシュ族の少年をチエルシーに任したシン達はクラウチに呼ばれ、シンとスバルはカフェへ向かいリオンとレイは早苗とエミリアを見ていてほしいと頼まれ医務室へ向かった。

シン

「シン・アスカ及びスバル・ナカジマ、出頭しました」
クラウチ

「よお来たか。先に一杯やらせてもらっているぜ」

シンとスバルが見たのはカフェで飲酒しているクラウチだった。

シン

「昼間に飲酒は体に毒ですよ？」

クラウチ

「まあいいじゃねえか」

スバル

「あ、あの今回依頼をしてもらったのに失敗してしまってすみませ
ん！！」

シンとクラウチがお決まりの定型文を言った後スバルは最初にした
ことは謝罪だった。しかし、クラウチの反応はスバルの予想の斜め
上を言っていた。

クラウチ

「あん？なに言っでやがる？俺は報酬の話でお前らを呼んだんだぜ
？」

スバル

「はへ？」

失敗した筈なのに報酬の話と聞いてスバルは思考停止寸前になった。
それも無理はない話である。つい先程まで依頼が失敗した事での叱
責だと思ったら報酬の話になっているからである。

スバル

「え？でも？あたし達依頼に失敗した筈じゃあ？」

シン

「ああ。状況が状況だったから言えなかったが…」

スバルがこれ以上考えると知恵熱を起こして倒れそうだったのでシンが説明することにした。

シン

「実はと言うとあの炎の柱が立った位にクラウチさんがワレリーさんを捕まえて借金を回収していたんだ」

傭兵説明中…

つまりシンの話をまとめると

シン、炎の柱を見て嫌な予感がする。

←

ワレリーの船が動き出す。

←

シン、通信を開いてクラウチにワレリーが動き出したことを伝える。

←

クラウチ、先回りする。

←

ワレリー確保。

←

借金回収（ついでに事情聴取）。

スバルはシンの手腕に感服するばかりだった。

もし自分がシンと同じ場面に直面したらここまでの機転は利かなか

っただろう。絶対に早苗達を心配してクラウチに連絡することを怠っただろう。しかし

スバル

「じゃあ何で先に説明してくれなかったのさ!？」

事前にこのことを知っていればここまで落ち込まなくてもよかっただろう。

このことにスバルは不満を持っていた。

が、シンにも言わなかった理由はあった。

シン

「もしあの状況でスバル達に言ってもリオンやレイはともかくスバルだと混乱するだろ？」

スバル

「う…」

立て続けに状況が変わり続けたあの戦場でそのようなことを言ってもおそらく頭に入るところかかえって混乱しただろう。

そのためシンは報酬を貰ってから事情を話そうとしたのだ。

クラウチ

「ってなわけで俺は借金も回収できたし言うことは無いんだがあいつの言っていたことが気になってな」

シン

「気になること？」

クラウチ

「なんでも変な嬢ちゃん達に声を掛けられてから記憶がまったく無くて気が付いたらカーシュ族の村がボウボウと燃えていただよ」
スバル

「（もしかしてカーシュ族の村にいたあの人達かな？）」

クラウチ

「ま、それに関しては俺も調べとく」

シンはクラウチの言っていた「変な嬢ちゃん」という単語にひっかかりを覚えたが報酬を貰ったのでそれ以上の追及はしないことにした。

クラウチ

「足手まといを抱えながらにしては上等な成果だぜ。あとさっきエミリアと早苗が目覚ましましたと連絡が入ったぜ」

スバル

「本当ですか！？ならいこ！シン！！」

シン

「わ、わかったって…あんまり引つ張るなよ！」

エミリアと早苗が目覚ましましたと聞いてシンを引つ張っていくスバルを見てクラウチは昔の事を思い出し、思わず頬を緩めながらシン達を見送っていた。

惑星モトウブ レリクス

ここは惑星モトウブに存在するレリクス

しかしグラールの人達にはここにはまだ足を踏み入っていないレリクスである。

そこにはカーシュ族の村を襲撃した犯人である女性達…

時空管理局のグラール本部が設営されていた。

????

「フエイトちゃん。首尾はどうだった？」

フェイトと呼ばれた女性

「あ、なのは。ごめん、駄目だった。あと少しまではいったんだけど…」

なのはと呼ばれた女性

「フェイトちゃんらしくないよね…。どんな人が相手だったの？」

フェイト

「黒いコートを着た男性なんだけど…」

なのは

「今私達が追っている次元犯罪者カムハーンだね」

フェイトと呼ばれた女性はなのはという女性に自分の戦った黒服の男との戦闘データを見せた。

なのは

「うそ！？これ本当に人の動き？」

なのははフェイトから見せてもらった戦闘データを見て、ただ驚くばかりだった。

それも無理は無い話で魔法を使っている自分達はともかく魔法なしでこのような動きをしてみせたのである。

フェイト

「あとこの人以外にも危険な人物がいたの」

なのは

「危険な人物？」

なのははこの世界にまだ危険な人物がいると聞いて驚き、フェイトに続きを促した。

フェイト

「うん。まず金髪の女の子なんだけど私の撃ったサンダースマッシュの直撃を受けても気絶しただけだった」

なのは

「え？」

フェイト

「次は黒髪の男の子。エリオとキャロが2人がかりで挑んだけど傷をつけられなかったの」

なのは

「あの2人もかなり強くなってる筈だけど…」

フェイト

「次に金髪の男の人。ティアナが戦ったけどクロスミラーージュを破壊されてしまったの」

なのは

「…確か今ティアナの魔導ランクはAだった筈だよね…」

フェイト

「最後に緑の髪の女の子。この子自体は攻撃してこなかったけど一番危険だと思う」

なのは

「なにがあつたの？」

フェイト

「なのはもあの炎の柱を見たと思うけどその発生源は彼女なの」

「うわあ…」

フェイト

「さらに…」

なのは

「まだあるの!？」

なのははさっきからぶっ飛んだ内容ばかり聞かされていたが次にフェイトが口にした言葉が彼女を更に驚愕させることとなる。

フェイト

「この人達と一緒にいた女の子も含めて全員ロストギアを所持してた」

なのは

「そんな…」

フェイト

「ロストギアは危険な物だから早く確保しないとイケないね…」
なのは

「うん」

彼女達…遺失物管理部・機動六課…通称起動六課はグラールにある
ロストギアの回収の為にこの世界に来ていた。

なのは達は自分達がやっていることは正しいと思っている。

その価値観はおそらく死ぬまで無くならないだろう。

全ては管理世界の平和の為に…。

その正義を妄信しながら機動六課はこの世界に大きな混乱を起こし、
それが原因で次元戦争がおこる事など知らずに…。

第5話『動き出した影』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はクラウチへの報告と異世界の介入者「機動六課」のお話です。クラウチから聞いた不審な人物にシンは疑問を抱き、次のお話でその正体が発覚、シンと時空管理局との関係を描きたいと思います。ここからは原作と大きく話が変わっていきます。
では（・・・）ノシ

キャラ設定2（前書き）

今回紹介するキャラクターはシン、レイ、早苗と密接なかかわりを
持っている

C・Eのキャラが中心です。

名前がまだ出ていないキャラクターも多数います。

原作を重視していますが違ふところも多いのでご了承ください。

キャラ設定2

キラ・ヤマト（享年25歳）

ラクス・クライン親衛隊「歌姫の騎士団隊長」

スーパーコーディネーター。

シンにとって切っても切れない縁があった人物。

シンの両親や守りたい存在だったステラ・ルーシエを殺した張本人メサイア戦役の後ラクス・クラインの護衛として行動していた。

しかし、彼女と行動を共にしていくうちに不信感が大きくなり独自に彼女のやっっていることを調査していた際に不老不死の研究、新型兵器『デバイス』の起動実験を知り現場へ急行した。

その時に心が壊れたシンを保護し、彼を匿うことにした。

2年の時間をかけてシンの心がようやく治りかけていたところに歌姫の騎士団の襲撃にあう。

その際にシンを狙った凶弾からシンを庇い、致命傷を負う。

自分の死を悟った彼はシンにあることを頼み、息を引き取った。

シンは彼の願いをかなえるために今も世界を駆けまわっている。

ルナマリア・ホーク（享年22歳）

元ザフト赤服

プラントの一コーディネーター。

シンのパートナー。

シンとはザフトのアカデミーからの仲。

メサイア戦役後シンと同じく歌姫の騎士団に捕らわれクライン派が所持している研究施設に入れられ人体実験の被検体とされる。

その際に人の枠を超えた力を持った彼女だが、代償は彼女の心だった。

心が壊れた彼女は体の隅々を改造し尽くされ、ついにはメサイアで発見された新型兵器『デバイス』の実験体とさせられる。

その後、テストと称してシンと戦わされ命を落とす。

このテストの後その施設は暴走したシンによって破壊された。

彼女の死は未だにシンが背負う十字架となっている。

ギルバート・デュランダル（享年32歳）

元プラント最高評議会議長。

プラントで最高評議会の議長をする前は学者だった。

実はこの時にジェイル・スカエリッティと接触しており、彼からデバイスの作成方法とクローンの寿命を延ばす方法を知り、議長としての仕事をこなしながらレイが服用していた薬の精製とデバイス『デステイニー』『レジェンド』『インパルス』を作り上げた。

その後メサイア宙域戦でレイへ『レジェンド』を託し息を引き取る。しかし、このデバイスが原因でシンの悲劇が引き起こされるとは彼は知る由もなかった。

その他

ラクス・クライン（25）

現プラント最高評議会議長
存命。

早苗の故郷を滅ぼした元凶。

密接に関わっていた人物曰く彼女の父であるシーゲルの死から変わったと言っている。

裏で何か怪しい実験をしている。

アスラン・ザラ（25）

オーブ軍中将

存命。

早苗の故郷を滅ぼした部隊を指揮していた人物。
キラの死後から性格が急変し、邪魔をする者は問答無用で殺すほどになった。

カガリ・ユラ・アスハ（25）

元オーブ元首

存命。

メサイア戦役の後自分の無知さを痛感し、一通りの作業を行った後
オーブ防衛戦で奇跡的に生きていたユウナ・ロマ・セイランのもと
で政治学を勉強中。

メイリン・ホーク（享年22歳）

元ミネルバオペレーター

ルナマリアの死後、重い病を患い彼女の後を追うかのように息を引き取った。

ユウナ・ロマ・セイラン（29）

オーブ五大氏族セイラン家当主
存命。

メサイア戦役後壊滅したセイラン家の当主となる。

現在は仕事の合間にカガリへ政治学を教えている。

ステラ・ルーシェ（享年16歳）

エクステンデット

ベルリン事件にてキラの手で致命傷を負い、シンの腕の中で息を引

き取る。

彼女の死はルナマリアと共にシンが背負う十字架となっている。

マユ・アスカ（死亡していたら享年9歳）

オーブ解放作戦の際にフリーダムの流れ弾によって行方不明となる。
シンは彼女は死んだのだと認識している。

八坂 神奈子（特定不明）

早苗が仕えていた神。

自分と諏訪子のいく末を考慮した結果幻想郷へ行くことを決意。
しかし幻想郷へ移動している最中に早苗と逸れてしまう。

洩矢 諏訪子（特定不明）

早苗が仕えていた神。

自分と諏訪子のいく末を考慮した結果幻想郷へ行くことを決意。
しかし幻想郷へ移動している最中に早苗と逸れてしまう。

また、早苗の先祖でもある。

ソーディアン・デймロス

天地戦争で作られた決戦兵器。

ワレリーを追っている最中に早苗が拾った剣。

早苗の精神に感応し、覚醒する。

もともとはダイクロフトでその役目を終え消えるはずだったが
他のソーディアン共々、何者かの手によってグラールへ飛ばされる。
他のソーディアンはどこにあるかは不明。

キャラ設定2（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はキャラ紹介です。

種死からのキャラが大半ですが別の作品のキャラもあります。
色々とおかしいかもしれませんがそこは脳内補正で（ヲイ
では（・・・）ノシ

第6話『決意する者達』

僕は正直なぜ自分が生きているのかよくわからない。

あの時に僕はソーディアン・シャルティエの役割を終えて消える筈だった。

しかもまた坊ちゃんとかうして話をして、共に戦うことができる。

さらには坊ちゃんがマリアン以外の人に興味を持ったことに僕はすごく嬉しい。

最近は早苗って子が気になる。

なんか坊ちゃんに似ている所もあるし僕の声も聞こえる。

まあ早苗さん以外にも僕の声が聞こえる人が4人もいたけどね…。

最近は早苗さんがこの前の任務の時にディムロスを拾ってマスターになった。

ディムロスが言うには僕たち以外のソーディアンもどこかに飛ばされたらしい。

でも、状況が変わろうと僕の役目は変わらない

早苗

「ほえ…？」

シャルティエ

『あ、早苗さん。起きたんだ。坊ちゃん、早苗さんが起きましたよ！』

リオン

「まったく…。やっと起きたか」

早苗

「はれ？リオンさんにシャルティエさん？」

僕はソーディアン・シャルティエ。

僕のマスター、リオン・マグナスの剣だ。

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

クラッド6 リトルウィング管轄区 シンの部屋

クラウチへの報告から10分後

クラウチから早苗とエミリアが目覚ましと聞いたスバルはシンを引っ張って他のメンバーがいる医務室へ向かった。

医務室へ着くとすぐに入ったスバルは早苗とエミリアに身体の調子を聞くが特に問題は無かったので全員はシンにカーシュ族の村で起きたことを話す為にシンの部屋に向かった。

シン

「それでカーシュ族の村で何があったんだ？」

レイ

「ああ。まずは…」

少年説明中…

レイ

「ということだ」

エミリア

「えっと…その事は夢じゃないの？」

リオン

「そうだ。何も覚えていないのか？」

レイがカーシュ族の村で起こった事の説明を終えたらエミリアがいきなり夢じゃなかったと言いだしたので不審に思ったリオンはエミリアを問いただすことにした。

少年説明中…

エミリア

「やっぱり夢じゃなかったんだ…」

そのことを聞いたエミリアは表情を暗くするともうひとつ自分が夢の出来事だと思っていたことがもしかしたら現実起こったことなのではないかと思ったエミリアが更にレイへ質問した。

エミリア

「もしかしてあたしのせいでレイは一度死んじやっているの!？」

レイ

「……………ああ。そうだ」

ミカ

『そうです。夢ではありません』

レイが質問に答えたあとエミリアからミカがでてきた。

ミカ

『ようやく私の存在に気づいてくれたのですね…エミリア…』

エミリア

「え!?! あんた誰!?! 急に私の身体から出てきた!?!」

エミリアはいきなりのこととで動揺する。

しかしこれは大抵の人はエミリアと同じ反応をするだろう。

いきなり自分の身体から何も知らない女性が出てきたのだから無理もない。

更には自分の頭の中に様々な情報が流れ込んでくるのである。

しかし、エミリアはその情報からひとつの結論を出した。

エミリア

「ようはこれってあたし達の抹殺計画ってことなの？」
ミカ

『身体を器、精神を命と考えるならそうなりますね』

エミリアはしばらくうつむいたままだったが、ある決意をした。

エミリア

「ねえみんな」

レイ

「なんだ？」

エミリア

「あたし戦うのは好きじゃないし得意じゃない。けど、強くなりたいの！！」

エミリアの決意…それは強くなることである。

確かに今の自分は強くない。しかし、強くなることができる。

だからエミリアは自分が知っている中でも最高峰の実力を持つシン達に強くしてほしいと願った。

レイ

「その心構えが大切だ」

リオン

「フン。そこまで強くなりたいのなら付き合おう」

シャルティエ

『僕もできる限り手伝うよ！』

スバル

「うん！あたし達でよければいつでも付き合おう！！」
シン

「でもあまり無理はするなよ」

レイ達はエミリアの頼みを受け入れた。

エミリア

「みんな…ありがとう！」

自分の頼みを聞いてくれたシン達が承諾してくれたことに喜ぶエミリア。

しかし、シン達はそこに影を差している少女が居たことに気がつかなかった。

早苗

「（やっぱり私は弱い…。皆の前で私も強くしてほしいなんて言えない…）」

影を差している少女…早苗は喜ぶエミリアを傍目に自己嫌悪に陥っていた。

自分も一緒に強くしてほしいと言えばおそらく彼らは協力してくれるだろう。

しかし、早苗はその一步を踏み出せずに皆の眼に入らぬ所で俯くだけだった。

ディムロス

『（早苗？どうかしたのか？）』

早苗

「（いえ、なんでも無いです）」

そこに心配になったディムロスが声を掛けるが早苗は気が付きなんでもないと答えた。

その反応がかえってディムロスを心配させていることに気がつかず

に。

惑星パルム インヘルト社 シズルの部屋
モトウブでの戦いから2日後

ここは惑星パルムにあるインヘルト社。
今やグラールに無くてはならないほどに急成長をした会社である。
この部屋はインヘルト社の社長ナツメ・シュウの息子であるシズル・
シュウの部屋である。
そして、その部屋にいるのはこの部屋の主であるシズルと彼の中に
宿っている太陽王カムハーンであった。

シズル

「（カムハーン。あの時あなたが言っていた時空管理局とは彼女達の
ことなのか？）」

カムハーン

『（うむ。奴らはお主たちで言う旧文明時代からこの世界の宝を盗
もうとしていた者達だ）』

シズルはカムハーンにカーシュ族の村で遭遇した女性…フェイト達
の事を聞いた。

シズル

「（でも管理局とやらはむこうの世界では100年程度しか歴史が
無い筈だったが…）」

シズルの疑問…。

それはどう考えても彼女達の時間とここグラールの時間の流れがど
う考えても違うことに気がついた。
それに対してカムハーンの答えはこうだった。

カムハーン

『（奴らの世界とこの世界との時間軸はかなり異なる）
シズル

「（そんなことが本当に起こるのか？）」

カムハーン

『（現にモトウブで奴らと出会ったのがその最たる例だ）
シズル

「（そうか……。ではあなたの言っていた【復活計画】とは？）」

カムハーン

『む、そういえば説明していなかったな』

シズル

「（ああ。説明を頼む）」

もうひとつシズルが疑問に思ったのは【復活計画】の内容である。
カムハーンはこの質問に対する答えも持っていた。

カムハーン

『（あの計画は元々この世界の民たちを乗っ取るなどという計画ではない）
シズル

シズル

「（？では本当の内容は？）」

カムハーン

『（【復活計画】の本来の目的は奴らを我らの潜伏場所であるマガハラに奴らを誘き出して一網打尽にする計画の事だ）
シズル

「（しかし、前に言っていたミカという女性はこの世界の民を乗っ取る計画だったとして反対したらしいが？）」

カムハーン

『（うむ。私とお前以外にこの計画の真相を知っているのは私の友

ただだ）』

シズル

「（友？）」

カムハーン

『（その者の名はシン。そしてワイナールだ）』

シズル

「（片方は聞いたことがある。確かシン・アス力。今は傭兵をやつてゐるらしいけど）」

カムハーン

『（ああ。だから私はS E E Dに侵された身体を押して奴の剣を創つた）』

シズル

「（剣？）」

シズルは今のグラールの技術を超えた技術を持つ旧文明人の最先端の技術を持ったカムハーンが創つたという『剣』が気になった。

カムハーン

『（それは奴が生まれた世界で使っていた兵器だ）』

シズル

「（そうか…）」

カムハーン

『（さて、時空管理局にこれ以上この世界を汚さない為にもうしばし、付き合ってくれ）』

シズル

「（ああ。一度失われた命だ。だからこの命は僕を育ててくれたこの世界を守るために使う…！）」

シズルはこれ以上管理局に自分達の故郷を汚されない為に自分の命を賭して戦うことを決意するのだった…。

第6話『決意する者達』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は目を覚ましたエミリアの決意と早苗の葛藤、そしてシズルの決意という話になっています。

本作に登場するカムハーンは原作とは性格が違っているのでそこはご了承ください。

では（．．）ノシ

キャラ設定3 (前書き)

キャラ紹介第3回目です。

今回紹介するキャラクターはシン達が所属しているリトルウイングとグラールを騒がす起動六課、影でグラールを守る者達です。

まだ出ていないキャラもあります。
では、どうぞ。

キャラ設定3

クラウチ・ミユラー（34）

リトルウイングの総括役でありエミリアの保護者。
元警察官。

リトルウイングで依頼の管理や新しい人材のスカウトを主に担当している。

原作よりは真面目に働いているがたまにサボる。

しかし、彼の仕事は非常に質が高く彼がいなかったらリトルウイングの機能は麻痺してしまう。

また、人材を見抜く眼を持っており、シンをはじめ優秀な人材を見事に集めている。

エミリアに対しては自分の娘のように大切にしているが昔いた自分の娘を思い出してしまうこととリトルウイングの総括をしているために私情を挟めないため冷たく接している（まあそれでも彼女にあった依頼を用意したりレイ達を教官にするあたりは甘い）。

チエルシー・トーン（特定不能）

リトルウイングの経理および受付嬢。

元同盟軍教官。

リトルウイングの経理などが彼女の仕事。

クラウチと同じく彼女がいなかったらリトルウイングの機能が麻痺してしまう。

特徴的なしゃべり方が特徴。

エミリアは自分の妹または娘として可愛がっている。クラウチの悩みを知る数少ない人物。

ミカ（28）

エミリアの中に宿る旧文明人。

カムハーンの妃でもあり、太陽妃と呼ばれていた科学者。

もともとカムハーンの仲は良好だったのだが管理局の仕業によって関係が悪化、それが誤解だと知る前に封印される。

クノー・オーガスト（26）

傭兵。

元ガーディアンズ。

リトルウイングに所属する傭兵。

前にエミリアの教官になったことがあるが1日でエミリアがギブアップした。

エミリアはガーディアンズにいたところから顔を知っておりそれ故に彼女を気にかけている。

今後はバスク共々早苗の特訓を手伝うことになる。

バスク・ウギン（特定不能）

傭兵。

リトルウイングに所属する傭兵。

もともとはフリーの傭兵だったがクラウドにスカウトされ、リトルウイングに入ることにする。

エミリアと早苗が非常に気になっている。

今後はクノー共々早苗の特訓を手伝うことになる。

トニオ・リマ（29）

傭兵。

元ガーディアンズ。

リトルウイングに所属する傭兵。

もともとはフリーの傭兵でシン達と行動していたがユートのミラー
ジユブラストによって負傷する。

その後、気を失ったユートをリイナとシンと共に自分の船へ運び、
スバル達と合流する。

スバルの話を聞いてリイナと共に荒らしまわった犯人達を逮捕して
いたところをクラウチにスカウトされ、リトルウイングに所属する
ことになる。

ガーディアンズを辞めたのはリイナのこともあるが制服を着せられ
そうになったため抜けたらしい。

リイナ・リマ（25）

傭兵。

元タイラー・ファミリーでラインディール号の副艦長。

もともとはフリーの傭兵でシン達と行動していたがユートのミラー
ジユブラストによって負傷する。

その後、気を失ったユートをリイナとシンと共に自分の船へ運び、
スバル達と合流する。

スバルの話を聞いてリイナと共に荒らしまわった犯人達を逮捕して
いたところをクラウチにスカウトされ、リトルウイングに所属する
ことになる。

実はトニオの子供を懐妊している。

高町　なのは（19）

時空管理局に所属する少女

機動六課隊長。

管理局の指示によりグラールに点在するロストギアの回収のためと次元犯罪者カムハーンの逮捕の為にグラールへやってくる。

自分に気に食わないことをすると「少し、頭冷やそっか…」と言って肅清することもある（主にティアナ）。

管理局の正義を妄信している傾向がある。

しかし、その無茶苦茶な行動である人物の逆鱗に触れることになる。

フエイト・テストロッサ・ハオラウン（19）

時空管理局に所属する少女。

機動六課副隊長。

管理局の指示によりグラールに点在するロストギアの回収のためと次元犯罪者カムハーンの逮捕の為にグラールへやってくる。

惑星モトウブのカーシュ族の村を焼いた犯人。

理由は危険なロストギアを渡さなかったため。

カーシュ族の村でレッド・タブレットを入手する直前まで順調だった

たがカムハーンとリオン達の妨害により失敗する。

しかし、その無茶苦茶な行動である人物の逆鱗に触れることになる。

八神 はやて（19）

元時空管理局に所属していた少女。

J・S事件を契機に時空管理局の闇を知ってしまい現在狙われているグラールにこの危機を伝えるためにヴォルケンリッターと共に管理局を脱走する。

しかし、途中でなのは達の妨害に遭い散り散りになってしまう。

無一文の状態で生き倒れてしまい、シズルに保護される。

この時にシズルに惚れてしまう。

ヴォルケンリッターの面々
夜天の書の守護プログラム

主であるはやてと共に管理局を脱走するが逸れてしまい、散り散りになった。

シグナムは同盟軍

ヴィータはガーディアンズ

シャマルはグラール教団

ザフィーラはリトルウイングに保護される。

それぞれ別の方面ではやてと仲間を探している。

フォワードのメンバー

原作との大きな違いはスバルがいないこと。

惑星モトウブのカーシュ族の村でレイとリオンの2人に戦闘を挑むがティアナはクロスミラージュを破壊され、エリオとキャロは連携でリオンを苦しめたが早苗の介入により敗北した。

シズル・シュウ（20）

新進気鋭の会社インヘルト社の会長ナツメ・シュウの息子。

亜空間発生装置を完成させたのは彼による功績だが一度事故を引き起こしその際に一瞬だがマガハラへの道を開く。

その際に致命傷を負うがカムハーンの手によって蘇生され、カムハーンからこのグラールを狙うものが来ると言われ半信半疑でカーシュ族の村へ向かった際に管理局の所業を見て真実だと分かり、彼と共に管理局と戦うことを決意する。

その後、情報収集のために街へ行こうとする際に行き倒れたはやてと遭遇、急遽インヘルト社へ連れていきはやてから管理局の狙いを聞くこととなる。

カムハーン（特定不能）

かつての旧文明人の頂点に立っていた太陽王。

管理局からグラールを守っていた人物。

かつてSEEDが来襲する前にやってきた管理局員を殲滅し、反撃としてミットチルダに赴き、管理局に大ダメージを与えたことにより次元犯罪者とされる。

旧文明人の大半に嫌われていたがそれでもグラールと自分の民の為に奔走していた。

ミカとはかつて最も信頼していた人物だったが、管理局により【復活計画】の情報の行き違いが発生、関係が悪化してしまい、誤解を解く前にミカは封印されてしまった。

現在はシユウの中に宿り、時としてシズルの身体を借りて行動することがある。

おそらく本作で最も原作から離れたキャラとなっている。

キャラ設定3 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回はシン達の見方と敵を中心にしたキャラ設定です。

一部原作からかけ離れた設定となっていますがそこは脳内補正でライ

では(・・)ノシ

第7話『休息』

何故我は生きているのだ

我らはソーディアンとしての役目を終え消える筈だった
しかし、気が付いたらまだ幼い少女が我を手に使っていた
そして、その少女は我の精神と無意識にリンクしていた
その時我は奇妙な縁を感じこの少女…早苗を我のマスターに選んだ
この少女は誰かの為に行動をしたいと願っている
だから我は早苗の剣となったのだ

だが、このままではいずれ自滅してしまうそれだけは避けねばならぬ

早苗

「デймロス？どうかしましたか？」

デймロス

『む、少し考え事をしていただけだ』

早苗

「そうですか…」

この幼きマスターを戦場で死なせるわけにはいかんからな

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

（世界を駆け巡る者達）

第7話「休息」

クラッド6 リトルウイング管轄区

パーティ解散から10分後

エミリアの決意を聞き、今後の方針を決めたシン達はパーティを解

散することにした。

本当ならすぐにも修行をしたいところなのだがクラウドの依頼を遂行していた際の

戦闘の疲労があるため一時休養をするべきだとリオンが提案したからである。

side シン & スバル

シン

「まさか管理局がもうここまで手を出していたとはな…」
スバル

「え？あの人達管理局の人だったの！？」

シンはスバル達からカーシュ族の村で起こった事件を聞き、顔を顰めた。

一方スバルカーシュ族の村で遭遇した女性達が管理局と聞いて驚いていた。

シン

「お前、あいつらの正体に気がつかなかったのか？」
スバル

「う、うん…」

シンはそんなスバルを見て盛大に呆れていた。

まあ管理局の本拠地であるミッドチルダの住人でしかも父親と姉が管理局の職員（更に父親は1つの部隊の長）のスバルが管理局の顔の1人であるフェイトを知らなかったと聞けば誰もが呆れるだろう。

シン

「しかし現地の住人を操ってまでロストギアを奪おうとするなんて

「正気じゃないな」

スバル

「その人達は保護されたらしいけどその時の記憶が無いつてクラウドさんが言ってたね」

シン

「おそらくフェイト・テストロッサがいるなら高町　なのはと

八神　はやてが来ていてもおかしくないな…」

シンは海底レリクスで発見した2振りの剣を思い出した。

エルシディオンとレーヴァンティン

この2振りはおそらく管理局が喉から手が出るほど欲しがっているロストギアの中でも最高峰の逸品だろう。

だからこそシンはこの2振りだけは絶対に管理局に渡さないと決意したのだった…。

S i d e レイ&エミリア

シン達と別れたレイとエミリアはカフェに来ていた。

ここのカフェはレイとエミリアのお気に入りのお店である。

だからこうした自由時間の時には必ず来ている。

エミリア

「ごめんね。無茶を言って…」

レイ

「気にするな。俺は気にしない…」

注文を終えた後、エミリアは開口一番に謝罪の言葉を発した。

が、レイは特に気にしないと返し、注文したモノが来るのを待っていた。

エミリア

「みんなはミカの事を知っていたの？」

レイ

「ああ。お前に部屋の使い方を聞いた後にな」

エミリアはミカの事をいつから知っているのかとレイに聞いたらレイはエミリアに
マイルームの使い方を教わった後だと答え、エミリアは少しへこんでいた。

エミリア

「やっぱりあの時かあ……」

レイ

「あの時に伝えなかったのはお前が信じないと思っていたから皆黙っていた。気を悪くしたらすまない」

エミリア

「ううん。いいよ……。たぶんあの時に言ってもあたしは信じなかったと思うし……」

レイは今までエミリアにミカの事を黙っていた事を謝罪するがエミリアは気にしていなかった。

もしあの時に自分がそのことを聞いても信じなかっただろう。

今でこそミカと話せるために本当だと信じられるがあの時に言っても信じなかっただろう。

だからエミリアは気にしてないと答えたのだった。

そんなやり取りをしているうちに注文していたモノが着た。

エミリア

「さあ！湿っぽい話は終わり！食べよ！！」

レイ

「ああ。そうだな……」

湿っぽい話を終わりにしたレイとエミリアは注文した料理に舌鼓を打つのだった…。

S i d e リオン&早苗（+シャルティエ&ディムロス）

シン達と別れた直後、シャルティエはリオンに話しかけた。

シャルティエ

『坊ちゃん。ちょっと早苗さんと話したいんですけどいいですか？』

リオン

「？かまわん」

ディムロス

『なら我は少しリオンと話がしたいのだが構わないか？』

早苗

「？はい。わかりました」

なにやら真剣な声でシャルティエがリオンに頼んだのでリオンは承諾し、ディムロスもリオンに用があるらしいのでリオンと早苗はお互いのソーディアンを交換したのだった。

S i d e リオン&ディムロス

リオン

「なに？早苗に剣の扱い方を教えてほしいだど？」

ディムロス

『うむ。早苗は剣を扱ったことは無いらしくてな』

リオンはディムロスに『早苗に剣の扱い方を教えてほしい』と頼ま

れて眉をひそめた。

無論、デймロスも無理な頼みだと承知しつつもリオンに頼んだ。しかしデймロスの知り合いでこのような頼みを言える人がいるわけもない。

だからデймロスはシャルティエのマスターでありセインガルドでも有数の剣士であったリオンにしかこの頼みはできないのである。

デймロス

『それにお前はシャルティエを使っている期間が長いだろう？』

リオン

「たしかに物心がつく前からシャルと共にいたからな」

デймロス

『だからこそだ。ソーディアンを扱える者が増えれば戦力の増強もできるだろう？』

デймロスの言っている事は正論だった。

今はたださえ戦力が傾いている今のパーティの状態であるため早苗が強くなれば戦力の向上にもなるしデймロスを使いこなせばリオン達にとっては大きくプラスになる。

リオン

「ふん。いいだろう。その頼みを聞こう」

デймロス

「！すまん。助かる」

リオン

「ただし、あいつが根を上げたらすぐに中断するからな」

デймロス

『それでも助かる』

だからリオンはデймロスの頼みを聞いた。

リオンは何故こうも簡単にこの頼みを引き受けたのかと思いながら……。

S i d e 早苗&シャルティエ

シャルティエ

『お疲れ様。早苗さん』

早苗

「ありがとうございます。シャルティエさん」

シャルティエ

『うーん。そうだ。早苗さん、これから僕のことを【シャル】って呼んでくれないかい?』

早苗

「え? いいんですか?」

シャルティエ

『いいのいいの』

早苗

「はい。じゃあこれから私の事は【早苗】って呼んでくださいね」
シャルティエ

『オッケー。早苗』

リオンと別れた早苗は自分の部屋でシャルティエと話をしていた。シャルティエはこれから自分を呼ぶ時はシャルと呼ぶように頼み、早苗もさんづけ無しで呼んでくれるように頼んだ後早苗は気になった事があった。

早苗

「ねえシャル」

シャルティエ

『なんだい早苗?』

早苗

「この剣って見覚えはないですか？」

シャルティエ

「！これって！？早苗、君はこれをどこで！？」

そういつて早苗が見せた物は何かの剣であつた。

それを見たシャルティエは驚愕し、早苗にどこでこの剣を拾ったのかを尋ねた。

早苗

「えーっと、デймロスを拾ったところと同じ場所ですけど」

シャルティエ

『ソーディアン・ベルセリオス！？確かもう存在していないはずなのに！』

早苗

「ベルセリオス？」

早苗はシャルティエがここまで驚く物だとは思わなかったらしい。

シャルティエ

『僕やデймロスと同じソーディアンだよ！』

早苗

「ええええええ！？」

ベルセリオス（以下ハロルド）

『なによーうるさいわねー！シャルティエー！』

シャルティエ

『ハロルド！？目を覚ましたの！？』

慌てる2人に聞き覚えのない女性の声が早苗の頭に響いた。
どうやら先程のやり取りで目を覚ましたらしい。

ハロルド

『たしか天地戦争で兄貴が死んだあと機能を停止した所までは覚えてるんだけどね』

早苗

「お兄さん？」

ハロルドの兄貴という言葉に早苗は疑問に思ったのでシャルティエに尋ねたら

シャルティエ

『うん。ソーディアン・ベルセリオスはハロルドの意思が入ってて…』

ハロルド

『私の兄貴がマスターだったわけ』

早苗

「なるほど…」

と説明されて納得した早苗だった。
そこにハロルドがさらなる質問を早苗に投げかけた。

ハロルド

『あんた見ない顔ね。もしかして異世界にでも飛んだのかしら？』

早苗

「え？どうしてそれを？」

ハロルド

『あらら。一番低い可能性を言ってみたけれどそれが当たりなんてね。さっすが私』

早苗はハロルドがいきなり的を射た質問をしてきたので戸惑う。

ハロルドはそんな彼女の様子を見て自分の予想が当たった事に満足していた。

シャルティエ

『と、とりあえず坊ちゃんとディムロスにこの事を話そう！』

早苗

「は、はい！」

ハロルド

『ディムロスもいるのね…。ぐふふ♪これからが楽しみだわ♪』

早苗はとりあえず新しいソーディアンを手に入れた事をリオンに伝えるためにリオンの部屋へ向かったのだった…。

S i d e リオン&早苗

リオンの部屋

早苗はもう一つのハロルドの事をリオンを話をする為にリオンの部屋を訪れた。

早苗

「リオンさん！ちょっといいですか？」

リオン

「どうした？」

早苗

「この剣を知っていますか？」

リオンに用件を聞かれた早苗はナトランサーから

ソーディアン・ベルセリオスを取りだし、リオンとディムロスに見せた。

ハロルド

『ハアーイジューダス。久しぶりねえ』

リオン

「なっ!？」

ディムロス

『ハロルド!？お前もこの世界に来ていたのか!？』

ハロルド

『そーよあ。なんでも早苗が言うにはアンタの隣に落ちていたそうよ』

リオンとディムロスはかつての仲間との突然の再会にただ驚くしかなかった。

ハロルドは自分がディムロスと共に早苗に回収され、ついさっき眼を覚ました事をリオンとディムロスに伝えた。

リオンはハロルドの説明を聞き終わった後ディムロスからの頼まれごとを思い出した。

リオン

「なるほどな。それと早苗、お前に話がある」

早苗

「はえ？」

リオン

「明日から僕の下でソーディアンの扱い方の訓練をするぞ」

早苗

「!それじゃあ!」

リオン

「ただし、少しでも音をあげたら中止するからな」

早苗

「はい!ありがとうございます!」

早苗はリオンが自分の訓練に付き合ってくれると聞いて喜び、
リオンはそんな早苗を呆れながら見ているのであった…。

第7話『休息』（後書き）

どうも飛鳥です。

投稿が遅くなって誠に申し上げありません。（土下座）

今回の話で早苗が持ってきたもう1振りの剣はソーディアン・ベルセリオスこと

ハロルドでした。

今後ハロルドはシン達の頭脳として共に行動をしていく予定です。
では（．．．）ノシ

スクリーンチャット集2

小説本文 chat7「教えて！シン！！（1）」 クラッド6から帰還した直後

スバル

「ねーねーシン！」

シン

「どうした？」

スバル

「ミラージュブラストってなに？」

シン

「元々はカーシュ族が持っていた技術で…」

スバル

「あーそういう難しい話は勘弁…」

シン

「まあ簡単に言うと必殺技だな」

スバル

「必殺技かあ…」

シン

「ユニットがあれば俺達も使えるぞ」

スバル

「ホントに！？じゃあ今からユニットを買ってくる！！」 走って去ろうとする

シン

「おい！クラウチさんへの報告はどうするんだよ！？」

スバル

「あつ。そうだった…」

シン

「まったく…それに今装備しているシールドラインにもつ登録され

ているぞ」

スバル

「え…？あ。ホントだ」シールドラインの情報を見て気がつくシン

「おいおい…」

chat 8「教えて！シン！！（2）」パーティ解散後シンとスバルの会話の後

chat 7「教えて！シ

ン！」を見ている

スバル

「ねーねーシン」

シン

「またなにか気になることがあるのか？」コーヒーを口に含むスバル

「シンが言っていた高町　なのはって人と八神　はやてという人って誰？」

シン

「ブハッ！！」口に含んだコーヒーを吹いてむせるスバル

「大丈夫？」シンを心配そうに見るシン

「ゴホゴホ…。お前その2人のことを知らないのか！？」スバル

「あとフェイトっていう人も知らない！」胸を張って答えるシン

「…高町　なのはは管理局のエースオブエースと呼ばれていて八神　はやては

若き指揮官として注目されていてフェイト・テストロッサ・ハオラウンは

若い執政官だけではなくて成功率100%で有名な奴らで管理局の広告塔だ」

スバル

「へーすごい人なんだねー」

シン

「スバル…」ジト目でスバルを見る

スバル

「ほえ？」

シン

「1週間アイス抜きな」

スバル

「ええー!？」

chat9「シンって何者?(3)」
ームへ戻っている途中

カフェで一息ついてマイル

chat3「シンって何者

?(2)」を見ている

エミリア

「ねーねーレイー」

レイ

「どうした？」

エミリア

「シンって何者か知ってる？」

レイ

「ある程度なら知っているが…」

エミリア

「よかったら教えてもらってもいい？」

レイ

「俺が知る範疇でいいのならな」

エミリア

「うん」

レイ

「まずあいつは俺と同郷で別れる前まではルームメイトだった」

エミリア

「ええ！？そうなの！？」

レイ

「ああ。後俺の居た世界ではエースとして有名になったが暴走するあいつを抑えるのは大変だった…」どこか遠くを眺める視線

エミリア

「そ、そう。ありがとね！レイ！！」

レイ

「俺の知っている情報が役に立ったのなら幸いだ」

エミリア

「(とてつもなく戦闘力が高くて仕事のせいである組織に追われていてレイとは同郷でエースって…ホントに何者?)」

chat10「1000年ぶりの再会」リオンが早苗に剣術と昌術の扱い方を教えると言った後

ディムロス

「まさかこうしてハロルドと会話できる日が来るとはな…」

シャルティエ

「第2次天地戦争では話すことができませんでしたからね…」

ハロルド

「私のせいで色々あったらしいけどよろしく頼むわねん」

ディムロス

「ああ。これからよろしく頼むぞ」

シャルティエ

「ハロルドがいるとこっちの戦力もアップしますね！」

ハロルド

「ぐふふ」この天才科学者ハロルド様にまかせなさい」

chat11「強運？」　リオンが早苗に剣術と昌術の扱い方を教えると言った後

chat5「奇跡を起こす程度の能力」を

見ている

リオン

「まさかソーディアンを二つも持ってくるとはな…」

早苗

「私もびっくりしてます…」

リオン

「一体いつ手に入れた？」

早苗

「皆さんが目印を探している時にデймロスと一緒に端っこに落ちていたのを拾ったんです」

リオン

「拾ったのか…（汗）」

早苗

「はい…（汗）」

デймロス

『我はエリアの端に落ちていたのか！？』ショックを受けた声を上げる

シャルティエ

『すごい偶然ですね…デймロスと会う前に行った依頼では

この世界に3振りしかない短刀を拾ってましたし（汗）』

ハロルド

『もしかしたら早苗ってばそういう能力を持っているんじゃないかしら？』

スクリーンチャット集2 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回はスクリーンチャット5本立てとなっております。

次回はいつになるかはわかりませんがよろしく願います。
では(・・・)ノシ

番外編 episode シン・アスカの過去 前編 〽デバイス事件1〽

あの戦争が終わってからどれだけ時間が経ったのだろう……

あの戦争が終わった後プラントに戻った俺に待っていたのは過酷な人体実験だった……

何だか妙な薬を身体に打たれ、普通の人間ならば確実に死ぬ実験が続けられた……

死ぬよりも辛い痛みを毎日経験してきた……

こいつらを殺したい……

いつしか俺は憎しみの渦に捕らわれかけていた……

それでも俺は何とか心を保ち続けてきた……

いつか俺が自由の身になってみんなと笑いあえるようになる日を待ち望みながら……

研究員

「被検体01!」

シン

「はい……」

研究員

「今回貴様にはわが軍で開発された新兵器のテストを行ってもらおう」

シン

「何故俺に……?」

研究員

「貴様が質問をする権利はない」

シン

「……………」

研究員

「ただし結果次第では貴様が自由の身になる権利を与える」
シン

「……………！」

研究員

「せいぜい有用なデータを出すことだな」

この時俺はようやく自由の身になれると心が躍った……………

このテストで自分の大切な人を殺してしまうとは思わずに……………

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

〈世界を駆け巡る者達〉番外編 デバイス事件の真相

C・E78 8月31日 デバイス事件発生から1日前

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所

ここはプラントのアプリリウス1に存在する新型兵器の3つ目の研究所。

表向きではZ・A・F・Tで使用される新兵器の開発を行っている。しかし、その裏ではクライン派に反対する者や『平和の敵』とされた者を使つて非道な人体実験を繰り返し、多数の死者を出している研究所である。

シン・アスカもまた世界を混沌とさせようとしたギルバート・デュランダルの懐刀として戦つた者であり、キラ・ヤマトを倒した唯一の人物故に『平和の敵』とされこの研究所に收容されていた。

そしてシンはこの研究所に收容された直後に特殊精製されたナノマシンによつて構成された薬を飲まされ、ある種の不老不死となつていた。

皮肉にもこの薬のおかげでシンはどのような実験をされても生き残ることができた。

そして、この研究所にてデュランダル議長が残した兵器『デバイス』がある研究員によつて解析が完了された。

女性研究員

「あははははは！！ついに解析することができた！！」

彼女はラクス・クラインの狂信的な信者であり、自身が神と崇めているラクス・クラインからデュランダル議長が残した遺産：『デバイス』の解析を命じられていた。

MAともMSとも違うこの『デバイス』は今まで数多の科学者が解析してきたが誰1人として解析することができなかった。

女性研究員

「これでラクス様もお喜びになるわ！！」

だから彼女は狂喜していた。

誰にも解析できなかったデュランダル議長の遺産を1人で解析することができたこと。

そして自分の神であるラクス・クラインの勅命を果たすことができたのだから。

女性研究員

「この『デバイス』が量産の暁にはナチュラル共の軍なぞあつという間に殲滅することができると！！」

デュランダル議長が残した『デバイス』とはMSに使われている兵装や機能を破壊力そのままにしてかつ人が装備できるまでにサイズダウンしたものを情報として保存し、使用する時に展開させるという一種のパワードスーツのようなものであった。

そしてこれを量産することができれば最強の軍隊を作れるほどのものである。

女性研究員

「あとは戦闘データが欲しいわね…」

しかしこの『デバイス』には1つの欠点があった。それは特定の人物にのみにしかこの『デバイス』を使用することができないのである。

そこで彼女は今いる研究所で実験体となっているシンとルナマリアに『デバイス』を使用させることにした。

それが自分の命を奪われることになることなど知らずに…。

C・E78 9月1日

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所 テスト場

シン

「このテストでいい結果を出せば俺を釈放してくれるんですね？」

研究員

「そのとおりだ。精々結果を残すことだな」

シン

「忘れないで下さいよ？…シン・アスカ！行きます！！」

シンは自分の実験を担当をしている研究員から約束を確認していた。このテストで結果を残せば自由の身になれる。

シンは自由の身になるためにテスト場まで駆けて行った。

シン

「デステイニー！セットアップ！！」

シンはあらかじめこの『デバイス』…『デステイニー』のことをある程度説明されていた。

まず起動時デバイスの名を言って起動すること。

兵装は自分の愛機であったデステイニーとかわらないこと。

の2点である。

シン

「（この機体…何故かは知らないけど馴染む！）」

合成音声

『これより現ザフトで使用されている対人兵器を射出します』

シン

「敵は…あれか！」

合成音声の後射出されてきた者は現在ザフトが使用している対人兵器『スパイダー』である。

この兵器は目標を特殊なジェルで動けなくしたところで仕留めるという反ラクス派にとって忌むべき兵器である。

しかし…

シン

「見えた！そこだ！！」

スパイダー

『！？！？！？！？！？！？！？！』

シン

「敵は…あと49か！」

一瞬でデステイニーデステイニーの扱いをマスターしたシン相手には荷があまりにも重すぎた。

片や地上を這ってでしか動けないスパイダー

片や自由自在に空中を飛びまわれるシン

いくら対人に特化したスパイダーでも空中からの攻撃は想定されておらずまた1機また1機と破壊されていった。

女性研究員

「素晴らしいわ！今まで誰にも逃れることができなかったスパイダーをこうも容易く次々と破壊するなんて！！」

女性研究員は自分の想定を遙かに上回るこの状況に狂喜していた。シンはそんな彼女のことは知らずに最後の仕上げにかかっていた。まずはビームライフルでスパイダーの足を止め、足が止まったところにパルマ・フィオキーナからの射撃でスパイダーの脚部を破壊し、トドメにアロンドイトを突き刺した。

シン

「これで！ラスト！！」

合成音声

『テスト終了』

シン

「よし！やった！！」

シンはこの時ようやく自由の身になることができると思った。しかし、この世界の神はシンに対して無情であった。

女性研究員

『いい動きだたわね。シン・アスカ』

シン

「あんたは？」

女性研究員

『私はそのデバイスを解析した者よ』

シン

「それで？もうテストは終わりなんだろう？」

女性研究員

『いいえ。最後にもう1つテストをしてもらおうわ』

シン

「なんだって？」

女性研究員

『今から射出する兵器を撃破できたら貴方の勝ち』

シン

「そいつに勝てばいいんだな？」

女性研究員

『ええ。貴方が勝てればね…』

合成音声

『被検体02射出』

??????

「アアアアアッ！！」

シン

「そんな…。嘘だろ…？」

シンは目の前のモノを見て愕然とした。

女性研究員

「さあ、貴方に討つことができるかしら…？」

シン

「なんでなんだよ！？ルナ！！」

ルナマリア

「アアアアアッ！！」

女性研究員

「貴方の守りたい存在であるルナマリア・ホークをね！」

そこには変わり果てた姿のルナマリア・ホークがいたのだから…。

どうも飛鳥です。

今まで投稿がなくて申し訳ございません!! (土下座

今回はシンがまだC・Eにいた頃のお話です。

今回はとにかく鬱な内容になってしまいました。

次はルナマリアとの激闘とキラがシンを保護するまでです。

ではではm (_ _) m

この世界はいつもそうだ…………。

何の罪を持たない人々からすべてを奪い、力を持つごく一部の者だけが笑う世界…………。

その中でもラクス・クラインはかつて俺が討ったブルーコスモスのトップであるロード・ジブリールよりも酷かった…………。

特にロゴスやデュランダル議長と関係ない国をいきなり『平和の敵』と称して自分の私兵である歌姫の騎士団をけしかけ、その国の人々を皆殺しにする…………。

しかも自分の手を汚さずに…………。

だから俺は…俺達は終戦した後すぐにプラントを離れようとした…………。

だけど奴らはデュランダル議長の懐刀であつた俺達を放っておくとはなく…………。

俺を含むミネルバ隊全員は全員逮捕された…………。

そして…………。

ルナマリア

「ガアアアッ!!」

シン

「何で…何でこんなことになるんだよ!!」

俺は守りたかつた人…………ルナマリア・ホークだったモノと命の奪い合いをしていた…………。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〱 世界を駆け巡る者達 〱 番外編 デバイス事件の真相 2

C・E78 9月1日

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所 テスト場

金属同士が激突しあう戦場……

旧西暦の前時代的な戦いがここで行われていた。

シン

「ッ！クソッ！」

ルナマリア

「ウガアッ！！」

シン

「ルナ！！聞こえないのか！？俺だ！！シンだ！！」

ルナマリア

「ウアアアッ！！」

シンは先程のスパイダーとの戦いと比べると明らかに苦戦していた。シンの持つ『デバイス・デステイニー』とルナマリアの持つ『デバイス・インパルス』の性能は確かにシンの持つ『デステイニー』の方が圧倒的に性能が高い。

しかし、を投与された以外強化されておらず、ルナマリアを討つ事に躊躇しているシンと肉体のありとあらゆる能力を改造され、ただ目の前の物体を排除する事のみに暗示されているルナマリアという違いが現在の状況を生み出していた。

ルナマリア

「ウガアアアッ！！」

シン

「しまった！！うわあッ！！」

ルナマリアは『インパルス』にスラッシュエッジを投影させてシン

に投擲し、シンはいきなり違う攻撃をされたために対応できず直撃してしまい片膝をついてしまった。

ルナマリアはその隙を逃すはずもなく動けないシンにトドメを刺す為に一気に間合いを詰め、投影したエクスカリバーでシンを切り裂こうとした。

シン

「（ここで…終わりか…結局俺は何もできなかったな…）」

ルナマリア

「アアアアアッ！！」

シン

「（死ぬ…？俺が…？イヤだ！死にたくない！！このまま何もできずに死にたくない！！）」

シンは確実に迫る死に諦めの情を抱いていた。

しかし、同時にシンは身体の底から湧きあがる強い生存本能がシンを包み込んだ。

そして…

シン

「俺は死にたくない！！」

シンの持つ種子…『SEED』が覚醒した。

シンはあまりにも遅く見えるルナマリアの斬撃を軽く受け流した後隙ができたルナマリアをその手に持つアロンドイトでルナマリアの心臓を突き刺した。

ルナマリア

「ああ…シン…やっと…会えた…ね…」

シン

「あ、ああ…ああ…」

ルナマリア

「私を…解放…してくれて…ありがとう…」

シン

「そんな…俺は…俺は…!!」

死の直前となつてようやく暗示が解けたルナマリアはシンに礼をいい…息を引き取った。

女性研究員

『素晴らしい!!MSと同等の火力にMS以上の機動性!!このデータさえあればこの兵器を量産することは容易いわ!!』

悲しみにくれるシンに追い打ちをかけるかのように女性研究員の『デバイス』に対する賛辞にシンの理性は限界を迎えた。

シン

「お前が…お前達なんかがいるから…」

女性研究員

『ひよっ?』

シン

「お前達なんかがいるから!!世界はあ!!!!」

女性研究員

『ひっ…!!す、すぐに被検体01を拘束しなさい!!』

シン

「うわあああああああ!!!!!!」

その後…新型兵器第3研究所は暴走したシン・アスカの手によって壊滅したのだった…。

どうも飛鳥です。

今回もシンの過去編となっております。

別に作者はルナマリアは嫌いではないのですがこの物語のキーとなるため

この時に死んでしまいました。

次で番外編は終了となります。

ではm(_____)m

【デバイス事件】から2年後。

あの事件の後、キラさんに保護された俺は少しずつだが壊れてしまった心が治っていった。

俺がこうも立ち直れたのは一重にキラさんの尽力とキラさんの娘さんであるサクヤちゃんとの触れ合いもあったからだろう……。

確かに家族を……ステラを殺したキラさんは許すことはできない。

けれど、再び独りになってしまった俺を救ってくれたキラさんとサクヤちゃんに恩返しをしたい。

だから俺は今できる事をしようとしていた。

この先に起こる悲劇など知らずに……。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

ー世界を駆け巡る者達ー番外編 ーキラ・ヤマトとの再会と永遠の別れー

C・E80 6月30日

プラント アプリリウス1 キラの自宅 中庭

キラ

「シン、君に渡したいものがあるんだけどいいかな？」

シン

「え？別にかまいませんけど……」

サクヤ@5歳

「じゃあサクヤはさきにやすんでますね!!」

シン

「おう。お疲れ様。ナイフの訓練はまた明日な」

キラ

「じゃありビングに来てね」

シン

「分かりました」

シンはヤマト家の家事（サクヤにもある程度伝授）とサクヤとの訓練（ナイフの使い方）を日課にしており、丁度訓練を終えたところにキラが話しかけてきた。

シンは丁度サクヤとの訓練がおわった後なのでタオルで汗を拭いた後、リビングに向かった。

プラント アプリリウス1 キラの自宅 リビング

キラ

「あ、来たようだね」

シン

「それで渡したいものってなにですか？」

シンはキラが自分に何を渡したいのかわからなかった。

キラはそんなシンの質問に答える為に取りだしたものは何かのペンダントのような物だった。

シン

「？何ですかこれ？」

キラ

「君の【デバイス】にあったデータを元に作ったモノだよ。…確か『携帯型次元転送装置』っていう名前らしいよ」

シン

「らしいって…」

シンはよくわかっていないのに作ったキラに呆れながら『携帯型次

元転送装置』を見た。

見た所は普通のペンダントである。

キラ

「効果は身を持って実証したから」

シン

「おい！それで帰れなくなったらどうするつもりだったんだよアンタはー！！」

キラ

「いやゝ。僕もいざ帰還した時にそのことを思い出して思わず震えちゃったよ！H A H A H A ー！！」

シン

「アンタって人はー！！」

サクヤ

「サクヤですけどおとーさまとシンおにーさまがなにやらのしそうにおはなしてます」

このような景色こそが現在のヤマト家の日常である。

翌日

キラ

「それじゃあ皆、準備はいいかい？」

シン

「本当にやるんですか？」

意気揚々としているキラにシンは溜息交じりに質問するとキラはサクヤの方を見た。

サクヤ

「おとーさまがいったせかいがどんなところなのかたのしみです！
」

サクヤは今まで自分が行ったことのない世界に胸を躍らせていた。
キラはそんなサクヤの様子をシンに見せ、改めて尋ねた。

キラ@親馬鹿

「君はここまで楽しみにしているサクヤから楽しみを奪うのかい？」
シン@親馬鹿

「わかりました。行きましょう！」

この2人はかなりの親馬鹿であった。

キラ

「じゃあ行こうか？」

サクヤ

「はいっ！！」

3日後

キラ

「あー楽しかった！！」

サクヤ

「はいっ！！とつてもたのしかったです！！」

シン

「俺達普通に前人未到のことをしてたんだよな…」

しかし、このような幸福な日々は長く続かなかった…。

そう、彼ら…時空管理局がラクス・クラインの下にやってきた…。

同日 クライン亭 執務室

ラクス・クライン

「それで、貴女方の望みとは何でしょうか？」

高町 なのは

「はい。ここにいると思われるロストギア不法所持者…シン・アスカの逮捕です」

ラクス

「？彼はこの世にはいない筈ですが？」

フェイト・F・ハオラウン

「いえ…、それがこの街のどこかに彼が潜伏しているのです」

ラクス

「！わかりました。貴女方の捜査に協力いたしましょう」

なのは

「ご協力、感謝します」

ラクスはこの話を聞いて1つ思いついた事があった。

それは最強の戦力になりうる兵器を連れて自分の下から去っていった彼…キラ・ヤマトをこの世から抹殺することであった。

そして…悲劇の日が訪れた。

C・E80 10月15日

何も知らないシン達は普段と変わらない生活を送っていた。

シン

「今日の訓練はここまでだな」

サクヤ

「ありがとございました！ー！」

いつもどおりの訓練を終えたシンとサクヤだったが玄関付近で銃声が鳴った。

サクヤ

「な、なに!？」

シン

「これは…銃声!？」

キラ

「シン!! いるかい!？」

いきなりの銃声で混乱していたところにキラがやってきた。

シン

「キラさん!! 何なんですか!？この銃声は!!」

キラ

「どうやら僕が君を匿っていたことがラクスにばれたみたいなんだ」

シン

「なっ!？」

キラ

「時間が無い! はやく奥のシェルターまで避難するよ!」

シン

「わかりました!」

シンは自分がキラに匿われていることに驚いたがここで立ちつくしている暇はないと直感してサクヤを連れてシェルターの中まで避難した。

キラ

「どうやらサクヤは疲れて寝てしまったようだね…」

シン

「なんで俺1人の為にここまでするなんて…」

キラはサクヤが眠っている事を確認するとシンはぼつりと呟き、キラはそんなシンに対してラクスの狙いを話した。

キラ

「恐らくラクスは君の体に埋め込まれているナノマシンが目当てみたいだね…」

シン

「……………やっぱり『平和の世界の為』ですか？」

キラ

「多分ね…あとサクヤも狙われている」

シン

「え…？」

キラ

「サクヤはね…君のいた研究所で作られた僕のクローンなんだ」

シン

「なっ！？サクヤがクローン！？」

キラ

「シッ。サクヤが起きてしまう」

キラはサクヤが目を覚ましてしまう事をシンに注意した後、サクヤの生い立ちを語り始めた。

キラ

「サクヤはね、僕の持っている能力の限界まで引き上げて『時間を止める能力』を強くされた子なんだよ」

シン

「『時間を止める能力』？キラさんも持っているんですか？」

キラ

「うん。この能力のおかげでマルチロックオンによる無力化ができたんだ」

シン

「でも俺はなんとも無かったですよ？」

キラ

「どうやら君にはこの能力が利かなかったみたいだね…。それで、サクヤはその能力を無理矢理引き上げられたんだ」

シン

「…俺やルナの時と同じ方法で…ですね？」

キラ

「うん…。そして、その事を知った僕はサクヤをあの研究所以から連れ出してラクスの下を去ったんだ…」

シン

「そんなことが…」

シンは目の前の少女の信じられない過去を聞いて返す言葉を考えていた時にキラが口を開いた。

キラ

「どうやらおしゃべりしている時間はここまでのようだね…」

シン

「…そのようですね」

シエルター越しから聞こえる爆音がシン達に残された時間がもう僅かしかない事を告げていた。

サクヤ

「おとーさま？」

キラ

「サクヤ…。ごめんね…どうやらここでお別れみたいだ…」

サクヤ

「おとーさま？」

キラ

「サクヤ、僕は君の父として大したことは出来なかった…でも僕は君を愛して…うぐ！？」

キラはサクヤに自分の思いを伝えきる前に青色の光の球がキラに直撃した。

シン

「キラさん！」

サクヤ

「いやあああ！！おとーさま！！！」

シンはキラに近付こうとしたが煙から出てきた人物がそれを許さなかった。

なのは

「シン・アスカ、貴方をロストギア不法所持者として逮捕します！！」

フェイト

「そして、キラ・ヤマトさんにサクヤ・ヤマトさん。貴方をシン・アスカを匿った者として逮捕します！！」

シンは彼女達…時空管理局の言っている事がさっぱりわからなかった。

シンはやってきた2人…なのはとフェイトに尋ねた。

シン

「ロストギア不法所持？」

なのは

「そう、貴方の持っているデバイスは危険な物です！！だから貴方を逮捕します！！」

シン

「そうか…そういうことか…」

フェイト

「わかってくれましたか？なら…」

シン

「なら…俺の答えはこれだ！！サクヤ！目と耳を塞いでろ！！」

サクヤ

「は、はい！」

なのは

「なにを…」

なのはとフェイトはシンが何を言っているのか理解できなかったが、シンが手榴弾らしき物を地面に叩きつけたと思ったらおびただしい光と音がなのはとフェイトを襲った。

シン

「今だ！脱出するぞ！！」

サクヤ

「は、はい！」

なのはとフェイトが怯んだのを確認するやいなやシンはキラを担いでシェルターから脱出し、キラの家にあるエレカに乗って港へ向かいキラの私用のシャトルに乗った。

シャトル

シン

「これでー安心か…」

キラ

「う、ううん…」

サクヤ

「おとーさま!!」

キラ

「サクヤ?それにこれは僕のシャトル?」

シン

「はい。ここならもう安心ですよ…」

キラ

「!!いけない!!」

脱出して警戒を解いていたシンとサクヤだったがキラはシンに向けている銃口に気が付きシンを突き飛ばすと次の瞬間キラの胸に紅い華が咲いた。

サクヤ

「!!」

シン

「キラさん!?この!!」

シンはキラを撃った追撃者の心臓をナイフで刺して殺した。

キラ

「はは…。どうやら本当にここまで…みたいだね…」

サクヤ

「おとーさま!!」

キラ

「サクヤ…今から君をここから遠く離れた世界に飛ばすよ…」
サクヤ

「いやです！！サクヤはおとーさまといっしょにいたいです！！」
キラ

「ごめんね…でもこのままだと確実に君もシンも殺されてしまう…だから…」

サクヤはキラから離れようとしなかったがキラはサクヤを優しく抱きしめた後離し、サクヤの首に掛けられているペンダント型の『携帯型次元転移装置』を起動させた。

泣き崩れるサクヤを見たキラはシンに話しかけた。

キラ

「シン…」

シン

「キラさん…俺は…」

キラ

「いつかはこうなる…運命だったんだよ…。覚悟はしてた…でも思ってたより…早かったなあ…」

シン

「俺があの時警戒を解いて無かったら！！」

キラ

「シン…。いいんだよ…でも…頼みが…あるん…だ…」

シン

「キラさん？」

キラは息が絶え絶えになりながらも懐中時計をポケットから取り出した。

キラ

「サクヤが…立派に…成長したら…これを渡して…ほしいんだ…」
シン

「…わかりました」

キラ

「頼んだよ…僕は…最後の後…始末を…しなくちゃ…いけない…」
シン

「…さようなら…キラさん…」

シンはキラから懐中時計を受け取った後、『携帯型次元転移装置』を起動させてサクヤの傍によった。
そして、シンとサクヤはC・Eから旅立った…。

キラ

「さて…と…」

キラはシンとサクヤが旅だったのを確認するとシャトルの自爆シークエンスを起動させた。

キラ

「まさか…君と同じように…死ぬなんてね…」

キラは自嘲気に笑いながら自分が愛した人物の名を呟いた。

キラ

「フレイ…いま…そっちにいくよ…」

キラはそう呟いた後息を引き取り、キラを乗せたシャトルは爆散した。

次元空間

サクヤ

「おとーさま…」

シン

「サクヤ…」

サクヤ

「シンおにーさまもいなくならないで…」

シン

「ああ。約束す…」

敵の追手からなんとか逃げ切ったシンとサクヤだったがサクヤはキラの死を受け入れられていなかった。

だからこそサクヤはシンにいたくならないでほしいと願った。シンもその願いに応えようとした。しかし、更なる悲劇が彼らを襲った。

シン

「！サクヤ！俺から手を掴め！！」

サクヤ

「え…？」

直前に次元空間の異常を察知したシンはサクヤの手を掴もうとするがサクヤは反応に遅れ、サクヤは吹き飛ばされてしまった。

サクヤ

「！シンおにーさま！！」

シン

「サクヤあ！！」

サクヤ

「おにーさまあああ！！」

シンは吹き飛ばされたサクヤに手を伸ばそうとしたが届く筈もなくサクヤは次元の彼方へ吹き飛ばされてしまった。

シン

「くそ！ー！うわあああああ…」

そして、シンもまたサクヤとは逆の方向の次元の彼方へ吹き飛ばされてしまった。

サクヤ side

??? ? ? ?

サクヤ

「う、ううん…」

サクヤは目を覚ますと目の前に広がった景色は前にキラとシンと一緒に遊びに来た世界だった。

サクヤ

「おとーさま…シンおにーさま…」

?????

「わはー」

自分の周りに誰もいない寂しさ故にキラとシンの名前を呟きながら夜の森を進んでいくと1人の金髪の少女が現れた。

サクヤ

「だれ…?」

サクヤは金髪の少女に話しかけると金髪の少女はこう返してきた。

金髪の少女

「あなたは食べてもいい人類？」

サクヤ

「え？」

金髪の少女

「いいのか？じゃあ、いただきますーす」

サクヤ

「ひいつ！」

サクヤは逃れられない死に恐怖し、腰を抜かしてしまった。

サクヤ

「（おとーさま！シンおにーさま！！）」

金髪の少女

「わはー…ヒデフツ！！」

サクヤ

「え…？」

サクヤはいつになってもやってこない痛みに疑問に思っただけで恐る恐る目を開けると金髪の少女はおらず、かわりに蝙蝠のような翼を持った少女がサクヤの前に立っていた。

蝙蝠のような翼を持った少女

「お前…名はなんという？」

サクヤ

「サクヤ…サクヤ・ヤマト」

蝙蝠のような翼を持った少女

「サクヤか…私の名はレミリア・スカーレットだ。そうだな…お前は我が紅魔館のメイド見習いになってもらおう」

サクヤ

「え…？」

サクヤは少女…レミリアが言ったことが理解できていなかった。そんな様子を見かねたレミリアは口を開いた。

レミリア

「このような場所にお前の行き場所などあるまい？名は…そうだな…今宵は素晴らしい満月だからお前はこれから十六夜咲夜と名乗れ」
サクヤ

「いざよい…さくや…？」

レミリア

「そうだ。サクヤ・ヤマトという名はお前の言っていた父か兄と再会するまで私が預かる」

サクヤにとってそれはあまりにも好都合な内容だった。

そして、5歳のサクヤが人を疑う事をしなかったサクヤはその提案を呑んだ。

こうしてここ…幻想郷の紅魔館前にて新しいメイドの卵が誕生した瞬間だった…。

シンスide

とある管理外世界

シン

「クソ！俺がもっと注意していれば…！」

シンは己の無力さと警戒の無さを呪った。

シン

「俺がもつとしっかりしていればあの2人は幸せな時をもつと過ごせたというのに！ー！うわあああああ！ー！！！！！」

シンはキラとサクヤの幸せ自分が奪ってしまったと思い、魂の慟哭を上げた。しかし、そんな彼に神は休まる時間を与えなかった。

男性

「た、助けてくれー！！！」

女性

「ひいいい！！！」

シンは目の前で起きている光景を見て信じられないと思った。

子供

「うわああああん！！おとーさん！おかーさん！！！」

魔族

「新鮮な人間の肉…いただきまあす！！！」

人が人とは違うナニかによって襲われているのである。

シン

「そうか…俺に出来る事はまだあつたな…！」

シンは自分の胸ポケットに入っていたデバイス…デスティニーを取りだした。

シン

「デスティニー！！セフトアップ！！！」

シンはあの時から封印していたデスティニーを起動させ、今にも子

供を喰らおうとしていた魔族を吹き飛ばした。

魔族

「ああん？なんだてめえは？」

突然現れたシンに対して魔族はシンを新たな餌だと思って喰らいかかるうとした。

シン

「はあー!!」

魔族

「ギャアアアアアアアア!!」

しかし、その時には魔族の首は胴と離れ、魔族は絶命した。

シン

「まだサクヤの『携帯型次元転移装置』の反応は残ってる…なら…」

シンはサクヤの事を諦めていなかった。だからこそシンはある決意をした。

シン

「薙ぎ払ってやる!!サクヤを…力の無い人から奪う物を!!すべて!!」

この日、シンは再びその手に剣を取り戦う決意をした。

この瞬間、次元管理局のなかでもっともランクの高いSSS級次元犯罪者『紅き翼を持つ男 シン・アスカ』が誕生した瞬間であった……。

どうも飛鳥です。

今回で番外編 episode シンの過去編は終了となります。

ここでシンが不老不死になった原因と新キャラサクヤが登場しました。

サクヤは内容を読めば分かるように、本作に登場予定の東方キャラの十六夜咲夜の前身となるキャラクターです（もともと彼女は巫空間事件編以降の登場となりますが…（オイ）。

何故サクヤをキラの娘にした理由は次回の補足編で補足します。

では（・・・）ノシ

番外編@設定集（前書き）

ここでは番外編に登場した新キャラ等の詳細が書かれています。
最後の2項目は本編に直結する重大なネタバレがあるため苦手な人はこの項目を閲覧しないことを推奨します。

番外編@設定集

【新キャラ紹介】

サクヤ・ヤマト（5歳）

第2次ヤキン・ドゥーエ、メサイア戦役を止めた英雄キラ・ヤマトの娘。

その正体は非常に高い能力と時間停止能力を持ちクライン派に対する不信心を持っていたキラの力を求めたラクス・クラインが新型兵器第3研究所に命じて作らせた生体兵器。

スーパーコーディネーターの持つ非常に高い身体能力とキラの持つ時間停止能力を極限までに引き上げるように遺伝子を操作され続けた結果、性別が女性になり、髪も銀髪になってしまった。

そうやって産み出されたサクヤだが最強の生体兵器を欲したラクスの意向によって生まれた後も肉体改造が行われ、最後にラクスに対する絶対的な忠誠心を植え付ける為にサクヤの脳に手を加えようとした時に事の顛末を知ったキラによって保護された（その後今までのデータを基にサクヤのカーボンヒューマンを生産する計画が建てられたがルナマリアの死によって暴走したシンによって研究所が壊滅し、計画は頓挫した）。

キラを父として懐き、数日後にサクヤと同じくキラに保護されたシンを兄として懐いた（これが2人を親馬鹿にする原因になった）。この時のサクヤとの触れ合いがシンが人の心を取り戻すきっかけになった。

キラに保護された後幸せな日々を送っていたがシンの持つデバイス『デステイニー』を奪おうとした時空管理局の襲撃によって父であるキラを亡くし、時空管理局から逃れるために次元空間に入った直後に起こった次元震によってシンとも離れ離れになってしまった。1人になったサクヤはかつてキラとシンと一緒に訪れた森を彷徨っ

ているところに肉食妖怪に襲われ、偶然居合わせたレミリアに助けられる。

その後、彼女の計らいで紅魔館のメイド（見習い）となりその時にレミリアから十六夜 咲夜という新たな名を与えられ、十六夜 咲夜としての人生を歩み始めることになる。

好きな人：キラ、シン、レミリア

嫌いなもの：父であるキラを殺した時空管理局

好物：タマゴサンド（シンがサクヤに初めて作ってあげた料理でサクヤが初めて覚えた料理）

キラの娘として起用した理由：時止め繋がり（原作にてキラのハイマツトフルバーストを討たれた敵がどう見ても棒立ちの状態で直撃したため筆者はキラに時間停止能力があると思っただけ）

レミリア・スカーレット（489歳）

幻想郷にある紅魔館の主。

肉食妖怪に襲われていたサクヤを助け、彼女を紅魔館のメイド（見習い）にし、サクヤに十六夜 咲夜（紅魔館のメイドとしての名前）という新たな名を与えた吸血鬼。

彼女にとってレミリアの出会いが新たな人生を歩むきっかけになった。

【デバイス】

デバイス・デステイニー

プラント最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリッティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『デュランダルシリーズ（以下Dシリーズ）』の3番機。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSデ

ステイニーの兵装と能力をそのままダウンサイズしたものになっている。

戦闘能力はDシリーズ3機の中でも最も戦闘能力が高い。

プラントのアプリリウス1にある新型兵器第3研究所のテスト場で惨劇の後キラが回収し、人としての心を取り戻したシンにインパルスと共に渡された。

デバイスマスターはシン・アスカ。

デバイス・インパルス

プラント最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリッティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『Dシリーズ』の1番機。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSインパルスの兵装と能力をダウンサイズしたものになっている（分離・合体の機能は無い）。

プラントのアプリリウス1にある新型兵器第3研究所のテスト場での惨劇の後キラが回収し、人としての心を取り戻したシンにステイニーと共に渡された。

戦闘能力はDシリーズ3機の中でも最も戦闘能力が低かったがシンが次元世界を旅を始め、その道中でシンのパートナーになった数多の者によって少しずつ改良と武装の追加をされていくうちにステイニー、レジェンドと同レベルになるまで改造された。

初代デバイスマスターはルナマリア・ホーク

現デバイスマスターはスバル・ナカジマ。

デバイス・レジェンド

プラント最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリッティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『Dシリーズ』の2番機。

メサイア戦役の際、瀕死のデュランダル前議長によってレイに託さ

れた。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSレジェンドの兵装と能力をそのままにダウンサイズしたものになっている。

戦闘能力は火力ではデステイニーに一步及ばないものの、レジェンドの最大であるドラグーンによるオールレンジ攻撃のおかげでデステイニーと同等に戦える。

デバースマスターはレイ・ザ・バレル。

【兵器・施設】

スパイダー（型式番号 ZGMF-H01 SPIDER）

ラクス・クラインが自分に反抗する者を捕える為に新型兵器第3研究所に命じて製作させた対人兵器。

ラクス・クラインに反抗する者が用意できる武装ではこのスパイダーを破壊できるものは無く、運よく1機破壊しても他のスパイダーによって捕えられてしまう。

武装は対象を捕獲するスパイダーネットと神経系の毒が塗られた針で相手を攻撃し、相手を動けなくするスパイダーニードルの2つである。

このスパイダーによってラクス・クラインに反抗する者が捕えられた。

モデルはスーパーロボット大戦OGに登場するイルメヤ（コードネームがスパイダー）

新型兵器第3研究所

アプリリウス1にある新兵器の研究所。

表向きはMSの新兵器の研究所だがその実態は対人を想定した兵器や生体兵器の研究が行われている研究所である。

ここで対人兵器のスパイダーはここで開発され、キラの娘であるサ

クヤもここで産み出された。
ルナマリアの死によって暴走したシンによって壊滅した。

【携帯型次元転移装置】

デュランダル前議長が作ったタイプとキラがデステイニーのデータバンクにあったデータを基に作ったものの2つのタイプがある。前者は特定した個人を転移させるタイプに対し、後者はこの装置から半径4 m以内にいる者全てを転移させるタイプである。

本編でスバルがシンに助けてもらったお礼を言うために駆け寄った際に丁度転送圏内に入ったため、スバルは転移に巻き込まれた。

【キラが発見し、シンとサクヤが初めての次元転移訪れた世界】

その正体は早苗と守矢の2柱が信仰の為に目指した幻想郷。
数多の種族が共存する極めて珍しい世界であり、時空管理局も発見していない世界。

元々は日本に繋がっていたが現在は1つの次元世界となっている。
代表者は八雲 紫。

【シンが不老不死になった原因】

シンが不老不死となった原因とはシンが新型兵器第3研究所に捕えられた当初、彼のことを嫌ったラクス・クラインの意向によって当時新開発された最新鋭のナノマシンを投与されたため。

このナノマシンは肉体に侵入した後瞬時に細胞に溶け込み、強力な再生能力、極めて高い身体能力を服用者に与える。

一度服用してしまうと二度と普通の肉体に戻せず、殺そうにも細胞一つでも残っていた場合瞬時に再生してしまうため、結果的に不老不死となってしまう。

このナノマシンの製作データは製作者によって闇に葬られたはずがシンとサクヤがC・Eから旅立つときに使用した携帯型次元転移装置による次元転移の時に生じた衝撃波で月人（東方）の都に流れ着き、このデータを基に蓬莱の薬が作られた（本作のみの設定）。

【ラクス・クラインがシンとサクヤを狙った理由】

シンを狙った理由はシンが不老不死になった原因であるナノマシンを採取するため。

サクヤを狙った理由は最強の剣を欲したラクスが彼女を基に大量のカーボンヒューマンを作り出そうとしたため。

どちらもデータは存在していたがナノマシンのデータは製作者によって封印され、製作した本人も自殺したため入手できず、サクヤのデータはシンの暴走によって壊滅した新型兵器第3研究所にあったためデータが物理的に消滅したため、シンとサクヤを狙った。

番外編@設定集（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は番外編に登場したサクヤと少しだけ登場したレミリアの紹介、シンとスバルとレイが使うデバイスの設定、番外編に登場した兵器と施設の紹介、『携帯型次元転移装置』の設定、ちょっとした補足とシンが不老不死になった原因とラクスがシンとサクヤを狙った理由という内容です。

とても無茶な設定ですが生温かく見守っていただけると幸いです。次回からは本編と十六夜 咲夜となったサクヤがシンと再会するまでの出来事を描いた外伝「サクヤのメイド奮闘日記」書いていく予定です。

この外伝は本編の区切り区切りに挟む予定です。

では（．．）ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 1ページ目 十六夜 咲夜、紅魔館に立つ

おとーさまがへんなひとたちにくろされてシンおにーさまとはなればなれになってレミリアさまにたすけられたサクヤはこーまかんでメイドみならいとしてはたらくことになりました。

はじめていくばしよだからこわいけどいつかシンおにーさまとまたあえるひがくるまでがんばります。

だからいつかあえますよね？シンおにーさま。

サクヤの日記1ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

1ページ目 十六夜 咲夜、紅魔館に立つ

幻想郷第3大陸 紅魔館 玄関前

ここは幻想郷にある紅魔館。

普段夜には人が寄り付かないこの紅魔館に1人の少女が居た。

咲夜

「うわー。おつきー」

レミリア

「そうだろう？ここが私の屋敷、紅魔館だ」

少女の名は十六夜 咲夜。

この幻想郷とは違う異世界からやってきた少女はここ紅魔館の主であるレミリア・スカーレットに連れてこられた彼女は紅魔館の大きさに驚いていた。

レミリアはそんな彼女を微笑ましく見ていると緑色のチャイナドレ

スを着た女性がやってきた。

???

「お帰りなさいませ、お嬢さま。となりの女の子はどうしたのですか？」

レミリア

「む、美鈴か。この少女の名は十六夜 咲夜という。」

美鈴と呼ばれた門番は咲夜の目線に合わせるようにしゃがみながら咲夜に挨拶をした。

美鈴

「咲夜ちゃんですか……。私は紅美鈴。ホン・メイリン ここ紅魔館の門番をしているの」

咲夜

「いざよいさくやです。よろしくおねがいします!」

美鈴

「うん。いい返事ね。よろしく、咲夜ちゃん」

レミリア

「挨拶は済んだようだな」

美鈴は咲夜の挨拶に満足げな笑みを浮かべたところでレミリアが本題に入った。

レミリア

「それで美鈴この咲夜だがこの紅魔館のメイド見習いをさせようと思っっているのだからかわらないな？」

レミリアから告げられた内容に対して美鈴は少しの沈黙の後、口を開いた。

美鈴

「メイド見習いですか…。しかしこの紅魔館にメイドは居ませんよ？」

そう。今まで門番以外の身の回りのことはこの主であるレミリアがしていたため、紅魔館にはメイドが居ないのである。そのため咲夜に教えられる者が居ないと美鈴は思ったのである。

しかし、レミリアの回答は美鈴にとって斜め上の回答だった。

レミリア

「なに、私がメイドとしての技術を伝授すれば問題ないだろう？」

美鈴

「……………」

レミリアの回答を聞いた美鈴は自分の主はこういう人物だということ进行い出した。

そして一度決めたことは誰が何と言おうと変えない頑固者でもあるので自分が何を言っても無駄だと判断した。

美鈴

「わかりました。そういうことなら私が口を出す余地はありません」

レミリア

「わかっているではないか。では引き続き門番の任を任せただ」

美鈴

「かしこまりました」

レミリア

「さて、それでは中に入るぞ？」

咲夜

「は、はい！」

美鈴に門番の任をまかせたレミリアは咲夜と共に紅魔館の中へ入った。

幻想郷第3大陸 紅魔館2階東エリア 空き部屋

レミリアに空いている部屋まで案内された咲夜はレミリアここで待つように言われ、ベットのの上に座った。

咲夜

「このベットすつごくフカフカだ!!」

咲夜は今までにないフカフカのベットに感動していた。

キラの家のベットもプラントではかなり高級な部類に入るベットだったが、咲夜が今座っているこのベットは今まで自分が寝ていたベットよりも遥かにフカフカだった。

咲夜がフカフカのベットを堪能しているとレミリアが戻ってきた。

レミリア

「ベットを堪能している所ですまないが風呂を沸かしてきた。今から身体を洗ってきなさい」

レミリアにそう言われた咲夜は自分の服の状態を思い出した。

幻想郷に流れ着き人食い妖怪に襲われた咲夜は泥まみれになっていた。

咲夜は顔を赤くしながらレミリアに紅魔館の風呂場まで案内された。そして、風呂場に案内された咲夜は新たな感動を覚えた。

咲夜

「うわあ!すごくひろい!!」

それは風呂場の広さであった。
プラントにはここまで大きな風呂場…大浴場は無い。
更にただ広いだけではなくこの大浴場の壁と床と浴槽は大理石によ
ってできており、シャワーヘッド等の備品もこの大浴場の景観に
合ったものが使われている。

咲夜

「こんなにひろいおふろははじめてみました！！」

初めての大浴場に感動している咲夜にレミリアが声をかけた。

レミリア

「咲夜。この大浴場に感動してくれるのは私としてはとても嬉しい
のだが早く身体を洗って風呂に入らないと風邪をひくぞ？」

咲夜

「あつ。ごめんなさい！！」

レミリア

「お前の着ていた服は私が洗濯しておく。着替えは脱衣所の籠に入
れてからそれを着てくれ。後風呂から上がったらさっきの部屋まで
戻ってくるように」

咲夜

「はい！わかりました！！」

咲夜の返事を聞いたレミリアは咲夜の着ていた服を持っていき、咲
夜は髪と身体を洗い、湯船につかった。

3時間後

幻想郷第3大陸 紅魔館2階東エリア 咲夜の私室（レミリアと美
鈴が用意した）

レミリア

「おそいな…」

美鈴@入浴時間は20分

「女の子のお風呂は長いものですけど流石におそいですね…」

レミリア@入浴時間は30分

「少し様子を見てくる」

美鈴

「私も行きます」

3時間たつても帰ってこない咲夜が心配になった2人は大浴場に向かうと2人が思っていた予感が見事に的中した。

10分後

幻想郷第3大陸 紅魔館 2階東エリア 咲夜の私室

咲夜@のぼせた

「きゅー…」

美鈴@団扇で咲夜の身体を冷やしている

「予感が見事に的中しましたね…」

レミリア@氷の入った袋で咲夜の頭を冷やしている

「まったく。大浴場に感動してくれるのは非常に嬉しいがそれが原因でのぼせるとはな…」

2人の予感通り大浴場に感動して湯船(41)につかりながら周りを見回していた咲夜は完全にのぼせてしまい、レミリアが咲夜の仕事を教えるのが1日ずれてしまったのは言うまでもない…。

どうも、飛鳥です。

今回はこの作品の外伝にあたるサクヤのメイド奮闘日記の第1話となりました。

この外伝は本編の節目あたりに投稿していく予定で、サクヤが一人前のメイドとなっていく過程を描いたものです。

本編が鬱展開になりやすいのに対し、こちらの外伝では基本ほのぼのとした雰囲気の話が進んでいきます。

尚、こちらもある程度話が進む度にスクリーンチャット集を作る予定です。

次は外伝に登場したキャラクターの紹介となります。

では（・・）ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介1（前書き）

サクヤのメイド奮闘日記に登場するキャラの紹介です。

また最後の項目は本編及び外伝のネタバレとなっていますのでそういったことを嫌う方はスルーすることを推奨します。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介 1

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介

十六夜 咲夜（5歳@初登場時）

紅魔館のメイド見習いの少女。

紅魔館の付近を彷徨っていたところを人食い妖怪に襲われていた所を紅魔館の主であるレミリアに助けられ紅魔館のメイド見習いとなった。

自覚は無いが強力な時間停止能力を持っている。

家事スキルはそれなりにあるがたまにドジをする。また、コンピュータを使用した作業もできる。

強さは5歳の少女にしては異常なくらいの強さだがそれを遥かに上回る実力の持ち主がいる為紅魔館の中では最弱。が、体術基本は完璧でナイフにいたってはレミリアも認めるほどの実力の為今後の成長に期待。

尚、この名前とは別にもう1つの名前があり、今の名前は主であるレミリアからもらったものである。

レミリア・スカーレット（489歳@初登場時）

紅魔館の主である吸血鬼。

日課である散策をしている時に人食い妖怪に襲われていた咲夜を助け、紅魔館のメイド見習いとするために紅魔館へ連れ帰った。

『運命を操る程度の能力』を持っており、この能力の応用で対象が今までたどってきた運命を見ると事で過去の経歴を知る事ができるが、レミリアはこの能力を使う事はほとんどない。

吸血鬼の為かなり長い生を送っており、それを利用して色々な事に

手を出していたため、裁縫・料理・掃除・給仕・採掘・コンピュータ関連の作業・魔法・錬金術・古文書解読・遺跡発掘・鍛冶・MSの操縦及びMSを使った戦闘（強さ的にはシンと同レベル）・MSをはじめとする重機や車両の製作と設計及び整備・対人戦闘・モンスターや妖怪との戦闘集団での戦闘は完璧にこなせる万能吸血鬼。紅魔館の主の筈なのにメイドや執事がするような仕事をしている為、紅魔館にメイドと執事はいない（実質咲夜が紅魔館初のメイド）。

そのため咲夜を一人前のメイドにする教育為に自分の持っている技術を授けることにし、また人食い妖怪に襲われても生き残れるように自身の十八番である槍術を教えることになる。

強さは吸血鬼だけあって非常に強い。また、ある事故によって吸血鬼の弱点がまったく通用しなくなっている為弱点が存在しない。

人望も強く美鈴をはじめとする優秀な者が彼女の下におり、友好的な力を持つ妖怪も多い。

種族は吸血鬼であるが人間から吸血する必要はない。

尚、スタイルは良い（本編に登場する早苗と同レベル）。

一見全てにおいて完璧であるレミリアだが性格は我が道を行くを体現した性格で美鈴はよく思いつきで行動するレミリアに振り回されている。

紅美鈴（年齢不詳）

紅魔館の門番の女性。

咲夜がレミリア以外で初めて会った紅魔館の人物で紅魔館で働くようになった彼女の姉貴分となる。

レミリアが紅魔館に住み始めた時から門番をしている。

武術の達人であり、紅魔館の住人の中でレミリアと真正面に戦って勝てる唯一の人物。

咲夜が紅魔館に来たあとは人食い妖怪の対策の為に咲夜に体術を教えることになる。

家事スキルは高いがレミリアの前だと霞んでしまう（比べる相手が

間違っている)。

スタイルは非常に良い(本編に登場するチエルシーレベル)。

正確は温厚で咲夜はすぐに懷いた。

思いつきで行動するレミリアに振り回される苦勞人。しかし、それでもしっかり付き合うあたりかなり義理堅い人物でもある。

十六夜 咲夜の正体

番外編の人物紹介にもあるように名前はサクヤ・ヤマトが本名で咲夜の産まれた世界…コズミックイラの時代の地球圏に存在するプラントにある研究所で生み出された生体兵器。

身体能力が高いのも自分のオリジナルであり、亡き父であるキラ・ヤマトの持つ能力を遺伝子操作で極限までに引き上げられ、産まれた後にも肉体を改造されたために5歳にしては異常な程の高い身体能力を持つ。

さらに2年の間本編主人公であり、ナイフ戦の達人であるシンの下でナイフの訓練を受けていた（シンは乗り気ではなかったが）ために、戦闘能力も高いレベルである（それでもレミリアや美鈴には勝てないが）。

家事やコンピュータを使った作業ができるのもシンの家事の手伝いをしたり、キラがコンピュータの使い方を教えてもらっていた為である。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介1（後書き）

どうも飛鳥です。

現時点で登場した3人のキャラ説明となっております。

この話に出てくるレミリアはよく二次創作にあるイメージとは魔逆になっていくかもしれません。

本編でも登場する予定です。

とんでもない設定（主にレミリア）ですが生温かく見守っていただけると幸いです。

では（・・・）ノシ

第8話『それぞれの休日』

よくは分からないけどあたしはこのグラールっていう所に飛ばされてきた

どういうわけかディムロスとシャルティエもこの世界にとぼされてきたらしい

このグラールはあたしが知らないモノが山のようにある

ここまで心が躍ったのはソーディアンを完成させた時以来かもしれない

だから決めた事がある

せっかくソーディアンになって長い時を生きられるようになったのだから…

ハロルド

『ぐふふ』

早苗

「ハロルド？どうかしたのでしょうか？」

リオン

「話しかけるな。こういう時は碌な事を考えてないぞ」

この世界は勿論他の世界の不思議を説明してみせるわよ♪

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

く世界を駆け巡る者達く

第8話「それぞれの休日」

S i d e シン&スバル

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋
パーティ解散から2日後

シン

「ふう…。これでよし…っ」と

エミリアの決意表明から2日、シンが自室のビジフォンに向かいながら作業をしている時にシンがあらかじめ呼んでいたスバルが入ってきた。

スバル

『シンー？入るよー？』

シン

「ああ、スバルが入ってくれ」

「なにしてたの？…って何これ？」

シン

「これか？エミリアの特訓メニューの仮組だ。スバルを呼んだのはスバルの意見が聞きたかったからな」

シンはビジフォンにあったデータをプリントアウトしてスバルに渡した。

スバル

「特訓かー。私がシンの旅について行く為にもらった特訓が懐かしいな」

スバルは渡された特訓メニュー（仮）の内容を見るとかつて自分がシンについて行くと言い張った時にシンに渡された特訓を思い出していた。

スバル

「あ、私の時の特訓メニューとほとんど同じだ。懐かし」

シン

「スバルが俺について来ると言った時はまだ11歳だったからな」
スバル

「もつとも、私が13歳の時にインパルス起動させてしまったから特訓の量が数倍になったけどね…」

シン

「今なら分かるだろうけどインパルスは状況に合わせて瞬時に武装変更が出来るのが強みだ。それにデバイスの起動できる時間が短い程換装にかかる時間が短くなるからな」

スバル

「それは分かっているけどさー。とりあえず内容は大丈夫だと思うよけどここをこうしたら…」

少女説明中…

シン

「なるほどな。じゃあこいつを内容に組み込んでこいつを除外すれば完成だな」

シンはスバルからの意見を取り入れ、エミリアの特訓メニューを完成させた。

シン

「サンキューなスバル」

スバル

「そう言うなら今度アイス奢ってね？」

シン

「8個までな」

スバル

「やりー！！じゃあ早速いこつ！」

シンから礼を聞いたスバル満面の笑みでアイスをねだった。

シンは呆れながらも了承し、シヨップینگモールへ行こうとした時に突然クラッド6が大きく揺れた。

スバル

「な、なに！？」

シン

「なんだか分からないが揺れの原因は近くだな。スバル！行くぞ！」

スバル

「う、うん！！」

シンとスバルは揺れによつてパニックになっている人の塊をかき分けながら揺れの震源地…最近増設されたシミュレータールームへ走っていった。

S i d e レイ&エミリア

揺れが起こる1時間前

クラッド6 武器シヨップ

エミリア

「ねえレイ。これから盾持シールドとうと思ってるんだけどどうかな？」

「ふむ…確かにエミリアの防御力は低いからな盾を持つ事は正解だと思っぞ」

現在レイとエミリアはエミリアの新しい装備の購入をしていた。
エミリアは以前セイバー＋ハンドガン、ロッド、ウオンド＋マドウ

ーグの組み合わせだった。

しかし、それでは火力面も防御面にも不安が残るためならばいつそのこと装備を変えてみたらどうかとシン達に提案され、レイはエミリアの助言役として行動していた。

レイ

「あとお前はどうかやら剣の使い方が苦手だからな。ナイフを使ってみたらどうだ？」

エミリア

「え？あたしナイフなんて使った事無いんですけど……」

レイ

「基本の動きは俺とシンが教えるから安心しろ」

エミリア

「うー……。ガンバリマス」

レイ

「あとはテクニクのディスクの設定だな」

エミリア

「え？」

レイ

「ロッドで行うテクニクをフォーバスとレスタにしてウォンドで行うテクニクをザルアとジェルンにするぞ」

エミリア

「え……ウォンドでレスタをした方が早いじゃん！」

レイ

「どうやらあのロッドには癒しの力を強くする能力があるらしいかな」

結果レイとエミリアが購入した物は

ナイフ×2（炎属性・氷属性をひとつずつ）

シールド×1

フォーバス（レベル15）×1

ジェルン（レベル15）×1

ザルア（レベル15）×1

を購入した。

エミリア

「あたし…使いこなせるかな？」

レイ

「自信を持て、体力以外は高水準に動いていたからな。あとは体力の強化だ」

エミリアは今までの戦い方からがりと変わることには不安を持ち、レイは弱気になったエミリアを激励していると大きな揺れが2人を襲った。

エミリア

「ちよっ！？クラッド6で地震なんて起きないんですけど！」

レイ

「位置は最近増設されたシミュレータールームからか…行くぞ！」

エミリア

「あ！置いてかないでよー！！」

レイはこの揺れの震源地がシミュレータールームと推測すると走り出し、エミリアも慌ててレイを追うのだった。

S i d e リオン&早苗

揺れが起きる10分前

クラッド6 シミュレータールーム

リオン

「いいか？まずソーディアンを扱うのなら晶術を扱えるようになることだ」

早苗

「晶術というトリオンさんがよく使っているグレイブとかエアプレッシャーのようなものですか？」

リオン

「ああ。ただしその晶術はシャルのみが使える晶術だ」

早苗

「ふえ？どういうことですか？」

シャルティエ

「僕が使える晶術は土と闇の2種類の属性だけなんだよ」

デймロス

「我の場合は炎の属性の晶術が使えるがシャルティエの晶術を使う事はできないのだ」

ハロルド

「要するに専門とする属性が違うという事よ」

早苗

「えーと…つまり土と闇の晶術はシャルにしか使えないけどデймロスはシャルが使えない炎の晶術を使う事が出来る……であっていますか？」

シャル

「大体その解釈であってるよ」

ここはクラッド6にあるシミュレータールーム。依頼無しに原生生物を狩る事を禁じられている現在のグラールで用いられている訓練方法はいくつか存在する。

その中で最も安全である訓練としてシミュレーターを使って投影された敵を倒すという方法である。

この訓練方法は文字通りシミュレーターを使用することで仮想現実の世界で戦闘訓練などを行うものである。

非常に実戦に近い形で訓練できるためリオンはこの訓練方法を採用し、現在早苗の前で晶術の手本を見せていた。

早苗

「いつ見てもリオンさんの晶術は凄いですね……………」

ディムロス

『次は我らの番だ。いくぞ』

早苗

「は、はい！ファイアーボール！！」

早苗は炎の晶術の基本であるファイアーボールを唱えたが何も起こらなかった。

早苗

「あ、あれ？失敗しちゃいました？」

シャルティエ

『し、失敗しても気にすることはないですよ！！』

ディムロス

『む？確かにファイアーボールが発動した筈だが…』

早苗は失敗したと思って落ち込み、シャルティエは早苗を励まし、ディムロスが考え込み、リオンは何気なしに上を見て顔を青くして早苗に叫んだ。

リオン

「！早苗！伏せろ！！」

早苗

「え？」

早苗はリオンの言葉に呆気にとられていると前方10mに巨大な炎

の塊が落ちて大爆発を起こし、爆発によって起きた爆風は早苗を吹き飛ばした。

早苗

「きゃあああああ!!」

爆風によって吹き飛ばされた早苗はVR空間の地面に叩きつけられ、気を失った。

リオンは早苗に駆け寄り外傷が無いか確認した時目の前の惨状を見て息を呑んだ。

リオンの見た光景は炎の晶術の中でも最強レベルの威力を持つ晶術『エクスブロード』の落ちた後と酷似していたのである。

リオンは目の前の惨状を引き起こした原因である早苗を見た。

早苗はリオンの腕の中で気を失っている。この時リオンは早苗の持つ力を再確認し、晶術の訓練は大型のモンスターの討伐依頼の時にしようと思ったのだった。

S i d e o u t

シン

「レイも来たのか？」

レイ

「ああ。このシミュレータールームではリオンと早苗が訓練に利用すると言っていたからな。もしかしたら彼らに何かあったのか不安になってな」

スバル

「だったら早く中に行かないと！」

リオン

「その必要はない」

突然の揺れを調査しに来た4人はシミュレータールームの前で偶然鉢合わせ、そのままシミュレータールームに入ろうとしたがドアの奥から声が聞こえた。

リオン

「今回の揺れの原因は早苗だ。そして早苗は今気絶している」

エミリア

「リオン！早苗は大丈夫なの！？」

リオン

「問題はない。どうやら身体は頑丈らしいからな」

早苗が気絶したと聞いて心配するエミリアだがリオンは問題ないと答えた。

その後、医務班によって医務室に運ばれた早苗はすぐに検査され問題が無いと診断された。

しかし、早苗は起きた後クラウチに説教されたのは言うまでもない……。

第8話『それぞれの休日』（後書き）

どうも飛鳥です。

待ってください。の方は大変お待たせしました。

今回は休日編その2となっております。

次回からはフリーミッション編その2になります。

では（．．）ノシ

第9話前編『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼〜受託編〜』

レイと一緒に揺れの原因を確認しにシミュレータールームに行ったらそこには服が少し焦げたりオンと気を失った早苗、そしてあちこち火花が起こっているシミュレーターがあたしの目に映った。試しに頬を抓ったけど痛みがあった。

目の前に広がっている光景は夢じゃない。

ミカのことでも普通はありえないのに目の前の光景はとてもじゃないけど信じられなかった。

あたしは不安になった。

もしかしたらそう遠くない未来にレイ達が突然いなくなるのではないかと思ってしまう。

レイ

「どうやら早苗の身体には特に異常は見つからなかったらしい……」
エミリア

「ほんとに！？よかったあ……」

だからあたしは…もう逃げないって決めたんだ…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

〜世界を駆け巡る者達〜

第9話『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼〜受託編〜』

爆発事故から2日後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ

「ようシン。今依頼とか受けてないか？」

シン

「いえ、特には受けていないですけど……」

早苗の起こした爆発事故から2日経ち、クラッド6はいつもの日常に戻っている頃シンはクラウチに呼び出されていた。

クラウチ

「よっしゃ。実はローグスの首領からお前のチームを指名した依頼が来てな。できれば引き受けてもらえないか？」

シン

「依頼内容は？」

一応このリトルウイングは違法でなければローグスからの依頼も受けている。

最もローグスからくる依頼は危険であるケースが非常に多い（クラウチも出来る限り新人には回さないようにしている）。

しかも今回はローグスの首領『ドン・タイラー』からの依頼なのである。

特に有名というわけでもなく、戦闘に関してはまだまだ新米の早苗とエミリアがいる自分のチームを何故指名してきたのかシンには理解できなかったが依頼内容だけでも聞いておいた方がいいと思い、クラウチから依頼内容を聞くことにした。

クラウチ

「3年前にエンドラム機関が開発したマガス・マッガーナの破壊依頼だ」

シン

「確かその機体はあまり量産されていないと聞きましたが？」
クラウチ

「イルミナスの秘密基地を調査していたらまだ稼働可能な状態の機体が発見し、回収しようとしたらしいが所属不明の1人の女に奪われたらしい」

シン

「今のローグスなら解決できそうな気がしますけど…」

シンは不審に思った。

3年前のローグスならともかく、今のローグスは【SEED事変】を生き抜いた猛者達が『ドン・タイラー』による統制によってそんなにそこらではやられない連中である。

そのような猛者達がただが所属不明の僅か1人の女性相手に遅れをとることはない筈である。

クラウチ

「襲撃された連中も1人除いて行方不明になったらしい」

シン

「1人除いて？」

クラウチ

「おそらく残した1人はメッセンジャーなんだろうな。伝える事を伝えた後意識不明の重体になったらしい」

シン

「つまりその伝えられたメッセージの中に俺達のうちの誰かを指定した…。違いますか？」

クラウチ

「正解だ。襲撃犯に御指名されたのはお前を除く5人だ」

シン

「（あの時にスバル達が遭遇したっていう奴らの内の1人が…）」

クラウチ

「その顔だと何か心当たりがあるようだな。それで…引き受けてくれるか？」

シンはスバルから聞いた奴ら時空管理局の精鋭部隊である起動6課のメンバーがローグスを襲撃したのだろうと判断した。どうやってかは知らないが彼女達には催眠術で人を使役できる方法がある。恐らくローグスの面々が負けたのもこの方法のせいだろう。このまま彼女達を放置しておいたら更に被害が拡大するだろう。だからこそシンは

シン

「わかりました。その依頼、引き受けさせていただきます」
クラウチ

「わりいな…。エミリアの事、よろしく頼む」

ドン・タイラーからの依頼…試作型巨大SUVウェポン…マガス・マッガーナの破壊依頼を引き受けた。

クラウチから依頼を受託してから30分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ブリーフィングルーム

シン

「…これが今回俺達に依頼された内容だ」

リオン

「フン…。どうやら奴らは本気で僕達を敵視しているらしいな」

スバル

「まさか他の人を巻き込んでいるなんて…」

レイ

「ワレリーから借金を回収する依頼の時に奴らがやっていた事は何だ？」

エミリア

「そういえば現地の人を操って犯罪に加担させてたね…」

早苗

「そして私達を誘き出す為に関係のない人を襲撃するなんて…許せません!!」

シンから依頼内容を聞いた5人の反応はそれぞれ違ったが、ひとつだけ共通点があった。

それは関係のない人を巻き込んでいるという事に対する憤りである。

シン

「今回は危険な依頼になりそうだから準備は念頭にしておいてくれ」
スバル

「うん!」

リオン・レイ

「「わかった」」

早苗

「わかりました!」

エミリア

「おっけー」

シン

「それじゃあ2日後の8時半にマイシップに集合してくれ。では、解散!!」

シンの号令の後シン達は2日後の出発に備えて準備を始めるのであった……。

第9話前編『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼〜受託編〜』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はクラウチから依頼を紹介されるところです。

次は準備、そして道中編を同時に投下する予定です。

では（・・・）ノシ

第9話『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備＋EXside編』

最初にクラウチさんから依頼の内容を聞いた時は思わず耳を疑った。奴ら…時空管理局の動きが俺の予想よりも遥かに早く行動を始めていたからだ。

時空管理局に狙われた世界は良くて植民地化、最悪大量破壊兵器を使用した殲滅戦を仕掛けてくる筈だ。

時空管理局にとってこのグルールはただロストギアのある世界程度の認識しかないのだろう。

だからこそ…これ以上奴らが我が物顔で世界を蹂躪するのを止めなくてはならない…。

それが…俺が弱かったせいで時空管理局に殺されていた人達に対する償いだから…。

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

『世界を駆け巡る者達』

第9話『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備＋EXside編』

Sideリオン&スバル&レイ

ブリーフィングから1日後の夜8時

クラッド6 リトルウィング管轄区 ショッピングモール

リオンとスバルとレイは明日に控えている出発までに買い出しを済ませていた。

レイ

「これであとは明日を待つのみだな」

リオン

「そういえばエミリアはどうした？いつも一緒に行動しているだろう？」

レイ

「ああ。明日に備えて休ませている。そういう早苗もどうした？」
リオン

「早苗をもエミリアと同じで休ませている。寝不足で足手まといになられてはかなわんからな…」
スバル

「そっぴやシンは何しているんだろ？」

S i d e シン

同刻

クラッド6リトルウイング管轄区 シンの部屋

シン

「（奴らのことだ…絶対に罠を仕掛けてくる筈だ…）」

シンは今回の依頼で自分達が向かうエリアの地形の調査をしていた。

シン

「（恐らく設置型のバインドで俺達の動きを止めて一気に止めを刺すという戦法を取ってくる筈だ…）」

そうシンが調べているエリアはトラップを仕掛けるには恰好の地形なのである。

レイとリオンも警戒はするだろうがもしもの時があると考えたシンは買い出しをスバルに任せ、彼女達…起動六課が罠を仕掛けていそうな場所を入念に探っていた。

シン

「（奴らは自分達の所属している組織の正義が一番だと思っている……その組織に影があったとしてもな……）」

シンはかつて……キラを目の前で殺されたあの事件の事を思い出していた。

あの時シンとキラ……そしてサクヤを逮捕しに来たのは他にもないあの2人だった。

「（どんなことがあっても自分達の正義を変えない……聞こえはいいが俺からすればタダの狂信者だな……）」

シンは過去の旅で管理局の闇をいやという程見てきた。

従わない管理世界は大量破壊兵器で脅し、それでも従わない者は管理局の敵として『逮捕』し、人体実験の実験台にする。

そのうちの1つが新型デバイス『ディパイダー』の実験台にされた物も数多くいた。

それだけでなく、最近の事件の中でも有名なPT事件・闇の書事件・JS事件は全て管理局の闇によって起きた事件である。

シン

「（奴らの手口を知っているのは俺だけだ。だからあの時のような悲劇を繰り返させるわけにはいかない……！）」

シンは目の前で死んでいく父を見たサクヤが絶望していく光景は今でも鮮明に思い出せる。

それだけではない。今まで自分が立ち会った管理局絡みの事件ではサクヤのような子供達が多数出た。

だからこそシンは万全の状態で彼女達と戦うべく入念に準備をしたのだった。

S i d e 早苗&エミリア

同刻

クラッド6 リトルウイング管轄区 早苗とエミリアの部屋

早苗

「いよいよ明日ですね…」

エミリア

「うー…まさかローグスのトップから指名されるなんて…」

早苗とエミリアは明日に控えている依頼に緊張していた。

まだ戦闘に関しては新米である2人にとって今回の依頼はこれまでの依頼の中で最も責任のある依頼であるので当然である。

早苗

「緊張しますよね…」

エミリア

「うん…。でも頑張らないとね…」

最初は緊張していた2人だったがここで緊張して皆の足手まといになるのは良くないと思い、そのまま眠りに就いたのだった。

S i d e o u t

翌日

クラッド6 リトルウイング管轄区 マイシップ

シン

「みんな、準備は出来たか？」

指定したよりも少し早い時間に集まったシンは全員に準備は出来たかと尋ねた。

リオン・レイ

「問題無い」

スバル

「準備オツケーだよ!!」

エミリア

「少し緊張してるけど大丈夫!」

早苗

「私も準備万端です!!」

ディムロス

『我も問題ない』

シャルティエ

『僕も大丈夫です』

ハロルド

『ぐふふ♪どんな場所か楽しみだわ♪』

シンの呼びかけに対し、全員問題ないと告げた。

シン

「よし!それじゃあ出発するぞ。目標はググ砂漠だ」

そしてシン達を乗せたマイシップは依頼された場所であるモトウブのググ砂漠へと飛び立った。

そこにはもう彼女達の罠が仕掛けられていると感じながら……。

Side EX シズル&カムハーン

パルム 首都 タルカス・シティ

ここはパルムの首都であるタルカス・シティ。

シズルとカムハーンは時空管理局の情報を収集するために来ていたが思うように情報が集まらず落胆していた。

シズル

「（やはり奴らを知っている者はいないか…）」

カムハーン

「（奴らは秘密裏に動く事に慣れているからな…。もしかしたら接触できた者も奴らの手駒にされている可能性が高い）」

シズル

「（今日の情報収集はこれまでにするけどいいかい？カムハーン）」
カムハーン

「（うむ…。根を詰め過ぎていざという時に動けなければ本末転倒であるからな…）」

シズル

「（カムハーン…。ちょっといいかい？）」

カムハーン

「（手短にな）」

シズルは話を変えようと思い。今まで疑問に思っていた事をカムハーンに尋ねた。

シズル

「（何故カムハーンはそこまでして僕達を守ろうとしてくれるんだい？）」

それはカムハーンがシズルに守ろうとする理由だった。

シズル

「（僕はカムハーンからこの世界が異世界の者に狙われていると知

って父さんや会社にいる皆を守りたくて君に手を貸している。じゃあカムハーンは僕達を守ろうとしてくれるんだい？」

カムハーンは数分考えた後、口を開いた。

カムハーン

「（それはお前達が私の息子であり娘でもあり孫でもあるからだ）」
シズル

「（え…？）」

シズルは一瞬カムハーンが何を言ったのか理解できなかったがカムハーンは続けた。

カムハーン

「（何も無からお前達の先祖が産まれたのではない。我と私の妃であるミカの身体を元にお前達の先祖が産まれたのだ…）」
シズル

「（なるほど。だから僕はカムハーンにとって自分の子供と思っているから守ろうとしてくれるのか。…ん？）」

カムハーン

「（そういうことだが…どうした？）」

シズル

「（女の子が倒れている…。）」

カムハーンの答えに納得したシズルだが目の前に倒れている少女を発見し、カムハーンはその少女を見て反応を変えた。

カムハーン

「（む！？奴は管理局の服を着ている。確保するぞ！）」
シズル

「（何だって！？わかった！彼女は家まで連れて帰ろう！）」

1時間後

???

「う、うつん…」

シズル

「目を覚ましましたか？」

???

「あれ？確か私はなのはちゃん達と戦って…」

カムハーン

「…貴様…八神 はやてだな？」

はやて

「なんで私の名前を？」

カムハーン

「時空管理局の精鋭中の精鋭部隊の隊長の名を知らぬわけがなからう？」

一瞬場の空気が悪くなったがはやての返答によって空気が変わった。

はやて

「そやな…でも今は違うつんや」

シズル

「今は？」

はやて

「今の私は元起動6課隊長にして次元犯罪者八神 はやてや…」

カムハーン

「なに？」

元隊長という事にも驚きが隠せなかったが次元犯罪者という単語に

引っ掛かりをおぼえる2人だがはやてそんな2人に構わず話を続けた。

はやて

「もし貴方達がこの世界の住民やったら伝えなあかんことがある」

シズル

「『この世界が管理局によって狙われている』ではありませんか？」
はやて

「それなら…」

シズル

「ええ。そして貴女も僕が守ります」

はやて

「え…？」

シズル

「貴女は命を掛けて…犯罪者の汚名を着てまでもこの世界の危機を僕達に知らせてくれました。だから今度は僕が貴女を守る番です」

シズルの答えにははやては主思わず顔を赤くし、そして涙も溢れた。

自分がグーラルに危機を伝える為に次元を越えることの出来る次元航行艦を奪取し、グーラルに着くまでの新隊長とする起動6課の面々に様々な非難の言葉を浴びせられ、更に自分の家族であるヴォルケンリッターの面々も爆発する次元航行艦から脱出する際に散り散りになり、1人で心細い状態でタルカス・シティに辿り着き、力尽きた。

自分の為に迷惑を掛けたヴォルケンリッターの事を考えると今にでも壊れそうな状態だった。

そこにシズルの言葉を受けて自分の心に限界が来たのである。

はやて

「ありがとつ…！ごいます…」

シズル

「大丈夫です。貴女の…貴女方の思いは絶対に無駄にはさせません
！」

泣き出しそうになっていたはやてにシズルが抱きしめながら自分の
思いを伝えた。

はやて

「（あかん…これは…惚れてしまった…）」

はやてはシズルに惚れた事を理解しながらシズルの胸の中で泣き続
けるのであった…。

第9話『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備+EXside編』

(後

どうも飛鳥です。

今回は準備パートとなっております。

何故はやてがシズルのもとに流れ着いたのか？h s y sての流れ着いた理由はキャラ設定3のはやての項目を読めばわかりますが詳しい経緯は9話の機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼編が終わった後に補足設定を投稿する予定です。

では(・・・)ノシ

第9話中編1 『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』道中編』

クラウチから依頼を受けた時からシンは複雑そうな顔をしていた
あいつは何か俺達に危険が及ぶ可能性がある任務の時はいつも表情
をするからな

今回の依頼はかなり危険な依頼になるだろう

敵が彼女達だとすると恐らく罠を張ってくるだろう

だがどんな罠だとしても俺達はそれを目の前から破っていくしか方
法はない

どれだけの時が経とうとシンはシンだ

俺達に何かあれば恐らく自分を責めるだろう

だからこそ俺はあいつをサポートせねばならいな…

エミリア

「レイ！目標の地点まで到着したよ！！」

レイ

「わかった。今行く」

それが俺に出来るあいつへと償いなのだからな…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』道中編』

出発から2時間後

モトウブ ググ砂漠 ブロック1

目的地についたシン達の目に広がったのは天然の壁によってできた

エリアであつた。

エミリア

「ここにあいつらが…」

レイ

「罾を仕掛けるにはもってこいの地形だな」

早苗

「注意しながら進みましょう…」

モトウブ ググ砂漠 ブロック2

罾が張つてあると思つたスバル達は注意深く先へ進むが、シンは違和感を持っていた。

シン

「（おかしい…奴らのことだからもう罾を仕掛けてきてもおかしくない…。とすると…）」

シンが思考の海に沈んでいる間にスバルは奥に人がいる事に気がついていた。

スバル

「あれ？こんな所に人がいるよ？ちよつと声を掛けてみよ！」

レイ

「スバル！迂闊だぞ！！」

スバル

「あの！ここで何をしていますか？」

スバルはレイの制止を聞かずに目の前にいた男達に声を掛けた。

が、彼女の問いに対する答えは男が手に持っていた斧による攻撃で返ってきた。

スバル

「うわわわ！！危ないじゃないですか！！！」

男性ローグス

「SEED野郎が！！来るな！！！！来るなああ！！！！！」

振り降ろされる斧の軌道を見切ったスバルはすんでのところで斧を回避し、抗議の声を上げるが錯乱状態の男はそんなスバルに構わず斧による攻撃を続けてきた。

シン

「黙ってる！！！」

男性ローグス

「ぐはあ……」

シンは一度自分の考えを中止して男の鳩尾に強烈な蹴りを喰らわせた。

流石にビーストである男性ローグスもこれには堪らず一撃でノックアウトした。

シン

「スバルここはもう敵地なんだぞ！」

スバル

「ご、ごめん……」

リオン

「お前は本当に馬鹿だな……」

何も考えずに先に進んだスバルにシンが注意し、リオンが小言を言っている。早苗はある異常に気がついた。

早苗

「……………あれ？奥の方から何か聞こえませんか？」

エミリア

「え……？そんな音なんて聞こえないけ……ど……？」

エミリアは早苗に言われて音がするという方向に目を向けるとそのまま凍りついた。

シン達もその方向に目を向けるとそこには行方不明になっていたローグス達が編隊を組んでこちらに近付いてきた。

スバル

「なあにこれえ……」

レイ

「ローグスの大軍か……恐らく行方不明になったローグス全員がこのエリアにいるのだろう」

リオン

「恐らく先程の男の悲鳴に感じてこちらに来たか……30人だな」

スバルは思わず情けない声を上げ、レイとリオンは冷静に戦力を分析した。

エミリア

「そんな暢気なこと言ってる場合じゃないでしょ……！」

早苗

「あ、あんな大軍でしかも行方不明の人達ですから下手に手を出せませんよ……！」

エミリアは冷静に戦力分析をしているレイとリオンに突っ込みを入れ早苗はパニック状態になってしまった。

シン

「（成程な…俺達は迂闊にローグスに手を上げられない。向こうは俺達をSEEDフォームと勘違いしているのか問答無用で攻撃を仕掛けてくる。そして奴らは戦力を消費させずに俺達を疲弊させられる。まったくもって薄汚い連中が考える罠だな…。本当に反吐が出る）」

彼女達が用意した罠とは連れ去ったローグスの構成員を敵として出すという事だった。

確かにこうすれば自分の戦力を消耗せずに相手を捕える事が出来る。しかし、彼女達はひとつのミスを犯した。それは…

シン

「スバル、リオンこいつらは気絶させる。レイ達は援護を頼む！」
スバル

「う、うん！」

リオン

「わかった」

シャルティエ

『まかせて下さい！！』

レイ

「援護は任せる」

エミリア

「うー…。人相手に撃つのは罪悪感があるけど…こつなりややけだ！！」

早苗

「デймロス。晶術の出力を最弱に設定してください!!」

デймロス

『わかった。もうあの時のような失敗はこりごりだからな』

ハロルド

『私は何でこいつらが幻覚を見ているのか探らせてもらっわよ』

シン

「よし!行くぞ!!」

全員

「「「「「了解!」」」」」」

相手が普通の相手ではなく戦闘に慣れたプロフェッショナル達のチームだったからである(早苗とエミリアは除く)。

シン

「遅い!!」

戦いはシンに飛びかかった男性ローグスがシンのライティングエスパードの刃が男性ローグスの身体に食い込み、そのままシンに吹き飛ばされたことによって始まりの火ぶたが切って落とされた。

早苗

「これでどうです!!ファイアーボール!!」

男性ローグス×5

「「「「「ウボアー!!!!!!!!!!」」」」」」

早苗

「ああ!!大丈夫ですか!?!」

デймロス@ドン引き

『出力10%でこの威力か...』

あるローグスは早苗のファイアーボール(威力はイラプション並)

によつて吹き飛ばされ

レイ

「そこだな…」

女性ローグス×5

「『『『『『ちによつ！』』』』』」

レイ

「雑魚だな」

またあるローグスはレイの狙撃でヘッドショットされ

エミリア

「えーと確かEXスタントラップの使い方は…ポチっとな」

女性ローグス×4

「『『『シビビビビ…』』』』」

エミリア

「うわー。1つ500メセタするだけあつて強いわ」

またあるローグスはエミリアの仕掛けたEXスタントラップによつて行動不能にされ

スバル

「一撃！！必殺！！！！」

男性ローグス×5

「『『『『『イエ』アアアアア！！！！！』』』』』」

スバル

「すつきり爽快！！」

またあるローグスはスバルの鉄拳によつて宙を舞い

リオン

「グレイブ！」

女性ローグス×5

「『『『『『あべし！』『』『』『』』」

またあるローグスはリオンのグレイブによって下から上に打ち上げられ、落ちた衝撃で気を失い

シン

「これで！ラスト！！」

男性ローグス×5

「『『『『『ひでぶ！！』『』『』『』』」

またあるローグスはシンのライトニングエスパーダによる薙ぎ払いで吹き飛ばされ、気を失い
ものの10分でローグスは全滅した。

気絶したローグスの一団をそれぞれ暴れないようにロープで縛り、シンはハロルドに結果を尋ねた。

シン

「ハロルド。何かあったか？」

ハロルド

『え〜と。こいつらの脳波なんだけどこの奴ら全員一定の周波になっっていたわ』

早苗

「という事は？」

ハロルド

『みんな何かしらの方法で私達が敵に見せられていたわけ』

エミリア

「【SEED事変】…だね…」

この時エミリアは皆3年前に起こった事件が頭に浮かんだ。
エミリア以外は当時グールにいなかった為にどのような状況か知らなかったがかなり悲惨な事件であったことは知っていた。

シン

「恐らく彼らのトラウマを使って操っていた…。であつてるか？」

ハロルド

『そういうこと』

この時シン達は人のトラウマを使って彼らを操っていた事に強い怒りを覚えた。

レイ

「先に進むぞ。この先に奴らがいる」

早苗

「人の心の傷を使って操るなんて…許しません！絶対に！！」

エミリア

「こんな最低な事をする奴らなんてぶっ潰す！！」

リオン

「だが奴らは強力な機動兵器を所有している。気を抜くな」

スバル

「どんな相手だって私たちみんなで掛ければ勝てる！！」

シン

「よし！！行くぞ！！」

シン達は思い思いの言葉を言った後恐らく彼女達のいるエリアに突入した。

モトウブ ググ砂漠 最終ブロック

突入したシン達の前に居たのは間違いなく起動6課の面々がいた。
そして、彼女達の後ろには奪われた試作巨大SUVウェポンマガス・
マッガーナの姿があった。

フエイト

「よくここまでくれましたね？でも貴方達はここで『保護』させて
もらいます」

シン

「いいや。ここで捕まえられるのはお前らだ！！」

ググ砂漠にて2回目となる管理局との戦いが切って落とされたのだ
った……………。

第9話中編1『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』道中編』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は道中編になります。

次回は決着編になる予定です。

では（・・・）ノシ

第9話中編2 『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』対管理局戦』

目の前にあの時レイさんとリオンが戦っていた人達と巨大なマシンリーがいた

あの時は必死で気がつかなかったけど小さな子供もいる

なんでこんな事にあんな子供を平然と巻き込むのだろう？

なぜあの子達は自分のしている事に疑問を持たないのだろう？

私にはわからない…

なんでこんな事がおかしいと思わないのかと…

レイ

「スバル！呆けている暇はない！くるぞ！！」

スバル

「う、うん！」

子供が先陣を切って戦うなんておかしい

だけど私はあの子達を止める言葉は持っていなかった…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』対管理局戦』

S i d e s u b

戦闘開始から1時間後

モトウブ ググ砂漠 最終ブロック

戦いは激戦となっていた。

レイとエミリアはマガス・マッガーナにかかっている頃スバルは2丁拳銃タイプのデバイスを使うティアナと戦闘を繰り返していた。

ティアナ

「喰らいなさい!!」

スバル

「うわわわ!!」

ティアナの光弾がスバルを捕え、スバルはぎりぎりで光弾を叩き落とす。

スバル

「やったなあ!!」

ティアナ

「チイツ!!」

スバルもお返しとばかりにオブシディアンを展開して反撃するがティアナはその弾全てを回避した。

スバル

「（遠距離だと射撃に誘導性があるあの子の方が有利だけどあの弾幕じゃ私の十八番の接近戦を仕掛けられないよぉ〜）」

ティアナ

「（私の攻撃は威力が低いけど向こうの銃は誘導性が無い代わりに威力が高い！今は私の方が有利だけど長期戦では私の方が不利だわ!!）」

スバルとティアナはお互い決定打となるものを持っていなかった。スバルの使うオブシディアンはGRM社の最新鋭武器だけあつて威力はティアナのクロスミラージュの弾と比べると圧倒的な破壊力を持っている。が、ティアナはスバルの腕の拳動で射線を見切り、全て回避していた。

スバルの十八番である接近戦も遠距離から常に移動しながら攻撃でき、弾幕も厚いティアナの攻撃の前では接近戦を仕掛ける事ができずにいた。

それに対しティアナの使うクロスミラージュはある程度誘導性を持つ弾を放つ事ができ、スバルはぎりぎりで撃ち落とすしか回避方法は無い。が、クロスミラージュで放つ弾はスバルの使うオブシディアンに比べ威力が圧倒的に劣る。

なのは直伝のデイバインバスターを撃つことも可能だが、撃つ際に大きな隙ができる為使う事ができなかった。

スバル・ティアナ

「（この戦い。かなり長くなるか…）」

スバルとティアナはお互い決定打の無いまま戦いが続いていた。

S i d e レイ&エミリア

一方レイとエミリアはマガス・マツガーナに対してワンサイドゲーム状態となっていた。

エミリア

「レイ！ミサイルが来るから迎撃して！！」

レイ

「わかった」

何故なら元々人が乗って操作するマガス・マツガーナをAIで動かしている為最初は驚いたエミリアだがすぐに攻撃パターンを把握、レイがマガス・マツガーナの攻撃を迎撃または妨害し、エミリアはレイが見抜いた弱点をハンドガンで着実にダメージを与えていた。

A I

! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

レ
イ

「機体は良くても動かすAIはまだまだ雑だな」

エミリア

「これでトドメ!!」

エミリアのハンドガンのチャージショットがマガス・マッガーナの中枢部に直撃し、マガス・マッガーナは爆散した。

エミリア

「決まった！！気持ちいい！！！」

レ イ

「よくやったなエミリア。それがお前の力だ」

エミリア

「えへへ。あんがとね♪」

レ
イ

「よし。一番苦戦しているスバルの救援に行くぞ」

エミリア

「うん！」

レイとエミリアは苦戦しているスバルを援護するために走り出したのだった。

S i d e
リオン & 早苗

レイとエミリアがスバルの許へ向かっている頃、エリオとキャロ相手にタッグバトルを繰り広げていた。

早苗

「ファイアーボール！！」

エリオ

「うわー!!」

リオン

「隙だらけだ！幻影刃！！」

キャロ

「エリオ君！？フリード！お願い！！」

フリード

「ギャオオオン！！」

早苗のファイアーボール（威力は出力1%でようやくファイアーボールになった）でエリオを牽制し、それで怯んだエリオは体勢を立て直そうとする所にリオンは幻影刃でダメージを与えようとするがフリードの放つ炎によって妨害された。

リオン

「チイツ！」

早苗

「リオンさん！大丈夫ですか！？」

リオン

「大した事はない。それよりも早苗僕が許す。出力15%のファイアーボールで奴らの動きを封じる」

早苗

「は、はい！」

炎に焼かれかけたりオンに早苗が心配になって駆け寄るとリオンは早苗に指示を飛ばした。

それはディムロスの出力を1%から15%にまで引き上げたファイアーボール（威力はフレアトルネード並）でエリオとキョロの動きを封じるというものだった。

キャロ

「エリオ君！大丈夫！？」

エリオ

「うん。僕は大丈夫今のうちに追撃すれば……」

早苗

「子供相手に使うのは気が引けますが…ファイアーボール!!」

エリオ

「うわああああ!!」

キャラ

「きゃああああ!!」

フリード

「ギャオオオオン!!」

リオン

「これでトドメだ!!デモンズランス・ゼロ!!!!」

エリオとキャラは早苗のファイアーボールの荒れ狂う炎によってダメージを負い、トドメとばかりにリオンのデモンズランス・ゼロの紫色に輝く槍と魔力の塊が彼らを襲った。

これにはフリードも堪えたようで普段の小竜の姿で気絶し、エリオとキャラも気を失った。

リオン

「結果は変わらん。そう何度やってもだ」

早苗

「やりました!!」

リオン

「スバルの奴が苦戦しているらしいな…」

早苗

「すぐに援護に回りましょう!!」

リオン

「そうだがディムロスの出力を1%に戻しておけよ」

早苗

「は、はい…」

ディムロス

『魔力が高いというのも考え物だな…こういう時クレメンテ老が居れば…』

ハロルド

『無い物ねだりしていてもしょうがないでしょ？そんなじゃ今から出力を落とすから早苗はそこで少し待っててね』

エリオとキャロとの戦いに勝利したりオンと早苗はスバルの援護に回ろうとするがリオンから出力を1%に戻しておくように言われた為ハロルドにディムロスを任せて今の自分でも何かできる事は無いかと周りを見回すと自分と同じくらいの長さの剣を見つけた。

早苗

「これなんでしょう？綺麗な剣ですけど…。軽い…まるでディムロス達を持っているみたい…」

早苗は自分が拾った剣を見てディムロス、ハロルド、シャルティエを持った時と似たような感覚がして剣を見ていると早苗の頭に老人の声が響いた。

??????

『お主は僕の声が聞こえるようじゃな？』

早苗

「（貴方は誰ですか？ディムロスでもハロルドでもましてはシャルでも無いですけど…）」

早苗は頭に響く声にディムロスと交信した時と同じ要領で声の主に尋ねると声の主は驚きを含んだ声を上げた。

?????

『ほづ。どうやらディムロス達を知っているようじゃな。どれ、儂も新たなソーディアンマスターの手助けをしようとするかの』

早苗

「（わかりました。クレメンテ…貴方の力を貸して下さい!）」
クレメンテ

『フォツフォツフォ…。それでは行くとするかの。早苗よ』

早苗

「はい!行きましょう!クレメンテ!」

早苗は声の正体…ソーディアン・クレメンテを両手で持ち、ディムロスとハロルドを腰に差してスバルの許へ駆けていった。

S i d e スバル・レイ・エミリア・リオン

戦闘開始から3時間後

ティアナ

「もらった!これで終わりよ!」

スバル

「!ヤバツ!」

ティアナの放った弾に反応が遅れたスバルはやってくるだろう痛みに思わず目を瞑るがスバルを狙った弾は突如として飛んできた青い光弾によって撃ち落とされた。

レイ

「スバル援護する」

スバル

「レイさん!それにエミリアにリオンまで」

エミリア

「思ったより早く片付いたからね！ぱぱとやっつけてシンと合流しよ！」

リオン

「というわけだ。お前に勝ち目はないぞ」

ティアナ

「っ！馬鹿にして！！」

スバルを狙った弾を撃ち落としたのはレイの持つオブシディアンの弾であった。

そして、リオンの挑発に激昂したティアナはスバル達にディバインバスターを放とうとするがそれが彼女の失敗だった。

後方に大きく下がったティアナの足元には何かの機械が設置されていた。

エミリア

「ポチっとな」

ティアナ

「！きゃああああ！！」

そう。ティアナの足元にあった機械とはブレイバー御用達のトラップ【EXスタントラップ】だったのである。

エミリア

「みんな！今だよ！！」

レイ

「これで終わらせる。全弾持つていけ！！」

リオン

「覚悟はできたか？デモンズランス・ゼロ！！！！」

ティアナ

「うつ…」

レイのオブシディアン全弾発射とリオンのデモンズランス・ゼロを
まともに受け大ダメージを負ったティアナはそれでも意識を保って
いたがそこにスバルのトドメが入った。

スバル

「一撃必殺！パルマ！！フィオキーナ！！！！」

ティアナ

「うわあああああ！！！！」

スバルがシンと共に旅をしている時、シンから初めて教わった最強
の奥義【パルマ・フィオキーナ】。青く輝く拳はティアナを吹き飛
ばし、ティアナは壁に叩きつけられ気を失った。

スバル

「はあっはあっ…勝った！！」

レイ

「よくやったなスバル」

スバル

「うつん、みんなが助けてくれたおかげだよ」

エミリア

「あたしは置いて起動させただけだから！」

リオン

「ふん…。これで例を言うのならもっと腕を磨くんだな」

スバル

「っと！こうしてる場合じゃない！！シンの援護に行かないと！！」

スバル達は少しの間勝利の余韻に浸ったが、まだ戦闘を続けている
であろうシンを援護するためにシンの許へ急ぐのであった。

S i d e シン

スバル達の勝利から1時間30分前

ググ砂漠 最深エリア

一方シンはというとフェイトと高速戦闘を繰り広げてていた。

フェイト

「貴方にこれが見切れますか!？」

シン

「当たるか!！」

フェイトはバルディッシュをスピードを上乗せしながらシンに振り降ろすがシンは紙一重でこの斬撃を避けた。

フェイト

「どうしたんですか?ただ避けてばかりでは私に勝てませんよ?」

シン

「言ってる!」

フェイトはバルディッシュによる斬撃とプラズマランサーを混ぜた攻撃でシンを攻撃するがそのどれもシンは避けていた。

客観的にみれば地面を走るシンに対し空を自由自在に飛ぶフェイトの方が圧倒的に有利である。

なぜならシンの動きは2Dであるのに対しフェイトは3Dな動きができるのである。

だからシンの放つ攻撃はことごとく外れている。

しかしフェイトは気が付いていない。

シンはフェイトに対して手加減をしながら戦っているだけではなく、着実に追い詰められている事に。

フェイト

「追い詰めましたよ！！プラズマザンバー！！！」

シン

「（来たか！）」

フェイトは壁を背にしている状態を追い込んだと勘違いしていた。だがフェイトはそれに気がつく事も無く、シンに突撃した。

フェイト

「電光一閃……え……い……！！！」

シン

「今だ……！！」

シンは突撃してきたフェイトに対し最小限の動きでプラズマランサーを回避し、スピードが乗っていたフェイトはブレーキできず、シンの後ろにあった壁に激突した。

フェイト

「ッ………！！！！！」

声にもならない悲鳴を上げるフェイトに対しシンは一気に止めにかかった。

シン

「（トキさん……貴方の技を使わせてもらいます……！！）」

シンは過去に訪れた世紀末の世界で世話になった人物の1人にして今から使う技の持ち主に宣言した。

シン

「北斗！！有情断迅拳！！！」

シンは動きを止めていたフェイトに一気に接近するとそのままフェイトの横を駆け抜けた。

フェイト

「ッ！…あれ？痛くない…？」

フェイトは痛みを覚悟していたがいつになっても痛みが来ないのでシンが攻撃を外したと思ってシンに攻撃をしようとしたが身体を動かそうとした瞬間、身体の異常を感じた。

フェイト

「あれ？動けない！！なんで！？」

フェイトがシンを攻撃しようと思っても身体がフェイトの意思とは裏腹にまったく動かなかった。

未知の状態に陥ったことでパニックになるフェイトにシンは静かに答えた。

シン

「秘孔・新？中を突いた。あんたは俺がいいと言っまで身体を動かす事ができない」

秘孔・新？中とはシンが説明したとおり相手の動きを封じる秘孔である。

フェイトは意識があるのに身体が動かない状態に恐怖した。

過去にJS事件の時でも身体を縛られたことがあった。しかし、今は縄もバンドもされていない状態にも関わらず身体が動かないのである。

フェイト

「そ、そんな！助けて！！」

フェイトはシンに対して助けを求めるような声を上げた。

しかし、シンはそんなフェイトに対してワルサーP99を向けた。

シン

「いやだね。アンタは自覚していないだけで多くの人々から大切なもの…大切な人を奪ったんだ。むしろこれくらいで済んでいるだけありがたいと思うんだな」

フェイト

「そ、そんな！私がいつ貴方から大切なものを奪ったと言っんです！？」

シンはそんなフェイトに対して憎しみをこめた目でフェイトを睨みながらフェイトに答えた。

シン

「C・E80 10月15日、プラント、アプリリウス1、キラ・ヤマト、サクヤ・ヤマト、……」

シン・アスカ…ここまで言えば分かるな？」

フェイト

「！？そんな！貴方がSSS級次元犯罪者【紅き翼をもつ男】！？それにアプリリウス1って私が17歳の時に担当した…あの事件の！？」

シン

「ああ、そっだ」

シンはそう言うとフェイトの左腕を掠めるように撃った

フェイト

「い、痛い！！なんで！？なんでこんなに痛いのか？」

想像以上の痛みに悲鳴を上げるフェイトにシンは冷ややかに答えた。

シン

「痛いのは当たり前だ。秘孔・龍領を突いたからな」

秘孔・龍領…痛覚神経を剥き出しにし、相手への痛みを倍増させる秘孔である。

フェイト

「痛い！痛い！！！！誰か！！誰か助けて！！！！」

シン

「アンタ達は俺達を捕えようとした結果、キラさんは死んだ」

シンは無表情でされど憎しみのこもった目でフェイトの右足を撃った。

痛覚神経がむき出しの状態にされているため普通に銃で撃たれた時の何倍もの痛みがフェイトを襲った。

フェイト

「ひぐう！！！！！！」

シン

「痛いだろ？これはキラさんの痛みだ」

痛みで苦しむフェイトをシンは表情を変えずに左足へ銃弾を叩きこんだ。

フェイト

「いぎつ！！！！」

シン

「そしてこれはまだ5歳のサクヤが父であるキラさんを目の前で殺された事によって生まれた痛みだ」

シンの脳裏にはC・Eで自分を捕えようとした2人の顔を覚えている。

シンの目の前でキラを殺したのは彼女ではない。しかし、彼女達が自分の存在をラクス・クラインに告げた為にキラは死に、サクヤは行方不明となった。

無論、彼女も上司からの命令で来たのだろう。ここで自分が彼女を憎むのも筋違いではないかと何度も思った。

だが、シンは彼女達を許す事ができなかった。

そして、涙を浮かべ助けを求めるフェイトに対し、シンは左肩に銃弾を叩きこんだ。

シン

「痛いだろ？怖いだろ？だけどな。これよりももっと強い痛みを与えたのはお前ら時空管理局だ」

フェイト

「誰か…助けて…」

シン

「ついでに面白い事を教えてやるよ。一度俺はお前達に捕えられた。その時管理局は俺の身体を何度も何度も八つ裂きにした」

フェイト

「ひい！！」

フェイトはシンが八つ裂きにされた光景を想像して悲鳴を上げた。

シンはそんなフェイトを無視して話を進めた。

シン

「俺はC・Eに居た時の人体実験で不老不死になっていたからな。
当時のトップが俺の身体のコールドとして体の隅々を調べられ
たさ…」

フェイト

「う…あ…」

シン

「だが別に俺は自分の体を痛めつけられたから管理局を恨んじや
ないさ…。だが、それを俺以外の人にも行ったことが許せないんだ
よ！！」

遂にはまともに返答できなくなったフェイトに対し、シンは最後の
弾を放ち、フェイトは操り糸が無くなった操り人形のように崩れ落
ちた。

シン

「（…俺も甘いな…。本当ならこのまま殺すつもりだったのに結局
奴を殺せなかった…）」

シンはトドメを刺せたのにトドメを刺さなかった自身の甘さに呆れ
ていた。

スバル

「シンン！！大丈夫？」

シンは自嘲気に笑っていると戦いを終えたスバル達がシンの許に駆
けつけてきた。

シンはワルサーP99をナノトランサーにしまうと普段と変わらな
い表情でスバルに答えた。

シン

「俺は大丈夫だ。それよりも行方不明だったローグスの人を連れてここから出るぞ」

レイ

「どういうことだ？こいつらも連れていけばこいつらの狙いを知る事ができるのだぞ？」

シンがここから離脱すると伝えるとレイは意義を唱えた。

確かに彼女達を捕虜にすれば情報を得られるだろう。が、シンの答えはそのような状況ではない事をスバル達に思い知らされた。

シン

「ここにこいつらの仲間が大量に來ている。接敵まであと30分くらいだ」

エミリア

「ええ！？こいつらの仲間が來てるの！？」

そう。彼女達の残した最後の罠…それは物量による力押しだった。

リオン

「シャル。分かるか？」

シャルティエ

『80…90…100…駄目です！数が多すぎます！！』

リオンはシャルティエに敵の数を聞くとシャルティエはあまりにも数の混乱しながらもリオンに報告した。

レイ

「シャルティエ。敵の位置は分かるか？」

シャルティエ

『どうやらここを包囲しているようです。何とかして切りぬけないと...』

敵は自分達を包囲している。

幸いマイシップまでには来ていないがこのままでは包囲殲滅されるのも時間の問題である。

エミリア

「ど、どうするの？」

シン

「とりあえず奴らはここにいる奴らの反応を追ってここに来ているだからこいつらは放置して行方不明になっていたローグスをマイシップに詰め込んで逃げるぞ」

パニック状態になっているエミリアにシンは冷静に答えたが、シャルティエがその方法も無くなったと伝える内容がシャルティエの方から出された。

シャルティエ

『駄目です!! どうやら先行部隊がもうここに着いています! 数は60人です!!』

この時スバル達はここまでかと思い、シンはデステイニーを起動させようとしたがそこにシン達に光明をもたらす少女がやってきた。

早苗

「大丈夫です!! 私に任せて下さい!!!」
リオン

「早苗!?! デイムロスの出力調整でこの危機を乗り越えられるよう

な威力は無いぞ?」

やってきた少女…早苗はリオンの問いに対して両手で持っている剣をリオン達に見せた。

クレメンテ

『ひさしぶりじゃのう。シャルティエ』

リオン

「クレメンテだと!?!」

シャルティエ

『クレメンテ老!?!もしかして…!』

リオンは早苗の持ってきたソーディアンに動揺を隠せず、代わりにシャルティエが早苗の考えている事を言おうとしたら早苗が先に答えた。

早苗

「クレメンテの出力100%で晶術を使います!?!」

リオン

「やめろ馬鹿者!?!あの時はディムロスの出力が30%だから被害は少なく済んだがそんな出力で晶術を使ってみろ!?!ここに半径150kmのクレーターができるぞ!?!」

これを聞いたリオンは早苗を止めようとした。

しかし、早苗は笑顔でリオンに答えた。

早苗

「大丈夫です。リオンさんもシンさんもスバルさんもエミリアさんもレイさんもそして私も死にません。だから…任せて下さい」

リオン

「チツ！勝手にしろ！！」

早苗

「じゃあ勝手にします。クレメンテ！お願いします！！」
クレメンテ

『まかせておけ。全力でいくぞ！！』

早苗はクレメンテを空に掲げるとある術を詠唱した。

早苗・クレメンテ

「『【来たれ生誕の雷！怒れ、創生の大地！】』」

早苗が詠唱を始めると早苗の周りに異常な量の魔力が集まっていく。それはかつてクレメンテのマスターであった者が使ったクレメンテの最強の晶術その名は…

早苗・クレメンテ

「『【リバーズ！クルセイダー！！！！】』」

リバー・スクールセイダー

早苗の前のマスターである者が第2次天地戦争の時に使用した晶術早苗を中心に巨大な雷が落ちた瞬間シン達に迫り来ていた時空管理局の者のみをこの場所から吹き飛ばした。

シャルティエ

『敵の反応…距離にして150kmまで遠ざかりました』

早苗

「はあっはあっ！やった！！」

クレメンテ

『お主はフィリア以上のマスターになりそっじゃなあ…』
リオン

「早苗。動けるか？」

シャルティエは茫然とした状態で起こった事を報告し、早苗はそれで成功を確信して荒い息をしながら喜び、クレメンテはこの状況を打開させた早苗を称賛し、リオンは早苗に動けるかと尋ねた。

早苗

「ちょっと疲れましたが…大丈夫です」

スバル

「すっご…」

エミリア

「早苗って本当に凄いね…」

シン

「よし。この隙にここから離脱するぞ」

レイ

「ああ。それが最善だな」

シン達は早苗が作ったチャンスを生かして行方不明になっていたロースグスをマイシップに乗せてクラッド6へ帰還するのであった…。

第9話中編2 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』対管理局戦』

（後書き

どうも飛鳥です。

今回は管理局との第2回戦です。

この話でフェイトはこの戦いの時シンへの恐怖で心が折れ、以降の戦いからは退場することになります。フェイトファンのみなさんゴメンナサイ。

次回は報告編となります。

では（．．）ノシ

第9話後篇『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』報告編 + α』

デймロス、ハロルドに続いてまさかクレメンテ老に再会できるとは思っていなかった

あの娘は確かに強い力を持っているけどそれだけじゃない気がする
あの娘は自分の背中に坊ちゃんと変わらないくらい思いものを背負っている

16歳の女の子が背負うにはあまりにも重いものをあの子は背負っている

もう坊ちゃんみたいな悲劇はもう見たくない
たぶん坊ちゃんもそう思っている
だから…

デймロス

『シャルティエ！聞いているのか！？』

シャルティエ

『あ、すみません。それでデймロスの出力を戻している時には…』

だから僕は坊ちゃんと一緒にあの娘を支えてあげたい
ソーディアンとしてそして、1人の人間として…

交錯戦記 CROS OF DESTINY

『世界を駆け巡る者達』

第9話『機動兵器マガス・マッガーナ破壊依頼』報告編 + α』

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

ググ砂漠から撤退して3時間後

激戦を終えたシン達はクラッド6に帰還したシン達はググ砂漠で救

出したローグスの集団を医務室に預け、クラウチのところへ報告をしていた。

クラウチ

「むこうさんから連絡が取れた。意識不明になっていた男が意識を取り戻したらしい」

早苗

「そうなんですか！？よかったぁ…」

早苗は出発する前に事の顛末を伝えた者が意識不明だとシンから聞かされていたため、回復の報を聞き安堵の息を吐いた。

クラウチは早苗が安堵の息を吐いたのを確認すると話を続けた。

クラウチ

「今回の依頼の達成でウチも他の企業から注目されるようになった。しかも行方不明になっていたローグスの連中も保護したっていうんだから俺から言う事は唯一つだ」

クラウチの様子を見て依頼の管轄外の事をした為に怒られると思ったエミリアは息を呑むが次のクラウチの言葉でそのエミリアの表情は明るくなった。

クラウチ

「よくやったな、お前ら」

クラウチはシン達1人1人に30万メセタの入った袋を渡した。

エミリア

「おっさん！これって…」

エミリアは袋に入っていた30万メセタを見てクラウドに問いかけるとクラウドはこう答えた。

クラウド

「これは俺からのボーナスだ。エミリアもいい働きをしていたと報告されているしな。これは俺からのご褒美だ」

エミリアは嬉しかった。自分を認めてほしかった人に認めてもらえたからである。

クラウド

「次もしっかりやってくれよ？んじゃお疲れさん！」

クラッド6 リトルウィング管轄区 ブリーフィングルーム

クラウドへの報告から10分後

ブリーフィングルームは和やかな雰囲気にも包まれていた。

その要因はクラウドに認められて上機嫌になっているエミリアと新たな仲間が加わったからであろう。

エミリア

「ふ」

レイ

「上機嫌だなエミリア。まあそれも仕方ないか…」

クレメンテ

『僕はソーディアン・クレメンテじゃ。これからよろしく頼むの』
スバル

「うん！これからよろしくね！クレメンテおじいちゃん！」

ディムロス

『スバル！クレメンテ老になんて言い草を…』

クレメンテ

『ほっほっほ。構う事は無い。それにしても元氣のいい孫ができた気分じゃのう』

ハロルド

『早苗つてばもしかしたらソーディアンに好かれているんじゃないかしら？』

早苗

「え？そうですか？」

しかしこの状況に表情をひきつらせている者もいたが

リオン

「なんだ…このカオスな空間は…」

シン

「まあみんな無事に生還できただからああいう雰囲気になるのは仕方ないだろ？」

リオン

「だがこれでは連絡事項を伝える事はできんぞ？」

シン

「それもそうだな。というわけで…」

シンも最初はこの雰囲気を感じていたがこのままだと連絡事項を伝えられないとリオンから苦情が入ったのでシンは雑談を楽しんでいるスバル達に声を掛けた。

シン

「みんな！これから連絡事項を伝えるから聞いててくれ！」

シンがそう叫ぶと皆一様にして沈黙した。

シンはその様子を確認すると連絡事項を伝え始めた。

傭兵連絡中…

シン

「というわけで次に依頼が来るまでは各自自由行動をしてくれ。それじゃ、解散！！」

シンから連絡事項を聞いたスバル達は各々が思う場所へ移動したのであった。

S i d e E X なのは

シン達が撤退してから1時間後

ググ砂漠 最深エリア

フェイトの救難信号をキャッチしたなのははググ砂漠の最深エリアに来ていた。

他の3人はこの手前にあるエリアで気を失っていたが大事に至るような怪我は無かった。

しかし、フェイトはそのエリアにはおらずこのエリアに救難信号が出されていた。

なのは

「フェイトちゃん！何処なの！？返事をして！」

なのはは必死になってフェイトを捜すと微かにフェイトの声がしたためその方向へ向かうとなのはは悲惨な状態になっているフェイトを発見した。

なのは

「フェイトちゃん？」

フェイト

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサ

サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ
サイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ

なのは

「しっかりして！！フェイトちゃん！！」

この時なのはは猛烈な憎悪に囚われた。

自分の親友であるフェイトの心をズタズタに引き裂いた者に対して
憎悪の叫びを上げた。

なのは

「許さない！！フェイトちゃんをこんな風にした奴を絶対に許さな
い！！」

その後、シンが突いた秘孔の効果は消えていたがフェイトは心神喪
失状態と診断され前線からの撤退と管理局の退職を余儀なくされ、
ミッドチルダに帰還させようとしたところ輸送ヘリに乗って移動し
ようとしたところを現地のモンスターに襲撃され行方不明となり、
なのはの許に彼女がMIAに認定された報が届いたのはその翌日だ
った。

Side EX フェイト

フェイトが行方不明になってから1時間後

フェイト

「なんで私は生きているんだろ…」

フェイトは自分を攫ったモンスターをバルディッシュを使って撃退するも大きな虚無感に囚われていた。

シン

【痛いだろ？これはキラさんの痛みだ】

シン

【そしてこれはまだ5歳のサクヤが父であるキラさんを殺された事によって生まれた痛みだ】

シン

【痛いだろ？怖いだろ？だけどな。これよりももっと強い痛みを与えたのはお前ら時空管理局だ】

あの戦いの時にシンに言われた言葉がフェイトの心に深々と突き刺さっているのである。

フェイトも誰かから大切なものを奪っている自覚があった。

が、フェイトは見えて見ぬふりをしてきた。

そうしなければ管理局の執政官をしていないし、エリオとキャロの見本にならなくてはいけないと思いつけていた。

しかし、シンはそんなフェイトに嫌でも現実を突き付けた。

フェイト

「私にはもう生きる意味なんてない…」

フェイトは罪悪感に押しつぶされそうになっていた。

皮肉にもキラが殺されて自分のせいで罪悪感に押しつぶされそうになっていた状態となったシンと同じ状態になっていた。

フェイトは死にたいと思った。

そして、そんなフェイトの思いに呼応するかのようにゴ・ヴァーラ

の大軍がフェイトを取り囲んでいた。

フェイト

「（私…死ぬんだ…）」

フェイトは自分にふりかかる死をまるで他人事のように見ていたが、自分の頬に炎がかすった瞬間フェイトの思いは変わった。

フェイト

「イヤだ…。死にたくない！このまま何も出来ずに死にたくない！」

この時のフェイトは何かの偶然か、かつてシンが生への執着で叫んだ言葉と一語一句違わず同じ内容を叫んだ。

そして、ゴ・ヴァーラの爪がフェイトを引き裂こうとした瞬間、フェイトを襲っていたゴ・ヴァーラ全てが氷漬けになって絶命していた。

????

「お姉さん大丈夫？」

フェイトを救ったのはまだ幼さを残した水色の髪の少女だった。

そこに赤と黒のツートンの配色のキャストが水色の髪の少女を叱った。

????

「チルノ！勝手に行動するでない！！」

チルノと呼ばれた少女

「だってこいつらがこのお姉さんを殺そうとしてたんだよ？」

????

「ぬう。だからといって1人で突っ込むでない！いくらお前が強い力を持っていたとしてもお前より強い奴はゴマンといるのだぞ」

チルノ

「ちえっ。おっちゃんのケチ」

????

「私はおっちゃんではない！私はマガシだ！！」

フェイト

「あ、あの…」

目の前で繰り広げられる漫才にフェイトはやや引き気味にも漫才をしている2人に話しかけた。

チルノ

「あ、お姉さん。怪我は無い？」

フェイト

「え、ええ。ありがとう」

マガシ

「気にするでない。…が見た所わけありのようだな」

フェイト

「え？は、はい…ちょっとトラブルがあつて…」

チルノ

「ふーん…」

フェイト

「え、えーと…」

フェイトは礼を言った後マガシと名乗ったキャストにいきなり核心を突かれ、しどろもどろになりながら言い訳するとチルノはフェイトの眼をじつと見つめ、何か思いついた表情をした後フェイトにある提案をした。

チルノ

「そうだ！お姉さんもあたいたい達と一緒にきなよ！！」

フェイト

「え…？」

マガシ

「待てい！！」

いきなりとんでもない提案をされたフェイトは目を白黒させ、キヤストはチルノに対して突っ込みを入れた。

しかし、チルノはそんな2人を無視して話を進めた。

チルノ

「？ここで戦力が増えるのはいいことじゃん」

マガシ

「ぬう…。確かにこの戦力だと不安が残るな…」

フェイト

「えっと…」

チルノがマガシにそう説くと彼も思案顔になり、フェイトはただ状況についていけないでいると彼は答えを出した。

マガシ

「貴様…。名をなんという？」

いきなり名前を聞かれて驚きながらフェイトは自分の名前を答えた。

フェイト

「フェイト…フェイト・テストロッサ・ハオラウンです…」

マガシ

「そうか私の名はレンヴォルト・マガシだ。これからお前は私とこ

の娘…チルノと共にチームを組んでもらうぞ?」

フェイト

「え…?ええええええええ!?!」

フェイトはあっさり自分をチームに入れるマガシの発言に驚き、自分のしてきた事を考えて一瞬断ろうとしたが

チルノ

「あたい達と一緒に行動するのがイヤなの?」

フェイト

「う…」

チルノの今にも泣きそうな目を見て断ろうにも断れず。

マガシ

「ちなみにお前に拒否権は無い」

マガシの言葉によって逃げ場を無くされた。

フェイト

「不束者ですがこれからよろしくお願いします…」

チルノ

「うん!よろしく!」

そして、フェイトは遂に観念してマガシのチームに入る事になった。チルノは満面の笑みを浮かべてフェイトに抱きつき、フェイトは自分の持っている母性本能に強い刺激を与えた。

こうしてフェイトの新たな人生が始まったのであった…。

第9話後篇『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』報告編 + α』 (後書き)

どうも飛鳥です。

これにて第9話『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼編』は終了となります。

今回はクラウチへの報告と憎悪を抱いたなのはと原因となったフェイトの人生の新たな出発となっております。

チルノの登場に驚く方もいらっしゃると思いますが何故彼女がこのグラールにいる理由を設定紹介にて書く予定です。

さて次回はスクリーンチャット集3と外伝を投下する予定です。

では(・・・)ノシ

スクリーンチャット集3

Chat12 「妙な意気投合」 パーティ解散後の自由時間時

レイ

「まさかあの時の奴らが再び俺達の前に現れるとはな…」

リオン

「フン…。ああいうタイプはしつこいのが相場だろう？」

スバル

「（なんだか空気が重い…）」

レイ

「確かなにな…。次に会った時は2度と立ち向かいたくないようにしてやるか…」

リオン

「奇遇だな。僕も同じことを考えていた」

リオン・レイ

「……………（――）b」

スバル

「（なんかお互いグッジョブしてる！？）」

レイ

「どうやら俺達は気が合うようだな」

リオン

「どうやらそのようだな」

スバル@1人だけおいてけぼり

「（あれ？私だけおいてけぼり？）」

Chat13 「気になった事」 はやてがシズルにグラールの危機を知らせた後

シズル

「そういえばはやてさんは何故次元犯罪者に？」

はやて

「ええっと…管理局を脱走する際に少しでも強力な武器が欲しくてな…」

はやて、少し遠い目をしながら答える

シズル

「それで向こうのロストギアの武器を奪って逃げたと？」

はやて

「そうや…」

シズル

「それってこの杖ですか？」

シズル、部屋に立てかけてある杖を見せる

はやて

「確かにそれなんやけど起動方法が分からなかったんや…」

はやて、恥ずかしそうに後ろの髪をバリバリとかく

シズル

「（ねえカムハーン。これってサイコウオンドだね？）」

カムハーン

『（うむ…全部で7本あったうち1つが管理局に奪われていたのだから…こんな形で再会するとはな…）』

カムハーン、感慨深げに頷く

シズル

「（でも起動方法が分からなかったって…）」

カムハーン

『（サイコウオンドもそうだがグラールの法撃武器はテクニクのディスクをあらかじめセットしておかねばまったく効果が出ん。正直宝の持ち腐れだ…）』

シズル、はやてを可哀想な人を見る目で見ると

はやて

「えー！？私なんか恥ずかしい事言った？」

シズル

「えーと…」

シズル、理由を教えるのをためらう

カムハーン

『お前の持ってきた武器はお前達の世界では宝の持ち腐れだぞ？』

はやて

「え…？」

カムハーン

『テクニクのディスクを持っていないお前ではタダのガラクタだ』

カムハーン、あっさりはやてがサイコウオンドを使えなかった理由を教える

はやて

「うわーん！！！！」

はやて、シズルに泣きつく

シズル

「よしよし…（まるで子供みたいだ…：：）」

Chat14「味を覚えたエミリア」 ローグスの集団との戦闘終了後

エミリア@意地の悪い笑み

「ぬっふっふ…」

リオン

「なんだその気持ち悪い笑みは…：：」

リオン、エミリアにドン引きする

エミリア

「だってこれ滅茶苦茶強いんだもん♪」

エミリア、EXスタントラップを見せる

早苗

「確かEXスタントラップっていう名前でしたね」

エミリア

「これがあればどんな敵だってイチコロだよ！」

エミリア、得意気な笑みを浮かべる

シン

「麻痺が利く奴限定だけだな…」

シン、ばっさりと切り捨てる

エミリア

「え…？」

エミリア、表情が凍る

レイ

「もっともそれは1つ500メセタもするつえに最大4つしか持てないからな」

エミリア

「うげ…そうだった…」

エミリア、顔が青くなる

スバル

「やっぱ便利な物には裏があるんだね」

Chat15「久しぶりの再会」
ググ砂漠から撤退している時マイシップ内

chat10「1000年ぶりの

再会」を見ている

ハロルド

『これで出力は1%→100%まですぐに変更できるようになったわよ』

デймロス

『よしそれでは早苗の援護に』

クレメンテ

『その必要はいらんよ』

デймロス

『クレメンテ老!?!』

ディムロス、クレメンテの声に驚く

ハロルド

『あつクレメンテ老じゃん。久しぶり〜』

ハロルド、特に驚く事もなく会話に参加

クレメンテ

『ハロルドも久しぶりじゃのう。どうやら元に戻ったようで何よりじゃわい』

ディムロス

『クレメンテ老がいると我々の戦力も大きく増したな』

クレメンテ

『というわけでこれからよろしく頼むわい』

Chat 16 「慣れてる?」 パーティ解散後

シャルティエ

『そついえば早苗つてさ...』

シャルティエ、何か思い出したかのように早苗に話しかける

早苗

「何ですかシャル?」

シャルティエ

『早苗つて僕達ソーディアンみたいに喋る剣を見てもあまり驚かなかったよね?』

リオン

「確かにそうだな」

ディムロス

『我の時も特に驚いた様子は無かったしな…』

リオン、思案にふける

シャルティエ

『僕の場合は坊ちゃんが物心つくが前から一緒でしたから違和感がありませんでしたし…』

早苗、少し考えた後口を開く

早苗

「実は私の居た神社にも喋る剣があつたんです…」

シャルティエ

『へえ。僕体以外にも喋る剣は作られていたんだね…』

早苗

「名前は確か…イクティノスだった筈です…」

リオン・シャルティエ・ディムロス・クレメンテ

「……！？」

リオンとソーディアン3振り、表情が凍りつく

早苗

「それで私が仕えていた神の神奈子様がマスターだとイクティノスは言っていましたよ。あと自分の仲間があと5振りあると…」

ハロルド

『イクティノスそんな所に居るんだ』

シャルティエ

『それで僕と初めて会った時も特に驚かなかったんだね……』

早苗

「私としてはイクティノスの仲間がシャル達だったのにびっくりです……」

クレメンテ

『世の中狭いものじゃのう……』

Chat17「前途多難」　フェイトがチルノのチームに参入した
直後

チルノ

「とゆーわけでよろしくね!!」

フェイト

「うん。よろしくね」

マガシ

「足手纏いにはなるなよ?」

チルノ

「何よー!!フェイトお姉ちゃんは絶対強い筈だよ!!」

フェイト

「!?!」

フェイトに電流が走る

マガシ

「フン。ゴ・ヴァーラの大軍に取り囲まれていたではないか」

チルノ

「むー!!でももう一度戦闘になればフェイトお姉ちゃんの強さが分かる筈だよ!!ねえ?フェイトお姉ちゃん!!」

フェイト

「(フェイトお姉ちゃん……フェイトお姉ちゃん……)」
チルノ

「フェイトお姉ちゃん？」

心配そうな表情でフェイトを見つめる

フェイト

「最高に…満足…し…ゲフウ」

フェイト、大量の鼻血を出しながら満面の笑みを浮かべながら気絶する。

チルノ

「わー！？フェイトお姉ちゃんしっかりしてー！！」

チルノ、フェイトの身体を揺すりながら声を掛ける

マガシ

「はあ…。前途多難だな…」

スクリーンチャット集3（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はスクリーンチャット集となりました。

本編は鬱になりやすいのでスクリーンチャットでは和やかな雰囲気が多いです。

次は設定集と外伝の予定です。

では（．．）ノシ

キャラ設定4（前書き）

第9話で所属が変わったり、新たに加わったキャラクターの設定などが書かれています。

特に最後の項目は今後のネタバレになるためそうつたのを嫌う方は閲覧しないことを推奨します。

キャラ設定4

設定紹介

新キャラ及び所属が変わったキャラ

フェイト・テストロッサ・ハオラウン（19）

チルノのチームに所属する少女。

シンとの戦闘によって心神喪失状態と診断され、執政官生命はおろか管理局員生命も無くなり、フェイトの引き取り手であるハオラウン家で療養することが決まってミッドチルダに戻る為に管理局の人員輸送ヘリでミッドチルダ行き of 輸送艦へ護送されている時に現地の大型モンスターに襲撃を受け、ヘリは撃墜、フェイト自身も攫われた。

フェイトは何とか大型モンスターを使って撃退するも今まで自分がしてきた事の罪悪感に押しつぶされそうになっていた。

その後自身の死を祈りながらあてもなく彷徨っているうちにゴ・ヴァーラの大軍に取り囲まれ、その時に生じた痛みで生への執着が復活する。

そして、フェイトにゴ・ヴァーラの大軍が襲いかかるうとした瞬間、偶然居合わせたチルノに助けられ強制的にチルノと彼女の保護者であるマガシとチームを組むことになる。

尚、チルノの姿を見て母性本能の塊（という名のロリコン）に覚醒してしまっている。

八神 はやて（19）

シズルに拾われた少女。

元はなのはが隊長を務めていた機動六課の前隊長。

元々管理局の闇に触れる事が多かったため管理局の正義に疑問を感じ

じていたところに時空管理局の全戦力を上げてのある作戦の内容に触れ、管理局からの脱走を決意、グラールに危機を伝える為にヴォルケンリッターの面々と共に時空管理局を脱走した。

しかし、次元航行艦でグラールまで辿り着いたのまでは良かったが、なのは達の追撃によつてはやてたちが乗っていた次元航行艦は轟沈、各々1人用の脱出ポッドで脱出するも散り散りになってしまった。

その後、無一文の状態でタルカス・シテイに行き倒れ、シズルに保護される。

そしてグラールの危機を伝えると自分を守ると言ってくれたシズルに心身ともにボロボロだったはやては惚れてしまった。

尚、彼女が次元犯罪者とされた理由は脱走する際に少しでも戦力を欲したはやてがロストギア保管室にあったグラールで作られたロストギア【サイコウオンド】を奪ったためで、この【サイコウオンド】もはやてと共にシズルに確保された。

チルノ（4歳@外見年齢13歳）

フェイトをチームに助けた少女。

服装はアドベントチルノの服（マガシ謹製）。

相方であるマガシと共に行動していた所にゴ・ヴァーラの大軍に襲われているフェイトを助け、フェイトを（無理矢理）引き入れ、チームを結成し、チルノはチームのリーダーとなる。

そこそこの体型と子供の眼でフェイトを母性本能の塊（という名のロリコン）に覚醒させてしまった張本人。

見た目とは裏腹に年齢が4歳には理由があるのだが…。

以下ネタバレの為別項目参照。

レンヴォルト・マガシ（70歳）

チルノのチームに所属する男性キャスト。

その正体はエンドラム機関の元隊長にしてかつてグラールを恐怖のどん底にまで陥れた組織【イルミナス】によって生み出されたコピ

ーキャスト。

人格元はイルミナスの長、カール・フリードリヒ・ハウザー。
暗黒衛星「HIVE」での決戦の後からチルノと共に行動している。
戦闘狂だがいつも突っ走っているチルノに頭を悩まされている。

ソーディアン・ベルセリオス（ハロルド）

ディムロスと同時期に早苗が拾ってきた剣。

人格元はハロルド・ベルセリオス。

かつては兄が殺された事によって生じた心の傷をミクトランに付け込まれ、リオンから父親を奪い最終的にはリオンの命を間接的に奪ってしまった。

リオンとは色々あったが和解している。

ドがつく程のマッドサイエンティストでグラールに来てからは色々な事象を調べている。

戦闘には参加しないがソーディアンの改造や相手の分析としてサポートする。

ソーディアン・クレメンテ

早苗がマガス・マツガーナの破壊依頼で管理局の面々と戦っている時に発見した剣。

ベルクランとの戦いで消滅した筈だったがググ砂漠に転移していた所を早苗が発見される。

晶術の威力は他のソーディアンの追従を許さない高さである。

晶術の調整はディムロスより上の為、常に最大出力で晶術を行使できるように早苗を戦闘面でサポートしている。

クラッド6で起きた爆発事故の真相

ある程度ソーディアンの晶術の威力を知っていたリオンはディムロスに出力を30%にするようにディムロスと話をつけていた。

当時リオンは早苗の魔力をディムロスの先代マスタースタン・エル

ロンと同レベルと見て訓練を開始した。

しかし、早苗の魔力はリオンの想定以上に高く、スタンはおろかかつて戦った幸福を司る神【フォルトゥナ】をもはるかに上回る魔力を持ち、スタン以上の同調レベル、そして、彼女の使っている2柱の神の神力の付加が加わった結果、大爆発が起きた。

9話の終盤で早苗のリバースクルセイダーが管理局員のみを吹き飛ばせたのはクレメンテが早苗のサポートをしていた為である。

他のソーディアンの行方

イクティノス

守矢神社にあり、早苗の仕えている神の片割れである八坂 神奈子がマスターをしている。

神奈子との付き合いは神奈子と諏訪子が出会う前からの付き合いで、神奈子が守矢神社に居を構えても神奈子の右腕としてすごしている。早苗が物心が着く前から面倒を見ていた為早苗はソーディアンのような“喋る剣”に慣れている。

アトワイト

現在行方不明。

グラールのどこかにある。

誰かがアトワイトのマスターになった為か現在は常にマスターと共に移動している。

現在のマスターは強い魔力を持っており、水、氷の晶術が得意な者が持っているらしいが…。

チルノの正体

チルノの正体は【SEED事変】の時にモトウブの雪山地帯に落下した巨大なSEEDによって産まれたSEEDフォームの亜種。たまたま着地点に訪れていたマガシ（イーサン戦後）がチルノが中に入ったSEEDを発見、通行の邪魔なので破壊すると中に入っていたチルノはそのまま産まれた姿でマガシの前に排出され、興味を持ったマガシに回収される。

元々の自然の強い場所にS E E Dによる侵食で力が強化された結果、チルノが産まれた。

そして、チルノがS E E Dフォームの亜種たる所以は

- ・他のS E E Dフォームと違い自我がある
 - ・S E E Dフォーム特有の破壊衝動が無い
 - ・物質に対して侵食能力を持っていない
 - ・ダークファルスの統制を受けない
 - ・限りなく人間に近い姿をしている
 - ・他のS E E Dフォームと違い、コミュニケーション能力を持つ
 - ・ミラージュブラストが使用可能
 - ・S U Vウェポンが使用可能
 - ・インフィニティブラストが使用可能
- の9点である。

これは後に現れるダークファルスとシンが深い関わりを持っているからである。

キャラ設定4（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はキャラ設定4となっております。

今回チルノの設定はチルノの設定に自然をつかさどる妖精にしては強すぎるという設定をこの話ではSEEDから産まれた者として解釈させました。

ちなみにこの話での幻想郷にはチルノはいません。

次は外伝となります。

では（・・）ノシ

サクヤがこうまかに来て1年のときがすぎました。

このこうまかにすんでいる人たちはみんないい人です。

とくにレミリアさまにはたくさんのおんがあります。

かじ、りょうり、せんたく、そうじ、もじのよみかき、さんすうどれもレミリアさまがおしえてくださいました。

きょうはレミリアさまがいままでサクヤがはいることをきんしされていたへやにあんないしてくださるそうです。

いろいろなことがあつたけれどサクヤは元気にくらしています。

だから早くシンおにーさまに会いたいです。

サクヤの日記366ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

2ページ目 十六夜 咲夜、ガンダムに乗る

咲夜が紅魔館に来てから1年後 AM・05:50

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア入口前

レミリアに呼ばれた咲夜はレミリアに指定されていた長袖長ズボンの青ジャージ（レミリア謹製）、鉛筆等の筆記用具を持って指定された場所に待機していた。

咲夜@目を輝かせている

「ここから先はいつたい何があるんだろう?」

咲夜が目を輝かせながら入口の周りをウロウロしているとレミリアがやってきた。

レミリア

「む。咲夜か。指定した時間の10分前に来たのだな」

咲夜

「レミリアさま！おはようございます！」

レミリア

「ああ、おはよう。朝から元気なようで何よりだ」

レミリアは集合時間の10分前から咲夜が着ていた事に感心しながら挨拶を返した。

咲夜

「それで、レミリアさま！この先には何があるのですか？」

咲夜は目を輝かせながらレミリアにドアの先にあるものを尋ねるとレミリアは楽しそうな表情をしながら答えた。

レミリア

「今は言えないがお前が見たらきつと驚くものがある場所だ」

レミリアはそう言った後ドアに設置されている機械に懐から取り出したカードを通すと金属で出来た小さな部屋が咲夜の目に映った。

咲夜

「これだけですか？」

レミリア

「まあ待て。この部屋は今から行く場所へ行く為の移動手段だ。さあこの部屋に入るぞ」

咲夜

「はい……」

咲夜は自分が思っていた光景とは別の光景に落胆しながらレミリアに連れられて部屋に入ると先程まで開いていたドアが突然閉まった。

咲夜

「！レミリアさま！！ドアが閉じちゃいましたよ！？」

レミリア

「そう慌てるな。もう少ししたらお前が驚く場所に着くからな」

ドアが閉まったことによつて混乱する咲夜だったがレミリアは部屋に備え付けられている端末を操作すると、ガタンという音がした後、部屋は下のエリアに進んでいった。

3分後 AM・05:53

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリアMS工廠 連絡通路

レミリア

「着いたぞ。ここが今日お前を案内するエリアだ」

体験した事のない経験の連続で頭が混乱していた咲夜はレミリアのいる方向を見るとそこには咲夜にとって初めてみる景色が広がっていた。

咲夜

「うわあ！！すごい！！！」

咲夜の目に映った景色とは鋼鉄の巨人が並び、たくさんの人（どれも咲夜を娘や妹のように可愛がっている）が所狭しと走り回りたくさんさんの声が聞こえる景色だった。

レミリア

「驚いただろう？あの鋼鉄の巨人が我が紅魔館の最大戦力、MSだ」
モビルスーツ

MS…それは咲夜のいた世界でも多数製造されていたものである（咲夜は知らないが）。

そして、この紅魔館にあるMSはこの紅魔館が幻想郷の勢力の中でも圧倒的な強さの要因であり、紅魔館の象徴であった。

咲夜

「すごいです！！あのMSはなんという名前なのですか？」

咲夜は鋼鉄の巨人達が並ぶ光景に感動しながら巨人たちの中央にあるMSを指さしてレミリアに尋ねた。

レミリア

「ほう。咲夜はいい目を持っているようだな。あれは私が駆るMS『ガンダム』だ」

咲夜

「『ガンダム』…。かつこいい…」

咲夜は神々しさを放つ白亜の巨人に圧倒されながらも素直な感想を述べた。

レミリア

「咲夜。ガンダムの方は後で案内するから待て。今回の目的はこのエリア全体を案内することだ」

咲夜

「あつ。そうだった…」

咲夜はレミリアが咲夜をこのエリアに連れてきた理由を思い出した。そう。これは社会見学なのである。

一ヶ所ばかりに居てはレミリアは勿論このエリアで働いている人達にも迷惑が掛かるのである。

咲夜は名残惜しそうな目でガンダムを一瞥した後レミリアの後を追った。

その後、咲夜はこのエリアで働いている人々が昼食を食べる食堂などを案内され、最後に咲夜が気になっていたガンダムがあるエリアへ案内された。

約2時間後 AM・08:00

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア MS整備エリア

レミリア

「アストナージ居るか？」

アストナージと呼ばれた男

「はいよ！今行きますぜ！」

レミリアは緑色の作業服を着た男に声を掛けると呼ばれた男は作業を一旦中止してレミリアの許にやってきた。

レミリア

「作業中に済まんな」

アストナージ

「丁度キリがついた所なんで問題ありませんぜ。こんなところに油臭いところに何の用ですかい？」

レミリア

「なに、紅魔館の未来のメイドにこのエリアの地理を知ってもらいたくて案内をしていたのだ」

レミリアは一旦言葉を区切るとレミリアの後ろから咲夜がアストナージに挨拶をした。

咲夜

「こんにちは！アストナージおじさん！」

アストナージ

「おお咲夜ちゃんかい。となると咲夜ちゃんが未来のメイドですかい？」

レミリア

「ああ。そして咲夜がガンダムに目が行ったらしくてな。最後にここで働いているお前達に改めて顔見せをしに来たというわけだ」

アストナージ

「つまりお嬢がなさっている仕事を咲夜ちゃんもするわけですね？」

レミリア

「その通りだ。もう顔見知りかもしれんが仲良くしてやってくれ」

アストナージは咲夜が未来のメイドという事に驚きながらも咲夜がレミリアの仕事をするという事を確認し、レミリアもそうだと答えた。

一方咲夜はというとアストナージが整備をしていたガンダムを見上げていた。

レミリアはガンダムを見上げている咲夜が考えている事を見抜くと咲夜にある提案を持ちかけた。

レミリア

「咲夜よ。よかったらガンダムに乗ってみないか？」

咲夜

「え…？」

それはガンダムに乗ってみると言う事だった。これに対して咲夜は呆気にとられるがレミリアは話を続けた。

レミリア

「あのような目でガンダムを見ていたら大体何がしたいか想像がつく。アストナージ、構わないな？」

アストナージ

「はい。お嬢も一緒に搭乗するのですしたら構いませんぜ」

レミリア

「だそうだが咲夜よ、乗ってみるか？」

咲夜

「はい！」

それは咲夜にとって魅力的な内容だった。

そして、咲夜は考える間もなく返事をした。

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア MS工廠 ガンダムコック
ピット内

レミリアはシートに座ると咲夜を自身の膝の上に座らせ、ガンダムを起動させた。

咲夜

「うわあ……」

咲夜はガンダムのコックピットにある計器に火が入り、見たことない文字が多数浮かび上がる情景に見とれていた。

レミリア

「各部チェック…右マニピュレーター問題なし、左マニピュレーター問題なし、右脚部問題なし、左脚部問題なし、縮退炉問題なし、ミノフスキークラフト問題なし、グラビティコントロールシステム問題なし、各武装問題なし、各センサー問題なし、コンディション

オールグリーン。さすがアストナージだね。いつもいい仕事をしている」

咲夜@レミリアが口に出していた単語が分からない

「（レミリアさまは何を言っているんだろ？）」

アストナージ

『そう言われると調整した甲斐があつたつてもんです。丁度第3エレベーターが開いてますんでそいつを使ってください』

レミリアは自分の機体の専属整備士であるアストナージの仕事に感服しながらMS運搬用エレベーターまでガンダムを移動させた。

レミリア

「レミリア・スカーレット。ガンダム、発進する！」

レミリアがそう宣言するとフットペダルを踏み込み、ガンダムは空へ飛び出した。

10分後

幻想郷第3大陸 紅魔館 上空800m ガンダムコックピット内

レミリア

「咲夜。これが私達の住む紅魔館だ」

咲夜@レミリアの膝の上

「うわー！こつまかんがあんなに小さく見えるー！」

レミリアはガンダムのメインカメラを操作して咲夜に紅魔館を見せると咲夜は目を輝かせながらディスプレイに映る紅魔館を見た。

レミリア

「咲夜。私はこのまま視察に出るが一緒に来るか？」

咲夜

「はい！レミリアさまにおとします！！」

レミリア

「いい返事だ。では、行くぞ！」

レミリアは咲夜にしさつについて来るかと尋ね、咲夜は元気よくついて行くと言った。

それを聞いたレミリアは満足げな笑みを浮かべてフットペダルを軽く踏み込み、ガンダムを飛ばした。

その後、咲夜とレミリアはガンダムで紅魔館が統治しているエリアを見て回った。

13時間後 PM09:00

幻想郷第3大陸 紅魔館 咲夜の部屋

咲夜@疲れて眠った

「スー…スー…」

レミリア@咲夜をベッドに寝かせる

「やれやれ、どうやら自分でも気がつかないうちに疲れていたのか」

レミリアはベッドで気持ちよさそうに寝ている咲夜を慈しむ目で見ている。

自分が産まれた時、吸血鬼だったがために住む場所を追われ、この幻想郷に辿り着いた。

その後、幻想郷に住む技術者や実力者に頭を下げて弟子入りし、様々な技術を死に物狂いで身に付けた。

そして身に付けた技術でレミリアは現在の紅魔館を作上げた。

レミリア

「本当にあの時が懐かしいな…」

レミリアが自分の過去に物思いにふけっているとドアをノックする音が聞こえた。

レミリア

「入っていいわよ。フラン」

レミリアはノックをしたと思われる人物に普段のレミリアからは想像できないような口調で語りかけるとレミリアより少し幼い姿の寶石のような翼を持った金髪の少女が入ってきた。

フランと呼ばれた少女

「久しぶりだね。お姉ちゃん。その子が手紙に書いてあった娘なの？」

レミリア

「ええ。名前は十六夜 咲夜。紅魔館の未来のメイドよ」

フランと呼ばれた少女はベッドで寝ている咲夜を見てレミリアに尋ねた。

少女の名はフランドール・スカーレット。

レミリアの妹であり、今から5年前に幻想郷の勢力の1つである永遠亭に留学していた吸血鬼である。

レミリア

「その表情でここに帰ってきたということはフランの望んだ成果が出たみたいね」

フラン

「うん。だから紅魔館に帰って来たの」

レミリア

「そう。貴方の部屋はそのままにしてあるわ」

レミリアはフランに成果を聞くと彼女は満足げな笑みを浮かべて答え、レミリアはフランの部屋はそのままにしてあることを話した。

フラン

「ありがとう。それじゃあ私は部屋に荷物を降ろしてくるね」

レミリア

「ええ。ただし静かに行動しなさいね？」

フラン@咲夜の部屋から出ていく

「わかってるよ。それじゃ、また明日ね」

レミリア

「明日か…。今では明日があると思えるようになったのだな…。さて、私も明日に備えて寝るか」

咲夜@寝言

「おやすみなさいましえ…。レミリアしゃまあ…。むにやむにや」
レミリア

「ふふつ。おやすみ、咲夜」

フランが咲夜の部屋から出ていくとレミリアもまた咲夜の部屋から出ていった。

翌日 AM・07:45

幻想郷第3大陸 紅魔館

咲夜@寝坊

『ねすごしてしまいましたっ！！』

紅魔館全体に咲夜の声が響き渡った。

レミリア@咲夜の朝食を作っている

「まあ、あれだけ疲れていたら寝坊するのは当然だな」

フラン@^{ダーズリン}紅茶を淹れて飲んでいる

「でも、元気のいい娘だね。少しこの紅魔館の空気も良くなったね」
レミリア

「ああ。この紅魔館が明るくなったのはあの子のおかげよ」

今日も紅魔館の騒がしくも平和な1日が始まるのであった……。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 2 ページ目 十六夜 咲夜、ガンダムに乗る

どうも飛鳥です。

今回は外伝の第2話となります。

この話で出てきたガンダムや幻想郷の勢力、そして幻想郷については

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + αで紹介します。

次の第3話は本編の休息編の終了後に外伝を投稿します。

では（・・）ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + α（前書き）

外伝2話に出た人物などの設定があります。

ネタバレを含むのでそういったことを嫌われる方は閲覧されないとを推奨します。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + α

【キャラ設定@登場順】

アストナージ・メツソ（享年39：亡霊歴20年@外伝2話現在）
紅魔館のMS整備士の男性の亡霊。

シアアの反乱の際に流れ弾で戦死した際のショックで咲夜が紅魔館に流れ着く20年前に同じくシアアの反乱で戦死した恋人のケーラ共々レミリアの統治する幻想郷第3大陸に流れ着く。

流れ着いた後は無名の自動車（技術レベルは第二次世界大戦後の日本レベル）整備士をしていた。

そしてレミリアの領土に流れ着いてから3年後、腕のいい整備士が居るという噂を聞いたレミリアにMSの整備士としてスカウトされ、ケーラと共に紅魔館に住む事になった（ケーラはMSパイロットとしてスカウトされる）。

生前からMSの整備士として優秀だったアストナージは僅か1年でレミリアに認められ、彼女の専用MS『ガンダム』の専属整備士となった（アストナージが来るまではレミリアが自分で整備していた）。

咲夜が紅魔館に住むようになってからは彼女を自分の娘みたいに可愛がっている。

性格は普段は温厚で咲夜もすぐ懐いた。

MSの整備技術はまさに職人である（その点がレミリアに認められる一因となった）。

悩みは亡霊となったので自分とケーラの子供を産めない事。

フランドール・スカーレット（485歳@外伝2話現在）

紅魔館の主であるレミリアの妹。

レミリアと同じく吸血鬼である。

幻想郷最新の医療技術を持つ永遠亭に留学していた。能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。

かつては気が触れていると言われるくらいに情緒が不安定だったが咲夜が紅魔館に流れ着く50年前に起こったある事件によって自分の力のせいでレミリアを殺しかけた事を後悔し、とある仙人の下での精神修行の末に落ち着いた性格になり、またこの事件を契機に医学を志すようになった。

咲夜が紅魔館に来る4年前に丁度留学生を募集していた永遠亭に留学し、幻想郷最新の医療技術を学び、首席で卒業し、紅魔館に帰ってきた。

紅魔館に帰ってきてからは学んできた医学を生かす為に紅魔館専属の医者となる。

家事レベルは並みより上。

咲夜の事は時折届いていたレミリアの手紙である程度は知っていた。スタイルはそこそいい（本編に登場するスバル並み）のだが、姉であるレミリアがスタイル抜群のためコンプレックスになっている。

【兵器】

ガンダム（RX78）

レミリア専用のMS。

異世界（の世界）の遺跡にあったデータを基にレミリアが製作したMS。

姿と名前、型式番号こそはU・Cの一年戦争で伝説的な戦果を上げたMS『ガンダム』であるが中身はまったく別物である。

しかし、ガンダムの名に恥じない高性能なMSとなっている。

装甲素材 ルナ・チタニウム（ガンダムXの世界のもの）

MSの骨格 ムーバブルフレーム採用

コックピット形式 コアブロックシステムを採用

エンジン 縮退炉

備考 ミノフスキークラフト搭載

サイコフレーム搭載

レミリア謹製学習型コンピューター搭載

グラビティコントロールシステム（パイロットへのGを軽減するシステム）

【世界観】

幻想郷

咲夜やレミリア達が住む多種多様な種族が共存する世界。

元は日本の一部だったが、ある事件で独立した世界となり、その際に広大な世界となった（大きさは地球と同じ）。

全部で8つの大陸に別れており、8つの勢力がそれぞれの大陸を統治している。

時空管理局に察知されていない珍しい世界でもある。

代表責任者は八雲 紫。

【勢力】

幻想郷第3大陸

拡大した幻想郷で3番目に見つかった大陸。

咲夜達が住む大陸。故郷を追われたレミリアとフラン（咲夜が紅魔館に流れ着く471年前）や住む世界で死亡したアストナージとケーラが流れ着いた（咲夜が紅魔館に流れ着く20年前）大陸である。大きさとしては最も面積が狭い（地球のオーストラリア大陸位）が四季と自然に恵まれており鉱物資源も豊富、ここでしか手に入らない鉱物も多数存在し、異世界（の世界）の遺跡があり、ここにあったデータでガンダムが作られた。

また、技術者が最も集まる大陸である。

そのためかつてはここに住む技術者や土の下に眠る鉱物資源を狙って永遠亭をはじめとする巨大勢力が侵攻をされたが、レミリアが結成した当時の義勇団の者達が駆るMS隊の活躍によって侵略者を撃

退した（咲夜が紅魔館に流れ着く45年前）。

その後、当時義勇団の隊長であったレミリアがこの大陸にすむ住人の願いで第3大陸の統治者となった（咲夜が紅魔館に流れ着く40年前）。

現在は幻想郷で最も平和な大陸である（ただし軍事力も最強）。

統治者はレミリア・スカーレット。

紅魔館

幻想郷第3大陸を統治しているレミリアが住む屋敷。

幼稚園〜大学までの教育機関も兼ねている（学費は全額紅魔館負担）。

学生、技術者、武芸者が集まる場所。

咲夜や美鈴、フラン等がここで生活している。

保有戦力は幻想郷最強と言われており、保有MSは60機（専用機は除く）。

全部で8つのブロックがあり、全部を見て回するには最低1週間はかかる。

また、耐神構造を採用しており、フランが中でいくら大暴れしても絶対に崩れることのない程頑丈にできている。

ブロックは以下の通り。

3階中央エリア：主に作戦会議などを行うエリア

3階東エリア：主に幻想郷中の情報を収集しているエリア

3階西エリア：講義に使われる部屋が集中しているエリア

2階中央エリア：レミリアのプライベートスペース

ここで咲夜に色々な事を教えている。

2階東エリア：紅魔館に仕える者が寝泊まりする部屋が集中しているエリア

咲夜、美鈴、フランの部屋はこのエリアにある。

2階西エリア：学生達の寮の役割を持つエリア（宿泊費は0）

1階中央エリア：フードコート

様々な料理店が立ち並んでいる。

1階東エリア：主に紅魔館に仕える者が訓練を行うエリア

咲夜や美鈴もここで戦闘訓練をしている。

1階西エリア：主に学生達の運動場の役割を持つエリア

B1東エリア：特定の人物しか入る事が許されないエリア

MSの生産工廠と整備ベッドがある。

ここに紅魔館の平和を支えるMSが生産、整備されている。

B1西エリア：大図書館があり、ここに資料を借りに来る学生達で賑わっているエリア

幻想郷第2大陸

拡大した幻想郷で2番目に見つかった大陸。

気候は穏やかだが鉱物資源に恵まれていない。

幻想郷で最も医療技術が高い大陸である。

統治者は八意 永琳。

永遠亭

幻想郷第2大陸にある屋敷。

保有MSは30機

医学を志す者が集まる場所であり、フランもここに留学し、首席で卒業した。

最高責任者は鈴仙・優曇華院・イナバ。

【その他】

レミリアとフランの間に起こった事件

咲夜が紅魔館に流れ着く50年前に起こった。

当時戦争ムードが高まりつつあった幻想郷第3大陸で当時の人々は心が荒んでいた。

フランもその例外にもれず、侵攻してきた永遠亭の兵士にレミリア

を傷つけたことによって暴走、レミリアはフランの暴走を止める為にフランと戦った結果レミリアは瀕死の重傷を負い、さらにフランの能力で吸血鬼としての力を破壊されつくしてしまう。

レミリア自身は学んでいた魔術で肉体を再生させるが再生できたのは肉体のみでフランの能力で破壊された吸血鬼としての力は再生できなかった。

そのためレミリアは吸血鬼の高い身体能力が無くなり、空も飛べなくなった。

最も悪いことばかりではなく吸血鬼としての能力が破壊されたことにより吸血鬼の弱点である太陽光・流水・銀器・ニンニク等が克服された。

しかし、フランはこの時の自分を恥じてとある仙人のもとで精神修行をし、安定した精神を持てるようになった。

また、フランはこの事件を契機に医者になる事を志望し、紅魔館にある資料である程度医学を学んだあと、留学生を募集していた永遠亭に留学した（咲夜が紅魔館に流れ着く5年前）。

種族”亡霊”について

主に紅魔館の整備士のアストナージ・メッソがこれにあたる。

体温は常人よりも多少低いが肉体を持ち姿は死ぬ直前の姿になる。

食事は可能。

亡霊なので寿命は無い。

ただし痛覚があるので痛みはある。

また、子供を産む事ができない。

耐神構造について

その名の通り神が建物の中で戦闘が行われることを想定して設計された構造。

魔術と建築技術の応用で神々が戦闘を行っても耐えられる構造になっている

この構造を採用しているのは紅魔館のみである。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + α (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は外伝2話に登場したキャラの設定とでてきた単語の説明となつていきます。

では(・・・)ノシ

第10話「宴会」酒は飲んでも吞まれるな」

最初に早苗の精神を感応した時僕は僕のマスターであったフィリアを思い出した

気弱そうな外見じゃが、芯はしっかりしておる

本当にフィリアに似ておった…

もう1つ驚いた事じゃが、この娘は自分が好いておる者がなんとリオンであったことじゃ

シャルティエから話を聞いておったが僕もこの娘の恋が成就してほしいと願っておる

早苗

「クレメンテ。この晶術はどのように使えばよいのですか？」

クレメンテ

『この晶術は…そうじゃのう…』

さて、僕も今一度老骨に鞭を撃ってこの若きマスターの手助けをするとしようかのう…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第10話「宴会」酒は飲んでも吞まれるな」

S i d e シン

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

パーティ解散から3日後

ドン・タイラーの依頼を完了し、パーティを解散してからシンは次の依頼に備えて新たな武器を製作していた所にチェルシーから連絡

事項があるから来てほしいと通信があつたので来ていた。

シン

「宴会……ですか？」

シンは面食らった顔で復唱するとチエルシーは笑顔で理由を答えた。

チエルシー

「そうヨー。今回は大きな依頼だつタシ、カーシユ族の子も目を覚ましたカラ宴会を開こうつテ、シャツチヨサンが言つてタヨ！」

シン

「それで俺からスバル達に『宴会があるから参加しろ』って連絡しろと言う事ですか？」

シンは少し不機嫌になりながら頼まれた事を復唱した。

シンが不機嫌なのにも理由がある。

前回の依頼で早苗の使っているセイバー（ディムロスが炎属性の為、炎に対して耐性がある敵には氷属性のセイバーをしようとしており、壊れたのがそのセイバー）やエミリアが使っているダガーがググ砂漠の環境に耐えられずに故障したのである。

本来なら劣悪な環境に強いテノラ・ワークス社の武器を購入すれば済むのだがテノラ製は使い手を選ぶ武器が多く、接近戦では初心者
の早苗やエミリアでは戦闘にも影響されるためシンは2人の武器を製作していたのである。

そして、その武器がやっと完了となる直前で呼び出され、しかも呼び出された理由が伝書鳩がわりなのである、シンでなくても機嫌が悪くなるのは当然である。

チエルシー

「よろしくネー」

シン

「わかりましたよ…ったく…」

シンは不機嫌ながらもスバル達に連絡事項を伝える為にスバル達を招集した。

S i d e o u t

チエルシーからの伝言依頼から5分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

レイ

「宴会だと？」

シン

「そういうことだ」

リオン

「まったくそんな事を伝える為に僕達を呼んだのか？」

シャルティエ

『坊ちゃん……』

シン

「俺だって好きでやってるわけじゃないさ…」

レイ

「いつもお前ばかりにまかせてすまないな…」

シンに呼ばれた理由が宴会に参加しろということに不満を漏らすリオンと伝書鳩代わりにされたシンをいたわるレイに対し女子組はというと

エミリア

「宴会キター（・・）——！！！！」

ミカ

『ふふ。楽しそうですねエミリアは』

早苗

「私、宴会なんて初めてですから楽しみです！」

ディムロス

『ハメを外し過ぎるなよ？』

クレメンテ

『ホッホッホ。なに、宴会くらいそれくらい騒がねば損じゃよ』

ハロルド

『ま。あたしらにはあんまり関係ないんだけどね。ソーディアンだし』

スバル

「よーし！一杯食べるぞおー！！」

大盛り上がりだった。

そしてカーシュ族の少年が目覚めたという朗報にまったく気が付いていない女子組だった。

伝言完了から3時間後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ

「というわけでウチの新人チームの功績を称えて…乾杯だぜ！！」
女子陣

「乾杯！！」

宴会の始まったリトルウイング事務所の状況は

エミリア@酔っ払い

「もう1本持つてこーい！！」

早苗@爆睡

「むにゃむにゃ…神奈子様あ私はあ元気に生きてますう…むにゃむにゃ…」

スバル@素

「ガツガツ……こりやウマイこりやウマイ……おかわり！」

「うん！これは美味しいぞ！」

リトルウイング社員A @酔っ払い

「二日酔いが怖くて酒が飲めるか!!」

リトルウイング社員B@出来あがつてる

「酒が飲める飲める飲めるぞ」酒が飲めるぞ」
♪

リトルウイング社員C@絡み酒

「ああん！？私の酒が飲めないのか！？」

リトルウイング社員D @ 酔っ払い

「WRYYYYYYYYYYYYYYYY!!!!」

シン・リオン・レイ

「「「「「ぎりぎり」って」」」」」

カオスになっていた。

そして、カオスなこの状況に耐えきれなくなったシン達は

リオン@早苗を御姫様だっこしている

「冗談じゃない！さっさと帰るぞ！」

レイ@飲み物と食糧を確保した

「飲み物と食糧は確保したぞ」

シ
ン

「よし。逃げるぞ！」

この力オスな事務所から逃げ出した。

宴会開始から10分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋
カオスな宴会場から逃げ出したシン達は一番広い部屋を持っている
シンの部屋で同じく逃げ出してきたバスク達と改めて飲み会をして
いた。

バスク@シンが持っているコップに酒を注ぐ

「こうして酒を酌み交わすのは初めてだな」

シン@スバルは放置

「そういえばそうですね。っと、ありがとうございます」

クノー@レイのコップに緑茶を注ぐ

「こうして酒を酌み交わす事ができたのも何かの縁だ。共に楽しもう」

レイ@エミリアは見捨てた

「ええ。こうやって楽しむのもありますね」

リオン@早苗をベッドに寝かしてきた。

「まったくあいつらは静かに酒も飲めんのか？」

トニオ@逃げ出してきた

「おう。御苦労さん。俺達は俺達で楽しもうぜ？」

リイナ@同上

「そうそう。酒の楽しみ方は人それぞれってね！」

その後、シン達はリトルウイング事務所とシンの部屋でそれぞれの
宴会を楽しむのであった。

翌日

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ@酒を飲む量を調整していたので平気
「よう。お前ら。昨日は楽しめたか？」

クラウチに呼び出されたシン達はクラウチに宴会は楽しめたかと尋ねた。

実は大きな依頼を成功させたから宴会をしたのではなく、ここ数日激務続きだったシン達に息抜きも兼ねて行ったものである。それに気がついたシン達は思い思いの言葉を口にした。

スバル@料理ばかり食べていたので平気

「楽しかったです！」

早苗@すぐに酔いつぶれたので平気

「途中から記憶は無かったですけど楽しかったです」

シン@退避していたので平気

「ええ。俺達の為に態々ありがとうございます」

レイ@同上

「俺達は俺達で楽しめました」

リオン@同上

「普段はああいう馬鹿騒ぎは好きじゃないが…悪くなかった」

クラウチ

「そうかそうか！なら宴会を企画した甲斐があったってもんだぜ」

シン達の感想にクラウチは上機嫌で頷いた。

シン達はしばらく和やかな雰囲気だったがリオンの言葉である問題に直面することになった。

リオン

「が、この惨状をどう処理するかが問題だな…」

シン達が周りを見回すと

エミリア@二日酔い

「うげー…気持ちわるー…」

リトルウイング社員A@同上

「頭があ…」

リトルウイング社員B@同上

「ぎもぢわる〜」

リトルウイング社員C@同上

「世界がメリーゴーランドのように回ってる〜」

リトルウイング社員D@同上

「あ、頭がこ、この私が…」

シン

「……………」

レイ

「……………」

早苗

「……………」

スバル

「……………」

クラウチ

「……………」

シン達の周りの状況…それは二日酔いになったリトルウイング社員（エミリアも含む）が床で倒れている惨状であった。

シン

「とりあえず…今日の活動は休止ですね」

クラウチ

「だな…」

結局リトルウイングが再び活動を始めたのは宴会から3日後だった。

教訓

レイ

「『酒は飲んでも呑まれるな』だな……」

第10話「宴会ゝ酒は飲んで呑まれるなゝ」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は休日編その1です。

この話は基本的にシリアスな最後ばかりだったので今回はギャグ的なオチになりました。

次回は休日編その2となります。

では（．．）ノシ

第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」

僕は騒がしいのが嫌いだ

宴会と言ってもただ騒がしいだけだと僕は思っていた

シンから宴会に参加しろと言われた時は嫌がったが早苗の後押しで僕も参加した

しかし、この前行われた宴会は僕の思っていた宴会とは違った

あのような雰囲気は今まで体験した事がない

もしかしたら僕もあいつらと共に戦っていたらあのような宴会を体験したのだろう

あの時の宴会は僕にとって忘れられない思い出になっただから…

早苗

「リオンさん？どこか具合が悪いのですか？」

リオン

「いや、なんでもない」

早苗

「それならいいですけど…」

またあのような宴会をまた楽しむ為にも今を生きなければならんな…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」

S i d e シン

宴会から4日後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

あの宴会から4日経ち、リトルウイングも営業再開していた。

スバル達は新たな依頼に備えて休暇を楽しんでいた。

そんな中シンはリオンとレイ、デймロスから依頼されていたある物を作っていた。

シン

「ふう…とりあえずはこんな感じか…」

シンは呟きながら眼下にある1振り金色の剣と2丁の銃、そしてセイバーらしき武器の柄を見ていた。

シンが作っていた物…それは早苗とエミリアの新しい武器であった。元々はもつと早く完成する予定だったのだが4日前の宴会で完成が間延びしていたのである。

シン

「久しぶりに武器製作をしたけどうまくいったな」

シンは自分の仕事に満足しながらシンに武器の製作を依頼した3人を呼びだすのであった。

S i d e o u t

10分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ブリーフィングルーム

シンに依頼していた武器ができたという連絡が入り、シンに武器製作を依頼したリオンとレイとデймロス（リオンが晶術の修行はクレメンテに任せてある）が来ていた。

シン

「3人共、待たせたな。一応これがいっつの新しい武器だ」

リオン達が来る前からブリーフィングルームに来ていたシンは先程完成させた1振りの剣と2丁の銃を見せた。

レイ

「？シン。俺はあいつのダガーを作ってほしいと頼んだんだが？」

レイは手に取った2丁の銃を訝しげに見ながらシンに言うとシンは少し笑いながらレイに答えた。

シン

「とりあえずダガーを使っているとイメージしてみてください」

レイ

「？こっか？」

レイはシンに言われたとおりにダガーを使っているイメージを頭に思い描くとカートリッジの部分からビームでできた刃が生えていた。

レイ

「成程。銃としての機能とダガーとしての機能を両立させたのか」
シン

「エミリアはまだ戦況に応じて武器を変えるのができないからな。だったら両方の機能を持たせてみたら？と思っただけけど…どうだ？」

レイ

「想像以上にいい仕上がりだ。感謝する」

シンは自信満々にレイに尋ねるとレイもシンの製作した武器を満足気に頷いた。

レイが武器の確認を終えた事を確認するとリオンもまたシンが製作した剣について尋ねた。

リオン

「見た目はタダの金色の剣だがこれにも何かあるのだろうか？」

シン

「ああ。これは…」

ディムロス

『な！？何故この金属がこんな所に！？』

リオンに疑問にシンが答えようとするとディムロスが途中で遮った。

リオン

「どうしたディムロス。騒がしいぞ」

ディムロスが突然話を遮った事にリオンは咎めるが次のシャルティエの言葉でリオンもまた動揺した。

シャルティエ

『いえ。ディムロスが驚くのも無理はありません。この剣…ベルセリウムで出来ています』

リオン

「なんだと！？あの金属は僕達の世界にしか無い筈だ！」

そう。リオンが持っている剣はソーディアンの構成している金属であるベルセリウムで出来ているのである。

ディムロス

『更にコアクリスタルも付けられている。シン、お前はどうかってこの2つを手に入れた？』

ディムロスはシンに対して警戒の色を強めながら問うと、返答はあっさり返ってきた。

シン

「ハロルドに作ってもらった」

ディムロス

『なにぃ！？あいつはソーディアンだぞ！？動けるわけが…』
シン

「詳しく言うとベルセリウムはハロルドがどつからともなく召喚して、コアクリスタルはハロルドに教えてもらいながら作った」

ディムロス

『……………』

シャルティエ

『ハロルド…何やってるんだよ…』

リオン

「素材に関しては大体わかったが機能はどうなんだ？」

シンの返答にディムロスとシャルティエはハロルドのフリーダムさに呆れながら溜息をついた。

リオンはこのままでは話が進まないと判断して話題をこの剣の機能に変えた。

シン

「一応普通のセイバーと同じように使える」

リオン

「それは普通だな」

シン

「だけど今の俺達には水・氷の属性攻撃ができるものが無いから水と氷の晶術が使えるようになってる」

リオン

「成程。いい出来だ。これで当面の問題は解決できたな」

リオンはシンの製作した武器の能力に満足するとひとつ気になったことがあった。

リオン

「この武器の名をなんというんだ？」

レイ

「それは俺も気になっていたところだ」

そう。2人が気になっていた事はシンの製作した武器の名前だった。シンもその事を思い出して2人に武器の名前を教えた。

シン

「ああ。例の方は右手に持っているのがアル・クアーレで左手に持っているのがエル・クアーレ、リオンの持っている剣はエルシディオン・レプカだ」

シンがリオンとレイに武器を渡してから2日後

クラウド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

新たな依頼が来るまでそれぞれ休暇を楽しんでいたシン達だったがクラウドから緊急の連絡があると呼び出されていた。

クラウド

「おう。来たか」

シン

「なんでも急を要する依頼と聞きましたけど…また俺達を指定した依頼が来たんですか？」

シンはクラウドに自分達を指定した理由を見抜き、クラウドに依頼内容を尋ねるとクラウドは少し考え込んだ後、口を開いた。

クラウド

「察しがいいな。今回呼んだのは他でもねえお前ら指定で依頼をしたいっていうある有名企業からだ」

エミリア

「有名企業？」

クラウド

「ああ。お嬢さん、入ってきてもいいぜ」

シン

「！」

クラウドは社長室にコールすると社長室から1人の少女が1人の男を伴ってシン達の前に歩いてきた。
そして、シンはその少女と彼女の供をしている男を見て警戒心を露わにした。

スバル

「シン？」

クラウド

「ん？何だ知り合いか？」

シンの様子がおかしい事に気がついたスバルとクラウドはシンに問いかけるがシンは一気に少女との間合いを詰めると少女の服の胸倉を掴んだ。

レイ

「シン！？」

「??????」

「主！貴様！！」

スバル

「ちよっ！？シン！？」

リオン

「おい！何をしている！？」

早苗

「あわわわわわ……」

エミリア

「えっ？ちよっ！？何！？どうなってるの！？」

クラウチ

「お、おい！どうしたってんだ！？そのお嬢ちゃんは今回の依頼のメッセンジャーなんだぞ！？」

シンのいきなりの行動にシンとシンに胸倉を掴まれた少女以外の者が全員シンを咎めたがシンは周りに構わず叫んだ。

シン

「八神 はやて！ヴォルケンリッターの守護獣！こんな所に何しに来た！？」

シンに胸倉を掴まれた少女…はやてはさして動揺せずに自分がここにいる理由を話した。

はやて

「私はインヘルト社のメッセンジャーとしてここに来ました。今回私が派遣されたのはインヘルト社からの依頼とシン・アスカ。貴方に『ある人』からのメッセージを伝えに来たのです」

シン

「……………」

シンはやてが真剣な表情をしている事に気がつく胸倉を掴んでいた手を離した。

そして、シンから解放されたはやてはインヘルト社の依頼内容の説明を始めた。

それは新たな異変の幕開けを意味していたのだった…。

第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は休息編その2となっております。

今回シンが作った武器は次回から早苗とエミリアが使うことになります。

次回からはインヘルト社からの依頼とシンの旧友との再会編となります。

では（．．）ノシ

さくやがこうまかんに来てあれから2年がたちました。
あれから色んなことをすることができました。

最近レミリア様の妹様であり、こうまかんでお医者さんをしているフラン様からかんたんなものですけど医じゅつをおそわりました。
このこうまかにきてから楽しい日が続いています。

シンおにーさまがこのこうまかんに来てくれればもっと楽しくなる
と思います。

だから早くシンおにーさまに早く会いたいです。

サクヤの日記731ページ目より。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

3ページ目前編 十六夜 咲夜、アーリア村で御使いをする

咲夜が紅魔館に来てから2年後 AM・7:20

幻想郷第3大陸 紅魔館 レミリアの私室前

咲夜はレミリアに呼ばれてレミリアの私室に来ていた。

咲夜@メイド服(レミリア謹製)

「レミリア様によばれてきたけど…今日は何があるのかな?」

咲夜は今日何が起こるのだろうとドキドキしながら待機していると
レミリアの私室のドアが開いた。

レミリア

「む、咲夜か。指定した時間よりも10分早いな。感心したぞ」

咲夜

「おはようございます！レミリア様！今日は何のごようですか？」
レミリア

「ああ、おはよう。そうだな…詳しい話は部屋の中である」

咲夜は自分がレミリアの部屋に呼ばれて来たのかと尋ねるとレミリアは自分の部屋に咲夜を入れた。

5分後 AM・07:25

幻想郷第3大陸 紅魔館 レミリアの私室

レミリアに部屋の中へ通された咲夜は部屋にあった椅子に座って待っている。レミリアに用があつてきていたフランが咲夜に話しかけてきた。

フラン@今日は休み

「あ、咲夜だ。おはよう」

咲夜

「おはようございます！フラン様！」

フラン

「うん。子供は元気なのが一番だよ」

レミリア

「あらフラン。来ていたのね」

咲夜

「あ、レミリア様」

フランは咲夜が元気に挨拶するのを感じしていると3人分の紅茶を淹れたティーポットとティーカップ、カスタードプリンの入ったカップに乗せたトレイを持ったレミリアがやってきた。

フラン

「この香りはキャラメルフレーバーね」

咲夜

「キャラメルフレーバー？」

レミリア

「フレーバーティーの一種だ」

フラン@もう食べている

「タハニルナのティーバッグを使うと楽に淹れられるよ」

レミリア

「プリンの甘さとキャラメルの甘く香ばしいフレーバーは相性抜群だ」

咲夜@メモ帳を取り出してメモを取っている

「（プリンに会う紅茶はキャラメルフレーバー。シンおにーさまに淹れてあげたら喜んでくれるかな？）」

レミリアは咲夜がメモを取り終え、プリンを食べ終えたのを確認すると本題に入った。

レミリア@洗い物はもう洗った

「咲夜。今日お前を呼んだのはメイドの見習いとしての初仕事を用意した」

咲夜

「さくやの初仕事ですか？」

レミリア

「ああ。その初仕事だが…」

咲夜は緊張しながら自分のメイドとしての初の仕事を唾を飲みながらレミリアが口を開くのを待った。

そして、レミリアが言った咲夜の初仕事は

レミリア

「咲夜。お前には私が渡すメモに書かれた物の買い出しをしてもら

う」

咲夜の初仕事…それはお使いであった。

レミリア

「現地までは私と美鈴も同行するが現地に着いたら私は仕事に回る。咲夜はそれまでの間にこれに書かれた物を買ってきてもらう」

咲夜

「はい！頑張ります！！」

レミリア

「うむ。いい返事だ。では現地まではガンダムで向かう。もう準備ができているならすぐに出発するぞ」

フラン

「頑張つてね咲夜」

咲夜

「はい！」

元々外に出る為の準備を済ませてレミリアの私室まで来ていた咲夜はガンダムの置いてあるMS工廠に向かうレミリアの後について行った。

35分後 AM・08:00

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア ガンダムのコックピット内

レミリア

「各部チェック…コンディションオールグリーン」

咲夜@レミリアの膝の上

「あのレミリア様」

咲夜はここに来るまでに見かけたあるものが気になったのでガンダ

ムを起動させたレミリアに咲夜が尋ねた。

レミリア

「どうした咲夜？」

咲夜

「レミリア様のガンダムと同じような顔のMSがあつたのですけどあれはだれのMSですか？」

咲夜はそう言いながらガンダムのディスプレイに映っている1機のMSを指さした。

レミリア

「ああ。あれは美鈴のMFだ」
モビルファイター

咲夜

「MF？」

咲夜はレミリアの言った単語が出てレミリアに問うとレミリアが答える前に通信回線から咲夜にとって馴染み深い声が聴こえた。

美鈴@notファイティングスーツ

『これは私のMFであるシャイニングガンダムだよ。咲夜ちゃん』
咲夜

「美鈴お姉ちゃん！？なんでそこに？」

美鈴@レミリアが外に出る時はたまに護衛としてついていく

『私はお嬢様の護衛としてついて行く時があるの。そしてこの機体はつい先日アストナージさんが仕上げてくれたの』

咲夜

「つまり美鈴お姉ちゃん専用の機体なんだね」

美鈴

『そういうこと。そういえば咲夜ちゃんと一緒に紅魔館の外に出る

のは初めてだったね』

咲夜

「はい！よろしく願いします！」

レミリア@暇になったので計器を調整していた

「美鈴も準備できたようだな。では出発するぞ」

咲夜と美鈴の会話がひと段落したのを確認するとレミリアが話の中に割って入り、咲夜と美鈴は話を一旦中断した。

美鈴

『紅美鈴。シャイニング！行きますよ！！』

レミリア

「レミリア・スカーレット。ガンダム。発進する！」

美鈴とレミリアはそれぞれのフットペダルを踏み込み、機体を発進させるのであった。

1時間後 AM・09:00

幻想郷第3大陸 アーリア村

ここはアーリア村。

幻想郷第3大陸にある小さな村であり、故郷を追われたレミリアとフランが流れ着いた村である。

レミリア

「着いたぞ。ここがアーリア村だ」

咲夜@目を輝かせている

「うわゝ！」

レミリア

「では咲夜。私と美鈴はこの先にある村長の家に行くが買い物の方は任せたぞ？」

咲夜

「はい！まかせてください！！」

アーリア村の入り口に辿り着いた咲夜はここでレミリア達で別れて行動することになり、店のある場所に走っていった。

S i d eレミリア

咲夜と別れてから10分後 A M・09：10

幻想郷第3大陸 アーリア村 村長宅前

レミリア

「半年ぶりに来たがやはりここは紅魔館とは違った安らぎがあるな」
美鈴

「そういえばお嬢様にとってここが始まりの地でしたね」

レミリア

「ああ。今でもこうしてちよくちよく顔を出している」

レミリアは過去の思い出に浸っていると咲夜と同じくらいの少女が走ってきた。

少女

「あっ！レミリアのお姉ちゃんだ！」

レミリア

「む、魔理沙か。ひさしぶりだな。元気になっていたか？」

魔理沙と呼ばれた少女

「うん！みんな元気だよ！」

レミリア

「そうか。なら私も用事が終わったら顔を出すでしょう」

魔理沙

「本当！？じゃあみんなにも言ってくる！」

レミリアに魔理沙と呼ばれた少女はレミリアが顔を出すと言うと目を輝かせながら目の前にある建物の中へ入っていった。

美鈴

「お嬢様。今の娘は？」

レミリア

「ああ。この先にある孤児院の子供だ。私とフランも一時期その孤児院で世話になっていた」

レミリアはこの村を出て以降も度々この村に顔を出し、この村の住人はやってくるレミリアを温かく迎え入れていた。

そして、今回レミリアがアーリア村にやってきたのは今から1年後に行われる大収穫祭にレミリア達も参加する事を伝える為に来たのである。

レミリア

「さあ。私達も私達の仕事をするぞ。美鈴」

美鈴

「はい。お供します」

レミリアと美鈴はまずは己の仕事を終わらせる為にアーリア村の村長の自宅前に立つのであった。

美鈴

「お嬢様」

レミリア@呼び鈴を鳴らす

「どうした美鈴？」

美鈴

「咲夜ちゃんにどのような物を買に行かせたのですか？」

レミリア

「セージとよく熟れたトマトと卵だ」

美鈴@滝汗

「何気に難易度が高いですね……」

レミリア

「あいつなら問題ないだろう。さ、中に入るぞ」

美鈴

「（咲夜ちゃん。大丈夫かなあ？）分かりました」

Side out

Side 咲夜

同刻 AM・09:10

幻想郷第3大陸 アーリア村 八百屋

一方美鈴が心配していた咲夜はというと……

店主

「おや？お嬢ちゃん御使いかい？」

咲夜

「はい！しんせんタマゴとれたてセージとよくつれたトマトをください！」

店主@売れているトマトと勘違い

「おう！俺の店で一番売れているトマトだ！安くてウマイ！って人気なんだぜ！」

咲夜@熟れているトマトが欲しい

「あの……えと……（どうしよう……。レミリア様のメモに書いてある”うれてる”とは違う気がする……。でもサクヤはその字がわかりません……）」

絶賛ピンチになっていた。

そう。レミリアのメモに書いてある”うれている”という意味は”売”ではなく”熟”という意味である。

咲夜もその意味は知っていたがいざ字に書こうとしてもどんな字かは知らないのである。

咲夜はレミリアの期待に添えなくなると思って涙目になっているとそこに1人の男性がやってきた。

白のTシャツに黒いジーンズを穿いた茶髪の男性

「ちよつと失礼するよ」

店主

「おや。ステッペンの旦那！今日は何を御所望で？」

ステッペンと呼ばれた男@この店の常連

「そうだね…。今日の朝採れたよく熟れた完熟トマトを100個と新鮮なセージを100枚。あと朝採れタマゴを100個頼むよ」

店主

「あいよ！全部で30・000フォルになりますぜ！いつも御買い上げありがとうございます！」

咲夜

「あ、あの！」

咲夜はたくさん買っただなあと思っていたが彼が注文していたものは全てレミリアのメモに書かれていたものと同じだったため自分も同じ物を買ってもらおうと思っただけで店の店主に声を掛けた。

店主

「ん？どうしたんだい嬢ちゃん？」

咲夜

「サクヤにもあの人と同じものを3つずつください！」

店主@咲夜の表情に合点がついた

「おうよ！全部で150フォルだ！」

咲夜

「あれ？あの人と同じものだから300フォルになるんじゃない？」

店主

「お嬢ちゃんが頑張って御使いしてるから俺からのオマケだ！」

咲夜

「ありがとうございます！」

咲夜は店主に頭を下げたあと集合場所であるアーリア村の入り口へ向かおうとすると先程自分に助け船を出してくれた男を見つけ、お礼を言おうと思い、軽トラに荷物を載せている彼に話しかけた。

咲夜

「あ、あの！」

ステッペン@荷物を積み終える

「うん？君はあの店に居た子だね？」

咲夜

「はい！こうまかんのメイドみならいのいざよいさくやです！」

ステッペン

「さくや？…ああ！君が彼女の言っていた咲夜か！」

咲夜

「かのじょ…？あのなんでサクヤのことをしているのですか？」

咲夜は何故彼が自分の事を知っているのか疑問に思っで尋ねると彼はすぐに答えた。

ステッペン

「ああ。ごめんごめん！僕はステッペン・ウルフ。このアーリア村にある孤児院を院長している。そして、何故君を知っている理由はね。ここを出たある娘が僕に教えてくれたんだよ」

咲夜は今一理解できなかった。

何故辺境であるこの村の孤児院の院長が自分を言っているのか？
少なくとも咲夜の知っている人物で孤児院の出の者は聞いたことが無い。

咲夜が未だに理由が分からないでいるとステッペンに詳しく話した。

ステッペン

「ああ。君なら…というよりこの大陸に住んでいる者は誰でも知っている人さ」

咲夜

「誰にでも…？もしかしてレミリア様とフラン様はこの村の出身なのですか！？」

ステッペン

「正解！正確に言うとおの娘達はこの村に流れ着いてきたんだよ」

咲夜

「そんなことまったく知りませんでした…」

ステッペン

「まあ事實は小説よりも奇なりって言うしね。僕は孤児院に帰るけど君も来るかい？」

咲夜

「え…？」

ステッペンの誘いは咲夜にとって魅力的なものだった。

彼は自分の知らないレミリアの事を知っている。

そしてなによりも時間が想像以上に余っているのである。

しかし、いくらレミリアの知り合いとはいえ無断で寄り道をしたらレミリアに心配を掛けるかもしれない。

咲夜はどうしようか悩んでいると彼の一言によって行こうと決心した。

ステッペン

「君がここに来ているのならレミリアも来ているんだろ？ だったら孤児院で待っていたほうが合流しやすいと思うよ」

咲夜

「行きます！」

ステッペン

「うん。いい返事だ。それじゃあ動かすから助手席に座ってね」

咲夜

「はい！」

ステッペンが軽トラの運転席に座ると咲夜も軽トラの助手席に座った。

ステッペン

「それじゃあ行くよ」

咲夜

「はい！」

咲夜達はアーリア村の村長宅の近くにある孤児院に向けて出発したのだった…。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 3 ページ目前編 十六夜 咲夜、アーリア

どうも飛鳥です。

今回は話が長くなったので前後篇にしました。

今回の咲夜のお使い時の会話の一部はある4コマ漫画の者をベースにしています。

次は後篇とキャラ設定を投稿します。

では(・・・)ノシ

サクヤが会ったステッペン・ウルフという人はとてもあたたかくてやさしい人でした。

あの人とはなしているとまるでおとーさまやシンおにーさま、レミア様とはなしている感じがした。

レミア様もあたたかくてやさしい人ですけどあの人のあたたかさはまるでおとーさまやおにーさまみたいなあたたかさでした。はやくシンおにーさまにも会いたいです。

サクヤの日記732ページ目より。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

2ページ目後編 十六夜 咲夜、新しい友達ができる

Side 咲夜

咲夜がステッペンと孤児院に向かい始めて1時間20分後 AM・10:30

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

ステッペンについて行った咲夜は紅魔館ほどではないが大きな建物の前に立っていた。

ステッペン@荷物を運び終えた

「さあ。ここが僕が院長をしている博麗孤児院だよ」

咲夜

「大きい…」

ステッペン

「ははっ。そりゃこの中には96人の子供達が居るからね」

咲夜

「もしかしてステッペンさんが1人できりもりしているのですか？」
ステッペン

「御名答。まあ色々大変だけど慣れれば楽しいものだよ」

咲夜

「すごいです…」

ステッペン@咲夜の頭を撫でる

「ありがとう。それじゃあ中に入ろうか？」

咲夜@父^{キラ}と義兄^{シン}の事を思い出した

「（なんだろう？まるでおとーさまやシンおにーさまに褒めてもらったみたい…）」

咲夜はたった1人で96人の子供達の面倒を見ている彼に驚きながら彼に案内されて孤児院の中に入っていた。

S i d e o u t

S i d e レミリア

同刻

幻想郷第3大陸 アーリア村 村長宅前

一方アーリア村の村長との会談を終えたレミリアは思ったよりも早く終わった暇を持て余していた。

レミリア

「思ったより早く終わったな…」

美鈴

「村長さんもすぐに了承してくれましたね」

レミリア

「ああ。それは助かるが…」

美鈴

「暇ですねえ」

レミリア

「そうだな…。む？」

美鈴

「うわ。ここでは珍しい軽トラですか！」

レミリア

「美鈴。予定を少し繰り上げてあれを運ぶぞ」

美鈴

「あれって…。もしかして出発する前にガンダムのバックパックにつけてあるあのコンテナですか？」

レミリアは少し早いが孤児院に向かおうとしたらアーリア村に1つだけある軽トラに見覚えのある人物がいたので予定を少し切りあげてガンダムへ向かっていった。

その時、その軽トラに咲夜が乗っていたのだが丁度ドアが影になっていたので気付かなかったのであった。

S i d e o u t

咲夜が博麗孤児院に来てから10分後 A M ・ 1 0 : 4 0

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院 客室

咲夜@ステッペンに淹れてもらった緑茶を飲んでいる

「？なんか外がにぎやかですね？」

ステッペン

「この賑わいようだ…。あの娘が来てくれたようだね。それもお土産を持って」

咲夜

「この声もしかして…」

ステッペン

「丁度緑茶も飲み終えたみたいだし行ってみるかい？」

咲夜

「はい！」

咲夜は外が賑やかになったことに気がついてステッペンに何があるのかと尋ねるとステッペンは誰がやって来たのか見当が付き、咲夜もステッペンから聞いていた話で誰が来るのか悟り、咲夜達は孤児院の玄関に向かった。

5分前 AM・10:35

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

咲夜達が玄関に向かっていている頃レミリアと美鈴はガンダムに搭載してあったコンテナを博麗孤児院前にまで運んできていた。

レミリア@コンテナ（中身30kg）1つを片手で持っている

「む。どうやら子供達はまだ集まっていないようだな」

美鈴@同上

「お嬢様は半年に1回はこのようなことをなさっているのですか？」

レミリア@コンテナを置く

「ああ。少しノリで作りすぎた服をここの孤児院に提供している」

美鈴@同上

「そうなんですか…（30kgになるまでの量の服を少しノリで作りましたって…；；）」

美鈴はノリで服を200着作るレミリアに呆れながらコンテナを降ろすと先程会った少女がいた。

魔理沙

「レミリアお姉ちゃん！」

レミリア

「む。魔理沙か。すまないが皆を呼んできてくれないか？」

魔理沙

「うん！」

レミリアは魔理沙に子供達を集めてくるようにと頼むものの5分で玄関の前が子供達で埋まった。

5分後 AM・10:40

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

レミリアは子供達が集まったことを確認すると孤児院全体に聞こえるように叫んだ。

レミリア@大声

「よく集まってくれた！今回は皆の服を土産として持ちかえってきた！取り合いにならないように順番に呼ぶから呼ばれたらここにいる者に服を受け取ってくれ！」

孤児院女子組

「「「「「わーい！お洋服だー！！」「」「」」」」」

美鈴@同上

「お洋服は逃げませんから順番に来てくださいねー！！」

孤児院の子供達はレミリアの指示通りにレミリアに呼ばれた者から服（レミリア謹製）を受け取っていると客室にいた咲夜達がレミリアに声を掛けた。

咲夜@レミリアに抱きつく

「レミリア様！」

レミリア@子供達への服の分配が終わった

「む。咲夜か。その様子だと買い物もうまくいったようだな」

咲夜

「はい！ここの院長さんのステッペン・ウルフと言う方に助けてもらいました！」

レミリアは咲夜が何気なしに言った言葉で驚いたがそこに咲夜が言っていた彼：ステッペンがレミリアに声を掛けた。

ステッペン

「ひさしぶりだね。レミリア」

レミリア@深々と頭を下げる

「おひさしぶりです院長。お元気そうだなによりです」

咲夜

「（！レミリア様が頭を下げてる！？この人ってレミリア様とどういうかんけいなんだろ？）」

美鈴

「（どうやらお嬢様とフラン様がお世話になった人ってこの人なんですね…）」

ステッペン

「そこまで頭を下げなくてもいいよ。さ、ここは冷えるから部屋の中に入るうか？」

レミリアがステッペンにした行動に咲夜は驚き、美鈴は彼がどのような人物か察しがついた。

ステッペンはそんなレミリアに頭を上げさせ、話をする為に孤児院の建物の中に入ろうとすると魔理沙と彼女の友達と思わしき子供達が話しかけてきた。

魔理沙

「せんせー！わたしも一緒について行ってもいい？」

頭に赤いリボンをつけた少女

「わたしもー！」

頭に黒いリボンをつけた少女

「わたしもレミリア様とお話したいです！」
人形を持つている少女

「わ、わたしも…」

紫髪の少女

「わたしもお話したい」

ステッペン

「慌てない、慌てない。まずは部屋まで行こうか？」

空色の髪の少女@まとめ役

「レミリアさんは逃げないから部屋に戻りましょう？」

子供達

「……はい！」「」

物凄い勢いでレミリア達に話しかけてきた子供達をステッペンが興奮状態の子供達を空色の髪の少女と共に鮮やかに受け流して咲夜達は客室に向かった。

15分後 AM・10:55

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院 客室

ステッペンに客室に案内された咲夜達は彼が淹れた紅茶を飲^{シッキム}んでいた。

ステッペン

「お味はどうかかな？」

美鈴@非番の時は1階中央エリアで喫茶店を経営している

「凄いですね…。私も色んな紅茶を飲んできましたけどここまでおいしい紅茶は飲んだことないです」

レミリア

「流石のお手前です」

レミリアと美鈴は思い思いの感想を言い紅茶を楽しんでいたが咲夜はある引っ掛かりを覚え、声に出した。

咲夜

「あれ…？」

ステッペン

「どうしたんだい咲夜ちゃん？」

咲夜

「えーと…そのしつれいかもしれませんがなんかレミリア様が淹れてくれたお茶に似ている気がして…」

咲夜の感想にステッペンは数瞬沈黙した後声を上げて笑い始めた。

ステッペン

「ははは！君の味覚は凄いな！そのとおり！レミリアに紅茶の淹れ方を教えたのは僕だからね！」

咲夜

「え！？そうなんですか！？」

レミリア

「ついでに言うとお前に教えている裁縫・料理・掃除・給仕は全て彼から学んだ」

咲夜

「ええ！？」

咲夜はまさか目の前にいる彼がレミリアの師だったと事は勿論、今のレミリアから教えてもらっている事全てが彼に教わったものだとは思ってもよらなかったらしい。

魔理沙

「せんせーおなかすいたー」

ステッペン

「おつと楽しい会話をしていると時間が早く過ぎていくものだね。それじゃあお昼ご飯にしようか。」

子供達

「わーい！」「わーい！」

ステッペン

「というわけで今からお昼ご飯を作るけど君達も食べていくといいよ」

レミリア@エプロン装備

「ならば私も昼食づくりをお手伝いします」

ステッペン

「お、そうかい？なら手伝ってもらおうかな？」

レミリア

「喜んで」

咲夜達はそうやって雑談をしている内にもう昼になっていた。

その事に気がついたステッペンは厨房に昼食を作りに行き、咲夜もそれについて行こうとしたが美鈴に止められた。

咲夜

「美鈴お姉ちゃん！？何で止めるの！？」

咲夜は何故自分を止めたのかと尋ねたら美鈴はいつも咲夜に向けている笑顔で答えた。

美鈴

「いい咲夜ちゃん？お嬢様にとってあの人は咲夜ちゃんというお嬢様みたいな人なんだよ？それにお嬢様のあの表情を見てみて？」

咲夜は美鈴に言われたとおりに厨房に居るレミリアの表情を見てみ

るとまるで父と一緒に遊んでいる表情であり、ステッペンの表情もまた娘と共に遊ぶ父の表情であった。

美鈴

「楽しそうな表情かおをしているでしょう？だから私達があの場合に行くのは無粋だから私達はお嬢様達を待ちましよう。ね？」

咲夜@父キラと義兄シンと一緒に遊んでいた時のことを思い出した

「うん。そうだよね…」

美鈴は咲夜が納得した事にホツとしつつ、昼食が出来た時にすぐ昼食が食べられるように子供達を呼びに行くのだった。

AM・11:20

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院

あの雑談のあとステッペンとレミリアは昼食の準備をしていた。

レミリア@咲夜と美鈴の会話が聞こえていた

「まったく。私もいい従者を持ったものです」

ステッペン@同上

「そのようだね。ああいう娘はなかなかいないからね」

レミリア

「では私達は作る料理であの娘達に答えましょうか」

ステッペン

「そうだね。じゃあ腕によりを掛けて作りますか」

レミリアはここで空気を読んでくれた咲夜と美鈴に感謝していた。

今の自分は過去に戦争が始まる前にこうして彼と共に厨房に立つ機会は中々得られないものである。

だからこそレミリアは空気を読んで身を引いてくれた2人にそしていつも自分が訪れるのを待っていてくれる孤児院の子供達の為に腕

を振るうのであった。

P M・00:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院食堂

レミリアとステッペンが厨房で昼食を作っている頃、食堂ではレミリアとステッペンが作っている料理を知った魔理沙が子供達を集めていた。

魔理沙@匂いでレミリアとステッペンが何を作っているのかわかった

「みんなー！今日のお昼ご飯はレミリアお姉ちゃんが作ってくれたオムライスが出るよー！！」

子供達

「「「「わーい！！」「」「」」」

一方、レミリアとステッペンは魔理沙が子供達を集めている間に最後の仕上げにかかっていた。

レミリア

「あとはソースを卵の上にかけて…」

ステッペン

「完成！それじゃあみんな所に持っていこうか？」

レミリア

「わかりました」

その後、咲夜と孤児院の子供達は腹一杯になるまでレミリアとステッペンが作った昼食を食べたのであった。

2時間後 P M・02:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院

今孤児院の中は静かだった。

昼食を腹一杯食べた咲夜と魔理沙、魔理沙と一緒に居た5人の子供達は美鈴の引率付きでアーリア村にある公園に遊びに行き、それ以外の子供達も昼寝をしたり外で遊んだりと部屋の中で起きているのはレミリアとステッペンだけであつた。

ステッペン

「こうして2人きりで話するのは何年ぶりかな？」

レミリア

「私がこのアーリア村から義勇兵として旅立つ前日ですから大体47年ぶりですね」

ステッペン

「もうそんなに時が経っていたんだ…」

ステッペンは感慨深げにレミリアを見た。

ステッペン

「君とフランがこのアーリア村に来た時の君は目に見える人全てが敵だと思っていたからね…。あの時君を止めるのは大変だったよ…」
レミリア@黒歴史

「う…。あの時は本当に申し訳ありませんでした…」

ステッペンはこのアーリア村にやってきたばかりのレミリアを思い出し、レミリアは恥ずかしさのあまり顔を赤くした。

ステッペン

「まあ過去の事はもういいとして…」

ステッペンが過去の話をやめた所でレミリアは博麗孤児院に引き取られ、出稼ぎをするようになって彼の過去を知ってから疑問に思っていたことを話した。

レミリア

「ステッペン院長…いや、カービィ義父さん」

カービィ@ステッペン・ウルフは偽名

「なんだい？レミリア」

レミリア@カービィの過去を知っている

「今更ですが何故この孤児院始めたのですか？貴方程の方なら他の大陸の者が貴方を高い位の役職につけたでしょうに…」

レミリアの疑問。

それは彼がこの小さな村で孤児院の院長をしていることである。

彼は過去に幻想郷が一気に巨大化する前にあったある問題を自身と彼の仲間で作った発明品でその問題を解決した事があり、その時から幻想郷の力を持つ勢力の長があの手この手で彼を自らの参加に引き入れようとした。

その待遇は今の時代でも破格の待遇である。

だからこそレミリアは自分をこの大陸の統治者に推薦した彼が名前を変えてまで未だにこの孤児院の院長をしている理由が分からなかった。

カービィは数瞬目を閉じた後レミリアに語りかけた。

カービィ

「レミリア、人にはね、必ず役割というものがあるんだ」

レミリア

「役割？」

カービィ

「そう。君は人を率いる特別な才能を持っている」

レミリア@自覚が無い

「そうですか？」

カービィ

「そうだよ。…確かにこの大陸以外の権力者が出した待遇はとても破格だ。だけど」

レミリア

「だけど？」

カービィ@外で遊んでいる子供達を見る

「僕の役割はね。誰かの上に立って統治することじゃなくてここに
いる子供達の笑顔を守る事なんだと思っているんだ」

レミリア

「あ…」

カービィの言っていた事はこの幻想郷の中でも最も問題となっている
ものであった。

過去の戦争幻想郷大陸争奪戦争はどの大陸にも例外なく多数の死者・
難民・孤児が発生した。

そして、その戦争はレミリア達の手によって終結した。

しかし、それは一時的なものであり、他の大陸の勢力がこの大陸を
一時的に諦めただけで他の大陸間での戦争は47年前に各勢力の痛
み分けとしてようやく終結した。

カービィ

「統治する者が優秀な指導者だとしても必ず綻びが出る。ここにい
る子供達はその綻びによって出た犠牲者だ」

レミリア

「確かにあの戦争から47年の月日がたっても未だに孤児が続出し
ています。一番平和だと言われているこの大陸にでさえ…」

そして、この大陸でも未だにこの大陸を狙う勢力のテロによって孤
児が出てしまっている。

カービィ

「だから僕はそんな子供達を笑顔にしてあげたい。そして、その笑顔を守ってあげたい。それがここで孤児院を続ける理由だよ」

レミリア

「つまり貴方にはここにいる子供達の笑顔を守る事が貴方の役割なのだと言いたいんですね？」

ステッペン

「うん。大体その解釈で合っているよ」

ステッペンの言う理由を聞き終えたレミリアは目を閉じて答えを考えていた。

現在幻想郷の状況は安定しているとはいえそれは水面下の話であって実際はいつ戦争が起ころうともおかしくはないのである。

それだけこの大陸は他の大陸には魅力的なのである。

レミリアも本当ならカービィの力が欲しいのである。

だがここにいる子供達は…アーリア村は彼に守られている。

ここで彼を自分に引き入れてしまったらこの村を守る力を孤児院の子供達から彼という父を奪ってしまう。

だからこそレミリアは統治者としては甘いと思いつつながら結論を出した。

レミリア

「わかりました。なら貴方に関しては何も言いません」

カービィ@懐からカードを取り出しレミリアに渡す

「そうかい。そうだな…君ならアレを託せるかな」

レミリア@カードを渡される

「アレ？」

カービィ

「このアーリア村の近くにあるGシステムの起動及び認証キーだよ」
レミリア

「なっ！？Gシステム！？」

カービィ

「うん。ここの近くにGシステム1番機がある」

レミリア

「何故私に？」

カービィ

「君ならあの装置を正しく使えると思ったからね。それと君に頼みたい事があってね」

レミリア

「頼み？」

カービィ

「今年で7歳になる魔理沙、霊夢、パチュリー、アリス、妖夢、そして今年で15歳になる天子を君の本拠地にある紅魔館の学校に入学させたいんだ」

レミリア

「わかりました。ですがそれだけの条件でいいのですか？」

カービィ

「うん。できれば咲夜ちゃんとも仲良くなってほしいけど、これに關してはあの子達次第だからね」

咲夜

「ただいま帰りました！」

カービィ

「どうやらあの子達も返ってきたようだね」

レミリア

「そのようですね」

レミリアとカービィの頼みを聞き入れた直後に公園に遊びに行っていた咲夜達が帰ってきた。

美鈴

「お嬢様。ただいま戻りました」

レミリア

「そうか。咲夜達の引率、御苦労であった」

美鈴

「ハッ！」

カービィ

「そうそう。魔理沙、霊夢、パチュリー、アリス、妖夢、天子、君達が行きたがっていた学校の件なんだけど何とかかなりそうだよ」

子供達

「「「「ほんと!?」「」「」」」」

カービィ

「ああ。ここにいるレミリアが何とかしてくれる」

レミリア

「もし魔理沙達がいいのなら今日からでもいけるぞ」

子供達

「「「「やったー!!」「」「」」」」

その後咲夜達が部屋の中に入ってきて、魔理沙達も一緒に紅魔館に行くという大喜びした咲夜達が出たのだった。

3時間後 PM05:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 入り口前

帰る準備を終えた咲夜達と紅魔館に行く準備を終えた魔理沙達はカービィと孤児院の子供達に入り口の前まで送ってもらい、それぞれ別れの挨拶をしていた。

カービィ

「それじゃあレミリア。魔理沙達を頼んだよ?」

レミリア

「はい。まかされました」

子供A

「みんなー！たまには帰ってこいよー！」

魔理沙達@レミリアが用意したドダイ改のなか

『『『うん！』『』『』』』

天子@空色の髪の少女

『私がない間先生に迷惑を掛けちゃ駄目よ？』

子供 A

「もちろん！」

子供 B

「咲夜ちゃん！また遊びに来てね！」

咲夜

「うん。また魔理沙達と遊びに行くね！」

美鈴@シャイニングのコックピットの中

『お嬢様。いつでも出発できますよ！』

レミリア

「む。わかった。ではお元気で…」

カービィ@レミリアに近付く

「うん。それじゃあ…」

レミリア

「？」

カービィ@小声

「レミリア。もし辛い事があつたらいつでもここに来てもいいよ」

レミリア

「！」

カービィ@小声

「例え世界では知られていなくても君はこの孤児院は君のもう一つ
の家で、君は僕の娘だからね」

レミリア

「はい！」

この時咲夜が見たレミリアの表情はとても晴れやかなものだった。

レミリア

「それでは…帰るか咲夜」

咲夜

「はい！（レミリア様すごうれしそうだっただけど何を言われたのかな？）」

その後咲夜はレミリアの表情に疑問に思っっているながら紅魔館に帰っていくのであった。

4時間後 PM・09:00

幻想郷第3大陸 紅魔館 咲夜の部屋

アーリア村から返ってきた咲夜は現在部屋のない魔理沙達の寝る部屋として咲夜の部屋で寝ることになり、新たな部屋の仲間と仲良く会話をしていた。

魔理沙

「というわけで今日からよろしくね！咲夜！」

咲夜

「うん！よろしく！」

霊夢@紅いリボンをつけている少女

「それにしてもこのへやは広いね」

アリス@人形を持った少女

「まるでわたしたちがみんなでねてるへやみたいね」

パチュリー@紫髪の少女

「むきゅー…うらやましい…」

天子@空色の髪の少女

「私達が住むことになる部屋もこと同じくらいの広さらしいわよ
妖夢@黒いリボンをつけている少女

「ほんと！？それはたのしみだね！…」

咲夜

「ふつうのがくせいりょうは使えないからわたしの部屋があるエリアにある部屋を使うんだって」

霊夢

「そうなるわわたしたちはサクヤのおとなりさんになるってこと？」

咲夜

「そうだと思う」

天子@布団をかぶって寝る

「明日になったら準備が分かるでしょ？ホラ！サッサと寝る！」

咲夜達

「……はい……」

その後天子が寝たのを見計らって咲夜達は夜遅くまで仲良くトランプをしたりウノをしたりして遊んでいたのだった。

翌日 AM・08:30

幻想郷第3大陸 紅魔館

咲夜@夜更かしして寝坊

「寝坊しましたー！！」

魔理沙@同上

「ヤバイ！もうレミリアお姉ちゃんに言われてる時間すぎちゃってるよー！！」

霊夢@同上

「こんなことならもっと早くねればよかったー！！」

妖夢@同上

「と、とにかくいそぎましょう！」

アリス@同上

「うー！なんでこんなめにー！！」

パチュリー@同上

「みんな、おいてかないで〜!!」

案の定寝坊した咲夜達はレミリアに指定されている時間を軽く超えていることに悲鳴を上げながら紅魔館の廊下を走っていた。

レミリア@実は咲夜の部屋の隣の部屋にいる

「どうやら寝坊したようだな」

天子@今いる部屋が天子の部屋

「あんの馬鹿あ…orz」

今日も紅魔館は平和であった…。

どうも飛鳥です。

今回は外伝後篇になります。

今回のお話は咲夜主役なのにレミリアに出番食われてしまいました
(量も前編の2倍...)。

今回登場した彼が何故幻想郷にいるのか？何故人の姿をしているのか？

その点に関しては次の人物設定3 + α で記述しておきます。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介3 + α（前書き）

外伝2話に出た人物などの設定があります。

ネタバレを含むのでそういったことを嫌われる方は閲覧されないとを推奨します。

【キャラ】

カービー（特定不能）

アーリア村にある孤児院『博麗孤児院』の院長。

普段は偽名のステッペン・ウルフと名乗っている。

レミリアやフラン、魔理沙達をはじめとする孤児院の子供達の父親的な存在。

かつて幻想郷が日本の一部程度の大きさだった時、当時問題とされていた食糧問題を万能創造システム『Gシステム』を開発させたことによって解決に導いた人物でもある。

しかし、永遠亭の工作によってGシステムが暴走、博麗大結界は崩壊し、幻想郷が1つの独立した世界となってしまう（幻想郷巨大化事件）。

その後、設計図を持って開発者と共に隠匿生活をしていたが永遠亭に所属している兎のテロによって設計図を奪われ、永遠亭の勢力によるテロで仲間であるリバジを失ってしまうが、彼の約束に従い、量産された『Gシステム』を封印、その後はアーリア村で孤児院を建てる。

孤児院を建ててしばらくしたある日、故郷を追われたレミリアとフランを保護しようとするが当時周りの者全てが敵だと思っていたレミリアと戦闘になり、辛くも勝利、『博麗孤児院』の一員としてレミリアとフランを迎え入れた。

尚、彼の技術力ほどの大陸の勢力も喉から手が出るほど欲しい程であり、現在でも彼の許に勧誘の手紙が度々来ている。

現在のレミリアの基礎を鍛えた人物であり、彼女が咲夜に教えている裁縫・料理・掃除・給仕は勿論、採掘・コンピューター関連の作業・魔法・錬金術・古文書解読・遺跡発掘・鍛冶・MSの操縦及び

MSを使った戦闘もカービィが鍛え上げた。
戦闘技術は超一流であり、レミリアは未だにカービィに勝てないでいる。

MSの操縦技術もレミリアに全てを教え込んだだけあり、超一流である（レベルはシン@本編クラス）。

性格は温厚そのもので子供達は勿論レミリアとフランも彼に懐き、アリア村の住人にも慕われている。

顔のモデルは『ガンダムアサルトサヴァイブ』のカスタムパイロットのデフォルト。

イメージC.Vは上記ゲームのカスタムパイロットのボイスナンバー9の及川 光博氏。

何故カービィが人の姿をしている理由は最後の記述参照。

博麗 魔理沙（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

元々は幻想郷第4大陸の出身だったが大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた霊夢、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた霊夢達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となった（咲夜が紅魔館に流れ着く1年前）。

見た物の動きをそのままラーニングするという特技を持っている。性格はまさに活発の一言で、普段から霊夢達を連れまわしていることが多い。

元々学校に興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって霊夢達と共に入学することになる。

憧れの人物は幻想郷第3大陸統治者レミリア・スカーレット。

博麗 霊夢（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となつた。

特にこれといった特技は無いが自身が持つ霊力は並みの妖怪を軽く吹き飛ばせるほどの霊力の持ち主。

性格はめんどくさがり屋だがノリはいいため魔理沙とよく行動している。一見強気に見えがちだが孤独になる事をひどく恐れている。魔理沙と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって魔理沙達と共に入学することになる。

憧れの人物は博麗孤児院院長ステッペン・ウルフ（この名前自体は偽名だが）。

博麗 妖夢（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の

生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となった。

刀剣問屋の一人娘だったため刀剣の選別が得意。

性格は温厚なのだが周囲に流されてしまいがち。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって霊夢達と共に入学することになる。

憧れの人物は幻想郷の中でも剣聖と呼ばれているカービィ（自分を育ててくれた人物が本人だとは知らない）。

尚、原作と違って人間である。

博麗 アリス（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となった。手先が器用で人形サイズの服なら製作可能である。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって魔理沙達と共に入学することになる。

性格は甘えん坊で寂しがり屋。

宝物はカービィに作ってもらった『上海人形』。

憧れの人物は紅魔館の整備士アストナージ・メッソ。

尚、原作とは違って人間である。

博麗 パチュリー（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地…幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となつた。魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによつて魔理沙達と共に入学することになる。

運動は苦手だがその分学力と魔力は非常に高い。

性格は物静かで引っこみ思案だが言う時は言う。

憧れの人物はGシステム開発者リバジ・ザース。

尚、原作とは違って人間であり、喘息は患っていない。

博麗 天子（14歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地…幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で自分以外が力尽き、それでも人がいる場所を求めて彷徨っていた所にたまたま近くを散策していたレミリアとカービィに

保護され、『博麗孤児院』の一員となった。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミアによって魔理沙達と共に入学することになる。

学力・戦闘能力・魔術は非常に高く、家事全般などは一通りできる。スタイルは本編に登場する早苗レベル。

性格は真面目そのものでよくトラブルを起こす魔理沙達に頭を悩ませている。

彼女がいないと魔理沙達のストッパー役が無くなる為割と重要な役割を持っている。

憧れの人物は博麗孤児院院長ステッペン・ウルフ（本名はもう知っている）。

原作と同じく天人ではあるが家族と一緒に天人になった直後、永遠亭の攻撃で天子を除く全員が死亡している。

リバジ・ザース（享年45歳）

カービィと共に万能創造システム『Gシステム』を作った人物。

永遠亭の勢力によるテロによって命を落とした

【兵器・施設】

シャイニングガンダム（GF13-017NJ）

美鈴が駆るMF。

紅魔館の近くにある湖付近に中破して放棄されていた本機をレミアが回収、アストナージら紅魔館のMS整備士の手によって修復された。

大半の機能は修復できたが機体を動かす肝であるモビルトレスシステムの損傷が酷く、代用としてレミアのガンダムと同じ規格のコックピットに換装された。

その正体はGガンダムに登場したシャイニングガンダムそのもの。

放棄された際に幻想入りし、妖精達の悪戯でモビルトールシステムが破壊されてしまった。

装甲素材 ガンダリウム合金スーパーセラミック複合材

レアメタル・ハイブリッド多層材

MSの骨格 不明：恐らくはムーバブルフレームに準ずる物

コックピット形式 コアブロックシステムを採用

エンジン アーティフィシャル・オーラ・ジェネレーター（人工気力発生装置）

備考 コックピットがレミリアのガンダムと同じ規格

Gシステム

万能創造システム。

カービィとリバジ・ザースが開発した万能創造システム。

エネルギーと設計図さえあればどのような物も創造可能だという夢のシステム。

開発されたきっかけはカービィの持っていたコピー能力とヘルパーを生み出す能力を見て科学的に再現をしようとしたのがきっかけとなっている。

このシステムによって当時の幻想郷で問題となっていた食糧問題を解決されたが永遠亭に所属している兎の工作によってシステムが暴走する。

結果、幻想郷の守りの要であった博麗大結界が崩壊し、それによって幻想郷は8つに分かれ、それぞれの大陸が形成された（幻想郷巨大化事件）。

その後、事件のきっかけになったGシステム1番機の機能は全て封印され、設計図もカービィとリバジの許で管理されていたが永遠亭に所属している兎のテロによって設計図を奪われ、全部で7機量産された。

そして、永遠亭をはじめとする勢力はこのGシステムを使用してM

Sを大量に量産、幻想郷第3大陸をめぐって大陸間で戦争を始める（幻想郷大陸争奪戦争）。

が、Gシステムの場所を突き止めたカービィによって全機封印される。

一時的に封印を解いて機能を使用可能にするカードをカービィが所持していたがレミリアに譲渡される。

【勢力】

幻想郷第4大陸

魔理沙達の故郷。

幻想郷第3大陸と同様に自然と鉱物資源に恵まれていたが幻想郷第3大陸程の戦力が無かった為一度占領されるが突如現れた白亜のMSによって永遠亭は敗走、その後は永遠亭のレジスタンスのリーダーであった上白沢 慧音によって統治される。

統治者は上白沢 慧音。

アーリア村

幻想郷第3大陸の南端にある小さな村。

レミリア、フラン、カービィ等の人物がこの村に流れ着いている。自然豊かな村で凶暴なモンスターも住んでおらず、人妖が共存している幻想郷では珍しい村。

レミリア達の育ち故郷『博麗孤児院』もこの村にある。

村長はレジス。

博麗孤児院

アーリア村にある孤児院。

レミリア、フラン、魔理沙、霊夢、妖夢、アリス、パチュリー、天子が住んでいた。

ここに住んでいる者・住んでいた者は”博麗”と名乗っているがレミリアとフランは自分の名前で博麗孤児院が襲撃されることを懸念

して、スカーレット姓を名乗っている。

戦争によって住む場所を追われた子供達がこの孤児院に住んでおり、レミリアもまたこの孤児院でカービィに育てられた。

カービィ1人できりもりされているが孤児達の中でも天子をはじめとする子供達が率先して手伝うことも多い。

実はこの地下にMS一機分のハンガーがある。

名前の由来はここで初めての孤児となった者が博麗の巫女だったため。

院長はステッペン・ウルフ（カービィ）。

博麗神社

幻想郷巨大化事件が起こる前に存在していた神社。

幻想郷巨大化事件によって消滅してしまった。

尚、当時の博麗の巫女はカービィの所に遊びに行っていた為無事であった。

【事件・戦争】

幻想郷巨大化事件（幻想歴元年）

Gシステムの暴走によって起こった事件。

幻想郷が八雲亭周辺・霧の湖・人里周辺・妖怪の山・迷いの竹林・博麗神社周辺・魔法の森・地底が8つの島に別れ、その島をベースに各大陸が創造された。

それぞれの大陸を紫が訪れた順に第1大陸・第2大陸と名前を決められた。

皮肉なことにこの事件で幻想郷の抱えていた居住スペースの確保が解決された。

幻想郷大陸争奪戦争（幻想歴54年～幻想歴454年）

幻想郷第3大陸と幻想郷第4大陸を除くすべての大陸の勢力が、当

時統治者がいなかった幻想郷第3大陸をめぐって400年も行われた戦争。

戦況は終始MSを大量に量産していた永遠亭が優勢だったがレミリアの率いる義勇団のMS隊によって幻想郷第3大陸を制圧していたMS隊が全滅、これを契機に各地でも敗走が続き、更にMS量産の要であったGシステムをカービィによって全て封印され、結果幻想郷第3大陸と戦争に参加していなかった幻想郷第4大陸を除く全ての勢力が痛み分けという形で終結した。

しかし、それは水面下のことで未だに小さな小競り合いが続いており、幻想郷第4大陸はその余波で一度永遠亭に占領されていた。

【その他】

幻想歴

幻想郷での暦。

元年はGシステムの暴走によって起こった幻想郷巨大化事件が起こった年になっている。

尚、咲夜が紅魔館に流れ着いた年は幻想歴489年である。

カービィが人の姿になった理由

ベースはアニメ後の設定。

ホップスターに起こっていたトラブルを解決していたが太陽と月の喧嘩を止める為に機械惑星ノヴァを起動させるがマルクの策略によって負傷する。

が、負傷を押してマルクと戦い、相打ちになりながらもマルクの野望を阻止した。

その時に幻想入りし、八雲 紫に発見されるがこの時にはすでに致命傷を負っており紫はカービィを助ける為に彼の種族の境界を操作、結果カービィは九死に一生を得るが人の姿となってしまう、更には元の姿に戻れなくなった。

この件で紫はカービイに対して罪悪感を抱いていたがカービイ自身は紫を命の恩人として感謝している。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介3 + α (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は外伝3話に登場したキャラの設定とでてきた単語の説明となつています。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集

1 ページ目

Chat 1「よろしくおねがいします」 咲夜がのぼせた翌日

紅魔館2階東エリアの廊下

咲夜@あたりを見回している

「ここはほんとうにひろいです」

????

「うん？お嬢ちゃん。こんな所で何をしているんだい？」

咲夜@声に気がつく

「誰ですか？」

????

「誰かに名前を聞く時には自分から名乗れって教わんなかったのかい？」

咲夜

「あつ。ごめんなさい！サクヤはいざよい さくやと申します！」

????

「おつ。やればできるじゃないかい。私はケーラ・スウ。この紅魔館で兵士をしている」

咲夜@深々と頭を下げる

「よろしくおねがいします！」

ケーラ

「ああ。よろしく！」

Chat 2「もんばんってもののまえでねるし」と？ 咲夜がのぼせてから10日後

上海アリス喫茶

茶店

咲夜@美鈴に声を掛ける

「ねえねえ、めいりんおねえちゃん」

美鈴@紅茶を飲んでいる

「どうしたの咲夜ちゃん？」

咲夜

「めいりんおねえちゃんっていつももののまえてねているよね？」

美鈴@紅茶を吹きかける

「ブツ！？な、何を言っているのかな？」

咲夜

「だってめいりんおねえちゃんいつももののまえてねてるんだもん」

美鈴@どう答えていいか迷っている

「え、ええっと…」

レミリア@何処からともなく現れる

「それはだな咲夜」

美鈴@驚く

「うわ！お嬢様！？何処から入って来たんですか！？」

レミリア@スル―

「実は美鈴が寝ているように見えるのはそれだけ外敵が来ていないのだ」

咲夜

「そうなんですか？」

レミリア

「ああ。それに美鈴と会った時も起きていただろ？」

咲夜@美鈴に初めて会った時のことを思い出す

「あつ。そういえば…」

レミリア

「詳しく説明すると長くなるから簡単に言つとだな。美鈴は常にリーダーであたりを監視しているという事だ」

咲夜

「めいりんおねえちゃん。いつもねてばかりといっでごめんなさい」
美鈴

「いえいえ。気にしなくてもいいですよ！」

2 ページ目

Chat 3 「ガンダムへの憧れ」 ガンダムに乗った後

西にある港町

咲夜

「レミリアさま」

レミリア@振り返る

「どうした咲夜？」

咲夜@目を輝かせている

「サクヤもガンダムがほしいです！」

レミリア

「ふむ…。考えておこう」

咲夜

「ホントですか!？」

レミリア

「ああ。私はお前には嘘をつかん」

咲夜@大喜び

「やったあ!!」

レミリア@真面目に考えている

「（咲夜の戦闘パターンはまだ分かっているからな…」

ガンダムを建造するのは戦争訓練も入ってくる13歳あたりだな）」

Chat 4 「レミリアは人気者？」 ガンダムに乗った後

東にある交易都市

レミリア

「ふむ。ここの視察はここまでだな」

咲夜@あたり一面を見回している

「うわぁ……」

市民A

「む？あれは！？」

市民B

「レミリア様だ！」

市民C@高級な布をレミリアに渡す

「レミリア様！これは私の気持ちです！受け取って下さい！」

レミリア@人の厚意は基本的に受け取る

「む。すまん」

市民D@オリハルコンをレミリアに渡す

「レミリア様！これは私の気持ちです！受け取って下さい！」

1時間後

レミリア@貰った物をコンテナに入れている

「ふむ。ここの民は私を慕ってくれているようだなによりだ」

咲夜

「（レミリアさまって本当に色んな人にすかれているなあ……）」

Chat5 「はじめまして」 フランが帰ってきてから2日後

レミリアの私室

咲夜@アストナージから頼まれごとをされてきた

「レミリアさまはどこにいるんだろ？」

フラン@レミリアに用事があった

「うん？君は…」

咲夜@フランに気がつく

「サクヤはいざよい さくやです」

フラン

「私はフランドール・スカーレット。今日からここで医者をさせてもらうの」

咲夜@レミリアと同じスカーレット姓だということに気がつく

「スカーレット？となるとレミリアさまの？」

フラン

「うん。妹だよ。これからよろしくお願いね？」

咲夜

「はい！」

3 ページ目

Chat 6 「鬼ごっこ」 咲夜達が外に遊びに行った後

アーリア村公園

魔理沙

「それじゃあ何してあそぶ？」

霊夢

「オニゴッコ！」

霊夢と天子を除く子供達

「「「「「さんせー！！」「」「」「」

咲夜

「じゃあサクヤが鬼をするね！」

天子@引率

「あまり遠くに行くんじゃないわよー！」

子供達

「「「「「はい」「」「」「」

5分後

妖夢@息絶え絶え

「うつ…」

アリス@同上

「ぜえぜえ…」

パチュリー@同上

「むきゅー…」

霊夢@同上

「はあはあ…」

咲夜@余裕

「やったあ！サクヤのかちだね！！」

魔理沙@余裕

「チクシヨー！負けたー！！」

咲夜と魔理沙を除く子供達

「……まりさはともかくさくやは何でへいきなの！？」「」「」

Chat7 「夜更かし」 天子が寝た後

紅魔館2階東エリア 咲夜の部屋

魔理沙@天子の様子を見る

「よし。てんし姉ちゃんはねたな」

霊夢

「じゃあ何する？」

パチュリー

「トランプしたい…」

アリス

「わたしもー」

咲夜

「じゃあババぬきだね」

1時間後

アリス@ブービー

「ぜんぶそろったー！」

パチュリー@ビリ

「むきゅー……」

魔理沙@3位

「つぎは何する？」

霊夢@4位

「ウノってゲームしない？」

妖夢@1位

「それさんせー」

咲夜@2位

「じゃあ取ってくるね」

翌日

咲夜@起きる

「う、うつん……」

魔理沙@同上

「おはよー……」

霊夢@顔を青ざめる

「おは……ゲエッ!？」

咲夜

「どうしたのれいむ？」

霊夢@咲夜達に時計を見せる

「今8時20分！」

霊夢を除く子供達

「……」

子供達

「「「「「ちこくだ――！！！！！！」」」」

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は外伝のスクリーンチャット集です。

次からは本編になります。が、投下が遅くなるかもしれません。（ヨイ
では（・・・）ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」

私は目の前の光景が信じられなかった

普段のシンは冷静であんな事をする人じゃない

だけどさっきのシンは違った

まるで家族の仇を見るような目っていうのかな？

私にはよくわからないけどそんな目をしていた

私はシンが目の前の人の名前を叫ぶまで気がつかなかった

シンの家族同然の人を殺した組織

そしてギン姉とお父さんが所属している時空管理局の精鋭部隊

古代遺物管理部 機動六課隊長 八神 はやて

なぜこの人がこの場所にいるのか分からなかった

でも…

はやて

「それでは依頼の説明に入りますけど大丈夫ですか？」

スバル

「は、はい。大丈夫です」

例えばどんな人が敵に回ったとしても

私はシンの隣にずっと居たいんだ…

例えばその果てに私が死んだとしても…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」

シンとはやてのトラブルから5分後

クラッド6 リトルウィング管轄区 リトルウィング事務所

はやてとシンを除く全員が再びシンが暴走することを恐れて冷や冷やした雰囲気から依頼内容の説明が始まった。

はやて

「それでは、依頼内容を説明します」

はやては事務所にある巨大ディスプレイを（チェルシーの座っている席の右隣にある画面）起動させる。

はやて

「依頼主はインヘルト社。皆さんは御存じだと思いますが亜空間航行のプロジェクトを進めている企業です」

はやてがそう言うとディスプレイに巨大な建造物が表示され、その建造物が亜空間航行実験で使用される物だと表示される。

はやて

「尚、このプロジェクトはガーディアンズ、同盟軍、グラール教団、各惑星の企業の出資を受けて実施されているこのグラールの未来が懸かった一大プロジェクトです」

クラウチ

「確かにウチの親会社のスカイクラッド社も出資しているからな」

はやての説明にクラウチも補足を入れるとディスプレイにどのような場所がスポンサーを務めているかが表示される。

はやて

「そこで今回の依頼ですが現在亜空間航行の実験を行っている施設に何者かが侵入し、侵入者自体は撃退できました」

シン

「（あいつは…！？）」

ディスプレイには何者かの人影が映し出され、その上にアンノウンと表示される。

その人影を見たシンは苦々しげな表情をしていることに気が付き、スバルが声を掛けようと思ったがシンは目で気にするなと伝え、はやては説明を続けた。

はやて

「しかし、侵入者が放ったウイルスによってガードマシナリーが暴走、現在は職員が鎮静化を図っていますがどの方法もうまくいかず、現在は様子見の状態です」

レイ

「ウイルスだと？」

はやて

「どうかしましたか？」

レイ

「いや。なんでもない。説明を続けてほしい」

はやて

「わかりました」

ディスプレイに現在暴走しているマシナリーの情報が表示され、はやての説明にあったウイルスにレイは疑問を抱くがはやてに説明を促した。

はやて

「この施設には亜空間航行の研究に欠かすことのできない資料や機材が多数あり、このままだと亜空間航行の完成までに致命的な遅延が発生してしまいます」

はやての言葉の後にこの施設にある資料や機材の情報がディスプレイに表示され、このうちのどれかが欠けてしまっただけで亜空間航行の研究に致命的な遅延が発生すると説明される。

はやて

「なので暴走しているマシナリーの鎮静または破壊が今回の依頼内容となっています」

はやてが説明居ている途中に施設内のマップと暴走しているマシナリーを意味する赤い三角が表示され、暴走しているマシナリーに新しく表示された青い三角が接触して赤い三角が消えていく動きが表示され、依頼内容が表示された。

エミリア

「うーん…」

はやて

「どうかしましたか？」

エミリア

「え、えーと…」

はやて

「はやてで構いませんよ」

エミリア

「じゃあはやてさん。その施設で稼働しているマシナリーの中にグリナビートタイプ以上の大きさマシナリーってありますか？」

エミリアの指摘にははやてとはあるマシナリーが試験的に稼働している話をシズルから聞いていた。
そのマシナリーの名は

はやて

「レオルバディア！確かにグリナビートタイプ以上の大きさを誇る巨大マシナリーが試験的に稼働していた筈です」

レイ

「やはりか。ただ下のマシナリーのウイルスを除去してもそのレオルバディアから送られてくる情報の中にウイルスが混じっているのだろう」

はやて

「成程！では改めて依頼内容を説明します」

暴走している巨大マシナリーの名はレオルバディア。

現在稼働しているマシナリーの中でも有数の巨体を持つマシナリーである。

それが原因であることに気がついたはやては改めて依頼内容の説明を始めた。

はやて

「改めて依頼内容を説明します」

はやての操作によってディスプレイに映されているマップの最深部に巨大な円盤に四肢を生やしたようなマシナリーが映し出される。

はやて

「先程エミリアさんの指摘にあった通り、この施設ではマシナリーの制御を担当する巨大マシナリーが現在試験稼働をしています」
スバル

「ちなみに大きさは？」

スバルははやてにレオルバディアの大きさを尋ねるとディスプレイにレオルバディアの詳細データが表示された。

リオン

「大きさは直径20m。高さは8mか」

早苗

「あの…」

はやて

「どうかしましたか？」

はやては早苗が何か言いたそうな表情をしていたので尋ねると早苗は

早苗

「300mm大口径レーザーキャノンって…。このマシナリーはあくまでマシナリー制御の為のマシナリーですよね？」

エミリア

「それに機雷射出機能にナパーム弾搭載ってどう考えても過剰武装じゃん…」

はやて

「恐らくマシナリーを制御するマシナリーが弱かったら駄目だという理念で作られているのだと思います」

早苗とエミリアのツツコミにはやても冷や汗をかきながら自分の推測を述べているとそこにはやてにとつては意外な人物から助け船が出た。

シン

「指揮官機だから強力な武装をされているのは当たり前だろ？続きを」

はやて

「え？あつ、はい！」

シンからの助け船のおかげで助かったはやては依頼内容の説明を再開した。

はやて

「おそらく例の侵入者はこのレオルバディアにウイルスを仕込み、レオルバディアの命令の中にウイルスを混ぜさせることで今回のマシナリーの暴走が起きたのだと思われます」

ディスプレイにアンノウンが映し出され、アンノウンとレオルバディアが接触した後他のマシナリーが暴走していく状態が映し出される。

はやて

「そこで今回はこの施設の中に入る許可を得たので施設の中に侵入今回の暴走事件の原因となっているレオルバディアを破壊して下さい」

はやての説明の後青い三角が再びマップの中に現れてレオルバディアに接触、接触した後レオルバディアを示している巨大な赤い三角が消えた。

はやて

「このレオルバディアは4本足で稼働していますが構造上の問題で弱くなっており、転倒した際、レオルバディアのコアが露出するという欠点があります」

はやてがレオルバディアの弱点をディスプレイに表示させるとレオルバディアの4本の足とレオルバディアの中央にコアが表示される。

リオン

「最早欠点というより欠陥だな」

はやて

「コアにある程度のダメージが与えられればレオルバディアは停止します。皆さんの奮闘に期待します」

リオンの辛口コメントの後はやてが依頼内容の説明が終わった。

Sideシン

依頼内容説明から1時間後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

依頼内容の説明を聞いた後シンはやてを自分の部屋に連れてきていた。

理由は何故ここにいるのか？

そしてなによりもはやてが言っていた『あの人』という人物が気になる。

シンはやてがこのグラールに害を及ばさないかの確認の為に彼女を自分の部屋に連れてきていた。

シン

「それで、なぜ機動六課の隊長と守護獣がこんな所に来ている？」

はやて

「それは…」

カムハーン

『それについては我が説明しよう』

はやてはまさか『私も貴方と同類になりました』と自分で口に出すことを躊躇っているとシンにとって懐かしい人物の声が聞こえた。

はやて

「ちよっ！？カムハーンさん一体何処から！？」

シン

「カムハーン！？確かにミカは同朋って言うていたけどお前の事だったのか！？」

カムハーン@はやてはスルー

『そのとおりだ。それとこの娘は私の宿主に好いておつてな』

カムハーンは顔をニヤニヤさせながらはやてを見るとはやての顔は完熟したトマトのように真っ赤になっていた。

シン

「…どうせ管理局のやり方に不満を感じて脱走。他のヴォルケンリッターと散り散りになって行き倒れそうになった所をカムハーンの宿主に助けられてそのまま惚れたってところだろ？」

はやて

「ナゼバレタシ…」

カムハーン

『ついでに言うて脱走ついでに管理局が奪って保管してあった。サ

イコウオンドを盗んで次元犯罪者になった』

はやて

「モウヤメテーワタシノライフハ…」

次々と自分の隠していた秘密を暴かれて言葉も片言になっていたはやてにシンがトドメを刺した。

シン

「それでもってテクニクのディスクを持っていないからタダの杖程度にしか使えなかった…じゃないか？」

はやて

「コンナハズバー！！」

そしてはやては遂に倒れてしまった（精神的なダメージの意味で）。

シン

「…もしかして全部図星か？」

カムハーン

『うむ。全てお前の予想通りだ』

シン

「それで、ミカが【復活計画】のことを勘違いしているようだけど何かあったのか…？」

カムハーン

『それはだな…』

実はシンがミカと再会した時にある違和感を持っていた。

それは【復活計画】の内容の食い違いである。

シンの知っている【復活計画】とはかつてのシンの愛機であったあの機体を完全に復活させるという内容であり、現在カムハーンが行っている計画もこちらの方である。

しかし、ミカが語った【復活計画】とは今存在しているヒューマン・ニューマン・キャスト・ビーストにマガハラに住む魂達を憑依させるという内容であった。

カムハーンはその事を説明しようとしたら現在のカムハーンにとって最悪の客が来た。

エミリア

「うーす！シンに頼まれていた物は全部揃ったってスバル達が言ってたよー！ってそこにいる人は誰！？」

ミカ

『ッ！カムハーン！！』

エミリア

「え！？こいつがミカの言っていた！？」

ミカ

『はい！何としても彼の野望を阻止しなくては！』

カムハーン

『ぬ！？よりもよってこのタイミングか！？』

ミカ

『逃がしませんよカムハーン！！貴方の野望はここで阻止します！』

！』

はやて@起きた

「起きたと思ったらきわどい服着たお姉さんがカムハーンさんに襲いかかるうとしている！？」

状況は最悪だった。

カムハーンは逃げようとしても恐らくはやてがいらぬ疑いを掛けられてしまう。

しかし、カムハーンは武器を1つも持っていない。

さらに部屋としては広いが室内では狭すぎて自分の強みである人間離れた動きもできない。

それに対してミカは殺る気満々で彼女の宿主であるエミリアも戦闘態勢を取っている。

この状況でカムハーンに逃げ道はなかった。

が、ここでミカにとっては思わぬ介入が入る。

シン

「お前ら…。痴話喧嘩をするのは止めないけどここは俺の部屋だぞ

！」

ミカ

『しかしシン！このまま彼を放っておいては…』

シン@何かが切れた

「…おい。そこに座れ」

ミカ@不満げな視線をシンに向ける

『な、何を…』

シン@手に持っていたハリセンでミカの頭を思いっきり叩く
「なんだその目は!？」

普通精神体のミカには利かない筈だがシンの持っていたハリセンは正確にミカの頭に直撃し、ハリセンで叩いた時独特の軽快な音がシンの部屋に響き渡った。

ミカ@涙目

『なにも叩く事は無いじゃないですかあ…』

シン@SEED覚醒時の眼でミカを睨む

「何か言ったか？」

ミカ

『ナンデモアリマセン…』

シン

「カムハーン。ミカに本当の【復活計画】について教えてやってくれ…」

カムハーン

『う、うむ…』

太陽王説明中…

ミカ

『そんな…私が聞いていた内容とは違います』

シン

「カムハーンの話だとその時には時空管理局がここを狙っていたらしいから恐らくあいつらの策略だろ」

ミカ@顔を赤くする

『は、恥ずかしいです…』

エミリア@脱空気

「あとでレイ達にも謝っておかないと…」

カムハーン

『だがミカの知っている内容の方も実行に移されかけていた』

ミカ

『え？』

シン

「それを直前に俺が潰したけどな」

エミリア

「いつの間に!？」

ミカが知っている方の計画が実行に移されかけていたこととその計画は潰れ居ていることにエミリアとミカは目を点にしているとシンは説明を始めた。

シン

「もともとはあいつらが計画していたけれど当時その計画に注目した奴がいてな」

カムハーン

『それに勘付いたシンは今の時代に再びこのグラールに来訪し、その行方を追っていたのだ』

シン

「で、俺がレイ達と会うまでの間にその首謀者を潰しておいた」

シンの説明を聞いたミカは更に恥ずかしくなった。

自分の知っていた復活計画はシンと再会するまでもう潰されていたのだから。

シンはそんなミカをスルーしてエミリアが自分に伝えに来たことを聞いた。

シン

「それはそうとエミリア。もう準備は出来たのか？」

エミリア

「うん。明日にはもう出発できるよ！」

はやて@脱空気

「では向かう際に私とザフィーラも同行するで」

エミリア

「あれ？はやてさん。なんか口調が…」

シン

「こいつはこっちの口調が素だぞ」

はやて

「というわけでよろしく頼むで」

エミリア

「うん！」

その後シン達は明日の出発に備えて少し早い睡眠を取るのであった……。

第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は受諾編となっています。

この話以降はやてとカムハーンは共に行動するようになります。
次回はシンがはやてを連れている間のスバル達の話になります。
では(・・・)ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」準備編」

エミリアさんの洞察力の高さにはいつも驚かされます
そういえばシンさんが依頼内容を説明しに来た人…確かはやてさん
でしたっけ？

その人を自分の部屋に連れていきましてけど何かあったのでしょうか？

ザフィーラ

「…大丈夫か？」

早苗

「あつ！すみません！少し考え事をしてまして…」

ザフィーラ

「…無理はするな」

デймロス

『彼の言うとおりだ。あまり無茶をしてくれるなよ？』

早苗

「はい…」

とにかく私にできる事はリオンさん達と一緒に必要な物を買に行
くという事です！

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」準備編」

依頼内容を説明されてから1時間後

クラウド6 リトルウイング管轄区 ショッピングモール

シンがはやてを自分の部屋に連れてくる頃スバル達は依頼を遂行する時に必要となる物を買出しに来ていた。

エミリア

「まったく。一体あいつは何やってんのよ」

レイ

「確かに、昔のシンならありえたかもしれないが今のシンがあのような行動に出るのは珍しい」

レイとエミリア、口には出さないがリオン、早苗もシンがあのような行動を取ったことに不思議に思っていた。
リオン達はシンの過去の経歴に詳しくない。
だからこそシンの行動に違和感を覚えた。

しかし、シンが何の理由もなしに手を上げるような者ではないと知っている為、シンとはやてに何らかのトラブルがあったのだらうと推測し、現在同行しているザフィーラに何か心当たりが無いか尋ねた。

エミリア

「ねえザフィーラさん」

ザフィーラ

「なんだ？」

エミリア

「もしかしてシンの過去の経歴に関して何か知っているんじゃないですか？」

確かにザフィーラはシンの過去の経歴をある程度なら知っている。

しかし、ザフィーラはシンの経歴を話すべきか迷っていた。

ザフィーラははやてと同じくパルムで彷徨っていた。

体力には自信があった彼でも連戦に次ぐ連戦で疲弊し、あわやトド

メを刺されるかと思った直後にリトルウイングに所属しているバス
クに助けられ、タルカス・シティにある支部で保護されていた。
もし近くにはやてが居なかったら彼はこのままリトルウイングの一
員になっていた。

そして、はやてと合流し、リトルウイング管轄区に居たバスと再
会、彼からの頼みでできる限りエミリアや早苗にシヨックを与える
ような事を教えることを避けてくれと頼まれていたのである。

シンの過去の経歴とはいいたいけな少女をあつという間に闇に落とす
程のものなのである。

そこでザフィーラは

ザフィーラ

「すまん。俺も詳しい事は知らない」

エミリア

「そつかー…。シンがザフィーラさんにも叫んでいたからもしかし
たらって思ったんだけどねー…」

ザフィーラ

「（この少女…かなりの洞察力を持っているようだ…）」

知らないと答えたがエミリアの返答を聞いて自分が教えなくてもシ
ンの過去の経歴を探り当ててしまうのではないかと危惧していた。

レイ

「（この男…シンについて何か知っているな）」

リオン

「（奴の眼が少しシンの部屋の方に向いた…恐らくは何か知ってい
るのだろう…）」

そして、リオンとレイもまたザフィーラが何かを隠していると感じ
ていた。

だからリオンとレイのつた行動は

リオン

「これから消耗アイテムを買う班を分ける。僕とレイ、そしてザフィーラはトラップ系の購入、早苗、スバル、エミリアは回復アイテムの購入に回ってもらう」

スバル

「りょーかい。そっちはよろしくね!」

エミリア

「うー…。分かった…」

早苗

「それじゃあお先に失礼しますね」

班を2つに分けた。

恐らくザフィーラはあの3人に遠慮して事実を離さなかったのだろう。だから聞いても耐性のある自分達だけでも知っておいた方がいいと思います、この方法を取った。

班分けから5分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ショッピングモール

早苗達と距離が取れた事を確認したリオンは早速行動に入った。

リオン

「…さて貴様が知っていることを話してもらおう」

ザフィーラ

「何のことだ？」

レイ

「とぼけるな。貴方が何かを隠しているのはもう分かっている」

ザフィーラはリオンの問いにとぼけてみせたがもう既にばれてしま

っているのを確信にして観念することになった。

ザフィーラ

「確かに俺は奴の過去を知っている」

リオン

「エミリアには答えなかったのはシンの過去が決定的なものではないからだろうか？」

ザフィーラは覚悟を決めて口を開いた。

ザフィーラ

「奴はかつて俺と我が主が所属していた組織では『紅き翼を持つ男』と呼ばれていた」

レイ

「『紅き翼を持つ男』？」

ザフィーラ

「ここではまだ使用された形跡が確認できないが奴がデバイスを展開した時、その姿が紅い翼を背負った姿であったのが所以らしい」

リオン

「そして、話の内容を察するにシンはその組織と敵対し、その組織の構成員の多数が奴に殺された。だからその組織はシンを敵視している…違うか？」

ザフィーラは目の前に居る2人の少年の洞察力の高さに驚いた。

エミリアも自分の事を怪しがっていたが目の前の2人はすぐに看破してみせたのである。

そして何よりも少ない情報で真実の一手手前まで辿り着いたことにザフィーラは驚嘆していた。

ザフィーラ

「だいたいその解釈で合っている」

レイ

「更にいうと貴方達のかつての仲間がこのグルールで新たな火種を落とそうとしています」

ザフィーラ

「なに！？あいつらはもうここで行動しているのか！？」

ザフィーラは別の意味で驚いた。

自分達がこの世界に来たのは1週間前なのである。

まさか彼女達がここまで早く行動していたのはザフィーラにとって予想外であった。

ザフィーラ

「早くこの事を主に伝えなくては！」

ザフィーラは今にも行動を起こそうとしたがリオンに止められた。

ザフィーラ

「何故邪魔をする！？」

リオン

「おそらくお前の主も奴らが行動している事は知っている筈だ」
レイ

「例え知らなくてもシンの口から伝えられるでしょう…それに…」

ザフィーラ

「それに？」

レイ

「行くのは勝手ですが先に俺達の仕事をしてからにしましょう」
ザフィーラ

「む…。そつだな…」

ザフィーラは口実とはいえ自分達の役割を放棄するわけにはいかないと思い、リオンとレイの買い出しに付き合うのであった。

同刻

クラッド6 リトルウィング管轄区 ショッピングモール
リオンとレイがザフィーラに問いただしている頃スバル達は早々に
買い物を済ませ、カフェでおやつを食べていた。

エミリア

「ウマー」

スバル&ユート

「うーまーいーぞー！」

早苗

「あ。このプリン美味しい」

途中でユートも来た為、ユートはエミリアの奢りで早苗と同じプリ
ンの数倍の大きさがあるデカプリンを食べていたのだった。

班を分けてから1時間後

クラッド6 リトルウィング管轄区 中央部

買い出しを済ませたレイ達はこれからどうするべきか悩んでいた。
正直に言うところの事が無いのである。

シンが居ればこれから作戦を練る事が出来るのだがそのシンは絶賛
インヘルト社のメッセンジャーと『お話し』中である。

だからスバル達がシンを待っているのだがあまりにも遅すぎる為エ
ミリアが行くことになったのだがエミリアが行ってからもまったく
反応が無かったが1時間ぐらい過ぎたあたりにエミリアが返ってき
た。

スバル

「シンは何か言ってた？」

エミリア

「『明日に備えて今日はもう解散してくれ』だってさ」

リオン

「ふむ。確かに明日からはまた大きな依頼をするわけだから…」

早苗

「それじゃあもう寝に行きましょうか？」

エミリア

「おっけー」

シンからの伝言を聞いたスバル達は自分の体を休める為にそれぞれ
の部屋に戻っていったがレイはエミリアの後ろに居るミカに違和感
を持った。

レイ

「（顔が少しばかり赤くなっていた。おそらくエミリアが戻ってくる
のが遅かった理由はこれだな…）俺が気にすることではないか…」

リオン

「どうした？」

レイ

「いや。なんでもない」

リオン

「何でもないならいい。部屋に戻るぞ」

レイ

「ああ」

翌日

クラッド6 リトルウイング管轄区 マイシップ内

はやて

「それでは改めてよろしくお願いします」

ザフィーラ

「よろしく頼む」

早苗

「はい！よろしくお願いします！」

シン

「じゃあ出発するぞ」

スバル&エミリア

「おっけー」

リオン&リオン

「問題ない」

早苗

「はい！」

シンはマイシップの端末を操作して行き先をパルムのインヘルト社に設定した。

その後、シン達を乗せたマイシップはインヘルト社の亜空間実験場に向けて飛び立っていったのであった…。

第12話「レオルバディア破壊依頼〜準備編〜」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はシンがはやてにグラールに来ている理由を問いただしている間のリオン達の動きとなっています。

次回はレオルバディアに着くまでの話となります。

では（・・）ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」道中編」

私がデータだけで見た彼は極悪犯罪者というイメージがあった
でも実際会った時の彼のイメージはまったく違った

確かに最初は敵意を持って私に接してきた
でもそれはあの娘達がもうここで行動していて彼の仲間が実際に戦
闘したからだという

私が次元犯罪者になって隊長があの娘になった事を彼は知らなかった
だからあの時の反応は当然だったのかもしれない

カムハーン

「はやてよ。考え事でもしていたのか？」

はやて

「え？」

カムハーン

「そのような表情（顔）をしていれば嫌でも気がつく」

はやて

「私ってそんなに顔に出やすいん？」

とにかく今は私を受け入れてくれたあの人に恩返しせんとな！

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」道中編」

出発してから3時間後

パルム 亜空間実験場 入口

ここはインヘルト社が所有する亜空間実験場。

現在グラールで注目されている亜空間航行の研究、実験が行われている施設である。

普段ここは研究所の所員と亜空間航行を提唱したナツメ・シユウ、彼の息子であり、亜空間航行の技術を飛躍的に進めたシズル・シユウ、彼女の秘書を務めている八神 はやて以外は決して入る事が出来ない場所である。

シン達は現在暴走しているマシナリーを止める為にこの施設の奥で稼働している巨大マシナリー『レオルバディア』の起動停止、不可能な場合は破壊という依頼を受け、この施設の入り口に来ていた。

所員

「あ！はやてさん！その方が連絡で知らされていた方ですね？」
はやて

「ええ。マシナリーの暴走を止める為に私とこの人も通してもらってもええ？」

所員

「勿論です！この先にはグラールの未来が賭かっている亜空間航行の機材や資料が保管されています！どうかよろしくお願いします！」
シン

「わかりました。所員の皆さんは安全な所で待機しててください」
中に入る許可を得たシン達は各々の武装を展開しているとそこにオウカロドウを持ったはやてと素手？のザフィーラもその隊列に加わっていた。

スバル

「はやてさん！？戦闘できるんですか！？」
はやて

「失礼やな！こう見えても戦闘は出来るんやで？」
カムハーン

『何を言っている。お前の戦闘能力は私のサポートが無ければエミリアにも劣るのだぞ?』

スバル

「うわ!? 誰!？」

スバルははやてが戦闘に参加できるのか不安になっではやては口を尖らせながら大丈夫と答えたがそこに金髪の男がはやての背中からいきなり現れ、シンとエミリアを除く4人は思わず身構えた。

カムハーン@はやての天敵

『む。そうかこの者達は私の事を知らなかったな。私の名はカムハーン。かつて太陽王と呼ばれていた者だ』

早苗

「カムハーンって!? 確か復活計画でこのグラールを恐怖に陥れよう…」

エミリア

「あーえーと…その事なんだけど…」

少女説明中…

レイ

「つまりミカの言っていた計画は実は別の者が計画していてその計画はシンが潰したという事か?」

カムハーン

『その解釈で合っているぞ』

カムハーンのいきなりの登場に驚いたスバル達だったがエミリアの説明でミカの勘違いであった事が暴露された。

リオン

「まったく。次は無いからな？」

ミカ

『はい…』

レイ

「まあこの話はここまでにして。先程言っていた『サポートが無ければ』とはどういう意味ですか？」

リオンはミカに小言を言われてミカは赤面し、レイはカムハーンが最初に言った言葉が気になってカムハーンに尋ねた。

カムハーン

『はやての魔力はバカみたいな保有量を持っているが動きに関してはミカのサポートが無いエミリアよりも遥かに劣るのだ』

リオン@ドン引き

「エミリア以下…だと…？」

カムハーン

『そこで我がサポートに回ることこいつの動きをお前達に着いていけるように身体能力を跳ね上げているのだ』

リオンは現在戦闘能力が最弱のエミリアにも遥かに劣ることにドン引きした。

そして早苗はある事に気がついた。

早苗

「身体能力を跳ね上げるって…使用した後のはやてさんは大丈夫なんですか！？」

カムハーン

『問題ない』

早苗が気になったことそれはエミリアよりも遥かに劣る身体能力を

自分達の動きについていかせるという事ははやての肉体を無理矢理強化することである。

普通いきなりそこまで強化したら後遺症が必ず出る。

しかし、カムハーンはそのような心配は無いと答えた。

カムハーン

『我が施すサポートというものは肉体を強化するのではなくこいつのバカみたいな魔力を一時的に肉体の強化に回すことだ』

はやて

「魔力を使つての肉体の強化はしょっちゅうやってるからその後遺症もないってことや」

はやてはえっへんと胸を張るがそこにリオンの痛烈なツツコミが入った。

リオン

「つまりはカムハーンのサポートが無ければただの役立たずだな」

はやて

「あべし!!」

シン@スルー

「さっさと行くぞ」

シンははやてが精神的ダメージを受けているのをスルーして奥へ進み始め、スバル達もシンを追った。

コントから1時間後

パルム 亜空間実験場 連絡通路

ここに来るまで多数のマシナリーに遭遇したシン達はマシナリーを破壊して先へ進むとそこには見慣れないシルエットがシン達の眼に映った。

シン

「ガードマシナリー以外の奴が居るな」

はやて

「あれはアスタークという原生生物や見かけによらず動きは素早いから注意してや」

はやては見慣れないシルエットの正体：アスタークの説明を聞いた後早苗はいきなり晶術の詠唱を始めた。

早苗

「『風よ…竜巻となりて抗う者を吹き飛ばせ』…サイクロン!」

アスターク

「!?!?!?!」

アスタークはいきなり自分が宙に浮いていることに混乱し、早苗は目でリオンに合図を送った。

リオン

「飛燕連斬!」

アスターク

「ヒデブ」

リオンは早苗の作った隙を逃がさず十八番の剣技でアスタークを三枚下ろしにした。

はやて

「……………(。D)」

早苗

「動きが素早いなら相手の動きを止めればいいんです!」

リオン

「本来なら怒る所だが今回はうまくいったからよしとしよう」

はやては目の前の状況が信じられなかった。

アスタークは見た目とは裏腹にかなりのスピードを持つ。

しかし、早苗は小規模な竜巻を発生させることで無理矢理アスタークから動く手段を奪い、その隙にリオンがトドメを刺してみせたのだ驚かないわけが無い。

シン

「よし、アスタークの処理は2人に任せるけどいいか？」

早苗

「はい！」

リオン

「問題ない」

その後、シン達はレオルバディアが稼働しているエリアまで何事もなく進むことができた。

シン

「この奥でレオルバディアが暴走しているんだな」

はやて

「ええ。エミリアちゃんの推測が正しかったらレオルバディアの機能を停止させればマシナリーの暴走が止まる筈や」

レイ

「だが、うまく進めるのはここまでのようだ」

しかしそれを快く思わない者達がシン達の進路を塞いでいた。

ティアナ

「ここは通さないわよ!」

エリオ・キャロ

「フェイトさんの仇を取らせてもらいます!」

シン

「大体アンノウンが誰かは想像できたが本当にあたっているとは…マシナリーは俺達がやるからレイは2人のサポートを頼む!」

レイ

「わかった」

ザフィーラ

「……………」

はやて

「……………」

進路をふさぐ者…それはティアナ達管理局員と恐らくローグスあたりから奪ったであろうマシナリーの大軍であった。

シンは粗方予想がついていたがまさかここまで当たっているとは思わず溜息をつき、はやてとザフィーらをレイに任せマシナリー達の処理に向かっていった。

ティアナ

「はやて隊長…あなたもそちら側に回るんですね?」
はやて

「そうや。今の管理局は何もおかしすぎる!」

ティアナ

「なら貴方を逮捕してなのは隊長に引き渡します!」

ティアナとはやてが臨戦態勢を取っている頃ザフィーラもまたエリオとキャロ相手に対峙していた。

エリオ

「ザフィーラさん…貴方も何ですか？」

キヤロ

「ウソですよ？ザフィーラさんはそんな事をする人じゃありませんよね！？」

ザフィーラ

「俺は主はやての守護をする。それが俺の役目だ」

エリオ

「そんな！？」

キヤロ

「なんでですか！？なんで『紅き翼を持つ男』なんかの味方をするんですか！？」

ザフィーラ

「この地でできた友との約束だ。少なくともこの依頼までは行動を共にしている少女達を守る約束をしているのでな」

エリオ

「じゃあその依頼が終わったら…」

エリオは一縷の望みを掛けてザフィーラを説得しようとした。だが、エリオに帰ってきた答えはNOであった。

ザフィーラ

「その依頼はお前達がこの世界から手を引くまでだ。それでも自分の意見を通したいのなら。俺に勝って見せろ」

エリオは自分の希望が穿かなく砕け散ったことを思い知り、思わず膝を地面に着いてしまった。

そして、その隙を逃すレイではなかった。

エリオ

「え…？」

レイ

「ここは戦場だ。戦場で隙を見せると言う事は死を意味する」

ザフィーラ

「レイ!？」

レイに撃ち抜かれたエリオはそのまま床に倒れ、ザフィーラはレイを非難しようとしたが先にレイが答えた。

レイ

「スタンモードで気絶させました。今は動けません。後遺症はありません。それに…」

ザフィーラ

「それに？」

キャラ@気絶

「きゃう!？」

レイはエリオが倒れてパニック状態になっていたキャラも気絶させた。

レイ

「話をするのならここではなくても構わないでしょう?彼らには時間があるのですから」

ザフィーラ

「…そうだな。一応気がついて暴れられたら厄介だ。俺が拘束しておこう」

ザフィーラは鎖を召喚すると2人をその鎖で巻き、拘束した。

ザフィーラ

「主達が戦っている。いくぞ」

レイ

「了解」

一方はやてとティアナの戦闘は終始はやてが圧倒していた。

ティアナ

「クッ！まさかデバイスなしでここまで動けるなんて！」

はやて

「失礼やなあこれでもこの世界に来てから鍛えているんやで？」

ティアナ

「クロスファイアー！シュー……」

はやて

「貰ったで！」

ティアナ

「しまっ……きゃああああああ！！」

ティアナは自分達の隊長であつた時と段違いの動きを見せているはやてに動揺を隠せなかった。

そのため誘導性の強い魔法弾を撃とうとしたがはやてのはなったテクニク……サ・ゾンデがティアナに直撃し、気絶した。

シン@彼女達が呼び出したマシナリーを殲滅していた

「そつちも終わったようだな」

スバル@同上

「疲れた……」

リオン@同上

「奴らを自爆させずに倒すのも一苦労だな」

早苗@同上

「必ず浮いた状態で倒さないと絶対自爆しますからね……」

エミリア@マシナリーの行動パターンを予測してシン達のサポート

をしていた

「早苗のサイクロンが無かったらもつと大変だったかも…」

レイ

「どうやらそちらも片付いたようだな」

敵を殲滅シン達は改めてレオルバディアが稼働しているエリアに続く道を見た。

シン

「彼女達は？」

レイ

「ああ。3人とも捕えて…」

ティアナ@両脇に気絶したエリオとキャロを抱えている

「次こそは勝ってみせるわ！」

リオン

「な！まだ動けたのか！？」

シンはザフィーラ達が捕えた3人を見ようとしたりすぐに復帰したティアナが2人を抱えて逃走していくのが見えた。

レイ

「逃がしたか…」

はやて

「しまった。ティアナにバインド掛ければ…」

カムハーン

『今のお前では満足にバインドなど展開できんだろうが』
はやて

「オウフ」

シン

「あいつらはまた今度相手をすればいい。それよりも今は暴走して

いるレオルバディアを止めるぞ！」

リオン・レイ・ザフィーラ

「「「わかった」」」

スバル&エミリア

「「おっけー！」」

早苗

「はい！」

はやて

「そっやな！今は暴走しているレオルバディアをとめんとあかん
な！」

シン達はレオルバディアが稼働しているエリアへ駆けていった。
そこが戦場になっているとは知らずに…。

第12話「レオルバディア破壊依頼」道中編」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は道中編になりました。

ティアナ達とも戦闘しましたが本命の戦闘は奥にいますので戦闘シーンが少なくなっていました。

さて次回はみんなのトラウマが登場します。

では（．．）ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」ボス戦？編」

僕達はインヘルト社の依頼を遂行させる為にレオルバディアが稼働しているエリアに続いている通路を走っていた
ここまでにある程度の障害はあったが何も問題は無かった
しかし、どこか嫌な予感を感じる

早苗

「リオンさん？大丈夫ですか？」

リオン

「問題ない。それよりもそろそろレオルバディアが稼働しているエリアに着くぞ」

この感じはかつて2回目の旅をしていた時に度々僕達に襲いかかってきた『奴』の気配だ

もし再び奴と相見える事になればこの施設も無事である保証は無い…

その時『奴』の雄叫びがこちらにまで轟いた

??????

「ぶるあああああああ！！！！！！」

どうやら僕は再び奴と戦う事を覚悟しなければならないな…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」ボス戦？編」

ティアナ達との戦闘から10分後

パルム 亜空間実験場 最深部

最深部に着いたシン達はここに来るまでに聞こえた雄叫びの正体を捜していた。

そして、その正体はすぐに見つかった。

??????

「ぶるあああああ!!!!」

なのは

「何なのコイツ!? いきなり現れたと思ったら私達に攻撃を仕掛けてきて!」

手に斧を持っている清掃員姿の男がなのは達管理局の者達を攻撃していたのである。

??????

「縮こまってんじゃねえ!!」

管理局員 A

「う、うわあああ!!!!」

管理局員 B

「じよ、冗談じゃねえ! 俺は逃げるぞ!!」
??????

「漢に後退の二文字はねえ!!」

管理局員 A B

「ふぎやああ!!!!」

目の前で行われていたのは1対多数のリンチではなくたった1人による虐殺行為であった。

その光景を見てしまったスバルと早苗、エミリアは腰を抜き、レイは冷や汗を流し、リオンはシャルティエを握る力を強めた。

そして、シンはデバイスを手に取り、戦闘に参加しようとした所を

はやてに止められた。

シン

「どういっつもりだ？」

シンはやてに真意を尋ねるとはやてはリオンとソーディアン達にとって最も衝撃的な告白をした。

はやて

「あの人はバルバトス・ゲーディアさん。ここで清掃員をしている人です」

リオン

「なんだと!？」

シャルティエ

「ええええええええええ!？」

ディムロス

「奴が清掃員だと!？」

クレメンテ

「……………今まで山のような驚きをしていたがこれはその中でも断トツで驚いたわい……」

ハロルド

「ありえん（笑）」

早苗@復帰した

「つまりは私達の味方なんですね」

ザフィーラ

「そういうことだ。だがこの調子だとレオルバディアは……」

レオルバディア@大破

『モウツカレタヨパトラッシュ……』

早苗

「うわあ……」

レオルバディアは既に大破し、残るは今回の主犯である彼女達だけを見た限りだとまだ500人ばかりいる。

シン

「……………やっぱり俺も行ってくる」

リオン

「僕も行こう」

早苗

「私も行きます！」

ザフィーラ

「?このまま放っておいても問題は無いと思うが……」

改めてシン達は戦闘への介入を決めた。

ザフィーラはそんなシン達に問いかけるとシンはこれを聞いた誰もが納得する答えを言った。

シン

「あのまま放っておいたら施設に甚大な被害が出ると思っけどそれでいいのか？」

ザフィーラ

「……すまん。スバルとエミリアは主と俺とレイが見ておこう」

シン

「じゃあ行ってくる」

シン達は班を2つに分けると激戦区になっているエリアの中央へ駆けつけていった。

Side EX なのは

なのはは目の前の光景が信じられなかった。

今回は入念な準備をしてこのガードマシナリーもレオルバディアを暴走させて他のマシナリーを暴走させて所員が来ないようにした。ここにあるロストギア『ディアボリックフアング』を手に入れて早々に引く筈であった。

しかし、そのロストギアは何故かこの実験場の清掃員が所持しており、2000人がかりで挑んだが自分を除く499人が倒されていた。

なのは

「こんな…こんなことって!!」

バルバトス@清掃員の服

「貴様に朝日は拝ませねえ!!」

管理局員CDE

「「うぎゃあああ!!!!」」

管理局員F

「た、助け…」

バルバトス

「いつまで寝てんだ!!」

管理局員F

「ゴギア!!」

次々と倒されていく局員達。

なのは今すぐにでも撤退したかった。

しかし、ここで逃げたら見す見すロストギアを逃すことになる。

だからなのは撤退しなかった。それが一番の愚策とは知らずにバルバトスからディアボリックフアングを奪うことしか考えずに。

そして、そこになのはの仇敵が現れた。

なのは

「来たね『紅き翼を持つ男』!!今日こそ貴方を逮捕します!!」

シン

「……………はやくこの実験場から立ち去れ、そうすれば俺達は追撃しない」

シン・アスカ…通称『紅き翼を持つ男』。

時空管理局がSSS級次元犯罪者であり、ロストギア『デステイニ―』の所持者。

そして、自分の親友であるフェイトの仇。

そんな男に退けと言われたなのはの理性は完全に切れた。

なのは

「貴方さえいなければフェイトちゃんの心は壊れなかった！貴方さえいなかったら『デステイニ―』を回収できた！！貴方さえいなければはやてちゃんが次元犯罪者になることなんて無かった！！貴方さえいなければ！！貴方さえいなければ！！」

なのははシンの周囲に自分の見方がいるにもかかわらずレイジングハートを構え、最強の魔法であるスターライトブレイカーの発射態勢に入った。

カートリッジが射出される。なのはは魔力を上げる為にグラールで使われているシフタライドを使用した。

それがある人物の逆鱗に触れるとは知らずに。

S i d e o u t

バルバトス

「貴様等あ……………！！！！！！」

なのは

「え？」

バルバトスはなのはが『アイテム』を使ったのを見ると憤怒の形相でなのはに詰め寄り、なのはの頭を掴んだ。

バルバトス

「アイテムなぞ使ってんじゃないねえ！
！」

なのは

「きゃあああああああ！！！！！！！！！！」

なのはは自分に何が起こったのか理解できなかった。
気が付いたら自分が宙を舞っている。

なのはが最後に見えた景色はこの実験場の天井だけだった。

副隊長@なのはを抱えている

「撤退！撤退だ！！」

管理局員G

「に、逃げろー！！！！」

なのはの率いていた部隊の副隊長はなのはが気絶したのを幸いとにかくに撤退命令を出し、管理局員達は倒れた仲間を収容すると蜘蛛の子を散らすように逃走、残ったのはシン達とレオルバディアの残骸だった。

そして、もう一つの問題が起きた。

バルバトス

「ふん。雑魚が」

リオン

「雑魚というのには同意だが何故貴様がここにいる？」
ディムロス

『貴様はあの時神の眼のエネルギーで死んだ筈だ』

バルバトス

「ほおう。リオン・マグナスにディムロスが貴様達もここに来ていたよだなあ」

ハロルド

『ついでに言う私達もいるわよ』

バルバトス

「この声はあクレメンテの爺とマッドサイエンティストのハロルドか」

かつては命を奪いあつた彼らは一触即発の空気を醸し出していたが、その空気も1人の少女によって吹き飛ばされた。

早苗

「ストップ!!」

リオン・バルバトス・ディムロス

「『!』」

早苗

「皆さんに色々事情がある事は分かりましたけどここはグラールなんですからね!」

ディムロス

『し、しかしだな早苗、この男は...』

早苗

「あんまりうるさいとコアクリスタルを叩き割りますよ?」

ディムロス

『う...。それは流石に...（早苗はこんなに強気な娘だったか?）』

早苗

「リオンさんもです!いつもの冷静さは何処に行ったんですか!?」

リオン@冷静さを取り戻す

「...そうだな。どうやら僕も頭に血が上っていたようだ...」

早苗の一喝？によつてディムロスがタジタジになっていた。
一方バルバトスは

バルバトス@早苗が気に入った

「ほおう。あの娘中々骨があるようだな」

はやて

「やかからと言つてここで戦わんといて下さいよ？」

バルバトス

「わかつておる。しかし、あの運動神経最悪なお前がよくここまで
え来られたな」

カムハーン

『それは我がサポートをしているからだ』

バルバトス

「ふん。だろうと思つたわ」

一触即発の空気を吹き飛ばした早苗の事が気に入ったらしく、はや
ては今にも戦いそうなバルバトスを止めたが逆にからかわれてしま
った。

そして、バルバトスは何かを決心した。

バルバトス

「はやてよ。俺はリトルウィングとやらに行つてくる」

はやて

「ええええええええ！？」

バルバトスの爆弾発言を言い、はやては絶叫を上げた。

その後、シン達は周辺の被害を確認した後依頼主に報告するために
実験場をあとにするのであった…。

第12話「レオルバディア破壊依頼」ボス戦？編」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はレオルバディア戦ではなくバルバトス無双のお話でした。

みんなのトラウマとはバルバトスのことです（自分もマイソロ2で初めて戦った時に詰みかけた）。

今回は報告編となります。

では（・・・）ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編1」

俺が最初にあの小娘を見た時、直前まで戦っていた奴らとは違う何かを感じた

普通の者なら逃げ出すくらいの殺気に満ちていた空気を一喝で吹き飛ばした

それだけでも称賛に値するのにディムロス達との会話を察するにディムロスだけでなくクレメンテのマスターでもあるらしい

それを聞いた俺はこの小娘…東風谷 早苗という存在に興味を持った

バルバトス

「ふん。奴がどう化けるか楽しみだわ」
はやて

「バルバトスさん。どうかしたん？」

バルバトス

「いや。東風谷がどのように化けるか楽しみでな…」

東風谷 早苗…奴がどのように化けていくのか…

俺の楽しみがまた増えたわ！！

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編1」

管理局襲撃から1時間後

パルム インヘルト社本社 社長室

依頼を完遂した（ほとんどバルバトスがやったが）シン達はこの事を依頼主に報告するためにインヘルト社の本社にある社長室に来て

いた。

ナツメ

「私がインヘルト社代表のナツメ・シュウです。以後お見知りおきを」

シズル

「息子のシズル・シュウです。貴方方のおかげで亜空間航行に関する資料や機材は無事に守れました。ありがとうございます」

シン

「いえ…。自分達が来た時にはすでに現地の方が事態を収拾していました」

シズル

「となると…彼ですか？」

バルバトス

「そのお通りだ。最も俺は戦場の臭いを嗅ぎつけてきたただけだがな」

「…誰も殺さなかったか？」

バルバトス

「フン。あんな雑魚殺すほどの価値もないわ」

「どおりで動いている反応よりも生体反応が多かったわけか…」

シズルはバルバトスが事を納めた事に不安に思ったが実はバルバトスは死なない程度に痛めつけただけで襲撃者の死亡率は0であった。

バルバトス

「機材と資料も全て無事だ。これで文句はあるまい」

シズル

「ならいいけど…」

シズルは機材と資料に被害が無かった為納得し、今回の襲撃である事を決めた。

シズル

「父さん」

ナツメ

「どうした？」

シズル

「僕はリトルウイングの方で亜空間航行の理論をまとめたいのだけれどいいかな？」

ナツメ

「私は構わないがとりあえず理由を聞こうか？」

ナツメはシズルがリトルウイングで亜空間航行の理論をまとめる事に反対しなかったが代表という立場の為シズルが何故リトルウイングに行く理由を尋ねた。

シズル

「父さんも分かっていると思うけど今回の襲撃で社内の施設でも安全じゃない事が分かったからね。僕もある程度は戦闘できるけど1人だと流石に限界がある。でもガーディアンズや同盟軍、グラール教団はそこまで手を回せるほど暇じゃない。だから彼らみたいな猛者がいるリトルウイングならここよりも安全だろうし、はやてとバルバトスも連れていけば大丈夫でしょう？」

ナツメ

「ふむ。だが資料はともかく機材は搬入できないぞ？」

シズル

「大丈夫。父さんも知っているでしょう？僕に…いや、今ははやてにこの技術を作った人がいる」

ナツメ

「ふむ。カムハーン殿か。わかったはやて君とバルバトス殿がいるのなら問題は無いだろう。行って来なさい。はやて君、バルバトス殿シズルを頼みます」

はやて

「わかりました！まかせてください！！」

バルバトス

「言われなくても俺自身リトルウイングに行こうと思っていたところだ。遠慮なく行かせてもらうぞ」

シズル

「ありがとう。父さん。あとは貴方方が許可してくれるならば…」

ナツメの説得を終えたシズルはシン達に視線を移した。

早苗

「私は賛成です！」

エミリア

「あたしも！」

スバル

「賛成！」

リオン

「お前達は…」

レイ

「今の俺達にそのような権限など持っていないぞ？」

早々に賛成した女性陣にリオンとレイは呆れているとシンはリトルウイングの事務所に通信を入れていた。

シン

「で、どうしますか？」

クラウチ@通信越し

『問題ないぜ。ただし、条件がつくがな』

シズル

「条件とは？」

クラウチ

『リトルウィングも亜空間航行実験のスポンサーになる。それでいいか？』

ナツメ

「それは構いません。ではシズル達をお願いしても構いませんか？」

クラウチ

『了解した。というわけでシン。お前らのチームに護衛を任せるぞ』

シン

「了解です」

リオン

「……簡単に決まったな」

レイ

「……そのようだな」

リオンとレイはあっさり許可を出た事に溜息をついた。

そして、クラウチからの許可を得たシン達はクラッド6に戻る為にマイシップへ戻ろうとした所をシズルに呼び止められた。

シズル

「ちよつと話したい事があるから僕の私室まで来てもらってもいいでしょうか？」

シン

「？分かりました」

シンはシズルが何故自分達を引き留めたのか察した為承諾し、シン達はシズルの私室に向かった。

報告から10分後

パルム インヘルト社本社 シズルの私室

シズル

「さて、ここに皆さんを呼んだのはあの襲撃者についてと皆さんが何故このグラールに辿り着いた理由を話さなければなりません」

早苗

「え…？」

リオン

「僕達がここにいる理由だ？」

シズルの私室に入ったシン達にシズルは早速本題を話し始めた。

シズル

「はい。皆さんがこのグラールにいる原因は恐らく僕にあります」

リオン

「なに？」

リオンは思わずシズルを睨むがシズルは特に怯えもせず説明を続けた。

シズル

「皆さんが知つての通り、現在グラールは資源枯渇の危機になっており、僕達が進めている亜空間航行の実験が世界の注目を浴びています」

レイ

「確かに現在グラールの存亡の危機といってもいい程の問題だな」

エミリア

「でもそれがどうしてレイ達がグラールにいる理由になるの？」

シズル

「それは僕達が初めて行つた亜空間実験で装置が暴走、結果カムハーンをはじめとする旧文明人の魂が住まう世界『マガハラ』への道を開くと同時に他の世界への道も開いてしまいました」

リオン

「それが僕達の世界だったというわけか？」

シズル

「はい。その中でも世界から拒まれた者、住む世界から立ち去ろうとした者、そして死した者がこのグラールに引き寄せられました」

シン

「俺とスバルは自分の意思でこの世界に来た」

レイ

「俺の場合はギルから渡された装置によってこの世界に来たな」

エミリア

「あたしの場合はこの世界の出身だから」

バルバトス

「単刀直入に言おう。俺とリオン・マグナス、そして東風谷 早苗。俺達がこの3枠に入る」

スバル・エミリア・はやて

「……な、なんだってー！？」「」

バルバトスが言った事実思わずスバル達は叫んでしまったがリオと早苗は心当たりがある為特には驚かなかった。

シズル

「驚かないんですね」

リオン

「僕は元々『消え行く存在』だったからな。大体察していた」

早苗

「私も自分の故郷では信仰が集まらないのである場所を目指して故郷を去りましたからね」

シズルは特に驚かなかった2人に驚き、リオンは対して表情を変えず早苗は乾いた笑みを浮かべながら答えた。
部屋の雰囲気がいんまりとした所でエミリアが疑問に思っていた事があったのでシズルに尋ねた。

エミリア

「ちょっとしつもん！」

シズル

「なんですか？」

エミリア

「なんであたし達にはミカ達が見えるの？」

エミリアの質問はシン達が常々考えていた事だった。

ミカが言うには自分達以外の者は姿を見る事さえかなわないらしい。
無論シズル…というよりカムハーンはその質問に対する答えを持っていた。

カムハーン

『我ら魂となった旧文明人を認識するには大きく分けて5つの条件がある』

エミリア

「5つ？」

カムハーン

『うむ。1つ目はシンのように生前の我らに関わっていた者』
シン

「これが当てはまるのは俺だな」

カムハーン

『次に2つ目。肉体が何らかの理由で損傷し我らのプログラムで肉体を修復された者』

シズル

「この条件には僕が当てはまります。僕は亜空間実験の暴走事故で一度死亡しています」

レイ

「俺もその条件に当てはまるな」

カムハーン

『次に3つ目。稀にフォトンの認識能力が極めて高い者が居るのだがその者は無条件で我らの存在を認識できる』

エミリア

「ユートがその条件に入るね。あいつ普通にミカと話していたし…」

ミカ

『あれには私も驚きました』

カムハーン

『4つ目。我らに一度憑依された者は例外なく我らの存在を認識できる』

はやて

「この条件は私が当てはまるな。そのおかげで戦闘面の補助をしてもらっているし…」

シズル

「ただし慣れていない人がしてもらつと戦闘が終わつた翌日は全身筋肉痛になるけどね」

カムハーン

『最後に5つ目。我らに類似する存在に触れていた者』

早苗

「これは私やリオンさんが当てはまりますね」

リオン

「僕の居た世界ではソーディアンの声が聞こえる者はほんの一握りだったからな」

カムハーン

『以上が現在我が確認した方法だ』

カムハーンが説明を終えるとレイはある事に気がついた。

レイ

「1つ質問がある」

カムハーン

『なんだ？』

レイ

「どの条件に当てはまりそうに無いカーシュ族の里を襲った者は何故そちらの存在を知っていた？」

レイの疑問は何故カーシュ族の里を襲撃した犯人であるフェイト達管理局がカムハーンの存在を知っていたかという事であった。

カムハーン

『フェイト・テストロッサ・ハオラウンは我が生前SEEDの襲撃に遭う前に我が領土を侵略した報復に管理局のある施設を壊滅させた時に接触した』

レイ

「ならば他の者は貴方を認識できていなかったと？」

カムハーン

『恐らくそうであろう。奴以外は皆シズルが我だと勘違いしていたであろう』

エミリア

「あれ？だとしても時間軸がおかしくない？」

カムハーン

『それに関しては我も分からぬ』

シズル

「一応今でも調べているけどね」

カムハーンの説明にリオン達が納得した所で最後にスバルから最後の質問が入った。

スバル

「だとするとカムハーンさんが実行している復活計画って何？」

カムハーン

『ある人型兵器の修復だ』

エミリア

「人型兵器？スタティリアじゃないの？」

カムハーン

『その兵器が産まれた世界では【デステイニー】と呼ばれていた』

カムハーンの話した兵器の名前を聞いたレイは思わず耳を疑った。確かに自分も愛機の名を冠するデバイスを持っている。

しかし、まさかデステイニーがこの世界に来ているとは思わなかったのである。

シン

「それで。進行状況は？」

カムハーン

『大体50%程度だ。外見は完了しているが機体を動かすOSと動力源が無い』

シン

「OSは俺のデステイニーに登録されているOSを移せば何とかなるけど動力源はなあ…」

カムハーン

『元々核分裂炉とバッテリーだけで動いていただけでも動かすのがやっとだったというのに武装を増やす時点で動くわけが無いだろう』
シン

「俺の方も大体解析で来たけど最後のパスワードが分からないんだ

よ」

カムハーン

「確か…『私の親友の名がパスワードだ』と書かれていたな」

話に着いていけないスバル達を放っておいて話を進めるシンとカムハーンだったがレイはカムハーンの言ったパスワードのヒントが気に掛かった。

レイ

「シン。そのデバイスを製作したのは誰だ？」

シン

「デュランダル議長だけど…それがどうかしたのか？」

レイ

「だとしたらそのパスワードに心当たりがある」

カムハーン

『なに！？それは本当か！？』

レイ

「ああ。恐らくパスワードは『ラウ・ル・クルーゼ』だ」

デステイニー

『パスワード認証確認…ミノフスキーイヨネスコ機関の設計資料閲覧及び【glory system】の使用が許可されます』

シンはレイに言われた通りのパスワードをデステイニーに入力すると最後のロックが解除され、デステイニーに登録されていた資料とデステイニーに封印されていたシステムが解放された。

カムハーン

『なるほど。このエンジンならばデステイニーを完成させることができるぞ！』

カムハーンは閲覧を許可されたエンジンを調べてみるとデステイニ
ーの復活に必要であった動力源に使える事が分かり、思わず声を上
げて喜んだ。

シズル

「でも直すとしてもそのデステイニーは何処にあるんだい？」

カムハーン

『あの機体は管理局に奪われる事を避ける為に奴らが感知していな
い世界に住む『彼』に預けてある』

エミリア

「盛り上がってる所悪いんだけどさあ早めに帰った方がよくない？」

エミリアのツツコミは狂喜乱舞していたカムハーンに釘を刺した。

シン

「そうだな。一応通信では完遂したと伝えただけど早めに帰った方が
いいな」

カムハーン

『む。そうだな。デステイニーは安全な所にある。今は目先の問題
に取り掛かるとしよう』

シン

「ああ。それじゃあクラッド6に帰るぞ」

スバル・エミリア

「「「りょーかい！」」」

リオン・レイ・ザフィーラ

「「「わかった！」」」

早苗

「はい！」

はやて

「お邪魔します」

シズル

「わかりました」

シン達はカムハーンが落ち着いたのを確認するとクラウチに依頼の
完遂を報告するためにクラッド6へ戻るのであった…。

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編1」（後書き）

どうも飛鳥です。

思ったよりも話が長くなったので前後篇にしました。

後篇は近日中には投稿する予定です。

では（・・・）ノシ

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編2 + α」

まさかバルバトスがここに居るなんて思いもよらなかった

でも考えてみると死んだ筈の坊ちゃんと僕がこうして生きていたのだから彼が生きていないという理由はない

でもなによりも驚いたのはあのバルバトスが早苗に興味持った事だ
たぶん悪い事はしないと思うけど大丈夫かなあ

早苗

「シャル？聞こえてますか？」

シャル

「ん？なんだい早苗？」

早苗

「もう！私の修行内容はシャルが伝えるって言っていたじゃないですか！」

シャル

「ああ！そうだった！それで修行の内容は…」

僕達がここに来た理由はわかった

だけど僕の役目は変わらない

僕はソーディアン・シャルティエ

坊ちゃんと坊ちゃんの大切な人を守る剣だ

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編2 + α」

クラッド6 リトルウィング管轄区 シンの部屋

クラウド@3時間前

『おう。今回の仕事はご苦労だったな。次の依頼があるまでしっかり休んでいてくれ』

クラウド6に帰還したシン達はクラウドへの報告を済ませ、これからクラウド6に住むシズル達の部屋の用意が出来たシン達はこれからの方針について話し合っていた。

エミリア

「で、これからどうすんの？」

リオン

「ミカの言っていた計画もシンに潰されたからな」

ミカ

『ご、ごめんなさい…』

カムハーン

『気にするでない。元をただせば我にも責任がある』

ミカ

『カムハーン…』

シンの部屋はミカとカムハーンによって非常に甘ったるい空気に包まれた。

しかし、だからといってこの空気を壊す者は1人もいなかった。

ミカとカムハーンは悠久の時を得てようやく再開できたのだ。

シン達はそれを察しているためただ何も言わず2人をそのままにしておいて会議を進めた。

レイ

「恐らく亜空間実験場を襲撃した者がいつ来るかわからない。まずは万全の状態で戦えるようにしておくべきじゃないか？」

リオン

「僕も賛成だ。それに平行してエミリアの修行を開始する」

エミリア

「そういやまだ修行のメニューを貰って無かった…」

早苗

「最近は3日置き位に大きな依頼が来ていましたからね…」

スバル

「そんな事よりアイズ（パアーン）」

シン@スバルをハリセンで叩いて黙らせる

「そうだな。ようやく腰を据えて修行ができる状況になったな」

ディムロス

『そうなると暫くは修行期間だな』

途中で話の腰を折ろうとしたスバルをシンはハリセンで黙らせて改めて自身が作ったメニューをエミリアとレイに渡した。

はやて@エミリアの修行メニューを見る

「うげ…なにこの密度…」

エミリア@重要な依頼を立て続けに参加していた為平気

「そうかな？あたしは大丈夫だと思うけど」

シズル

「はやても参加したらどうだい？いつまでもカムハーンに頼っては
いられないし…」

はやて

「うん。そうやな…がんばろや…」

エミリアの修行内容を見て顔を青くしたはやてとなんだかんだで体力が上がっているエミリアがメニューの内容の感想を言い、シズルははやてにこの修行に参加する事を提案し、はやては逃げられないと悟り、覚悟を決めた。

そこに2人の男が話に割って入った。

バルバトス

「俺は東風谷　早苗の修行を手伝おうと思っているが構わんな？」

早苗

「え！？いいんですか！？」

早苗はバルバトスが自分の修行に協力してくれる事に喜んだ。

ディムロス

『どういふ風の吹き回しだ？』

バルバトス

「東風谷　早苗にカイル・デュナメス以上のものを感じた。それが理由だ」

リオン

「カイルか…懐かしい名だ。わかった。ただし、早苗に手を出したらわかってるな？」

ディムロスの質問にバルバトスはかつて自分を追い詰めた英雄志願の少年以上の素質があると答えた。

リオンはバルバトスに敵意が無い事を確認すると一言釘を刺しながらも早苗の修行の参加を許した。

シン

「あとはエミリアとはやてだけどうするべきか…」

シンは早苗の方の話がついた（早苗の修行関連の情報はリオンから聞いた）事を確認するともうひとつの修行対象であるエミリアの指導官が問題となった。

レイ

「基本的に俺が見るつもりだが不測の事態があるからな…」

ザフィーラ

「俺は主はやての面倒を見よう」

レイ

「それは助かります。俺でも2人の面倒をみるのはキツイですからね…」

シン

「それじゃあ今度召集が入るまで各自休んでいてくれ」

その後、今後の方針がまとまったシン達は今回の依頼の疲れを癒す為に各々の部屋に戻るのであった…。

Side EXなのは

亜空間実験場から撤退してから2日後

パルム 管理局拠点 なのはの部屋

亜空間実験場での戦闘で気絶したなのはが目を覚めた時、自分の部屋に居た。

目を覚ました後現在彼女の副官を務めている局員は申し訳なさそうに戦闘の結果を報告した。

結果は惨敗。

戦闘不能にされた局員達は皆例外なくバルバトスを恐れた。2000人掛かりで挑んでも傷一つつけられず逆に自分達はことごとく吹き飛ばされ、士気は明らかに低下していた。

なのはが倒されてからは士気の低下が顕著になり、結果彼は撤退を決意、相手側に追撃の意思が無かった為に無事に帰還できたという。なのはは皆が無事な事に安心して自分の相棒であるレイジングハートに声を掛けようとしたが、なのはの手にはレイジングハートが無かった。

なのは

「あれ？レイジングハートは？」

副官

「レイジングハートは今デバイスルームにあります」

なのは

「うん。わかった。それじゃあデバイスルームに行ってくるね」

副官

「ハッ！」

なのはは自分の相棒が気になりになりデバイスルームへと向かった。

なのはが目を覚ましてから10分後

パルム 管理局拠点 デバイスルーム

なのは

「シャーリー！レイジングハートは！？」

なのははデバイスルームに入るなり自分達機動六課のデバイスの整備・製作を担当しているシャーリーことシャリオ・フィニーノに自分の相棒について尋ねた。

それに対してシャーリーは悔しそうな表情でなのはの問いに答えた。

シャーリー

「レイジングハートは…もう戦闘に使用する事は出来ません」

なのは

「え？」

なのははシャーリーのいつている意味がわからなかった。

レイジングハートは自分の最大出力に耐えられるほどの強度を持っている。

だから戦闘に使用できないということは無い筈であった。

シャーリーは現在のレイジングハートの状態に着いて説明を始めた。

シャーリー

「前回の戦闘でレイジングハートはなのは隊長を守る為に耐久許容量を遥かに上回る出力で防御フィールドを展開して敵の攻撃を受けました」

シャーリーはディスプレイに現在のレイジングハートを映し出すとレイジングハートの中枢に指を刺した。

シャーリー

「その結果レイジングハートは中枢部にまで損傷が及び、その損傷で戦闘に耐えられるほどの耐久力は無くなってしまいました」

映された中枢部には大きな罅が出来ており、レイジングハートの損傷具合が窺い知れる。

シャーリー

「幸い記憶やコミュニケーションの機能は無事でしたがこれ以上の戦闘は不可能です」

なのは

「そんな…」

なのはは自分の相棒がそこまで酷い損傷を受けている事に絶望した。親友であるフェイトはMIAになり、はやてにいたっては次元犯罪者になっている。

そこで更に自分の相棒も失ってしまった事実をなのはは受け止める事が出来なかった。

なのは

「シン・アスカ…あいつさえ…あいつさえいなかったら!!!!!!」

なのははこのような事態になった全ての元凶であるシン・アスカを憎んだ。

何故、自分だけ全てを奪われなければならない？

何故、自分から全てを奪った彼が生きている？

何故、自分だけこんなにも悲しまなければならない？

なのは

「シャーリー」

シャーリー

「なんでしょうか？」

なのは

「ラクス・クライン元帥から渡されたデバイスはある？」

シャーリー

「え？ええ。確かに【GAT-131】【GAT-252】【GAT-X103】【CAT1-X3】

【GFAS-X1】は現在このデバイスルームで整備していますけど…」

なのは

「そのデバイスの設計データとレイジングハートの内部構造のデータを頂戴。それで新しいデバイスの設計図を作るから」

シャーリー

「は、はあ。わかりました」

なのは

「お願いね」

その後、なのははシャーリーから貰ったデータを基にひとつのデバイスの設計図を作り、ひとつのデバイスを完成させた。

3日後

パルム 管理局本部 訓練スペース

なのは

「リベンジャー！」

リベンジャー

『「アウフプラール・ドライツェーン」』

なのはは自身が新しく製作したデバイスに攻撃を命令すると四条の光が訓練相手である武装隊に降り注いだ。

男性武装局員×500

「「「うわあああああああ！！！！！」」」

女性武装局員×500

「「「きゃあああああああ！！！！！」」」

エリオ

「す、凄い……」

キャロ

「あんなにも居た武装隊の人が一撃で……」

エリオとキャロは一撃で吹き飛ばされた武装隊をみて呆氣にとられていた。

たった四条の光が1000人も居た武装隊を意図も容易く吹き飛ばしたのである呆氣にとられないわけがない。

なのは

「これなら……これなら『紅き翼を持つ男』……シン・アスカに勝てる！」

なのは

「そうよ！今度は私がいっから全てを破壊してやるの！！！」

もしこの状況をフェイトが見たらこうなってしまうたのはに嘆くであろう。

もしこの状況をなのはの家族が見たら悲しむであろう。

不屈の魔導師は立て続けに起こった悲劇に精神が限界を迎え、シンから全てを破壊しようとする復讐者になった。

皮肉にもなのは自身が気付かぬうちにかつてシンが歩んだ悲劇の道を歩むことになってしまった。

しかし、その事を知る者は誰もいなかった…。

第12話「レオルバディア破壊依頼」報告編2 + α」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は報告と今後の方針の決定、なのはの復讐者としての覚醒となりました。

なのはファンの人スンマセン。

今回は休息編になります。

では(・・・)ノシ

スクリーンチャット集4

Chat18 「ギン姉の知り合い!？」 パルムに出発する前

はやて

「そういえばスバルってギンガに似とるなあ」

スバル

「え!？ギン姉を知っているんですか!？」

はやて

「え?もしかしてスバルがギンガの言っていた妹？」

スバル

「はい!そうですよ!」

はやて

「君のお姉さんにはすごくお世話になったかな」

スバル

「そういえばかれこれ4年間お父さんとギン姉に連絡してないなあ

…」

はやて

「まあそのうち会えるやろ」

スバル

「そうですね」

Chat19 「素手で大丈夫？」 亜空間実験場で戦闘後

早苗

「あの、ザフィーラさん」

ザフィーラ@辺りを警戒している

「どうした早苗？」

早苗

「ザフィーラさんは素手で戦っていたようですが大丈夫なんですか？」

ザフィーラ@今装備している情報を早苗に見せる

「ああ、問題ない。これをつけているからな」

早苗@装備の詳細を見る

「ゴッドハンド？」

ザフィーラ

「バスクから装備を受け取った時にあった物だ」

早苗

「不可視のフォトンバリアで手を保護しているんですね」

ザフィーラ

「ああ。だからこそ俺は素手でモンスターと戦える」

早苗@殴られたポルヴァーラが粉々に粉碎されている所を思い出した

「（それにしても殴っただけであんなに大きなモンスターを倒せるって怖いですよ…；；）」

Chat 20 「私、自信無くしそう…」 アスターク戦後

はやて@呆気にとられる

「……………（。D）」

スバル

「はやてさーん！戻ってきてくださいーい！ー！」

はやて

「あんな巨体を浮き上がらせるなんてありえへん…」

エミリア

「そりゃ普通はありえないよね」

レイ

「エミリア、後ろに敵がいるぞ」

ヴァーラ

「へアー！！」

ヴァーラ、エミリアに飛び掛かる

エミリア@ヴァーラを蹴り飛ばす

「えっ？きやああああ！！」

ヴァーラ@蹴り飛ばされる

「ホゲエー！！」

ヴァーラ10m程蹴り飛ばされ、レイに頭を狙撃されて絶命

エミリア

「うー…びっくりしたー…ってはやてどうしたの！？」

はやて@号泣

「…………私、自信を無くしそう…」

Chat21 「なかなか骨のある奴だな」 早苗がリオンとバル

バトスの戦闘開始を止めた直後

バルバトス

「おい。その小娘」

早苗

「なんですか？」

バルバトス

「貴様の名はなんだ？」

早苗

「東風谷 早苗です」

バルバトス

「ほう。東風谷か…覚えておこう…」

Chat21 「シンって何者？（4）」 シズルの説明が終わっ

た後

Chat 9 「シンって何

者？（3）を見ている

エミリア

「ねーねーカムハーン」

カムハーン

『どうしたエミリアよ』

エミリア

「生前にシンと会っているんだよね？」

カムハーン

『うむ。かつては自分に媚を売る下郎ばかりだった時に会ったな。もし奴と出会っていなければ我は暴君としての道を歩んでいただろう…』

エミリア

「それじゃああの白い服を着ていた奴が言っていた『紅き翼を持つ男』ってなに？」

カムハーン

『…詳しい事は話せないがシンにはデバイスと呼ばれる武器を持っています。その武器を展開した時に紅い翼を背負っている様に見えるというのが所以らしい』

エミリア

「（シンのデバイスってなんだろう？ちょっと気になるな…）」

Chat 22 「声が似ている？」 クラッド6に帰還後

はやて

「そっぴいやスバルとエミリアの声って似てへんか？」

スバル

「そっぴいやそっぴだね」

エミリア

「あたしも思ってた!」

リオン

「言われてみればそうだな」

レイ

「今まで特に気にしなかったからな…」

ザフィーラ

「性格も似ているからな。余計に似て聞こえるのだろう」

「はやて@意地の悪い笑みを浮かべる

「(にひひ…面白い事思いついちゃった)」

リオン・レイ@はやてが悪巧みしている事を察知した

「(…何か変な事をたくらんでいるな…)」

Chat23 「だーれだ？」パーティ解散後

Chat22 「声が似ている？」を

見ている

シン@報告書を作成していた

「ふう。これで報告書はこれでよし…っと」

「????@目を手で塞ぐ

「だーれだ？」

シン@目を塞がれている

「エミリアだろ？」

エミリア@手を離す

「ふえー…よくわかったね」

シン

「スバルの場合はそのまま自分に抱きよせるからな」

エミリア

「スバルのことよく知ってるんだね」

シン

「まあなんだかんだで4年以上の付き合いだしな」
エミリア

「（あたしもレイとそんな仲になれるかな？）」

Chat24 「2人の天才」 パーティ解散後

シズル

「貴女がハロルドさんですか？」

ハロルド

『そうよ。あと呼び捨てでいいから』

シズル

「わかった。じゃあハロルド」

ハロルド

『何？』

シズル@何かの設計図を見せる

「この設計図だけはどう思う？」

ハロルド

『ふん。私としてはもっと改造したい所ね』

シズル

「丁度僕も思っていた所だ。僕の場合はここをこう改造して…」

ハロルド

『ふんふん。あんたなかなかわかってるじゃない』

1時間後

ハロルド

『ぐふふ、あんたとは気が合いそうね』

シズル

「ははは。確かにそうですね！」

ハロルド

『さーで、これで新しい武器を作るわよ〜
♪』
シズル

「完成が楽しみだ…アストラルライザー」

スクリーンチャット集4（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は12話のスクリーンチャット集となりました。

次の話は外伝とチルノ達の番外編となっています。

では（・・・）ノシ

キャラ設定5（前書き）

第12話で所属や状況が変わったり、新たに加わったキャラクターの設定などが書かれています。

特に最後の項目は今後のネタバレになるためそいつたのを嫌う方は閲覧しないことを推奨します。

キャラ設定5

高町　なのは
機動六課隊長。

バルバトスとの戦闘でレイジングハートが大破し（コミュニケーションを取るくらいならできる）、親友たちとの度重なる別れに限界が近付いていた精神が完全に壊れ、シンの持つ全てのモノを破壊しようとする復讐者になってしまう。

皮肉にもなのはとフェイトの2人でシンが過去に歩んできた道をそれぞれ歩む事になる。

使用デバイスはリベンジャー。

八神　はやて

インヘルト社の御曹司シズル・シュウの秘書兼護衛官。

シズルに拾われた後ははやての事務能力に目を付けたナツメ代表にスカウトされ、現在に至る。

カムハーンのサポートがあればデバイスなしで戦闘ができる。

装備は火・氷・土・雷・サポートの役割を持たせてある5本のオウカロドゥとリュミエスブラウ。

ザフィーラ（年齢不明）

インヘルト社の御曹司シズル・シュウの秘書兼護衛官。

最初はラフォン草原を彷徨っていた所をバスクに保護され、バスクが依頼の報告にインヘルト社に立ち寄った際にはやてと再会、以降彼女と行動を共にする。

装備はバスクから譲られたゴッドハンド5つ（火・氷・雷・土・光）とシェルドーテ、デルピーク。

ナツメ・シュウ（50歳）

インヘルト社代表。

シズルの父親であり、亜空間航行理論を提唱した人物。
カムハーンの協力により研究が飛躍的に進んでいる。

バルバトス（年齢不明）

インヘルト社の御曹司シズル・シユウの秘書兼護衛官。

リオン達と同じくこのグラールにやってきた男。

最初に辿り着いた場所が亜空間実験場だった為、口封じとしてガードマシナリー500機のマシナリーに襲撃されるがこれを全て破壊、その実力とシズルの進言により清掃員に（清掃員という名のガードマン）なるが時空管理局の襲撃に遭遇してこれを撃退、その後リオン達と戦闘しようとした所を早苗に止められ彼女に興味を持つ。
シズルがクラッド6に向かう際に彼の護衛官となる。

現在は早苗の修行の面倒を見ている。

使用武器はディアボリックフアング

デバイス

リベンジャー

なのはの2代目デバイス。

レイジングハートと違いアームドデバイスである。

レイジングハートがバルバトスとの戦いで大破してしまったため、現在の時空管理局の元帥であるラクス・クラインから渡されていたC・E産デバイス、カラムיתי、フォビドゥン、バスター、ハイペリオン、デストロイの設計データとレイジングハートの内部構造のデータを基になのはに製作された。

火力と防御と機動力の3点のみに特化したこのデバイスは並みの魔力の者が使用すると1分も持たない。

特筆する点はその火力であり、1000人の武装隊が束になっても一撃で吹き飛ばせるほどの威力を持つ【アウフプラール・ドライツ

エー」は今までなのはが使用していた最強の砲撃魔法「スター
イトブレイカー」の4倍以上の破壊力を持っている。
バリアジャケットの色彩は基本色の黒と紅いラインのみであり、展
開した時に有り余る魔力を背中にあるバインダーから常に放出され
ており、その魔力の色が紅いことも相まって天使から墮天使に落ち
ていったなのはの心境が窺い知れる。

その他

glory system

万能創造システム。

デュランダル議長が議長になる前に訪れた世界『幻想郷』で作られ
たGシステムを極限にまで小型化したもの。

最後のパスワードの入力に成功した場合のみ機能が解放される。

キャラ設定5（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はなのはの新たなデバイスと12話で解放されたデステイニーの機能などとなっています。
では（・・・）ノシ

番外編〈氷精達の冒険〉第1話「初依頼」

それは…遙か遠いところのおはなし…

ここグラールは3年前SEEDと呼ばれる生物の襲来を受け、資源枯渇が深刻な問題となっています…

そして、現在では時空管理局がこの世界にあるロストギアを奪う為にこの世界のあちこちで暗躍しています…

私もまたその管理局に所属していましたが私を輸送していたヘリが現地の生物に襲撃されて私以外は全滅

私も管理局では死亡した扱いになっているでしょう…

でも私はここで生きています

今はチルノちゃんリーダーをしているチームの一員としての新たな人生が始まりました

チルノ@フェイトを起こしに来た

「フェイトお姉ちゃん！もう朝だよー！」

フェイト@鼻の下を伸ばしている

「うん。わかったよ（チルノちゃんは可愛いなあ…）」

チルノ

「ホラ！今日はあたいとフェイトお姉ちゃんの2人で依頼を受けに行くっておっさんが言ってたじゃん！！」

これは私達の受けた初めての依頼のお話です…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY 番外編

〈氷精達の冒険〉

第1話「初依頼」

モトウブ ダグオラ・シティ

朝食を済ませたフェイトとチルノは傭兵としての依頼を受諾するためにダグオラ・シティに来ていた。

チルノ

「ここがモトウブの首都、ダグオラ・シティだよ！」

フェイト@辺りを見回している

「ここが…」

フェイトは一度この街に来た事があるがこの時は顔を隠して来ていた為に周囲を見学する暇がなかった。

そのためフェイトは目の前に広がる景色が新鮮であった。

フェイトがあたりをキョロキョロしているとビーストの男が話しかけてきた。

ナンパ男

「よう姉ちゃん。今暇かい？」

フェイト

「ごめんなさい。暇じゃないです」

ナンパ男@顔面に氷塊が直撃

「そう言わずに…ほげえ！！」

ナンパ男はフェイトにナンパをしていると横から飛んできた氷塊が彼の顔面に直撃し、気絶した。

フェイト

「ふえ？」

チルノ@ナンパ男に氷塊をぶつけた犯人

「フェイトお姉ちゃん！早く行くよ！！」

フェイト

「う、うん」

フェイトはナンパ男の様態を心配しつつもチルノに引っ張られていた。

ナンパ男撃沈から5分後

モトウブ ダグオラ・シティ ガイークの酒場

チルノ

「マスター！なんか新しい依頼来てる？」

ガイーク@依頼書を渡す

「ああ。チルノ嬢ちゃんか今ある依頼はこの依頼だけだな」

チルノ@依頼書を受け取る

「えーと…」

フェイト@依頼書を覗く

「氷結洞窟安全確保依頼？」

チルノはガイークから現在依頼が来ている依頼書を受け取り、フェイトがその依頼書を覗くと依頼書にはこう書かれていた。

ヒル・ボル@依頼書

『俺達が経営しているカジノへ続く道がこの道の道中に住んでいる大型モンスターが暴れているせいで安全じゃなくなってるんだ！俺達じゃ手も足も出ねえ！！だから頼んだぜ！！！』

チルノ達は数分考えた後、この依頼を受ける事にした。

依頼を受けてから5時間後

モトウブ 氷結洞窟 ブロック1

依頼を受けたチルノ達は現地までやってきたが、ここで1つの問題に直面した。

フェイト@バルディッシュは中破して使えないため私服

「さ、寒い…（ガクガクブルブル）」

それはモトウブの雪山地帯の為、現在バルディッシュを使えないフェイトには寒すぎるのである。

チルノ@氷のSEEDのため平気

「そんなに寒いのか？」

マガシ@キヤストのため平気

「ぬう…。おそらくこの寒さがが他の傭兵達が依頼を受けなかった理由だろう」

フェイト@まともに喋れない

「さ、ささ、ささ寒すぎぎぎ、ぎる、るっる」

チルノとマガシは悩んだ。

かれこれ3年以上過酷な依頼を受けてきた2人だが、それは自分の身体能力を生かしてきたためであり、デバイスが無ければただの人間であるフェイトが（フェイトは生身でも十分強いが寒すぎて力が出せない）この環境は初めてである事への考慮が抜けていた。

マガシ

「このままではマズいな…」

フェイト@瀕死

「あれ？綺麗なお花畑でお母さんとアリシアが手を振ってる？」

チルノ@涙目

「どうしよう…。このままじゃフェイトお姉ちゃんが死んじゃうよー！！」

チーム結成後初の依頼でフェイトが死にかけていた所に非常に寒い

この雪山で場違いな女性が見ていた。

「???」

「あら?こんな所に人が来るなんてね…」

「????」

『たぶん傭兵か何かだと思っわ』

「??」

「その割には1人女の子が死にそうになっているけどね」

「????」

『どうするのレティ?』

レティと呼ばれた女性

「勿論助けるわ。どうやらもう1人の女の子は私の同族っぽいし。

いいわね?アトワイト」

アトワイトと呼ばれた短剣

『ええ。私は元々医者の子だから死にかけの人間を放っておけないわ』

レティ

「ええ。その傭兵!私達は彼女を助ける事が出来るわ!」

チルノ@目が赤く腫れている

「本当!」

レティは今にも泣きそうになっていた少女:チルノに声を掛け、チルノは瞬時にレティの呼びかけに答えた。

レティ

「ええ。本当よ。アトワイト、貴女はこの娘の様態をどう見る?」

アトワイト

『恐らくは寒さで身体の一部が凍傷になりかけているわ。すぐに直すならホットドリンクを使えばいいと思っわ』

レティ@赤い液体の入った瓶をナノトランサーから取り出す

「オーライ。その案でいきましょう」

フェイト@ホットドリンクを飲まされる

「んぐ。んぐ。プハー！…辛あああああ！…！！！」

チルノ

「フェイトお姉ちゃん！！」

マガシ

「ほう。ホットドリンクか…次の買い出しの際に買っておくとしてう」

赤い液体…ホットドリンクを飲まされたフェイトはとてつもない辛さに悶絶するが、死の淵から生還した。

10分後

フェイト@深く頭を下げる

「助けていただいてありがとうございます」

レティ

「なに、気にする事はないわ。私達がしたくしてただけだから」

チルノ@フェイトに抱きつく

「よかったよ…フェイトお姉ちゃんが生きててよかったよ…」

フェイト@ロリコン

「ありがとう。チルノちゃん（チルノちゃんの胸が私の左腕に！）」
マガシ

「（こやつ。絶対鼻の下をのばしておるな…）」

フェイトはレティに礼を言った後、チルノに抱きつかれて鼻の下をのばし、マガシはそんなフェイトに呆れているとアトワイトが話しかけてきた。

アトワイト

『私達はこの先に居る大型モンスターの討伐に来ただけねど。貴方達もかしら?』

チルノ@フェイトから離れる

「うん!そうだよ!!」

レティ

「なら私達も同行してもいいかしら?」

マガシ@即決

「そうか。ならば同行してもらおう」

アトワイト

『はやっ!?!』

レティはチルノ達に同行すると言うとマガシは即決で(この間わずか0・01秒)同行を許可した。

チルノ@屈託のない笑みでレティの手を握る

「よろしくね!レティお姉ちゃんにアトワイトお姉ちゃん!」

レティ・アトワイト@この時電流が走る

「『!?!』」

フェイト@中まで来た事に気がついた

「(あ。仲間発見)」

マガシ@スルー

「で、生体反応の強さを見るに大体5km先だな」

マガシはレティとアトワイトがフェイトと同類になったのを軽くスルーし、チルノ達は大型モンスター『ディー・ロレイ』の住むエリアへ進んだ。

フェイト復活から30分後

モトウブ 氷結洞窟 ブロック2

チルノ@カリバーン（違法改造）で横一閃

「でりゃあー!!」

ラブチャ×3@上下真つ二つになる

「「「ギエピー」」」

チルノ

「うん！いい調子!!」

道中ラブチャの大軍に遭遇したチルノ達だったがこれを難なく撃破、再び先に進もうとしたら大きな地震がチルノ達を襲った。

チルノ@よろめく

「うわっ!!」

フェイト@同上

「きゃあ!!」

マガシ

「ぬ。これは…」

レティ

「おそらく奥に居る奴が暴れているのね…」

アトワイト

『強大なエネルギーを感知…来るわよ!!』

いきなりの地震に戸惑うチルノとフェイトだったが、この地震の元凶は休む暇を与えなかった。

デイルナズン×3

『『『!!!!!』』』

レティ@SEED事変を生き残った者

「なっ!?!」

マガシ@同上

「デイルナズンだと!?!」

アトワイト

『これがさっきの地震の正体ね…』

レティとマガシは目の前に居るモンスターに驚愕を隠せなかった。
デイルナズン…かつてSEED事変にて脅威となっていたSEED
フォームはダーク・ファルスと共に封印された存在であつた。

マガシとレティはそんなデイルナズンを警戒するがデイルナズン達
はそんな2人を通り抜けてチルノに近付くとそのまま膝をついた。

デイルナズン×3

『『『…』』』

チルノ

「そつか…あんた達は元に戻りたいんだね…」

デイルナズン×3@首を縦に振る

『『『…』』』

チルノ@キャリガイン×3に両手を掲げる

「ごめんね…あたいの同族のせいでこんな目にあつて…」

デイルナズン×3@首を横に振る

『『『…』』』

チルノは警戒している3人を制して3体のデイルナズン達に近付く
とチルノのデイルナズン達に両手を掲げた。

チルノ@両手から蒼い光が溢れ出る

「今までこんな姿になつて辛かつたよね？だけでもう大丈夫。アン
タ達のD因子はあたいが引き受けるから…」

デイルナズン×3@蒼い光に包まれる

『『『アリガトウ…』』』

チルノの両手から溢れ出ていた蒼い光に包まれたデイルナズン達は

片言ながらも礼を言々と人の姿になった。

レティ

「デイルナズンが人の姿になった!？」

マガシ

「いや。戻ったと言った方が正しいだろうな…」

アトワイト

『あの娘の両手から溢れ出ていたあの蒼い光…とても強いエネルギーを持っていたわ…』

フェイト

「この人達はどうしますか？」

マガシ

「一度来た道に戻ってGフライヤーに乗せておくのが最善だろう」

チルノ達は救助した3人をGフライヤーに乗せる為に来た道に戻った。

1時間後

チルノ

「これであの人達も大丈夫だね!!」

フェイト

「うん。書置きも残しておいたし、もし危険があっても逃げられるだろうしね…」

レティ

「（私達はSEEDになった者は殺すことでしか救えないと思って…でもこの娘は…）」

アトワイト

『（きつと辛い思いをしてきたのね…だから見捨てる事が出来なかった…）』

マガシ@チルノの過去を知っている

「（あいつはあの時の事を引きずっているのか…）先に進むぞ」

チルノ

「うん！！」

チルノ達は救助した3人をGフライヤーに乗せた後、今回の依頼のメインターゲットがいるエリアに続く道を進んでいった。

3分後

モトウブ 氷結洞窟 最深部

チルノ

「ここに今回のターゲットが居るんだね」

マガシ

「！来るぞ！！」

ディー・ロレイ

『HYAHHAHAHA！！！！！！！！！！』

今回のターゲットであるディー・ロレイはエリアに入ったばかりのチルノ達に奇襲をしかけようとするが先に奇襲を察知したマガシの警告によって失敗に終わった。

フェイト@ムクテンゲキを展開する

「危なかったあ…」

レティ@リガールランサーを展開する

「奇襲とはいいい度胸ね！！」

アトワイト

『奴に氷の攻撃は通用しないわ！！出来る限り火属性の攻撃で攻撃して！！』

チルノ@H10ミズーリを展開する

「あつ！川の中に逃げた！！」

マガシ@クリムゾンを展開する

「このすぐ近くに移動式のボートがある！それに乗るぞ！！」

マガシ以外の全員

「『了解！！』」

デイー・ロレイは奇襲に失敗したと悟ると川の中に潜り込んだ。

チルノ達はマガシの指示でボートの上に乗るとボートは下流に向かって動き始めた。

デイー・ロレイ@氷のブレスを吐く

『GYA O O O O N！！』

フェイト@前転で回避する

「危な！！…って私の居た場所の床が凍っている！？」

レテイ

「そいつのブレスを受けたら氷漬けになるわよ！！」

フェイト@バイパーを展開する

「だったら当たらなければいいだけです！！」

フェイトは自分がさつき居た場所の床が完全に凍結しているのを見て驚愕するがバイパーをすぐに展開してデイー・ロレイの顔に弾を撃ち込んだ。

デイー・ロレイ

『？』

フェイト

「ウソツ！？利いてないの！？」

フェイトは攻撃が聞いていない事に動揺するがデイー・ロレイはそんなフェイトに構わずボートを転覆させようと横から体当たりをし

しかし、それはチルノ達にとって大きな攻撃チャンスであった。

「今が好機だ！一氣に叩くぞ！」

「でやあああああ！！」

! ? ! ? ! ? ! ?

「せい！」

「隙だらけよ!!」

! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

チルノ@ディー・ロレイの背中の上に乗る

フ
エ
イ
ト

チルノ@ディー・ロレイの心臓にカリバーンを突き立てる

チルノはこの隙を逃さずディー・ロレイの背中の上に乗ると手に持つカリバーンをディー・ロレイの心臓に突き立てた。

540

てみる」

チルノ@カリバーンを見る

「うげ…」

チルノはマガシに言われた通りに手に持っているカリバーンを見てみるとあちこちから火花が飛び散り、今にも爆発しそうな状態になっていた。

マガシ

「今のお前は1人ではないのだ。少しは私達を頼れ」

チルノ

「うん。わかった…」

チルノが反省した事を確認したマガシはチルノの新たな武器に関して思案していた。

実はというとこのカリバーンはかつてイルミナスで大幅に改造され、滅多なことが起きない限りは壊れないという頑丈さがウリで、なによりもマガシが使っていた得物だった。

だが、今回のチルノの攻撃でリアクターに限界を超え、壊れてしまったのである。

マガシ

「（おそらく市販品や既成品を使ってもすぐに使い潰されるだろう…。…クバラ・シティでパーツを買って1から作った方がいいだろうな…。）」

チルノ

「うわあ！みんな！ちょっと外を見てみてよ！！」

マガシは今後の方針を決めるとチルノがマガシ達に外を見るように言われて外を見るとモトウブの過酷な環境が生み出した芸術が広が

っていた。

晴れ渡る空…左右に広がる氷でできた壁…とてもじゃないが他のエリアでは見る事の出来ない景色が広がっていた。

マガシ

「ほう…。中々いい景色だ」

フェイト

「綺麗…」

レティ

「私も長い事このエリアで狩りをしていたけどこの景色は初めてだわ…」

アトワイト

『同じ雪の筈なのにこの景色は幻想的ね…』

チルノ@満面の笑み

「これはみんなの思い出にしようね!!」

フェイト達は目の前に広がった景色に感動し、マガシもまた感嘆の声を上げた。

そんな景色に映るチルノの笑顔はフェイト達の心に一生残る思い出となったのだった。

デイー・ロレイとの戦闘から1時間後

モトウブ Gフライヤー内

チルノ

「え！？レティお姉ちゃんとアトワイトお姉ちゃんも一緒に来てくれるの！？」

レティ

「ええ。マガシにスカウトされてね」

アトワイト

『これからよろしくね。チルノ』

チルノ

「うん！！」

チルノはレティとアトワイトがこれから一緒に行動できる事に喜んだ。

その後、ガイークの酒場で依頼の完遂を報告したチルノ達は報酬として2000万メセタを受け取るとマガシの提案でクバラ・シティに向かうのであった…。

これが私達のチームが初めて受けた依頼のおはなしでした…

あの時チルノちゃんの両手から溢れ出ていた蒼い光は何だったのかな？

冷たい感じのする光だったけどどこか温かい光だったなあ…

そういえばなのは達は今どうしているだろう？

元気にしてくれればいいなあ…

番外編「氷精達の冒険」第1話「初依頼」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回はチルノが主人公の番外編の第1話になります。

デュー・ロレイを倒した後に広がる景色は自分がオススメする景色の1つです。

もしP s p o 2またはP s p o 2 Iを持っていらっしゃったら見てみる事をお勧めします！

では(・・・)ノシ

番外編／氷精達の冒険／第2話「新しい武器」

おっさんからの提案であたい達は新しい武器を作る為にクバラ・シティに行く事になった

フェイトお姉ちゃんとレティお姉ちゃんの武器は今でも問題ないけどあたいの場合、H10ミズーリ以外の武器はどれも使い潰れてしまったの

このカリバーンもかなり頑丈に作られていたから今まで戦闘に耐えきれた様なんだけどね

一応壊れてもおっさんが直してくれたけどそれでも限界があるのだからあたいはあの人にカリバーンを直してもらうついでに自分用の武器を作ろうと思ったんだ

レティ

「クバラ・シティね…私もなんかパーツを買って新しい武器でも作ろうかしら…」

アトワイト

『確かに槍だけでは遠距離にいる敵を攻撃できないわね』
フェイト

「うーん私も何かパーツを買おうかな…。バルディツシュを直せそうなパーツがあるといいけど」

バルディツシュ

『申し訳ありません…』

チルノ

「新しい武器かあ…どんな武器を作ろうかなあ…」

ロリコン×3

「『チルノ（ちゃん）は可愛いなあ…（わねえ…）』」「

バルディツシュ@内心深い溜息をつく

『（マスター…）』

クバラ・シティに売っているパーツで自分の新しい武器を作る…
今回はそんなお話だよ！！

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y 番外編

く氷精達の冒険く

第2話「新しい武器」

モトウブ クバラ・シティ

クバラ・シティ…

ここは大手企業の3社の模造品の製造が主に行われている所だがそれ以外にも他の街では手に入らない掘り出し物のパーツがあったり、武器を作る工房もあるため、自分で武器を作る傭兵がよく訪れる街である。

俗に言うクバラ製とはこの街の名が元になっている。

チルノ達は自分達の新しい武器を製作するためにこの街に来ていた。

商人A@金属専門店

「他の街ではお目にかかれない素材があるぜー！！さあ！！見に来てくれー！！」

商人B@鉱石専門店

「この鉱石はつい最近この付近にある鉱山で採掘された物だよー！！」

商人C

「ここは工房を貸出しているよ！！素材が集まって武器を作るのなら是非ウチの店へ！！」

レティ

「ここはいつ来ても活気に溢れているわね」

フェイト

「うわぁ…」

フェイトはクバラ・シティの活気に息を呑み、レティは何て事ないように口を開いた。

チルノ

「あたいはいつも武器を買ってる店に行くけどみんなはどうする？」
レティ@ロリコン

「私も一緒の店に行くわ…（チルノと一緒に行動できるチャンス！）」

フェイト@同上

「私も…（抜け駆けは許さないよレティ！）」

チルノ@満面の笑みを浮かべつつダツシュ

「それじゃあ、あたいはいつもの店に行ってくるね！！」

ロリコン×3@チルノを見失う

「『あ…ちよつと待って…』」

バルディツシュ

『とりあえず我々だけで行動しましょう』

フェイト

「うん。そうだね…」

チルノを見失った3人はバルディツシュからの提案でまずは金属専門店に足を向けるのであった。

Side チルノ

モトウブ クバラ・シティ ジャンク屋L&K

チルノはクバラ・シティの郊外にあるいつも武器を購入している店に来ていた。

チルノ

「ごめんくださいーい！」

商人L

「うん？おお、チルノの嬢ちゃんか！となると新しい武器を作る為に素材を買いに来たのか？」

チルノ@この店の常連

「うん。前に使ってたカリバーンが壊れちゃって…」

商人L@チルノの正体を知っている

「はっはっは！嬢ちゃんのフォトンの強さはそこのニューマンとは別格だからな！よし！それじゃあとっておきを見せてやるぜ！」
チルノ@目を輝かせている

「え！？どんなの！？」

商人L@SEED事変の時はガーディアンズだった

「見て驚け！リュクロスにあったデータを基に作り上げた金属！【ゾル・オリハルコニウム】と【ルナチタニウム】だ！！」

チルノ@目を輝かせる

「おお！！これだったらあたいの能力に耐えられそう！！」

チルノは商人Lが見せた金属を見て目を輝かせた。

この金属は特別な製法で作られており、チルノの能力に耐えられる物であり、チルノが使っていたカリバーンもこの金属が僅かにだが使用されていた。

商人L

「今回は超特価の20kg200万メセタだぜ！」

チルノ

「買った！！」

商人Lの奥さん

「ロウウ…いくらなんでも安すぎだよ…」

ロウと呼ばれた商人L

「今は自作武器がブームで金自体は問題ないだろキサト？」
キサトと呼ばれた女性@元ガーディアンズ

「でも200万メセタは安すぎるんじゃないあ…」

チルノ@所持金1000万メセタ

「えっと…本当の値段はどれくらいなの？キサトお姉ちゃん…」

ロウとキサトのやり取りを聞いていたチルノは不安になりながらキサトに本来の値段を尋ねるとその金額はチルノの想像をはるかに超える値段であった。

キサト

「えーと…この金属の基になる鉱石自体は普通の店でも買えるけど、この金属の精製自体は私達しかできないから10kg400万メセタになるね」

チルノ@顔を青くする

「そのまま買おうとしたら1600万…ヤバイ…おっさんから渡された値段を軽くオーバーしてる…」

ロウ@チルノの武器のメンテナンスも請け負っている

「気にすんな！嬢ちゃんに使われていた武器も喜んでいたからな！今回は俺の言っていた値段でいいぜ！！」

チルノは本来の値段を聞いて購入をためらったがロウは笑いながら最初に言った値段で2つの金属を売った。

チルノ

「ありがとう！ロウ兄ちゃん！」

ロウ@最終鬼畜超絶技術チート持ち

「となるとここで武器を作っていくのか？」

チルノ@ロウから武器作りを学んだ

「うん。あと、おっさんも連れてきていい？」

ロウ@マガシの過去を知っている

「ああ、構わないぜ！」

チルノ

「ありがとう！じゃあ早速連絡を入れるね！」

キサト@空気を呼んだ

「（とりあえず4人用の客室の準備をしておいた方がいいかも…）」

チルノ@通信機のスイッチを入れる

「おっさん！チルノだけどいつももの店に居るよー！」

マガシ@通信機越し

『ぬ。チルノか。その表情だかおといい物が手に入ったようだな』

チルノ

「うん。工房の使用も許可してくれたよ」

マガシ@クバラ・シティの外に居る

『わかった。今からそちらに向かう』

マガシとの通信を終えたチルノは通信を切り、マガシが到着するまでの間、ロウの店の手伝いをすることにした。

S i d e o u t

S i d e フェイト

モトウブ クバラ・シティ

チルノと逸れたフェイト達はとりあえず自分達の買い物を済ませる為に金属専門の店に来ていた。

フェイト

「どう、バルディッシュ。何か修理に使えそうな物はある？」

バルディッシュ

『修復どころかここにある素材なら私の改修が可能でしょう』

レティ

「ガチリニウム4kgにグルタイト4kg…それにパウラルが手に入ったわね。これである程度の武器は作れるわ」

アトワイト

『今回は素材を使わない傭兵が大量に鉱石を売っていったらしいから安く手に入ってたわね』

一方フェイト達はそれぞれ欲しかった素材が安値で手に入った事を喜んでいた。

そんなフェイト達にマガシから通信が入る。

マガシ@通信機越し

『こちらマガシだ。チルノの奴が武器製作に掛かるため私はチルノの居る店に向かう』

フェイト

「チルノちゃんも素材が見つかったんですね」

マガシ

『うむ。ジャンク屋L&Kという店に居る。そちらも買い出しが終わり次第その店に向かえ』

レティ

「わかったわ。じゃあすぐに向かうわ」

マガシ

『ではな…』

マガシからの通信でチルノはもう買い出しを済ませていると知ったフェイト達はチルノの居る店に向かうのであった。

S i d e o u t

30分後

モトウブ クバラ・シティ ジャンク屋L&K

フェイト達は現地の商人からの案内でチルノ達が居る店に入るとそこには作業服姿のチルノがパーツを組み立てていた所だった。

チルノ@作業服

「あつ。みんなも欲しい素材が買えたんだね」

バルディツシュ

『ええ。しかし、単独で行動するのは感心しませんよ』

チルノ

「う…ごめん」

レティ

「それでチルノがいい素材が入ったのなら構わないわ」

チルノ@屈託のない笑み

「レティお姉ちゃん…ありがとう！」

フェイト・レティ・アトワイト

「…」（よかった…いつものチルノちゃん^{かお}の表情になった…）『…』

チルノは合流したフェイト達を笑顔で迎えるがバルディツシュからのお小言で少しシュンとしたあとレティからの助け船でいつもの笑顔になり、フェイト達もほっとした所でマガシは指示を出した。

マガシ

「まあ良い。今は各々自分の武器を作る事に集中しろ」

ロウ

「ここにある機材は隙に使ってくれてもいいぜ！」

フェイト

「いいんですか？」

ロウ

「ああ。マガシの旦那から料金を貰っているからな！」

マガシ

「というわけだ。サッサと武器製作に掛かれ」

チルノ

「はい！」

その後、チルノ達は自分の武器を思い思いに作り始めた。

Side チルノ

チルノ@H10ミズーリの代わりとなる銃を作っている

「えーと…この配線はこうして…」

ロウ@チルノのアドバイザー

「お。だったらこうしてみたらどうだ？」

チルノ

「ありがとう。ロウ兄ちゃん」

ロウ

「いって！何せ明日にはメインの武器作りがあるからな！」

チルノ@配線を繋いでいる

「ねえロウ兄ちゃん」

ロウ

「どした？」

チルノ

「ロウ兄ちゃんの作ってくれたカリバーンを壊してごめんね…」

ロウ@チルノの持っているカリバーンを作った本人

「ああ。あいつはチルノの剣になれて喜んでいたぜ」

チルノ@カリバーンをロウに渡す

「そっか…。じゃあロウ兄ちゃんに返すね」

ロウ@チルノからカリバーンを受け取る

「ああ。もう一度嬢ちゃんの剣になれるように改造してやるさ」

チルノ

「ありがとう…ロウ兄ちゃん」

チルノはピースメイカーの製作に成功した。

S i d e o u t

S i d e フェイト

フェイト

「これで…壊れた所の改修は完了…かな？」

バルディッシュ

『ええ。これで以前よりも総合性能が20%アップしました』

フェイト

「ごめんね。バルディッシュ…私が死にたいと思ったせいであんな損傷をしちゃって…」

バルディッシュ

『いえ。ですがその損傷のおかげでこういった改修の機会が得られたので問題ありません』

フェイト

「そういえばここまで大幅な改修は闇の書事件以来だね」

バルディッシュ

『改修する必要がありませんでしたからね』

フェイト

「JS事件の時はかなりきつかったもんね…」

バルディッシュ

『ええ。ですから現状で回収できたのは幸いです』

フェイト

「でもいいの？カートリッジシステムを廃止しちゃって」

バルディッシュ

『カートリッジが手に入らないここでは無用の長物です。ですから代わりにこの世界でも比較的よく手に入り、別の世界に行っても生産が容易なフォトンチャージをカートリッジにしましたし、フォトンチャージとシフタライドの同時使用でカートリッジを使用した時以上の効果ができるようになりましたから問題ありません』

フェイト

「ならいいけど…」

フェイトによってバルディッシュが改修された。

改修内容は以下の通り

- ・デバイスの剛健性が20%上昇
- ・カートリッジシステムの廃止
- ・→に伴いフォトンチャージとシフタライドを使用したシステムを採用
- ・ナノトランサーとの併用を可能に
- ・全体的なエネルギー効率が飛躍的に上昇

S i d e o u t

S i d e レティ

レティ

「とりあえず射撃武器を作ろうかしら」

アトワイト

『それならライフルタイプを作ってみたらどうかしら?』

レティ

「それ採用」

1時間後

アトワイト

『じゃあこの配線はこうして…』

レティ

「完成ね」

アトワイト

『この傭兵は自作の武器を作る事が多いと言っていたけど本当のようね』

レティ

「規格品が合わない場合があるから当然の流れね…」

アトワイト

『だからといってこの武器の出来は反則だわ…』

レティはリベリオンとブラックリベリオンの製作に成功した。

Side out

Side チルノ

2日後

それぞれの武器を製作したチルノ達は1日ロウの店で泊まり、フェイト達は消耗品の買い出しに行き、チルノとマガシはチルノの新たな剣の製作の為の準備をしていた。

チルノ@作業服+鉢巻き

「材料よし、機材よし、力の制御…よし！」

マガシ

「準備は出来たようだな。では始めるぞ」

チルノ

「おう！！」

ロウ

「いつでもいいぜ！！」

マガシの合図の後、チルノは炉に自身のありったけのフォトンを炉の中に叩きこんだ。

炉にチルノの放ったフォトンの塊が直撃すると炉の中に入っていたルナチタニウムが溶け始めた。

ロウ@持っている鎚でルナチタニウムの塊を叩く

「どおおおりゃあああああ!!」

マガシ@同上

「ぬっっっっっっっん!!」

ロウとマガシは溶け始めたルナチタニウムを全力で叩き始め、チルノは自身のフォトンを途切れることなく炉に供給し続けた。

6時間後

チルノ@フォトンを出し過ぎで眠っている

「きゅー…」

ロウ@疲労困憊

「流石に疲れたぜ…」

マガシ

「だがいい武器が出来た」

マガシは打たれた3振りの剣の内、チルノの身の丈ほどの大きさを誇る大剣を手についた。

マガシ

「重さは約25kg。チルノの最大出力のフォトンをその身に受けてさらに切れ味を増すか…いい武器だ」

マガシは自分達の仕事に満足し、ある程度疲労が回復したロウはもう1振りの打ち刀を手についた。

ロウ

「重さは800g位か…。ここまで軽いのに切れ味と頑強さを兼ね

備えているな…我ながらいい出来だぜ!!」

チルノ

「うつん…」

ロウもまた自身の仕事に満足していると先程まで眠っていたチルノが目を覚ました。

ロウ@3振り目の剣を渡す

「お。起きたようだな! 見ろよ! これが俺達の作った武器だぜ!!」
チルノ@ロウから剣を受け取る
「これが…あたいの新しい剣…」

チルノは自身が作った剣を受け取ると剣から流れる力が確かにチルノの剣だという事を物語っていた。
チルノが自分の作った剣を見ているとロウは疲れた体に鞭打って柵まで歩くと柵にあった細身の長剣を取り出し、チルノに渡した。

ロウ@細身の長剣をチルノに渡す

「それとこれは俺からのプレゼントだ」

チルノ@ロウから細身の長剣を受け取る

「!これって…」

ロウ

「ああ。嬢ちゃんが使っていたカリバーンを改造した奴だ」

チルノ@ロウに抱きつく

「ロウ兄ちゃん…ありがとう!」

ロウの渡した長剣とはチルノが使っていたカリバーンをチルノ達が休んでいる間にロウが持つ全ての技術をつぎ込んで作り上げた物であった。

チルノは自分の相棒が再び自分と共に戦える事を喜び、ロウに抱き

ついた。

ロウ

「どわっ！？いきなり抱きつくなよ！」

チルノ

「あつ。ごめん」

マガシ

「流石に今日出発する事は不可能だな…」

キサト

「それならもう一晩泊っていつでもかまいませんよ」

チルノ

「いいの？」

キサト

「ええ。あんなにもいい笑顔のロウは久しぶりに見たから。そのお礼も兼ねて…ね？」

チルノ

「ありがとう！」

マガシ

「ではもう一晩世話になる」

その後、チルノ達はロウの店でもう一晩過ごし、朝を迎えた。

チルノはクラウ・ソース、ガーベラストレート、オデッセイの製作に成功。

ロウからエリュ・シオーヌを受け取った。

S i d e o u t

翌日

モトウブ クバラ・シティ ジャンク屋L&K前

フェイト達はこのクバラ・シティから出発するための足の確保の為に先にGフライヤーの貸出場に向かい、チルノは遅れてロウの店の前でロウとキサトに別れの挨拶をしていた。

ロウ

「それじゃあ気をつけてな」

キサト

「怪我に気をつけてね」

チルノ@作った剣はナノトランサーに反応しなかったので直に装備している

「ロウ兄ちゃん達も元気でね!!」

ロウ

「おう!じゃあまた何かあったら俺の店に来いよ!!」

チルノ

「うん!!じゃあ…行ってきます!!」

チルノはロウ達に頭を下げるとマガシ達の居るGフライヤー貸し出し場まで駆けていった。

新たな剣をその手に持って…。

これがあたいの武器作りの話だよ!

バルディッシュが言っていたけどこの剣はフェイトお姉ちゃんが居た組織でロストギアと呼ばれるクラスの剣でもしかしたらその組織がこの剣を奪いに来るかもしれないって言ってた…

この剣にはおっさんとロウ兄ちゃんの思いが込められている剣…だから時空管理局って奴らには渡さないんだから!!

番外編く氷精達の冒険く第2話「新しい武器」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は番外編第2話となりました。

今回はチルノ達の新しい武器を作るというおはなしでした。
次は番外編のスクリーンチャット集と設定集を投稿します。
では(・・・)ノシ

スクリーンチャット集@番外編

Chat 1 「何で平気なの？」 ラプチャの大軍と戦闘後

氷結洞窟ブロック2

フェイト@生身の人間

「うう… ホットドリンクは飲んだ筈なのにまだ寒い…」

チルノ@寒さに対して異常に強い

「あたいは平気なだけだなあ…」

レティ@冬の妖怪

「あら、奇遇ね。私も平気よ」

マガシ@キヤスト

「私の場合は凍結さえしなければ問題ない」

アトワイト@そもそも剣に寒さとか関係ない

『私は感覚自体がないから平気ね』

フェイト

「うう… みんなずるい…」

Chat 2 「チルノの力」 チルノがディルナズンを人の姿に戻した直後

氷結洞窟ブロック2

チルノ@玉のような汗を掻いている

「ふう…。これでこの人達も助かる…」

フェイト

「チルノちゃん。大丈夫？」

チルノ

「大丈夫。なんたってあたいは最強なんだから！」

マガシ

「（かなり無茶をしているな…）」

チルノ@小声

「だってこの人達はあたいの同族のせいでこんなめに遭ったんだから…」

レティ

「？何か言ったかしら？」

チルノ

「うつん。なんでもない！さ、行こ！！」

Chat3 「どうしよう…」 ディー・ロレイ撃破後

ガイクの酒場前

チルノ@涙目

「うつ…。どうしよう…」

フェイト@滝汗

「チ、チルノちゃんが無事だったからいいよ！」

レティ@同上

「そ、そうよ！武器くらいならすぐに買い替えられる筈よ！」

マガシ

「いや。こいつの武器に関してはそうは言っていられん」

アトワイト

『え？』

マガシ

「こいつの武器は少し特殊な物でな…作れる者は1人しかおらん」
フェイト

「そ、そんな…」

アトワイト

『作った本人に会うしかないわね』

マガシ

「というわけで明日からクバラ・シティに行くぞ」

Chat 4 「なにそれこわい」 フェイト達と合流後

ジャンク屋L&K

チルノ@作業服

「そついやみんなは素材を買えたの？」

フェイト@私服

「うん。バルディッシュの話だと改修もできるみたい」

バルディッシュ

『ここにある素材はどの管理世界でも手に入らない位の物ばかりでした』

レティ@私服

「私の方もいい素材が手に入ったわ」

アトワイト

『ところでそういうチルノはいい素材が手に入ったのかしら？』

チルノ@満面の笑み

「うん！ゾル・オリハルコニウムとルナチタニウムが格安で買ったの！」

バルディッシュ

『2つとも超がつく程の高級な素材ですね。それで値段は？』

チルノ

「ロウ兄ちゃんがまけてくれたから400kg400万メセタで売ってくれたの！」

バルディッシュ

『…………』

フェイト

「ねえバルディッシュ。その金属の本当の値段はどれくらいなの？」
バルディッシュ

『管理局の基準だと1kg1000万になりますね』

フエイト・レティ・アトワイト
「『なにそれこわい』」

Chat5 「その頃フエイト達は…」 チルノとマガシが武器を
作り始める前

クバラ・シティ 中央区

フエイト@紙袋を抱えている

「えーと…モノメイト、デイメイト、トリメイト…よし！揃った」
レティ@同上

「こつちも購入が終わったわよ」

アトワイト

『そういえば…』

フエイト

「なに？アトワイト」

アトワイト

『フエイトは何故チルノちゃんが好きになったのかしら？』

フエイト@顔を赤らめる

「えつと…それは…」

少女説明中…

レティ

「なるほど。貴女もなのね」

フエイト

「貴女もって…レティさんですか？」

レティ

「ええ。正直に言うと私達はそれぞれ自分の故郷からたった1人ば
つちの状態で飛ばされたの」

アトワイト

『私の場合はすぐに貴女達と出会えたからよかったけど遭った当初のレティは酷かったわ…』

レティ@顔を赤らめる

「ちよつとアトワイト！あの時の私を話すのはやめて頂戴！」

フェイト

「あはは…。私達つてある意味似た者同士ですね」

アトワイト

『そうね。たぶん考えている事は同じだと思うわ』

レティ

「そうね」

フェイト

「じゃあ、みんなで言うてみましょうか。せーの！」

3人

「『全てはあの娘の笑顔の為に！』」

Chat 6 「お披露目」 チルノがフェイト達と合流した直後

Gフライヤー貸出場

チルノ@駆け足でフェイト達に近寄る

「お待たせー！！」

フェイト

「あつ。チルノちゃん。丁度私達もGフライヤーを貸してもらえた所だよ」

レティ@チルノが背負っている剣に気がつく

「あら？貴方の持っている剣は何かしら？」

チルノ

「あ。これ？これがあたいの新しい剣なのー！！」

バルディッシュ

『！？』

フェイト

「どうしたのバルディッシュ？」

バルディッシュ

『この3振りの剣から非常に高い魔力を感知しました』
フェイト

「え？でも魔力の宿っている武器は結構多いよ？」

バルディッシュ

『いえ。その魔力の量が異常なんです』

フェイト

「とりあえずどれくらい？」

バルディッシュ

『どの剣も軽く見てジュエルシールド21個分だと思われます』

フェイト@滝汗

「え？ウソ？」

バルディッシュ

『残念ながら事実です』

チルノ@フェイトを心配そうに見る

「どうしたのフェイトお姉ちゃん？」

バルディッシュ

『単刀直入に言います。その剣を狙う者が現れると思います』

チルノ

「え？なんで？」

バルディッシュ

『貴女の武器を狙う組織がいると言っ事です』

チルノ@好戦的な笑みを浮かべる

「大丈夫！この剣は絶対に奪わせないよ！なんたってこの剣はあたいの大切な相棒なんだから！！」

スクリーンチャット集@番外編（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は番外編1話〜2話までのスクリーンチャット集になっています。

大体はチルノ達の私生活や次の話に行く前の小話を楽しんでいただけたなら幸いです。

では（・・）ノシ

番外編@キャラ設定+α（前書き）

番外編「氷精たちの冒険」の1話、2話に登場するキャラクターなどの設定と何故SEEDフォームが現れた理由が記述されたネタバレとなっています。

苦手な方は閲覧しないことを推奨します。

番外編@キャラ設定+α

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y 番外編

└ 氷精達の冒険┘

キャラ設定+α

【キャラ設定】

チルノ（4歳@外見年齢は13歳）

番外編の主人公。

マガシとフェイトでチームを組み、自身はリーダーを務める。

チームでの役割は依頼の受託と報告。

戦闘では極めて高い身体能力を生かした攻撃で相手を問答無用で叩き斬る戦闘スタイル。

本人には自覚は無いが人を引き付ける才能があり、マガシはいち早くその才能に気がついてチルノをリーダーにした。

また、稀に人をロリコンとしてしまう場合がある。

SEEDフォームからD因子を抜き取る力を持っており、この力でSEEDフォームになった何人もの人々を救っている。

使用武器はクラウド・ソウス、ガーベラストレート、オデッセイ、ピースメイカー。

好物：冷たい食べ物全般、タマゴサンド

好きな人：マガシ、ロウ、キサト、チームの仲間

嫌いな物：自分から大切なものを奪う者

レンヴォルト・マガシ（70歳）

チルノのチームに所属するキャスト。

元エンドラム機関隊長にしてイルミナスのコピーキャスト。

リュクロスの封印の後、自身の秘密基地に匿っていたチルノと共に傭兵稼業を始める。

チームでの役割は方針決定や人員確保。

戦闘では単身で突っ込むチルノのサポートをする事が多いが単独での戦闘になると戦闘狂へと豹変する。

自身がその身に付けた技術と圧倒的なパワーで敵を圧倒する。

本人に自覚は無いがツツコミ体質の持ち主でチルノのボケとマガシのツツコミはこの2人の名物になっている。

また、チルノの過去を知る数少ない人物である。

使用武器はクリムゾンとツーヘッドラグナス、ヒュージカッター。

好きな事：強者との決闘

嫌いな事：戦いの水を刺す事

フェイト・テストロッサ・ハオラウン（19歳）

チルノのチームに所属する少女。

元時空管理局執政官兼機動六課副隊長。

心神喪失状態でググ砂漠を彷徨っていた所をゴ・ヴァーラに襲われ、チルノに助けられた後チームに所属する事になる。

チームでの役割はチルノの護衛。

戦闘では高い身体能力を生かした高機動で相手を翻弄し、怯んだ所でトドメを刺す。

ロリコン1号。

好きな物：チルノの笑顔

嫌いな物：チルノの笑顔を奪う者

苦手な場所：寒い場所、狭い場所

レティ・ホワイトロック（年齢不明）

チルノのチームに所属する女性。

幻想郷出身の冬の妖怪。

幻想郷でのある事件に巻き込まれてここグラールにやってきた。
モトウブの氷結洞窟でディー・ロレイを討伐しに来た時に寒さで凍死しかけているフェイトとフェイトに泣きつくチルノ、どうするべきか悩んでいるマガシと遭遇、瀕死のフェイトを救い、目的が一緒だったので同行した縁でマガシにスカウトされ、チームの一員になった。

チームでの役割は依頼内容の分析と地形の分析。

戦闘では自身の防御力の高さを生かしたゴリ押し戦法。

ロリコン2号。

好きな物：チルノの笑顔

嫌いな物：チルノの笑顔を奪う者

苦手な場所：暑いエリア全般

アトワイト（年齢不明）

レティが所持する短剣。

異世界で作られた意思を持つ剣。

神の眼を破壊する時に自身も死んだ筈だったが何故かモトウブの雪山地帯の岩に刺さっていた所をレティに回収された。

チームでの役割は健康管理。

単身での戦闘は不可能。

ロリコン3号。

好きな物：チルノの笑顔

嫌いな物：チルノの笑顔を奪う者

悩み事：それぞれ別の種族が集まっている為、健康管理をする事が難しい事

ロウ・ギョール（27歳）

クバラ・シティでジャンク屋を営む男性。

元ガーディアンズ。

元々は別の世界に居たが自分の居た世界の長のやり方についていけず、この世界に来た。

グラールに来てからは見た事のないマシンが数多くある為、この世界に来てよかったと思っている。

ガーディアンズに居たのはリュクロスに一番近づけるのがガーディアンズだった事とジャンク屋を設立するための資金稼ぎの為。

チルノの使っている武器は全て彼が製作したものであり、チルノに武器の製作の仕方を教えたのも彼である。

チルノとマガシの両方の過去を知っている数少ない人物。

奥さんとの関係は良好である。

好きな事：機械弄り、新しい武器の製作、新しい技術に触れる事

嫌いな事：物を壊すこと

キサト ヤマブキ（25歳）

ジャンク屋L&Kを営むロウの妻

元ガーディアンズ。

ロウと同じ世界の出身でロウが別の世界に行くなら私も行くといった形でついてきた。

引っ込み思案な性格だが言う時は言う。

ロウと長い付き合いの末に結ばれた。

ロウと共に行動していた為かある程度だがこの先に起こる事が予測できるようになった。

チルノとマガシの過去を知る数少ない人物。

好きな事：ロウと一緒に居る事

苦手な事：怖い場所に行く事

【武器・デバイス】

チルノ専用カリバーン

元々はG R M社が作られた物がイルミナスで改造され、更にロウによって改造されたソード。

同じ型のカリバーンと比較しても頑強性、出力共に段違いの性能を誇る。

デイー・ロレイとの戦いで中破したが、ロウによってエリユ・シオリヌとして再びチルノの手元に戻った。
属性は火。

クラウ・ソウス

チルノとマガシとロウによって製作された大剣。

芯の部分はルナ・チタニウムで出来ており、刃の部分はゾル・オリハルコニウムによって出来ている。

3振りの剣の中で最も破壊力が高い。

チルノの最大出力のフォトンで溶かされて打たれた剣のためチルノの力に十分耐える事ができ、尚且つ切れ味と破壊力を上昇させる事ができる。

バルディッシュの分析によるとこの剣をはじめとする3振りの剣にはジュエルシード21個分に相当する力が込められているらしい。
属性は光。

見た目はP S P O 2 Iに登場する大剣【ザンバ】の色を白くしたイメージ。

ガーベラストレート

チルノとマガシとロウによって製作された打ち刀。

芯の部分はルナ・チタニウムで出来ており、刃の部分はゾル・オリハルコニウムによって出来ている。

切れ味は3振りの剣の中で最も高い。

チルノの最大出力のフォトンで溶かされて打たれた剣のためチルノの力に十分耐える事ができ、尚且つ切れ味と破壊力を上昇させる事ができる。

バルディッシュの分析によるとこの剣をはじめとする3振りの剣にはジュエルシード21個分に相当する力が込められているらしい。属性は火。

見た目はガンダムアストレイレッドフレームの装備である【ガーベラストレート】

オデッセイ

チルノとマガシとロウによって製作された短剣。

芯の部分はルナ・チタニウムで出来ており、刃の部分はゾル・オリハルコニウムによって出来ている。

3振りの剣の中で最も取り回しがいい。

チルノの最大出力のフォトンで溶かされて打たれた剣のためチルノの力に十分耐える事ができ、尚且つ切れ味と破壊力を上昇させる事ができる。

バルディッシュの分析によるとこの剣をはじめとする3振りの剣にはジュエルシード21個分に相当する力が込められているらしい。

属性は氷。

見た目はモンスターハンターシリーズに登場する片手剣【オデッセイ】。

エリュ・シオーヌ

中破したチルノ専用カリバーンをロウが改修し、生まれ変わった剣。改修前と比べると外観が大きく変わったがこれは構成している金属とフォトンの属性を変えた為である。

3振りの剣と比べると見劣りするがゾル・オリハルコニウムでできたこの剣は他のソードと段違いの性能を誇る。

属性は雷。

バルディッシュ現地改修仕様

中破したバルディッシュをフェイトがグラールにある素材を使用し
て修復及び改修したもの。

改修内容は以下の通り

- ・デバイスの剛健性が20%上昇
- ・カートリッジシステムの廃止
- ・→に伴いフォトンチャージとシフタライドを使用したシステムを
採用
- ・ナノトランサーとの併用を可能に
- ・全体的なエネルギー効率が飛躍的に上昇
属性は雷。

【世界観*本編及び番外編のネタバレ注意】

何故SEEDフォームがいた？

理由はただ1つ。

合の時をもつてしてもグラール全体のSEEDを浄化されなかった
ため。

中途半端に浄化した結果SEEDフォームになる前の生物の意思の
みが戻り、死ぬこともできないため、人が滅多にやってこない土地
に移動していた。

チルノ達が遭遇したSEEDフォームは移動中だったSEEDフォ
ームであった。

現在のモトウブにはこのSEEDフォームが多数生息している。

チルノは中途半端に残ったD因子を己の体内に取り込むことでSE
EDフォームになった者達を開放している。

尚、このSEEDフォームは全てビーストがSEEDフォーム化し
たものである。

番外編@キャラ設定+α（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は番外編の設定集となっております。

番外編は本編の話の節目につき2話投稿する予定です。

次は外伝を投稿する予定です。

では（・・・）ノシ

マリサたちがこのこうまかんに来てちょうど1年がたちました。
マリサはいつも明るくてよく一緒にあそびに行きます。

レイムはきほんてきに自分からこうどうしようとしなければどこま
った時があつたらいつも手伝ってくれます。

アリスはよくお人形作りをしていてたまにわたしに作った人形をく
れます。

パチュリーはすごく頭がよくて学校の宿題をおしえてくれます。

ヨウムはお料理が上手でよく一緒にお料理をしています。

天子お姉ちゃんはレミリア様や美鈴お姉ちゃんがいない時、わたし
たちを守ってくれます。

みんなわたしの大切な友達です。

だからはやくお兄様と会わせてあげたいです。

サクヤの日記1096ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイ

ド奮闘日記

4ページ目前編 「十六夜 咲夜、思い出の味を食べる」

幻想歴492年 AM・08:20

幻想郷第3大陸 紅魔館2階中央エリア レミリアの私室前

咲夜達はレミリアから呼び出しを受け、指定された時間よりも少し
早めに来ていた。

咲夜

「レミリア様はなんでわたしたちをよんだのかな？」

霊夢

「魔理沙、あんたまた何か悪い事をしたんじゃないの？」

魔理沙

「わ、わたしは何もやってないよ！」

天子

「何故呼ばれたかはレミリアさんに聞けばいいでしょ」

天子は口論を始めそうになった魔理沙と霊夢を宥め、咲夜はドアをノックしようとしたらレミリアが出てきた。

レミリア

「ふむ。全員揃っているようだ。話は部屋の中でするから入ってくれ」

天子

「わかりました。ホラ！レミリアさんを待たせるんじゃないわよ！」

咲夜達

「……………はい……………」

天子はレミリアの話を聞く為にソワソワしている咲夜達を促してレミリアの部屋に入った。

幻想郷第3大陸 紅魔館2階中央エリア レミリアの私室

咲夜達はレミリアに促されて席に座るとレミリアは早速本題を話し始めた。

レミリア

「今日お前達を呼んだのは3日後にアーリア村で行われる大収穫祭にお前達を連れていく事を伝える為だ」

咲夜

「大収穫祭？」

咲夜達は聞きなれない単語に顔をかしげると天子が呆れながらその

単語の意味を説明した。

天子

「あんたらねえ……。大収穫祭っていうのはその名の通り豊作を感謝して秋の神である静葉様と稔子様をお招きして行っ祭りの事よ」

霊夢

「でもわたしたちが居た時にはそんなお祭りは無かったよ？」

レミリア

「この収穫祭は4年に1度しか行われず、あまり有名でない祭りだ。知らないのは仕方ないだろう」

レミリアは苦笑しながら咲夜達に助け船を出した。

咲夜は勿論、魔理沙達がこの大陸に来たのは咲夜がこの紅魔館に流れてく1年前の幻想歴488年の冬であり、その時には大収穫祭が終わっていたので知らないのも無理はないのである。

更に言うならアーリア村の存在自体を知っている者はこの大陸以外ではせいぜい10人、13人位の者しか知られていない（いずれもカービイの身柄目的の各大陸の権力者）。

魔理沙

「ということは3日後にそのお祭りに行けるの？」

レミリア

「ああ。去年あの村を尋ねた理由がその祭りに私達も参加するという事をレジス村長に伝える為だったからな」

子供達

「……わーい！！」「……」

天子

「まったくこいつらは……。じゃあ3日後の出発に備えて準備をします」

レミリア

「ああ。もつとも持っていく物は殆どいらないな」

天子@暇を見て美鈴の喫茶店でバイトをしている

「院長や孤児院の子供達のお土産を買ってあげないといけませんからね。その為の準備です」

レミリア

「そうか。では出発は3日後の午前7時30分だ」

天子

「わかりました。ホラ！さっさと行くわよ！！」

咲夜達

「「「「「はい」「」「」「」」」」」

天子は咲夜達を引き連れてレミリアの私室を出るとレミリアは小さくため息をついた。

レミリア

「真面目な事は構わないがたまには息抜きしないといかんぞ天子……」

この時のレミリアの表情は真面目な娘を心配する母親の表情であった。

50分後 AM・09:30

幻想郷第3大陸 紅魔館1階中央エリア 上海アリス紅茶館

3日後の出発の準備をある程度済ませた咲夜達は美鈴が経営している喫茶店に来ていた。

咲夜

「美鈴お姉ちゃんいるー？」

妖夢

「今日は休みだって書いてあったけど……」

美鈴

「あつ。咲夜ちゃん！それに天子ちゃんもいるのね？丁度良かったわ！」

天子

「丁度良かった？」

美鈴

「ええ。新メニューを作ったのはいいいけど食べてくれる人がいなくて…だけど天子ちゃんや咲夜ちゃん達なら大丈夫だわ！今からその試作品を持ってくるわね！」

咲夜

「新メニューかあ…楽しみ！」

この喫茶店はこのフードコートエリアの中でも非常に人気が高い店であり、この時間帯はまだ経営していないが美鈴は新しいメニューの研究の為に店を休業していた。

しかし、美鈴はいざ出来た時に誰が試作品を食べてもらうのかを失念し、途方に暮れていた時に咲夜達がやってきたのである。

美鈴はすぐに人数分の新メニューを持ってきた。

美鈴

「お待ちせ！これが新しい新メニュー『タマゴサンド』よ！」

天子@この店でバイトをしている為メニューを知っている

「あれ？この店のメニューでタマゴサンドはありましたよ？」

美鈴が持ってきたのは何の変哲もないただのタマゴサンドだった。天子は美鈴が持ってきたタマゴサンドを見て少し呆れたように美鈴に尋ねると美鈴はそんな天子に自信満々の表情で答えた。

美鈴

「食べてみれば分かるわ！そうすれば違いに気がつく筈だから」

天子

「はあ…それじゃあ頂きます」

咲夜達

「……………いただきます！……………」

天子は美鈴の迫力に観念すると先に咲夜達がタマゴサンドを食べ始めた。

霊夢

「おいしー！」

魔理沙

「ウマーー！！」

妖夢

「すごくおいしいです！」

アリス・パチュリー

「「おいしい……………」」

天子

「これは…確かに以前のタマゴサンドより美味しいですね」

美鈴

「ちよつと出張で遠くに言った時にこのタマゴサンドを食べてね、それを作った人にレシピを教えてもらったの」

天子達は美鈴の新タマゴサンドに舌鼓を打つが咲夜は1口食べた後何も喋らなくなった。

美鈴達は心配になって咲夜の顔を覗くと咲夜は涙を流していたのである。

咲夜は涙を拭わずに質問した。

咲夜

「美鈴お姉ちゃん」

美鈴

「な、なあに？咲夜ちゃん」

咲夜

「このタマゴサンドを教えた人の特徴って16才くらいの男で、黒髪と白い肌、紅い目をしてなかった？」

美鈴

「え、ええ。そうだけど…」

咲夜

「教えてもらったということはレシピを書いた紙があるんだよね？」

美鈴

「確かにあるわよ」

咲夜

「そのレシピを見せてくれていい？」

美鈴

「え、ええ。構わないわよ」

美鈴は咲夜から漂うオーラに押されて厨房にレシピを取りに行き、そのレシピを咲夜に渡した。

咲夜

「まちがいない…お兄様の文字だ」

霊夢

「え？咲夜ってお兄さんが居たの？」

咲夜

「血はつながっていないけど…」

美鈴

「もしかしてお嬢様が言っていた咲夜ちゃんのお兄さんってあの人がったの！？」

咲夜

「たぶんそうだと思う」

美鈴

「そういえばあの人も『サクヤ』って名前の妹分がいるって言うってわ…」

美鈴はまさか自分にこのタマゴサンドのレシピを教えた人物が咲夜の義兄だとは思わなかったのである。

咲夜

「お兄様…幻想郷^{こゝろ}に来ていたんだ…」

天子

「世の中って狭いわね…」

その後しんみりとした空気が続いたが魔理沙達が咲夜の分のタマゴサンドを食べようとした所を咲夜が目撃、最後のタマゴサンドをめぐって喧嘩が起こりそうだったのを天子と美鈴が仲裁し、その日は解散となったのだった…。

同刻

幻想郷第1大陸 某所

??

「これでよし…っと…」

?

「シン…貴方の妹分に会わなくてもよかったの?」

シンと呼ばれた男

「元気に過ごしていると分かったただけ十分です。お世話になりました。紫さん」

紫と呼ばれた女性

「本当に行くのね?」

シン

「はい。俺がこの世界にいつまでも留まっていると奴らがこの世界

を察知してしまう…」

紫

「そう。貴方の旅に幸があらんことを…」

シン

「じゃあ、行ってきます」

紫

「ええ…。いつてらっしゃい…」

どうも飛鳥です。

今回は外伝の前編となります。

ついに本編の主人公であるシンがほんの少しだけ出ました。

番外編で彼が登場するのはあと1回だけです。

では（・・・）ノシ

おとといは美鈴お姉ちゃんに新メニューを食べてほしいと言われ、
ました。

その時食べたタマゴサンドの味はお兄様がわたしにおしえてくれた
タマゴサンドと同じ味でした。

まさかお兄様の味をここで食べられると思っていませんでした。

明日はアーリア村でおこなわれる大しゅうかく祭に行ってきます。

お兄様はお祭りに行った事がありますか？

サクヤの日記1098ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイ
ド奮闘日記

4ページ目後編 「十六夜 咲夜、初めてお祭りに行く」

幻想歴492年 AM・08:30

幻想郷第3大陸 紅魔館 玄関前

咲夜達は3日前に指定されていた場所で待機しているとガンダムに
乗ったレミリアが咲夜達の前にやってきた

レミリア@ガンダムのコックピット

『皆、準備が出来たようだな』

天子

「はい。みんな集まっています」

咲夜

「レミリア様、どうやってアーリア村に行くのですか？」

レミリア

『ドダイを使ってアーリア村に行く』

咲夜の質問にレミリアはガンダムを乗せている機体…ドダイ改をガンダムで指を指して答えた。

レミリア

『皆が乗り次第すぐに出発する』

天子

「わかりました」

咲夜達

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

咲夜達はレミリアの指示通りにドダイ改に乗るとドダイ改は咲夜達とレミリアの乗ったガンダムを乗せて飛び立っていった。

1時間後 AM・09:30

幻想郷第3大陸 アーリア村

しばしの空の旅の後、咲夜達はアーリア村に入ると既に大収穫祭が始まっていた。

レミリア

「祭りは既に始まっているようだな」

咲夜

「すごくにぎやかですね！」

天子

「まあ4年に1度のお祭りだから賑やかになるのは当たり前ね」

アーリア村の至る所に屋台が立ち並び、客寄せをする商人の声、その声に引き寄せられて買っていく人々の姿、どれも咲夜は見た事のない景色だった。

咲夜がこの光景に目が言っていると魔理沙はレミリアにある事を頼

んだ。

魔理沙

「ねえ。レミリアお姉ちゃん」

レミリア

「どうした？魔理沙」

魔理沙

「院長に顔を見せに行きたいけど行ってもいい？」

レミリア

「ああ。構わない。だが、その時は皆で行くでしょう」

魔理沙

「うん。わかった」

魔理沙の頼みとは自分の居た孤児院の院長ステップンに（カービィ）に会いに行くというものだった。

無論レミリアは彼に会っていくつもりなので承諾した。

1時間後 AM・10:30

???左

「皆様。今日は私達の為にこのような祭りを開いてくれた事を深く感謝します」

???右

「いつもこんなお祭りをしてくれてありがとうねー!!」

祭りも佳境に入ってきた所でアーリア村の中央にある広場に紅い服装をした2人の少女がいた。

咲夜

「あの方達は誰なんですか？」

咲夜は広場の中央に居る2人の少女を見ながらレミリアに尋ねた。

レミリア

「ああ。彼女達こそが秋を司る神である秋静葉様と秋稔子様だ」

咲夜

「え！？あの人達が神様なんですか！？」

天子

「私も名前しか知らなかったから少し驚いたわ」

咲夜と天子は天子と同じくらいの少女がこの祭りの主賓である上だとは思っていなかったために大いに驚いた。

1時間後 AM・11:30

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

祭りを一通り回った咲夜達は本日のメインイベントの1つ、博麗孤児院の院長への顔出しのために博麗孤児院に来ていた。

カービィ

「やあ。みんなおかえり」

魔理沙・霊夢・妖夢・アリス・パチュリー

「「「「ただいま（です）！！」「」「」」」」

天子

「ただいま帰りました。院長」

咲夜

「お邪魔します！」

レミリア

「おひさしぶりです。ステッペン院長」

カービィ

「うん。みんな元気で何よりだよ。さっ、ここは冷えるから中に入

りなよ」

?????

「あら、ステッペン先生。この子達が先生の言っていた子ですか？」
それぞれ再会の挨拶をすると見慣れない女性がカービィに話しかけてきた。

カービィ

「ああ。ナクリー君か。この子達が僕の言っていた子達だよ」
ナクリーと呼ばれた女性

「はじめまして。私はこの孤児院で先生をしているナクリーです」
レミリア@ちよくちよく連絡していたので知っている

「紅魔館当主。レミリア・スカーレットよ。よろしく頼む」

天子@同上

「博麗 天子です。確か元々この孤児院にいた人ですよね？」

咲夜達@知らなかった

「「「「「え？え？」「「「「「」

咲夜達はいきなりの展開についていけないでいるがレミリア達はそんな彼女達を放っておいて話を続けていた。

ナクリー@元博麗孤児院の孤児

「ええ。もつとも私の場合は貴女達がこの孤児院に来る前に出稼ぎに行っていたから始めて会うと思うけどね」

カービィ

「それで大分情勢が落ち着いたからこの孤児院に戻って先生をしてくれる事になったんだ」

ナクリー

「院長からここにいる孤児の数が増えているって聞いたから戻ってきたということなの。よろしくね？みんな」

咲夜・妖夢

「「よろしくおねがいします！」」

魔理沙・霊夢

「「よろしく!!」」

アリス・パチュリー

「「よろしくおねがいします」」

カービィ

「じゃあ自己紹介も済んだことだし中に入ろうか」

自己紹介を終えた咲夜達はカービィに促され、孤児院の中に入っていた。

30分後 PM・12:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院

カービィに促された咲夜達が孤児院の中に入ると、咲夜にとって意外な人物が先客として来ていた。

フラン

「あ。咲夜にお姉ちゃん。それに天子達も来ていたんだね」

咲夜

「フラン様!? 何故この孤児院に？」

フラン

「院長から聞いていると思うけど私もこの孤児院の出身なの。だから今日は里帰りに来ていたってわけ」

咲夜達は（レミリアを覗く）まさかフランがこの孤児院に居るとは思っていなかったようで驚いたが、フランの説明を聞いて納得した。そして、しばらく雑談していると見覚えのある少年が咲夜達の所に来てきた。

少年A

「魔理沙！それに天子姉ちゃんも！久しぶり！！」

天子

「あら。トラッシュじゃない！久しぶりね。元気にしていたかしら？」

トラッシュと呼ばれた少年

「うん！みんな元気だよ！！」

天子

「そう…。ならいいわ。お土産があるからみんなを呼んできてくれるかしら？」

トラッシュ

「わかった！」

少年…トラッシュは天子と再会の挨拶をした後、天子の頼みを聞いて部屋を飛び出していくのを見てみると咲夜は一つ疑問に思った事があったのでレミリアに尋ねた。

咲夜

「あの、レミリア様」

レミリア

「どうした？咲夜」

咲夜

「今も広場の方がにぎわっていますけどなぜ今ここにいるのですか？」

咲夜の疑問とは今この孤児院に居る理由であつた。

今咲夜達は博麗孤児院に居るが院長と再会する以外にも何か目的がある気がしたのである。

レミリアはしばらく答えるか否か迷ったが孤児院の外からまったく聞き覚えのない声が聞こえてきた。

兎詐欺@玄関前からの声

『だからそのカービイって奴に会わせろと言っているウサ!!!』
トラッシュ@同上

『だからここにそんな人はいないって言っているだろ!!』

咲夜

「この声は…トラッシュ?」

レミリア

「やはりこの日に来たか」

咲夜達は玄関前から聞こえてくる声の中にトラッシュの声もある事に気がつく。レミリアは溜息をついた。

咲夜

「もしかしてここに来たもう1つの理由って…」

レミリア

「ああ。4年に1度この日のこの時間に奴がこの孤児院に来ている」

アリス

「でもカービイって人なんてこの孤児院にいましたっけ?」

レミリア

「いや。この孤児院にはいない」

霊夢

「じゃあなんで…」

レミリア

「この手の話はお前達にはまだはやい」

咲夜達はレミリアに何故玄関前に来ている者がここに来ている理由を質問したがレミリアはこの質問に答えなかった。

この話はこの幻想郷の暗部に関わるものである。

まだ10歳にも満たない少女達が知るにはあまりにも重すぎる内容

なのである。

だからレミリアは咲夜達の問いに答えなかった…いや、答えられなかったのである。

兎詐欺@玄関前からの声

『こうなれば実力行使で出てもらうウサ!』

トラッシュ@玄関前からの声

『う、うわあ!』

天子@玄関前に向かって走り出す

「トラッシュ!」

魔理沙・霊夢・妖夢・アリス・パチュリー@同上

「トラッシュ!」「」「」

咲夜@同上

「ごめんなさい!わたし、行きます!」

レミリア

「いかん!お前達が敵う相手ではないぞ!」

咲夜達はトラッシュの悲鳴を聞いていてもたっても居られず、レミリアの制止を振り切って玄関前に走っていった。

フラン

「私が行ってくるよ」

レミリア

「…ええ。咲夜達をお願いね」

フランも立ち上がると咲夜達を追うと言い、フランの実力を知っているレミリアはフランに咲夜達を任せた。

本当ならレミリアも咲夜達を助けに生きたい。

しかし、もしここでレミリアがこの騒動の原因となっている者に手を上げると戦争にまで発展するだろう。

少しでも弱みを見せたらそれを大義名分に襲いかかってくるのがこの幻想郷の現状なのである。
だからこそレミリアは咲夜達やトラッシュを助けに行けないのである。

レミリアは己の無力さに苛立ちながらも咲夜達が無事に戻ってくる事を祈った。

30分後 PM・12:30

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院玄関前

トラッシュ@頭から血を流している

「うつ…」

兔詐欺

「弱つちい人間のクセに逆らうからこうなるウサ」

天子

「トラッシュ!!ッ!?!」

博麗孤児院の前では頭から血を流したトラッシュと無傷の兎のような耳を持った者が立っていた。
そこに天子は駆け付けると

咲夜

「トラッシュ!大丈夫!?!」

魔理沙@激昂

「トラッシュ!!こいつ!!!!」

霊夢@同上

「ぜったいにゆるさないわよ!!」

妖夢@同上

「ゆるしません!!」

アリス@同上

「ゆるさない…！」

パチユリー@同上

「…ゆるさない」

兎詐欺

「おんやあ…また雑魚のお出ましウサか？」

遅れて咲夜達も玄関前に着くがトツラシユの怪我を見た魔理沙達は激昂して下手人を睨みつけるが当の本人はターゲットが増えただけかと思っただけだった。

魔理沙

「この…！」

??@魔理沙の腕を掴む

「そこまでだ」

魔理沙は我慢できずに手を出そうとしたが何者かの手によって止められた。

魔理沙

「だ、だれ！？」

??

「なに、通りすがりの剣士だ」

魔理沙は自分の腕を掴んだ者を見るとそこには16歳位の少女が魔理沙の腕を掴んでいた。

兎詐欺

「うん？お、お前は…！」

??

「永遠亭の兎詐欺風情が子供に手を出すとはな…永遠亭の質も地に

堕ちたものだな」

兎詐欺

「う、うるさいウサ！それよりも何で白玉楼の庭師兼剣術指南役のお前がここにいるウサ！！」

???@白玉楼の庭師

「私がここにいる事で察しがつかないのか？」

兎詐欺@顔面蒼白

「ま、まさか…」

兎詐欺は少女の顔を見るや否や何かに脅えているような表情になった。

魔理沙達は現在状況についていけないしていると更に20歳位の女性がやってきた。

???@焼き芋を持っている

「マ〜ユ〜どうしたの〜？」

マユと呼ばれた少女

「幽々子様。この者が子供相手に本気になって怪我を負わせたので成敗しようと思った次第です」

幽々子と呼ばれた女性@焼き芋を食べ終えた

「へえ〜…って怪我をしているのはトラッシュ君じゃない！」

トラッシュ@フランに治療されている

「うつ…」

フラン@到着した後すぐにトラッシュの治療を始めた

「よし。あとはこの秘孔を突いて…」

幽々子@トラッシュはお気に入り

「マユ。構う事は無いわ。存分に殺^やりなさい」

マユ

「という訳だ。覚悟は出来たか？」

兎詐欺

「＼（＾Ｏ＾）／」

幽々子に戦う許可を得たマユは腰に差している日本刀を抜き、兎詐欺に突き付けると兎詐欺は目の前の現実に絶望した。

マユ@殺^やる気満々

「安心しろ。一瞬だ」

兎詐欺@手にしたハンマーで叩き潰そうとする

「こつなつたらヤケウサ!!」

咲夜

「あぶない!!」

マユ@小声

「時よ止まれ…」

咲夜はマユが兎詐欺のハンマーで叩き潰されそうになって声を上げるが何故か兎詐欺がハンマーを振り降ろしていない事に気がついた。

咲夜

「あれ？何であいつはふりおろさないの？」

兎詐欺

「……………」

咲夜は何故兎詐欺がハンマーを振り降ろさないのか疑問に思い、周りを見てみると魔理沙達や周りにある全ての物もまた『まるで時が止まった』かのように動かなくなっていた。

咲夜@魔理沙達に近付いて手を振る

「フラン様？魔理沙？霊夢？妖夢？アリス？パチュリー？天子お姉ちゃん？トラッシュ？なにがおきているの…？」

マユ@目を丸くする

「貴女：静止した世界でも動けるの？」

咲夜

「え…？」

マユ

「それはともかく今は奴を成敗することのみに集中しよう…」

マユは咲夜が動ける事に驚いたが気を取り直して兎詐欺の鳩尾を持つていた日本刀の柄で思いつき殴った。

マユ

「そして時は動き出す…」

兎詐欺@思いつき吹き飛ば

「う・わ・ら・ば」

マユが何かを呟いた瞬間兎詐欺は何が起きたか理解できずに星となった。

天子

「え！？な、何が起こったの!？」

魔理沙@状態異常：ポルポル

「あ、ありのまま起こった事を話すよ！」

霊夢@状態異常：ポルポル

「あのお姉さんに襲いかかった奴がハンマーで叩き潰そうとしたらいつの間にかふっ飛んでいた!！」

アリス@状態異常：ポルポル

「な、何を言っているか分からないだろうけどわたしも何が起こったのか分からなかった!！」

パチュリー@状態異常：ポルポル

「頭がどうにかなりそうだった…」

妖夢@状態異常：ポルポル

「さいみんじゅつかちょうスピードとかではだんじてありません
！！もつと恐ろしい何かを思い知りました…」

咲夜@静止世界でも普通に動けた

「（え…？みんな何がおこったのか分からないの？）」

咲夜は魔理沙達がさっきまでの出来事を知らない事に驚いていると
騒ぎを聞きつけたカービィが走ってきた。

カービィ

「トラッシュュ！」

トラッシュュ

「あ…先生…」

フラン

「1日ほど安静にしていれば怪我は治りますから安心してください」

カービィ

「よかった…無事だったみたいだね。ありがとう」

カービィはトラッシュュの傷を治療したフランに礼を言うとフランは
照れながらマユの方に向いた。

フラン

「いえ。彼女がいたから私は治療に専念する事ができました」

カービィ

「彼女って…マユに幽々子じゃないか！よく来てくれたね！」

幽々子

「あら。ステッペンさんおひさしぶり」

マユ@頭を下げる

「おひさしぶりです。ステッペンさん」

カービィ

「うん。ひさしぶり。となると犯人を追っ払ったのはマユだね？」

マユ

「はい。流石に子供に対して怪我をさせている者を見逃す程私は腑抜けていないので」

カービィ

「立ち話をするのもなんだし中に入りなよ」

幽々子

「それじゃあお邪魔するわね」

マユ

「お邪魔します」

フラン

「ほら！みんなボサつとしないで早く戻るよ！」

咲夜・魔理沙・霊夢・妖夢・アリス・パチュリー・天子

「「「「「は、はい！」「」「」「」

咲夜達はこの場の雰囲気についていけないでいたがフランに促されて部屋の中へ戻っていった。

5時間後 PM05:30

幻想郷第3大陸 アーリア村入り口前

騒動が終わった後再び祭りを見に行った咲夜達はカービィ達に入り口前まで送られ、各々機体の中に入った後別れの挨拶をしていた。

カービィ

「道中気をつけるんだよ？」

レミリア@ガンダムのコックピットの中

『無論です。それでは、お世話になりました』

咲夜@ドダイ改のパイロットスペースの中

『お世話になりました!!』

魔理沙・アリス・パチュリー@同上

『「「トッラシュ！またね!!」「」』

霊夢・妖夢@同上

『『ケガしないだね!!』』

天子@同上

『病気になるんじゃないわよー!!』

トラッシュ

「うん!みんな元気だね!!」

別れのあいさつを済ませたレミリア達は紅魔館へ帰っていくのであった。

3時間後 PM・08:30

幻想郷第3大陸 紅魔館2階東ブロック 咲夜の部屋

咲夜

「今日も色々あったなあ……」

咲夜は今日起こっていた事を日記に書きながらマユとの会話を思い出していた。

マユ@2時間前

『貴女も静止世界のなかでも行動できるのね』

咲夜@同上

『せいし世界?』

マユ

『私は世界の時間を停止させる能力があるの』

咲夜

『そんなことができるんですか?』

マユ

『ええ。貴女に実感は無かったと思うけどあの時この世界の時間は停止していたの』

咲夜

『すごいんですね』

マユ

『もつとも戦闘にしか使わないけどね』

咲夜

『あと、トラッシュをイジメていた奴の言っていた【アスカ】って…』

マユ

『そんなに私の名前が変？』

咲夜@首を横に振る

『え、えーと。わたしの知り合いに同じ【アスカ】っていう名字の人がいるんです』

マユ

『そう。ありえないかもしれないけど私の兄と同じ名前かもね』

咲夜

『そのお兄さんの名前って？』

マユ

『【シン・アスカ】。私が行き別れたたった1人の兄よ』

咲夜

『え…？お兄様の名前と同じだ…』

マユの言った兄の名前…それは自分の義兄であるシンと同じ名前であつたのである。

咲夜@懷からピンク色の携帯電話を取り出す

「そういえばお兄様からもらったこのお守りにうつっていた人ってあの人だったな…」

咲夜は自分の義兄から貰った携帯電話に映っていた人物がマユと同じ事だった事に気が付き、思わず目から涙が溢れた。

咲夜@涙を腕で拭う

「いけないいけない…泣く時はお兄様と再会した時って決めたんだから…」

その後、咲夜はベッドの中に入ったのだった。

翌日 AM08:30

幻想郷第3大陸 紅魔館

咲夜@結局寝られなかった。

「寝坊したー！！！！！」

結局マユの事で眠れなかった咲夜は気がつくとき刻は既に8時を過ぎており、咲夜は走っていた。

レミリア@紅茶を飲んでいる

「うむ。いつもの光景だな」

フラン

「今日も咲夜は元気だね」

紅魔館は今日も平和…。

どうも飛鳥です。

今回は外伝4話後編となっています。

この話で登場した人物は設定集に記述します。

次はスクリーンチャット集外伝2と設定集を投稿します。

では(・・・)ノシ

外伝キャラ設定5 + a (前書き)

外伝4話に出た人物などの設定があります。

ネタバレを含むのでそういったことを嫌われる方は閲覧されな
いとを推奨します。

外伝キャラ設定 5 + a

【キャラ設定】

マユ・アスカ（年齢不明 @ 外見年齢 15 歳）

白玉楼の庭師兼幽々子の護衛の少女。

咲夜の義兄であるシンの妹である。

コズミツクイラでの戦争で命を落とした筈だったがシンがトダカに連れていかれた後にスキマが発生、彼女は白玉楼に飛ばされる。

飛ばされた時のショックで魂が 2 つに分かれ、半分は肉体に残ってもう半分は不可視の半霊として存在している。

来た当初は死んだ筈なのに生きている自分の体と見知らぬ環境、そして異世界での孤独感によってかなり荒れていたが時間が経つにつれて大分落ち着きを持った。

剣術は当時の幽々子の剣術指南役であった妖忌と幽々子の親友であったカービィに鍛えられているため、超一流である。

打ち刀による神速の剣術は師である妖忌すらも防ぐ事ができない位のものであり、カービィ以外にこの剣術を避けるのは不可能である（この剣術はカービィによって叩きこまれたもののため）。

スタイルは本編登場の早苗レベル。

愛剣は霊刀ユクモ影打。

西行寺 幽々子（年齢不明）

幻想郷第 3 大陸の中央にある交易都市『ペターニ』の領主である女性。

かつては冥界の管理者であったが幻想郷巨大化事件によって西行妖が消滅、さらに白玉楼も現世に無理矢理引き込まれてしまい、管理者としての役目を終えた。

現世に住む事になった後は自分のいる土地の立地条件が交易に非常

に向いていると知り、幻想郷第3大陸の中でも有数の街であるペタ
ーニを築き上げた。

戦闘能力は現世に引き込まれたショックで能力を含めて全て失った
が妖忌とカービィから学んだ剣術は失われていなかったため、剣術
を使った戦闘ならマユと互角に渡り合える。

スタイルは本編登場のチエルシールレベル。

実は家計面でマユに頭が上がらない。

尚、博麗孤児院に住んでいるトラッシュは彼女のお気に入りである。

博麗 ナクリー（20歳）

元博麗孤児院の孤児。

16歳になった時にアーリア村の隣にある鉱山街『サルバ』に出稼
ぎに行っていたがある程度の収入を得られたので夢であった孤児院
の先生を自分の育ち故郷である博麗孤児院で始めた。

温厚で大抵の事は受け入れる彼女の性格で、先生を始めてからすぐ
に孤児達に懐かれるようになった。

スタイルは本編登場の早苗レベル。

憧れの人物はステッペン・ウルフ（カービィ）。

博麗 トラッシュ（8歳）

博麗孤児院の孤児。

彼は魔理沙達と違ってアーリア村の出身であるが物心が付く前に両
親が賊によって殺害され、賊の討伐に来ていたカービィとレミリア
に保護される。

彼の眼はオッドアイだが幻想郷ではそんな人妖が大量に居る為気に
していないらしい。

魔理沙達が居なくなっただ後は孤児達のリーダー的な存在となってい
る。

シン・アスカ（年齢不明）

旅人。

その正体は咲夜の義兄であり、マユの最後の肉親である。

何かの為にこの幻想郷に訪れていたらしいがその理由は不明である。幻想郷の代表である八雲 紫と何か関係があるらしいが…。

尚、美鈴にタマゴサンドのレシピを教えており、そのタマゴサンドは美鈴の店の人気商品になった。

八雲 紫（年齢不明）

幻想郷の代表にして幻想郷第1大陸の統治者である女性。

普段は統治者としての威厳を放っているが実は非常に脆い心の持ち主であり、幻想郷で起こった戦争に関しては非常に心を痛めている。シンとは何か深い関係があるようだがどのような関係なのかは不明である。

スタイルは本編登場のチエルシーレベル。

秋 静葉（年齢不明）

秋の紅葉を司る神。

元々はまったく信仰されていない神であったが幻想郷巨大化事件の時たまたま霧の湖に妹の稔子と共に来ていたために、住処が無くなってしまうが、彼女達が当時荒れ果てていた幻想郷第3大陸の地を自然豊かにしたため、大きな信仰を得た。

それからというものの全ての街でひっぱりだこになっている。

尚、普段住んでいる場所は幻想郷第3大陸の中央にある交易都市『ペターニ』である。

スタイルは本編登場のスバルレベル。

秋 稔子（年齢不明）

秋の豊穣をつかさどる神。

元々はまったく信仰されていない神であったが幻想郷巨大化事件の時たまたま霧の湖に姉の静葉と共に来ていたために、住処が無くな

つてしまいが、彼女達が当時荒れ果てていた幻想郷第3大陸の地を自然豊かにしたため、大きな信仰を得た。

それからというものの全ての街でひっぱりだこになっている。

尚、普段住んでいる場所は幻想郷第3大陸の中央にある交易都市『ペターニ』である。

スタイルは本編登場の早苗レベル。

兔詐欺（年齢不明）

幻想郷巨大化事件や幻想郷大陸争奪戦争の引き金を引いた者。

因幡 てゐのなれの果て。

元々はただ悪戯が好きただけの兎だったが、あるものを見たあと、まるで人が変わったかのように残忍な正確に変貌してしまった。

尚、同時期に八意 永琳も性格が変貌したらしい。

【施設】

上海アリス紅茶館

美鈴が非番の時に経営している喫茶店。

紅魔館1階中央エリアに数ある店の中でも上位に食い込む人気を誇る店である。

【行事】

大収穫祭

アーリア村で4年に一度行われる祭。

内容はこの村で信仰されている神、秋 静葉と秋 稔子に毎年の豊作を感謝するために行うものである。

西行寺 幽々子はこの祭りに来るためだけにお忍びでアーリア村に来ている。

実はアーリア村以外にもこの祭りは行われおり、1年ごとに北・東・

南・西の順に行われている。

外伝キャラ設定5 + a (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は投稿が遅くなって申し訳ありません。

一部のキャラ設定に関しては本編にも関わってくるものとなります。
次回は外伝のスクリーンチャット集となります。

では(・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集2

chat8 「何で大収穫祭の事を知っているの？」 レミリアとの打ち合わせが終わった後

紅魔館1階中

央エリア

魔理沙

「そっぴゃー」

霊夢

「どうしたの魔理沙？」

魔理沙

「わたしたちが知らないお祭りをなんで天子姉ちゃん知っているの？」

妖夢

「あ。それはわたしも気になった！」

天子@遠い目

「私が物心がついた頃に一度家族と一緒に行っていたの…」

魔理沙@バツの悪そうな表情をする

「あ…ごめん…」

天子

「気にしなくてもいいわ。とにかく、一度行っていたから知っているの」

霊夢

「なるほど…」

咲夜

「じゃあ、お祭りを楽しもー！」

天子

「ええ。そのとおりね…」

chat9 「懐かしの味」

美鈴の店でタマゴサンドを試食した後
上海アリス紅茶館

魔理沙

「うまかったー!!」

霊夢

「こんなおいしいタマゴサンドはじめてかも」

妖夢

「わたしも何度か作ったことはあるけどここまでおいしくなかったです!」

アリス

「材料は変わらないはずなのになんでこんなに味がちがうんだろ……」
パチュリー

「おいしかった……」

天子

「これなら大ヒット間違いないですよ店長!!」

美鈴

「ふふつ。ありがとう。咲夜ちゃんはどうだったかな?」

咲夜@昔のことを思い出していた

「ふえっ!? あ、はい、おいしかったです! でも……」

美鈴

「でも?」

咲夜

「これ、わたしも作れます」

魔理沙・霊夢・妖夢@驚愕

「「「な、なんだってー!!!!?」」」

アリス

「いくら咲夜でもこの味を再現するのはむずかしいよ!」

美鈴

「私もレシピを再現するのに1ヶ月もかかったんだよ?」

咲夜@4歳の時にシンから伝授された

「だって…わたしがお兄様から教えてもらった料理はこのタマゴサンドの味だもん」

天子@滝汗

「なるほど…」

美鈴

「…………orz」

chat10 「懐かしき記憶」 美鈴の店でタマゴサンドを試食した後

紅魔館2階東エリア 咲夜の部屋

chat9 「懐かしの味」を見ている

シン@過去

『いいか?ここの味付けは直接挽いた黒胡椒を入れるんだぞ』

サクヤ(咲夜)@同上

『はい!』

シン

『あとは自家製のパンにさっき作った茹で卵で作ったタルタルソースを挟んで…完成だ』

サクヤ

『おいしそう!』

シン

『よし、それじゃあキラさんの所に持っていくか…』

サクヤ

『はい!』

??

「…夜!…!!咲夜!起きなさい!」

咲夜@慌てて起きる

「ふえ!!?」

天子

「起きたようね。それじゃあ顔を洗って…て咲夜?」

咲夜@涙を流している

「…………お兄様」

天子@空気を讀んだ

「とりあえず今日は休講日だけどはやめに魔理沙達にも顔を合わせ
るのよ」

咲夜

「なつかしい…夢だったなあ…」

chat11 「凄い賑い」 アーリア村に着いた後

アーリア村中央広場

射的屋の店主

「200フォルで6発撃てるよ…!さあ寄った寄った!!」

焼きモロコシ屋の店主

「150フォルでこの大きな焼きモロコシがけるよ…!」

咲夜@雰囲気圧倒されている

「うわ…」

魔理沙

「ねえねえ!あそこにある射的屋に行ってみようよ!」

パチュリー

「焼きモロコシが食べたい…」

霊夢

「そんなことより焼きそば食べたい!」

妖夢

「たこ焼き?どんな食べ物でしょうか?」

アリス

「お面が欲しいな…」

咲夜

「あつ、わたしは中央に行きたいです！」

天子@呆れる

「あんたらねえ……」

レミリア

「わかったわかった。まずは射的屋から行くぞ」

咲夜達

「……」「……」「はい！」「……」

chat12 「狙い撃つぜ！」 アーリア村に着いた後

アーリア村中央広場

chat11 「凄い賑い」を見ている

レミリア

「まずは射的屋だな」

魔理沙@プラモデルを狙う

「よーし！一番大きいあのはこをねらうぞー！！」

3分後

魔理沙@がつくりと頂垂れる

「だめだった……」

アリス

「そりゃあんな小さなたまじゃ落とせないわよ」

魔理沙

「ほしかったなあ……144分の1ガンダム……」

眼帯をつけた青年

「おやっさん。俺もやらせてくれないか？」

射的屋の店主

「あいよ」

眼帯をつけた青年@1 発で箱を落とした

「狙うは1つ…狙い撃つぜえ!!」

魔理沙

「!」

天子@呆然

「うそ…あんなに大きい箱だったのに…」

眼帯をつけた青年@魔理沙に近寄る

「ほらよ。嬢ちゃんはこれが欲しかったんだろ？」

魔理沙

「え? いいの？」

眼帯をつけた青年

「つい狙っちまったが俺はいらねえからな。欲しそうだった嬢ちゃんにやったほうがこれも喜ぶだろ？」

魔理沙@144分の1 ガンダムを受け取る

「ありがとうお兄さん!!」

眼帯をつけた青年@立ち去る

「いいってことよ! それじゃ、俺は失礼するぜ」

天子

「変わった人ね…自分で手に入れた景品をあげるなんて…」

アリス

「でもそれ天子お姉ちゃんもそうじゃない？」

天子@自分が取った景品と一緒にやっていた子供にあげていた

「う…」

chat13 「祭りの屋台の味は割と心に残る」 アーリア村に

着いた後

アーリア村中央広場

chat12 「狙

い撃つぜ!」を見ている

レミリア

「次は屋台だな」

10分後

咲夜

「唐揚げ買ってきました！」

パチュリー

「焼きモロコシ買ってきた…」

妖夢

「たこ焼きを買ってきました」

魔理沙

「クレープ買ってきた！」

レミリア

「よし、それじゃあ冷める前に食べるとしよう」

天子

「そうですね」

咲夜達

「……………はい！！……………」

30分後

咲夜達

「……………おいしかったー！！……………」

天子

「でも何故お祭りの時に食べる屋台の料理は美味しいのかしら？」

レミリア

「おそらく場の雰囲気などで一層美味く感じるのだろう」

天子

「そういうものですか？」

レミリア

「そういうものだ」

chat14 「お面の種類は割と豊富」 アーリア村に着いた後

アーリア村中央広場

chat13 「祭りの屋台の

味は割と心に残る」を見ている

アリス

「最後にお面やさんね!!」

魔理沙

「うわゝいろいろ売ってある」

霊夢

「どれにしようかな」

10分後

咲夜@結局買わなかった

「ちよつとわたしのほしいのは無かった」

妖夢@同上

「わたしも…」

魔理沙・アリス@ガンダムのお面を買った

「わたしは…ガンダムだ!!」

パチュリー@ジムのお面を買った

「わたしはこれを買った…」

??

「ゆつくりしていつてね!」

天子

「霊夢…?」

霊夢@ゆつくりのお面を買った

「そうだけどうしたの？」

レミリア

「……………まさか霊夢の顔とそっくりの面があるとは……」

咲夜

「いろんなお面があるんですね……」

レミリア

「では孤児院に向かうとするか……」

天子

「わかりました」

咲夜達

「……………はい！！……………」

chat15 「ひさしぶりだね」 マユが兎詐欺を追いつた後

博霊孤児院

カービィ

「ひさしぶりだね。幽々子」

幽々子

「ええ。おひさしぶり。トラッシュ君は怪我をしたけど……」

カービィ

「フランが治療してくれたから2、3日もすれば怪我も治るさ」

幽々子

「それもそうね……」

カービィ

「そういえば毎回大収穫祭に来ているけど何か欲しいものがあるのかい？」

幽々子

「えっと…それは……」

マユ

「幽々子様は祭りに際に出店している屋台の食べ歩きがご趣味なの

です」

幽々子@赤面

「ちよっ、幽々子！」

カービィ

「ああ。なるほどね」

幽々子@耳まで赤くなっている

「ううっ」

カービィ

「それも祭りの楽しみ方の一つだよ。ただし、食べ過ぎは厳禁だ
どね」

マユ

「そうですね」

chat16 「いつか来るべき日のために…」 レミリア達が去
った後

イの私室

博霊孤児院 カービ

カービィ

「ふう…。今日はこれでいいかな？」

「?????@ノックする

「ここにステッペン殿がいるか？」

カービィ

「?この声は…どうぞ」

「?????@ドアを開ける

「失礼する」

カービィ

「やあ、君か。カムハーン」

カムハーン@生前

「実は頼みたい事があってここに来た」

カービィ

「君が頼み事とは珍しいね。それで頼みたいことは？」

カムハーン

「奴の剣をここにあるドックの中に預けたい」

カービィ

「…それはシン君の剣だね？」

カムハーン

「いかにも。それで、引き受けてもらえぬか？」

カービィ

「わかった。その剣の管理は僕に任せてほしい」

カムハーン

「すまぬな」

カービィ

「君がここに来たのは彼らに対しての対策かい？」

カムハーン

「うむ。そのとおりだ」

カービィ

「じゃあ久々にあったから一杯飲んでいきなよ」

カムハーン

「馳走になる」

カービィ@コップにワインを注ぐ

「はい」

カムハーン@ワインの入ったコップを受け取る

「すまぬな」

カービィ

「それじゃあ…」

カムハーン

「うむ」

カービィ・カムハーン

「…いつか来るべき日のために…乾杯」

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集2（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は外伝のスクリーンチャット集になりました。

最後のチャットでネタバレになっていますが、シンのデステイニーはカービーが預かっています。

次回は本編に戻ります。

では（・・）ノシ

第13話「温泉旅行〜受託編」

インヘルト社からの依頼を完遂した俺達は平穏な時間を過ごしていた
エミリアの動きも最初に出会った時と比べると見違えるように良くな
った

彼女の師をしている俺としても嬉しい限りである

だが最近のエミリアはどこか無理をしている様に見える

レイ

「エミリア。今日の修行はここまでにするぞ」

エミリア

「はあっはあっ…おっけー」

修行を始めてから1週間が過ぎた

何かエミリアを休ませる機会があるといいのだが…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

「世界を駆け巡る者達」

第13話「温泉旅行〜受託編」

パーティー解散から1週間後

クラッド6 リトルウィング管轄区 リトルウィング事務所

特に危険な依頼が来る事もなく平穏な一時を噛み締めていたシンは
クラウチから話があると呼ばれ、事務所までに来ていた。

クラウチ

「お。来たか」

シン

「何の用ですか？」

クラウド

「ああ。実はちょっとお前に頼みがあって呼んだ」

クラウドは引き出しの中からある資料を取り出すとその資料をシンに渡した。

シン

「クゴ温泉？」

クラウド

「ああ。実はウチの慰安旅行の場所がクゴ温泉になってな」

シン

「つまり俺達にその下見に行って来いと？」

クラウド

「まあ建前としてはな」

シンは自分達が慰安旅行の目的地に向かう依頼だと思ったがクラウドはそれは建前と言い、シンが気にかけていた2人の人物を思い浮かべ、口に出した。

シン

「…もしかしてエミリアと早苗のことですか？」

クラウド

「ああ。レイとリオンからの報告でな。何やら根を詰め過ぎているから休息させるべきだって報告があった」

クラウドはシンの推測を肯定し、シンは今の早苗とエミリアを思い出した。

2人共暇があればシンが考えたスケジュール以外の修行をするようになっており、最近では睡眠をとっているのか疑問になるくらい

隈が出来ていた。

リオンとレイも休ませようとするが2人はのりくらりとかわして修行をしていた。

確かに修行を頑張るといいことである。

しかし、度が過ぎれば毒となってしまう。

シンもそれで苦い経験をしているだけに2人が自分と同じ失敗で怪我をする…最悪ミッション中に死んでしまう可能性もある…事だけは避けたかったため、クラウチの依頼はまさに願ったりかなったりであった。

シン

「わかりました。明日にはクゴ温泉に向かいます」

クラウチ

「ああ。頼んだぜ」

シンはクラウチからの依頼を引き受け、スバル達に依頼内容を伝える為に召集するのであった。

30分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ブリーフィングルーム

シン

「というわけで明日にはクゴ温泉に向かうぞ」

エミリア

「ちょっとちょっと待ってよ!」

早苗

「そうですよ!」

シンは依頼内容を粗方説明し終わった所で予測していた事態が起こった。

エミリア

「これじゃあただの旅行じゃん」

早苗

「そうですよ！今は唯でさえあの時の襲撃者が行動するかわからないんですよ！？なのにそんな暢気な事をしていていいんですか！？」

それは早苗とエミリアの反発であった。

確かに彼女達の言うとおり、襲撃者…時空管理局がいつ動き出すか分からないのである。彼女達としてはこんな時に旅行をするなんて思いもよらなかったのだろう。

しかし、シンは2人に対する答えをしっかりと持っていた。

シン

「こんな時だからこそだ。クラウドさんから聞いていたが根を詰め過ぎているだろ？」

早苗・エミリア

「う…」

シン

「疲れた状態で勝てる程あいつらも雑魚じゃない。だから休めるうちに休む事も重要だ」

早苗

「ですが…」

早苗とエミリアはまだ納得していないようだったが次のシンの言葉で納得した。

シン

「実はこの依頼の中には新しくリトルウイングの一員になったユートの能力審査と亜空間発生装置を設置しに行くシズル達の護衛も兼

ねている」

早苗

「…わかりました。今回もよろしくお願いします」

エミリア

「うー…シズルさん達の護衛依頼なら仕方ないよね…」

シン

「2人も納得したらしいし、今日はそのまま解散、明日の午前8時に集合してくれ」

実は同時期にシズルが護衛依頼をクラウドに出しており、その護衛の1人としてユートが同行する事になっていたためクラウドは同時に2つの依頼をするようにシンに命令していたのである。
早苗達も納得した所でシン達は明日の出発に備えて準備を始めるのであった。

Side EX ???

同刻

ニューデイズ クゴ温泉 守矢旅館

ここはニューデイズのクゴ温泉にある旅館。

開店したのはSEED異変が終わって1年がたった位で割と新しい旅館である。

しかし、ここにいる女将と受付の少女、そしてこの旅館の女将兼料理長が作る料理と絶景が楽しめる温泉を目的とした観光客で賑わっている。

小柄な金髪の少女

「ありがとうございますー！」

旅館の女将

「諏訪子ー！今日はもうあがっていいぞー！」

諏訪子と呼ばれた少女

「あいよー！じゃあ先に温泉に入っているねー！」

女将が諏訪子と呼んだ少女は宿の女将に温泉に入ってくると言った後温泉のある部屋まで駆けていき、宿の女将は最後の掃除を済ませて自室に向かった。

旅館の女将

「ふいー…今日も疲れたねえ」

旅館の女将は部屋に入ると私服を取り出して着替えていると彼女の頭の中に聞き慣れた『声』が聞こえた。

??????

『神奈子殿、どうやらこの世界に早苗がいるらしい』

神奈子と呼ばれた女将

『なんだって？この世界に来て1年間ずっと捜しても見つからなかったのかい？イクティノス』

イクティノスと呼ばれた者

『おそらくこの世界に来るタイミングがずれたのだろうな。どうやら今は傭兵をしているらしい』

神奈子は自分と念話していた相手…ソーディアン・イクティノスからの情報に最初は耳を疑ったが彼は自分に対しては嘘をつかない事を知っているのでその情報を喜んだ。

神奈子

『そいつは朗報だね。しかし、あの娘が傭兵ねえ…』

イクティノス

『どうやらリトルウイングと呼ばれる民間軍事会社に所属しているらしい』

神奈子

『リトルウイング？…そういえばその名前の団体がここに予約していたねえ…』

神奈子は感慨深げに呟くとイクティノスは彼にしては珍しく冗談を言った。

イクティノス

『もしかしたらその中に早苗がいるかもしれないな』
神奈子

『だといいねえ…』

イクティノスの冗談に神奈子は笑って返したがまさかこの冗談が本当になるとは思ってもいなかったのだ…。

第13話「温泉旅行〜受託編」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は受託編のためかなり短い内容となっていました。

13話は基本のんびりとした雰囲気となる予定です。
では(・・・)ノシ

第13話「温泉旅行」旅館到着編」

シンが受託してきた依頼は僕にとって非常に都合な内容だった
普段の僕なら下見などと文句を言っていただろうが今回は普段と状況が違う

あれから本格的に修行を始めてから早苗は何か焦っているようにも
見えた

劣等感を持ちやすい奴のことだ
足手纏いにならないようにしているつもりだろうがもしそれで倒れた時にどれだけ迷惑が掛かるのかわかっていないのだろう…

早苗

「修行はしばらくお休みですか…」

リオン

「内容が内容だがクラウドからの依頼だ。受けるしかないだろう」

まったく…

こいつはあの馬鹿2人とは違う意味で手が掛かる奴だ…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第13話「温泉旅行」旅館到着編」

クゴ温泉に行くことが決まってから1日後

クラウド6 リトルウイング管轄区

クゴ温泉に行くことが決まってから解散したシン達は各々準備を済ませ、マイシップの中で集合していた。

シン

「みんな揃ったようだな」

レイ

「ああ」

シズル

「こちら全員揃っています」

シン

「よし。じゃあ…」

スバル

「しゅっぱーっ!」

シン

「……………」

マイシップに全員のっている事を確認したシンは出発の合図をしようとしたところでスバルが先に出発の合図をしてマイシップを発進させたのであった。

クラッド6を出発してから2時間後

ニューデイズ クゴ温泉

シン

「ここが目的地のクゴ温泉だ」

スバル

「うわー…ここまで綺麗な紅葉は初めてだよ」

エミリア

「あたしは紅葉を見るのは初めてだね」

出発してから何事もなく着き、スバルはクゴ温泉の名物である紅葉を見て感動し、エミリアも始めて見る紅葉に目を奪われていた。

早苗

「（あれ？この気配は…）」

一方早苗はクゴ温泉に来てから懐かしい気配を感じ取っていた。

早苗

「（私達は【幻想郷】という世界を目指していたはず…でも私がこの世界に引き寄せられたのなら居てもおかしくはないはずですよね…？）」

その気配とは自分がグラールに飛ばされる前に自分が仕えていた2柱の神のものである。

最初はもう二度と会えないと思っていたが、シズルから自分達がこの世界に來た推測を聞いてからもしかしたらと思っていた。

早苗はこの事をリオン達に言うべきか迷ったが、早苗が言う前にシャルティエリオン達に言った。

シャルティエ

『坊ちゃん！この付近にイクティノスの気配がします！』

早苗

「（！？）」

リオン

「なに！？」

シン

「場所は分かるか？」

シャルティエ

「この先にある宿からです！」

シン

「そこにある宿が俺達の目的地だな…」

レイ

「なんにせよ、行ってみなければわからないな」

早苗はシャルティエが言った言葉でここに自分が仕えている2柱の神がいると確信した。

それを聞いたシンは少し考え込む表情を見せた後、レイの進言もあってシンは先に進む事にした。

10分後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』前

シン

「ここが俺達の泊まる予定の旅館だ」

スバル

「この世界で純和風な旅館なんて珍しいね」

レイ

「ふむ。俺も純和風の建物を見るのは初めてだな」

エミリア

「あたしもはじめて…」

シズル

「機械らしい物が見えない建物は僕も初めてですね」

はやて

「なんだか凄く貴重な経験をしてるかも…」

シン達は目的の宿である宿の前に着くと思いきいの感想を述べていたが早苗は旅館の名前を見て表情が固まっていた。

早苗

「……………」

リオン

「どうした早苗？」

早苗

「……………」

リオンは表情が固まっている早苗に声を掛けるが早苗はまったく反応しなかった。

そして、リオンはこの固まった早苗をどうするか内心頭を抱えているとそこに金髪の少女がやってきた。

諏訪子

「旅館『守矢』にようこそ！」

シン

「先日予約を取っていたリトルウイングの者です。今日から3日間お世話になります」

諏訪子

「はい！それでは中までご案内しますね！！」

レイ

「お世話になります」

諏訪子

「ではこちらに…って、え？」

シンとレイは表情が固まっている早苗を放置してやってきた少女…諏訪子に挨拶をした後中へ入ろうとすると諏訪子はシン達の後ろにいるスバル達に目が行くとそこにいた少女…早苗を見つけて表情が固まった。

早苗

「諏訪子様？」

諏訪子

「早苗…？本当に早苗なの？」

スバル・エミリア

「「え？なにこの空気」」

突然場の雰囲気が変わって戸惑うシン達意思を代弁するかのよう
にスバルとエミリアは呟くとザフィーラはシン達に代わって早苗に
尋ねた。

ザフィーラ

「知り合いか？」

早苗

「はい。この方は私が仕えている神の1柱の…」

諏訪子

「洩矢 諏訪子だよ。今はこの旅館で受け付けをしているよ」

諏訪子はシン達が早苗の知り合いだと分かると営業スマイルから本
来のフレンドリーな表情で自己紹介をしているとそこにこの旅館の
女将と思われる女性が旅館の中から出てきた。

神奈子

「諏訪子。いつまでお客さんを待たせているんだい？」

諏訪子

「あ、神奈子。実は…」

諏訪子は旅館から出てきた女性：神奈子に事情を話そうとすると神
奈子は目の前にいる早苗を見て目を見開いた。

神奈子

「…早苗なのかい？」

早苗

「はい。お久しぶりです神奈子様」

神奈子

「…………まさかイクティノスの言った冗談が現実になるとはね…」

シン達は早苗の感動の再会に水を刺さないように早苗達を見守っていた。

10分後

早苗との感動の再会を成し遂げた神奈子はまだ自分がシン達に自己紹介をしていない事を思い出し、自己紹介を始めた。

神奈子

「っと。情けないところを見せてしまったようだね。私は八坂 神奈子。この旅館『守矢』のオーナー兼料理長兼女将をしている」

シン

「シン・アス力です。今日から3日間お世話になります」

神奈子

「ああ。ではこれから泊まってもらう部屋まで案内しよう」

シン

「お願いします」

神奈子の自己紹介が終わった所でシン達は3日間泊まる部屋まで案内されたのであった。

10分後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』

神奈子

「ここが泊まってもらう部屋だ」

スバル

「うわ。本当に純和風だ」

神奈子に案内されたシン達は自分達が泊まる部屋に入ると純和風である部屋に息を飲んだ。

神奈子

「どうやら気にいってくれたようだね。夕食まで時間があるから近くを散策してみるといいぞ」

神奈子はシン達がこれから泊まる部屋を気にいった事に満足し、近くを散策してみる事を勧めた後シン達の夕食を作る為に厨房に戻っていた。

シン

「さて、これからどうするか…」

シンは自分の荷物を降ろした後これからどう動くか考えるとスバルが最初に意見を言った。

スバル

「はい！」

シン

「スバル。お前の意見は？」

スバル

「わたしは諏訪子さんが勧めてくれた観光スポットに行ってみたい！」

スバルは諏訪子から貰ったガイドを片手に近くを散策したいと意見した。

スバルが意見を言い終わったのを確認すると次にレイが自身の意見を言った。

レイ

「俺はこの旅館にある温泉に行きたいのだが構わないか？」

シン

「温泉か…」

レイの意見はこの旅館の温泉に行くというものであった。

この旅館の温泉の効能は疲労した肉体に良いと好評であり、エミリアの修行に付きつきりであったレイにとって非常にありがたい効能であった。

シン

「他のみんなはどうするんだ？」

早苗

「私は諏訪子様と神奈子様に改めて御挨拶に行きたいのですが今は忙しそうなので温泉に行こうと思います」

リオン

「僕もそうさせてもらっ」

シャルティエ

『早苗の修行につきつきりでしたからね』

エミリア

「あたしもそうするー」

シズル

「僕達はスバルさんと一緒にここの観光スポットに行こうと思います」

シンは他のメンバーの意見を聞くと意見は見事に2つに別れた。そこでシンが出した結論は

シン

「じゃあそれぞれ夕食まで自由行動にするか」

スバル

「オッケー！」

レイ

「では夕食の時に会おう」

一時解散して夕食まで自由時間を設けるというものであった。

スバル達はこの意見を承諾し、それぞれ自分が思うままに行動をするのであった。

第13話「温泉旅行く旅館到着編」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回はシン達が泊る旅館『守矢』で早苗と神奈子達の再会という話になりました。

またまた短い内容となりましたが楽しんでいただけたのなら幸いです。

では(・・・)ノシ

第13話「温泉旅行」旅館編」

まさかここで神奈子様と諏訪子様、イクティノスに再会できるとは思っていませんでした

シズルさんの仮説で私がこの世界に来る条件は大体わかっていましたからもしかしたらと思っていました

でも本当は会えないのではと思っていました

最初はただ無理矢理休みを取らされたと思っていましたが神奈子様と諏訪子様、イクティノスに再会できました

それでも私はこの場所に來られて良かったと思います

リオン

「早苗、他の者は既に準備を済ませている。早くしろ」

早苗

「あ、はい。わかりました！」

だから私はリオンさんやシンさん達と出会わせてくれたこの世界を守りたい…

リオンさんとディムロス達と共に…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第13話「温泉旅行」旅館編」

S i d e 温泉組

解散してから10分後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 男湯 大浴場

シン達は今までの戦いの疲れを癒す為にこの旅館の看板である大浴場の中に入るとシン達の目に映ったのはヒノキで作られた巨大な浴槽であった。

レイ

「これは…想像していた以上のすごさだ…」

リオン

「セインガルドでもこのような浴場は無かったな…」

シン@レイ達についていくことにした

「俺も色々な世界を回っていたけどここまで立派なのは滅多になかったぞ」

この旅館の売りのひとつである大浴場に思わず圧倒されていたシン達だったがこのままだと風邪をひくのでサッサと身体を洗って湯船に浸かった。

シン

「ふう…気持ちいい…」

レイ

「今までの戦いで溜まった疲れが溶けていくようだな…」
リオン

「最近までは早苗の修行に付きつきりだったからな…」

シャルティエ

『早苗の技術の飲みこみの早さは凄いですからねえ…』

ディムロス@中身が男性のため早苗から渡された

『もしかしたらスタンよりも素質があるのかもしれない』

クレメンテ@同上

『もしかしたらではなく確実にスタンやフィリア以上の素質を早苗は持っておる』

シャルティエ

『まあ今は温泉を楽しみましょう』

ディムロス・クレメンテ

『『そうだな（じゃな）』』

湯船に浸かったシン達は絶妙な湯加減に最近溜まっていた疲れを落とすのであった。

一方、女風呂の方はというと…

早苗

「ふう…最初は無理矢理休まれたかと思いましたが来てよかったですね…」

エミリア

「うー…思ったより疲れていたんだね…あたしの身体」
ミカ

『無理は禁物ですよ？エミリア』

ハロルド

『それならあたしの特製の栄養ドリンクスーパーゲンキナツチャウンスを…』

エミリア

「…色々やばそうだからパス」

早苗

「ハロルドの作る飲食物系は危険過ぎます…」

ハロルド

『ちえっ』

シン達と同じく温泉を楽しんでいた。

しかし、2回目の入浴の時に惨劇が訪れるとはこの時誰も知らなかったのだが…。

S i d e o u t

S i d e 観光組

同刻

ニユーデイズ クゴ温泉 温泉街

一方シン達と別れて温泉街を歩いていたスバル達だったがこの面子にはあるものが足りなかった。
それは…

スバル@温泉饅頭を食いまくっている

「あつ。この温泉饅頭おいしい！おじさん！あと20個頂戴！」

ユート@同上

「プリンとは違うけどこれもおいしいぞ！」

2人で馬鹿みたいに食べまくる馬鹿^{スバルとユート}を止める為のストッパーがいないのである。

そして2人を止められそうなのは…

はやて@号泣

「なんであんなに食べているのに太らないわけ…」

ザフィーラ

「主…気を確かに…」

シズル

「はやて！しっかりして！！」

いくら食べても太らないスバルを見て号泣しながら温泉饅頭をやけ食いし、ザフィーラとシズルはそんな彼女を止めに回らなくてはならなかった為にツツコミ役が不足していた。

カムハーン

『（いつもの事だが奴らがいないとまったくもってしまらん…）
バルバトス@無言で温泉饅頭を食べている

「……………」

そんなスバル達様子を見て心から嘆息するカムハーンと他人のふり
をして温泉饅頭を喰らうバルバトスであった…。

S i d e o u t

S i d e E X 神奈子

P M . 0 6 : 0 0

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 厨房

スバル達一行の雰囲気がかオスになっている頃、神奈子はシン達に
提供する料理を作る為にその腕をふるっていた。

神奈子

「うん。吸い物はこれでOKだね」

イクティノス@神奈子の神力を借りて一定の間肉体を形成できる

「神奈子殿。こちらの方も完了したぞ」

神奈子

「あいよ。じゃあ食器を用意してきてくれ」

イクティノス

「承知した」

30分後

神奈子

「よし。あとはあの子達が帰って来るまで待つか」

一通りの作業を終えた神奈子は用意してあった椅子に腰かけると剣の姿に戻ったイクティノスに話しかけた。

神奈子

「まさかイクティノスの言った冗談が現実になるとはね……」

イクティノス@元の姿に戻った

「いつか再会できるとは思っていたがここまで早いのは予想外だった」

神奈子は昼ごろに早苗と再会した事をイクティノスに伝えると流石のイクティノスもここまで早く再会するとは思っていなかったため最初に神奈子に伝えられた時は大いに驚いた。

神奈子

「しばらくここに泊っていくらしいから早苗がどんなものを見てみたのか聞いてみたいものだねえ」

イクティノス

「まったくだな」

諏訪子

「神奈子く、イクティノスく。そろそろ時間だよー!」

神奈子

「あいよ。それじゃあ最後の仕上げをしようか」

イクティノス

「承知した」

神奈子は早苗と話がしたいと言った後、そろそろ夕食を出す時間になったので最後の仕上げに掛かるのであった…。

side out

スバル達が帰って来てから10分後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 食堂

温泉街を回っていたスバル達が帰ってきた事を確認したシン達は夕食を食べる為に食堂へやってきた。

神奈子

「これが今日の夕食だ。遠慮なく食べてくれ」

神奈子はシン達の前にあるテーブルに作った料理を並べるとシン達は出された料理の豪華さに思わず息を飲んだ。

スバル@ヨダレ垂れ流し

「おいしそうな料理がたくさんある……」

ユート@同上

「これ全部食べていいのか!？」

エミリア

「あたし……こんなに豪華な料理を見るのは始めてかも……」
はやて

「高級料亭真つ青な品揃えやな……」

レイ

「俺の予想以上だ……」

リオン

「ここまで豪華な食事などオベロン社に居た時でもなかった
ザフィーラ

「……………（凄い料理だ）」

シン

「覚めるのももったいないから食べないか？」

バルバトス

「シン・アスカの言うとおりだ」

シン

「ではいただきます!!」

スバル達

「いただきます!!」

シン達は（スバルとユートは除く）あまりにも豪華な料理に圧倒されていたが冷めるともつたないので神奈子がつた料理を食べ始めた。

ユート@おかわり10杯目

「うまい！全部美味い!!」

スバル@おかわり8杯目

「何杯でもご飯が食べられる!!」

シズル

「噂に違わぬ腕前ですね」

ザフィーラ

「……………美味い」

バルバトス@12杯目

「おかわりだ!!!!」

シン達は神奈子のつた料理に舌鼓を打ち、和やかな雰囲気夕食を食べるのであった。

S i d e 男湯

1時間後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 露天風呂

食事の終えた男性陣は旅館『守矢』の看板である露天風呂に来てい

た。

シン

「ふう…」

レイ

「露天風呂もなかなかいいものだな」

シズル

「今までの疲れがとけていくようですね…」

ユート@泳いでいる

「すごく広いぞー！！！」

リオン

「風呂で泳ぐな馬鹿者」

ザフィーラ

「ここから見る景色も素晴らしいものだな」

バルバトス@グラールに来てから趣味が増えた

「満月の月が照らす紅葉を見ながら飲む酒…悪くない」

ユートが浴槽で泳いでいる以外は男湯の露天風呂は割と平和であった。

S i d e o u t

S i d e 女湯

同刻

ニユーデイズ クゴ温泉

旅館『守矢』

露天風呂

一方女湯は…

はやて@早苗の胸を掴む

「妬ましい！！フェイトちゃん並みにあるその胸が妬ましい！！」

早苗

「ひゃあ!？」

エミリア@スバルの胸を掴む

「おーおーいい胸持つてていいわねあんたらは!！」
スバル

「ちよつエミリア!？」

はやて・エミリア@胸を揉みまくる

「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい
!!胸か!？胸が大きい奴はモテるのか!？ならなんであたし（私）
には胸がまったくない!？なんで!？どうして!？神はそんなにあ
たし（私）が嫌いか!？嫌いなのか!？」

早苗

「そんな…と言われても…あん!！」
スバル

「あたしじゃどうしようも…ひゃあ!！」

絶賛力オス状態だった。

はやて・エミリア@血涙

「パルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパル
パルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパル
パルパル」

早苗・スバル

「あ、あん!！ひゃあ!！」

どんどんエスカレートするはやてとエミリアのセクハラ…それを止
められる者は女湯には居なかった。

はやて・エミリア

「パルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパル
パルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパルパル

パ
ル
パ
ル
「
」

早苗・スバル

「しゅんあにむねをもんじゃらめえええええ！！！」

早苗とスバルはこのまま延々とはやてとエミリアにセクハラを続けられると思っていた。

しかし、はやてとエミリアのセクハラは意外な形で呆気なく終わった。

リオン

「ピコハン!!」

はやて・エミリア

「
「
オウフ
」
」

リオンがシャルティエの晶術のひとつであるピコハンを詠唱し、は
やてとエミリアの頭の上にピコピコハンマーが直撃、2人は気を失
ってぶかぶかと浮いた。

Side out

リオン

「まったく……少しは静かに入浴する事も出来んのか？」

レ
イ

「それができる位には回復した証拠だろうか？」

シズル

「はやてがご迷惑をおかけしてすみません……」

はやてとエミリアの暴走を止めたりオンは深々とため息をついて再び湯船に身体を浸けるとレイは苦笑いしながらリオンに答え、シズルは深々と頭を下げた。

そんなりオン達の姿を見たシンはこのような日をとて大切なものだと思っていた。

そして、騒がしかった1日は終わりを告げたのだった…。

第13話「温泉旅行ゝ旅館編」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は1日目終了編になります。

後半では少し作者が暴走しちゃいました。

ナニヲヤツテルンダロアレ…。

では(・・・)ノシ

第13話「温泉旅行2日目」それぞれの休暇」

1日目は最後にちよつとしたトラブルがあつたけど無事に終わった
ここ最近坊ちゃんも早苗も頑張つていたからこうやってゆっくり休
める機会があるのはいいことだと思う

なんだかんだいって坊ちゃんも結構無理をしているからね
できればあの時のような悲劇が繰り返されなければいいけど…

シャルティエ

『坊ちゃん、早苗。もうそろそろ朝食の時間ですよ』

リオン

「わかった。ほら起きろ」

早苗

「うみゅ？もう朝ですか？」

シャルティエ

『うん。もう朝食の時間だから早く顔を洗ってきなよ』

早苗

「ふあい…」

今の坊ちゃんには本当の意味で仲間に頼るようになったのは僕にと
って非常に嬉しいことだ

だからこの絆が二度と断ち切られない事を僕は願っている…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第13話「温泉旅行2日目」それぞれの休暇」

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』

神奈子が用意してくれた朝食を食べ終えたシン達は今日の予定について話し合っていた。

シズル

「僕達はこれから亜空間発生装置の取り付けの為にこのエリアにあるグラール教団に向かいます」

シズル達は元々観光目的ではなく来週に行われる亜空間航行理論の研究の成果の発表のためにこのエリアから少し離れた所にあるグラール教団の施設に向かい亜空間航行実験で一番重要である機材を取りつける為に来ている。

そのためインヘルト社のメンバーとユートはここで別れる事になる。

リオン

「僕達はここの女将である八坂 神奈子に用がある」

早苗

「だから私達はここに残ります」

リオンと早苗は早苗の仕える神であり、ソーディアン・イクティノスのマスターである神奈子にある用があった。

そのためリオンと早苗は旅館『守矢』に残る事にした。

レイ

「では俺達はここの温泉街を回らせてもらおう」

エミリア

「昨日は温泉に浸かっていたただだからねー」

レイとエミリアは昨日スバル達が回った温泉街を観光する事になっていた。

エミリアは折角の休暇なので色々と回ろうと考えており、レイは近

うちに慰安旅行に来る他の社員達に勧められるものは無いかと探す為に温泉街を回る事にしたのである。

スバル

「じゃあわたしも…」

スバルはレイとエミリアに便乗して自分も温泉街を回ろうとしたがそんな彼女にシンは無情な宣告が待っていた。

シン

「スバル。お前は俺と一緒にユートの評価をするぞ」

スバル

「……………彘？」

シン

「だからユートの実力試験を俺達でする」

スバル

「なん…だと…？」

シン

「当たり前だろ？俺達以外に誰がユートの事を評価するんだよ？」

スバル

「そんなぁ…」

スバルは温泉街を回れない事に大きく肩を落とした。

シンはスバルのあまりにも落ち込んだ表情に内心罪悪感を持った。しかし、管理局は亜空間航行実験という絶好の好機に何もしてこないという事は考えられない。もし管理局襲撃してきた際にすぐに対応できるように施設への最短ルートと施設の構造を把握しておきたかったのである。

ユート

「うん？シンとスバルも来てくれるのか？」

シン

「ああ。そのかわり厳しく評価するから覚悟しておけよ？」

ユート

「おう！よろしくな！！」

その後シン達はそれぞれの組に別れ、思い思いに行動するのであった。

S i d e リオン＆早苗

組分けから10分後

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』

早苗とリオンは神奈子にある話をするために神奈子のいる部屋まで来ていた。

早苗

「神奈子様。今お時間はよろしいでしょうか？」

神奈子

「ああ。昨日から明日まで早苗達の貸し切りだから問題ない。入ってもかまわないよ」

神奈子から了承を得た早苗とリオンは部屋の中に入った。

早苗

「失礼します」

リオン

「失礼する」

神奈子

「よく来たね」

諏訪子

「先にお邪魔してるよ」

イクティノス

『ひさしぶりだな早苗、そしてリオン』

リオンは部屋に入った時に真っ先に目がついたのはリオンが居た世界で失われたものであるソーディアン・イクティノスであった。ある程度早苗から話を聞かされていたとはいえ目の前に実物があり、更にイクティノスの人格も健在であることに驚きを隠せなかった。リオンは何を話すべきか迷っていると早苗が先に口を開いた

早苗

「お久しぶりですイクティノス。貴方に会いたいという人達が居ましたから持つて来ましたよ」

イクティノス

『ほう……。それは誰なのだ？』

ディムロス

『ひさしぶりだな。イクティノス』

イクティノスは自分に会いたい人が誰かは分からなかったがディムロスが話しかけるとイクティノスは驚いた声を上げた。

イクティノス

『ディムロス！？お前もこの世界に来ていたのか！』

クレメンテ

『ついでに言つと儂らもじゃよ』

ハロルド

『はあいイクティノス。久しぶりね』

シャルティエ

『僕もいますよ』

イクティノス

『シャルティエはリオンが居る時点で居ると思っていたがまさかハロルドとクレメンテ老もいたとは…』

イクティノスはかつての仲間たちとの再会を喜び、神奈子と諏訪子は早苗の表情を見るとまだ話がある事を悟った。

神奈子

「……………その表情だ^{かお}とまだなにか重大な事があるんだね」

早苗

「え！？ええつと…」

諏訪子

「早苗は何か隠し事をしてしていると目がちよつとだけ右にずらす癖があるからね」

早苗@赤面して俯く

「はう…」

リオン

「ここからは僕が話す」

イクティノス

『ああ。頼む』

早苗はいとも簡単に隠し事をしている事を見抜かれて赤面した。

リオンはそんな早苗を見かねて早苗が話そうとしていた事を語り始めた。

リオン

「この世界…グラールにはかつてこのグラールに住んでいた人類が残した強力な遺産が存在している」

諏訪子

「うん。その事はこの世界に来てすぐに把握したよ」

リオン

「グーラルとは違う世界からこの遺産全てを奪おうとしている組織がある」

神奈子

「それは感心しないね。この世界の物はここに住む人々の宝だ」

神奈子はリオンの話を聞いて少し顔を歪ませた。

この世界にある物はこの世界に住む者達の物である。どんなお題目を掲げようと盗人である事にはかわりない。

そしてリオンは少し深呼吸をしたあと、口を開いた。

リオン

「そして僕達はその事件に巻き込まれ奴らに敵と認識された」
イクティノス

『だろうな。そうでなければそこまで知っている訳が無い』

諏訪子

「最近のニュースでインヘルト社が正体不明の何者かに襲撃されたというニュースがあつたけど…」

リオン

「ユートを除いた宿泊メンバーは全員その事件と遭遇した」
神奈子

「そうなるとイクティノスは勿論私達の持つ秘宝も狙われてもおかしくないわけだね？」

早苗@復帰した

「はい。ですから…」

赤面状態から復帰した早苗は神奈子の問いに答えると神奈子は少し目を瞑らせたあと口を開いた。

神奈子

「わかった。直接の手伝いは無理かも知れんがある程度なら協力しよう」

早苗

「本当ですか!？」

諏訪子

「流石に一緒に戦おうとしてもこの旅館があるからね」

イクティノス

『だから俺が早苗と合流しよう』

シャルティエ

『イクティノスが来てくれるなら心強いよ!』

神奈子達は早苗達に協力すると約束し、イクティノスは早苗が持つ事になった。

神奈子

「イクティノス。早苗を頼んだよ」

イクティノス

『承知した』

早苗

「ありがとうございます!!」

早苗は神奈子達に頭を下げると神奈子達は満面の笑みを浮かべたと早苗にとって非常に聞かれたくない事を聞かれた。

神奈子

「いいんだよ。そ・れ・よ・り・も」

諏訪子

「隣に居るリオン君との関係を教えてもらおうか？」

早苗

「え？それは、その……」

神奈子・諏訪子

「あああああ……！」

早苗

「ふええええええええ！！！！！？？」

その後、早苗はシン達が帰ってくるまでリオンとの関係について問
 いただされるのであった…。

Side out

Side
レイ&エミリア

シン達と別れてから10分後

ニユーデイズ クゴ温泉 温泉街

シン達と別れたレイとエミリアは別れる前にスバルから教えてもらった温泉饅頭の店に来ていた。

レ イ

「ほう……スバルの情報は確かのようなな」

エミリア

「ほんと沢山あつて迷つちやうよねー」

何故レイとエミリアがこの店に来ている理由はレイが日ごろからお世話になつてゐるクラウチやチェルシー、エミリアと早苗の修行を手伝つてくれているバスクとクノーにお礼を兼ねてお土産を買いたいと思つたからである。

エミリア

「これはおっさんの分でこれがクノーさんの分…」

レイ

「これで粗方揃ったな」

レイはリトルウイングのメンバー達への土産が揃った事に満足げな笑みを浮かべたがここにきてエミリアは1つ重大な事を思い出した。

エミリア

「ねえねえレイ」

レイ

「どうした？」

エミリア

「チエルシーとバスクさんの分はどうするの？」

レイはエミリアの何気ない質問に表情を凍りつかせた。

チエルシーは恐らく食べ物を食べる事ができるだろう。

しかし、バスクは何処をどう見ても食べ物を食べることが出来なさそうである。

だがバスク達の分を買ってリトルウイングに送ってもらった以上クーリングオフは利かないであろう。

レイ

「……………とりあえず何か別の物も探すぞ…」

エミリア

「うん…。そだね」

その後レイとエミリアは必死に土産物店で土産になりそうなものを探したが結局見つからず肩を落しながら旅館『守矢』まで引き返すのであった。

S i d e o u t

S i d e シン&ユート

レイ達と別れてから1時間後

ニューデイズ サクラギ保護区 亜空間実験公開会場予定地

シンはシズル達の護衛兼ユートの実力試験を終え、作業するシズル達と別れ、待合室でユートとスバルと共に待機していた。

スバル

「はあ…温泉饅頭…」

シン@スルー

「一通りユートの動きを見せてもらったが」

ユート

「おう！どうだった？」

シン

「流石といったところだな」

ユート

「よっしゃあー！」

シンは落ち込んでいるスバルをガンスルーしてユートの評価をしていた。

ポテンシャルに関しては見習いとはいえ流石はカーシユ族の戦士なだけあって非常に高く敵の位置を察知する能力もシンの出会った人物達と比べてもベスト3に入る程のものである。

しかし、シンは1つだけ気になる事があったのでそこをユートに指摘した。

シン

「だが闇雲に敵に突っ込むのはいただけないな」

ユート

「う…。それは…」

シン

「何か理由でもあるのか？」

シンが気になった事…それはどんな敵だとしても真っ先に突撃するクセがあるのである。

ユートは直情的な性格だろうと最初は思ったがユートの反応を見る限り何か理由があるのだろうと思ったシンは思い切ってユートに理由を尋ねてみる事にした。

ユート

「お兄がいつも言っていた言葉で『死に触れる事で強くなる』って言うっていたから…」

シン

「『死に触れる』…か…」

シンはユートが言った兄の言葉に興味を持った。

だがこのままだとユートが本当に命を落とすようなことがあると判断したシンは少し考えた後に口を開いた。

シン

「たぶん『死に触れる』という死ぬ事ではないはずだ」

ユート

「死ぬことじゃない？わからない…わからないぞ！」

シン

「そうだな…。俺も最初はこの答えを知らなかった」

ユート

「じゃあシンは『死に触れる事で強くなる』という意味を知っているのか!？」

シン

「あくまで俺自身の解釈だけだな」

ユート

「教えてくれ！『死に触れる』って本当はどういう意味なんだ！？」

ユートはシン持っている答えを知りたかった。

今は亡き兄の遺した言葉の意味を今までずっと探し続けていた。そして目の前にその意味を知る者がいる。

だからユートはシンに掴みかかった。

シンは少し困った表情をした後に口を開いた。

シン

「この言葉の意味自体は自分で探しだすものだぞ」

ユート

「でも！」

シン

「だからこれは俺が辿り着いた答えであってユートの見つけるものとは違う。それでもいいか？」

ユート

「ああ！」

ユートが元気よく返事をする。シンは真剣な表情で語り始めた。

シン

「俺の解釈では『死に触れる』という事は死ぬという事じゃなくて死に瀕した時に込み上げてくる『死にたくない。もっと生きていたい』と思う『生きる事への執着』という意味だと思っている」

ユート

「『生きる事への執着』？」

シン

「ああ。死んでしまったら何もできなくなるからな…」

ユート

「シンはそんな人を沢山見てきたのか？」

ユートの質問にシンは少し顔を歪めたがここで話を折っては意味が無いので話を続けた。

シン

「そうだ。俺は沢山の人の死をこの目で見てきた」

シンはかつての自分の相棒…歴代のインパルスのデバイスマスター達の顔を思い浮かべた。

デバイスマスターの大半は戦いの最中に散っていき生き残れた者は両手で数えられる位しか生き残らず、生き残った者でも半分は日常生活が送れない怪我を負った。

シンはユートをその一員になってほしくない為に話を続けた。

シン

「だから『死に触れる』という意味は『死ぬこと』じゃなくて『生き抜く事』だと思っている」

ユートはシン話を聞いて何かを掴めたらしく満面の笑みでシンに礼を言った。

ユート

「まだよくわからないけどそれでも何か掴めた気がする！ありがとう！！」

シン

「俺の話で何かを掴めたのならそれで十分だ」

シンもユートが何かを掴めたことに満足した後、もう1つの問題に頭を抱える事になった。

スバル

「温泉饅頭…」

シン

「…スバル（この馬鹿）を早く復帰させないといけないな…」

その後、シンは旅館『守矢』に帰るまでスバルを慰めるのに頭を悩ませるのであった。

Side out

ニユーデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 温泉

シン

「今日は…疲れたな…」

レイ

「ああ…」

リオン

「まっただ…」

湯船に浸かっている3人はひどく疲れていた。

シンはユートの実技試験報告書の作成と落ち込んでいたスバルの機嫌を直す為に温泉饅頭巡りに（全てシンの自腹）付き合わされた為に。

レイはチェルシーとバスクのお土産を捜す為に温泉街全体を回った為に。

リオンは神奈子と諏訪子に早苗との関係を徹底的に追及された為に。

シン・リオン・レイ

「「「はあ……」」」

3人は深いため息をつきながら温泉で1日の疲れを癒すのであった。
一方、女湯にいるスバル達3人は

早苗

「うう…根掘り葉掘り聞かれてしまいました…」

エミリア

「チエルシーのお土産どうしょ…」

スバル

「温泉饅頭おいしかったなあ…」

スバルを除いて皆疲れ切っていた。

早苗・エミリア

「「「はあ…」」」

早苗とエミリアは自分が疲れる原因を思いながら溜息を吐き

スバル

「またシンと一緒にどこか遊びに行きたいなあ…」

スバルは満月に照らされる景色を眺めながらまたシンと一緒にあそびに行きたいと思った。

こうして色々あった温泉旅行の2日目は幕を閉じたのであった…。

第13話「温泉旅行2日目〜それぞれの休暇〜」（後書き）

どうも、飛鳥です。

今回は温泉旅行2日目となりました。

色々とグダグダな1日でしたが次で温泉旅行編も終了となります。
では（・・・）ノシ

第13話「温泉旅行最終日」家に帰る者と仕事をする者と影で動く者」

温泉旅行に出かけて今日が3日目になる

仕事の兼もシンがしてくれたために僕達は純粹に休暇を取る事ができた

ここの女将であり早苗の保護者であった神奈子という人物の協力を得る事ができた

イクティノスも僕達と行動を共にすることになり僕達の戦力の強化もできた

だが

シャルティエ

『坊ちゃん。どうかしましたか？そんなに考え込んで』

リオン

「少し考え事をしていただけだ」

シャルティエ

『そうですか？でもあまり考え過ぎるのも良くないですよ坊ちゃん』

リオン

「気に留めておこう」

こうもうまくいきすぎていると何か良からぬ事が起きてしまいそうだ
この予感が杞憂である事を願うしかないな…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

「世界を駆け巡る者達」

第13話「温泉旅行最終日」家に帰る者と仕事をする者と影で動く者」

ニューデイズ クゴ温泉 旅館『守矢』 玄関

温泉旅行の最終日となり、荷物をまとめたシン達は世話になった神奈子と諏訪子に挨拶をしていた。

シン

「お世話になりました」

諏訪子

「また来てねー！」

早苗

「はい。この戦いが終わったら必ず来ます！」

神奈子

「イクティノス。早苗の事を頼んだよ」

イクティノス

『承知した』

シン

「じゃあまた来ます」

その後、クゴ温泉をあとにしたシン達はマイシップに乗った。

旅館『守矢』を出発してから10分後

マイシップ

スバル

「あっという間に終わったね」

レイ

「だが今回の旅行はかなり有意義なものだったな」

リオン

「それには同意だな」

エミリア

「あたしと早苗は元々仕事だって聞いたからついてきたんだけどね」

早苗

「その仕事はシンさんとスバルさんにこなしてもらったから純粹な旅行になりましたね」

だんだん遠くなっていくクゴ温泉を眺めながらスバル達はあつという間に終わった温泉旅行に感傷に浸っていた。

ほんのわずかな時間だったが得られたものは沢山あり、イクティノスという新たな仲間が加わったのである。

シンとスバルは休暇にならなかったがそれ以外の4人は純粹に休暇を楽しめた。

なんだかんだ言って休暇を楽しんでいた早苗とエミリアにレイは少し笑いながら口を開いた。

レイ

「休みに行くなんてとんでもないと言っていたお前達が言うものだな」

エミリア

「うゝ…それは…」

早苗

「あの時はそこまで頭が回らなかったんですよ!!」

レイに痛い所を突かれて早苗とエミリアは顔を赤くして反論しているとさつきから口を開いていなかったシンが口を開いた。

シン

「何か勘違いをしているようだがちゃんとレイ達にも仕事はあるぞ？」

早苗・エミリア

「「え?」」

リオン・レイ

「ああ。なるほどな」

シンの言った事に早苗とエミリアは目を点にし、リオンとレイはこの温泉旅行の本当の意味を思い出して納得した。

シン

「俺達は今度リトルウイングの慰安旅行の”視察”の為にクゴ温泉に行ったんだぞ？」

早苗・エミリア

「ああ。そういえばそうだった」

早苗とエミリアもシンに言われてようやく気が付き、シンはその2人を見た後リオン達にある紙を渡した。

シン

「この紙にクゴ温泉の温泉街のレポートをまとめてくれ。紙は3日後に回収するからな」

エミリア

「うえ…あたしレポート書くの苦手なんですけど…」

レイ

「まあ”仕事”だからな。仕方ないだろう」

早苗

「まあ…これも訓練だと思って頑張りましょう？」

エミリアは肩を落とし、早苗はそんなエミリアを慰めながらパーティを解散したのであった。

Side シン&スバル

パーティ解散から10分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

あれからリオン達と別れたシンとスバルは部屋に備え柄つけてあるシャワーを浴びた後一息つき、スバルは冷蔵庫にあったコルトバミルクを飲みほして気になった事をシンに尋ねた。

スバル

「ねーねーシンー」

シン

「どうした？」

スバル

「わたしは報告書を書かなくていいの？」

スバルが気になった事とはリオン達に渡された報告書用の紙が自分に渡されていない事であった。

シンはスバルの質問を聞くとしばらく考え込んだ後口を開いた。

シン

「スバルはユートの実技試験の審査官としてきたという扱いになっていたからなあの時落ち込んでいたとはいえ報告書は書いただろ？」

スバル

「うん？そういえば書いたねー」

シン

「だからスバルの分はない」

スバル

「そうなると温泉街を回るのを我慢した甲斐があったね」

スバルはもう報告書を書かなくていい事に喜び、シンも苦笑しながら自分の報告書を書いているとスバルは何か思いつきシンに提案した。

スバル

「ねーねーシンー」

シン

「今度はなんだ？」

スバル

「今起こっている事件が終わったらさ…2人でどこかに遊びに行こうよ！」

シン

「そうだな…。この情勢がある程度落ち着いたら遊びに行くか」

スバルの提案とは今起こっている事件に一定の目処が着いたら2人で何処かに遊びに行くというものであった。

シンも結局スバルは休暇らしい休暇を上げられなかったためスバルの提案を承諾した。

スバル

「さっすがシン！話が分かる！！」

シン

「じゃあ何処に行きたいかお互い考えておくか」

スバル

「うん！」

スバルはシンが自分の提案を承諾してくれた事に子供のように喜んだ。

シンはそんなスバルを見ながら何処に遊びに行こうかと考えるのであった。

S i d e o u t

S i d e シズル

シン達が旅館『守矢』を出発してから1時間後
ニューデイズ サクラギ保護区 亜空間航行実験成果発表会場予定
地 機材室

シズル達は思ったよりも難航している亜空間発生装置の取り付けを
完了させるためにシン達と別れ亜空間発生装置の最終調整をしてい
た。

シズル

「あとはここをこうして…よし完成だ」

そしてその調整も完了したシズルは部屋に備え付けてあるソファ―
に腰掛けた。

シズル

「ふう…少し作業が難航したけどあとは発表当日になるのを待つだ
けだね」

はやて

「お疲れ様、シズルさん。はい、お茶を淹れてきたで」

シズルがソファ―で寛いでいるとお茶を淹れてきたはやてが部屋の
中に入り、お茶の入った容器をシズルに渡し、シズルの隣に座った。

シズル

「ああ。ありがとうはやて」
はやて

「それにしてもやっと亜空間航行の発表ができるなあ」
シズル

「そうだね」

シズルははやての何気ない一言を聞いて今に至るまでの亜空間航行の研究を思い出していた。

最初は父がダークファルスとの戦いで発見された歪曲空間を基に提唱された事がこの研究の始まりだった。

最初は機材を作ることさえ難航し、もしかしたら旧文明にもそういった技術があるのではというある研究員の意見があつて実際にレリクスの出土品を調べていくと亜空間航行の技術は旧文明の時点で確立していたことが判明した。

シズルは自分の産まれ持っていた神憑り的な演算能力を生かして亜空間の座標設定の演算を行つて亜空間への道を開いた。

しかし、その過程で起こった事故で一度肉体的に死に、その時にカムハーンと出会った。

カムハーンは旧文明を統治していた王であり、亜空間航行の技術を確立した技術者であると知り、彼自身もこの研究に協力してくれるようになった。

彼の力添えもあつてこの亜空間航行の研究もここまで漕ぎ着ける事ができた。

亜空間航行は資源枯渇という問題に直面しているこのグラールの明日を決めると言つていい程重要な研究である。

それもやつと最終ラインに入る事ができた。

この実験が成功すればこのグラール最大の問題である資源枯渇を解決する事ができる。だからシズルは最後の調整作業の任を任され、その調整もようやく完成した。

だが、シズルには1つだけ気にかかる事があつた。

時空管理局…

SEEDとの戦いで疲れ切っていた旧文明にいきなり製作したものをよこせと現れ、旧文明が滅びる一端となつた組織であり、現在もこのグラールで暗躍している組織である。

生前のカムハーンはこの組織を何とか撃退できたもののSEEDによる肉体汚染と時空管理局との戦いでできた傷によって肉体が限界

を迎え精神体として1万年の以上たった1人で亜空間の1つである『マガハラ』の中で潜伏を続け、僕の亜空間を開いた事によって『マガハラ』への道を開いた際に一度死亡した僕を蘇生してこのグラールに再び襲いかかるうとしている時空管理局の魔の手からグラールを救う手伝いをしてほしいと彼に懇願され、シズルは時空管理局という組織に半信半疑であったシズルもカーシュ族の里の惨状を見てその組織が存在している事を認識した。

最近研究所に襲撃してきた所属不明の集団も時空管理局の手の者だとわかったシズルはおそらく亜空間航行の発表に合わせて襲撃を仕掛けてくると予測していた。

だからシズルはこの研究を悪用されない為にある事を思いついた。

シズル

「はやて」

はやて

「どうしたんシズルさん？」

シズル

「明日クラッド6に行って彼らにこの実験の護衛の依頼を出してきてほしいんだ」

はやて

「やっぱりシズルさんも同じことを考えとったんやな…。わかりました。それじゃあ明日行ってきます」

シズル

「うん。よろしく頼むよ」

シズルが思いついた事：それはリトルウィングに所属するシン達にこの実験の護衛を依頼するというものであった。

はやても同じことを考えていたらしくすぐに了承した。

その後、はやて達は間近に迫っている実験に備え、身体を休めるのであった。

S i d e o u t

S i d e E X ユート

シン達が旅館『守矢』から出発してから1時間後
ニユーデイズ サクラギ保護区

シズルの護衛の役目を終えたユートだったがユートはシン達と別れ、
バルバトスに組み手をしてもらっていた

バルバトス

「ぶるあ！」

ユート

「うわっ!？」

結果は見ての通りバルバトスがユートの槍（テノラ社製）ごと吹き
飛ばし、ユートは空中で体勢を整えて着地したものの、咄嗟に防御
に使った槍はぽっきりと折れていた。

ユート

「うっ…これで10連敗だ…」

バルバトス

「ふん。お前では俺の渴きを癒すにはまだまだ程遠いな」

ユートは折れた槍を見て頂垂れ、バルバトスは言葉ではユートを貶
しているが連敗しても自分に立ち向かってくるユートに興味を持っ
ていた。

それはかつて自分を倒した英雄志望の少年を思い起こすには十分す
ぎるほど彼とユートは似ていた。

バルバトス

「どうした？それで終わりか？」

ユート

「まだまだ僕は戦える！！」

10連敗したにも関わらず戦意を無くさないユートにバルバトスは心の中で思った。

『こいつを1人前の戦士に鍛え上げるのも悪くない』と。

バルバトス

「いいぜ。こいよ！」

ユート

「いくぞ！！」

バルバトスは将来有望な1人の少年に早苗と同じかそれ以上の期待を持ってユートの組み手を再開するのであった。

尚、その後バルバトスが折った槍の本数は20を超え、ユートの手持ちの槍が無くなったので（カーシユ族の槍は本来狩りをする時に使うものなので除外）終わったのだがバルバトスは折れた槍を弁償する羽目になったのはまた別の話である。

S i d e o u t

S i d e E X なのは

ニューデイズ サクラギ保護区 時空管理局拠点

時空管理局がニューデイズに存在するロストギア確保の為に作られたこの拠点でなのはある人物からの命令を聞いていた。

なのは

「亜空間実験の関係者の抹殺…ですか？」

???

『はい。この発表に参加した者を全員抹殺してください』
なのは

「御言葉ですがいくらなんでも抹殺はやりすぎです!!」

なのはが通信をしている相手から受けた命令…。

それは亜空間航行の発表に参加した全ての者を抹殺するというものであった。

なのははこの命令を聞いた時反発した。

確かになのははシンに対して強い憎しみを持っている。しかし、シンに關係する以外のことに關してはまだ正氣を保っている。

だからなのはにとってこの命令は正氣かと疑っていた。

だが、なのはと通信している相手は涼しい顔をしてなのはに答えた。

???

『何を躊躇っているのです？彼らが次元航行の技術を手に入れてしまつては後に大きな厄災をもたらすのですよ？』

なのは

「ですが…」

未だに引こうともしないなのはに彼女はある方法に使つた。

???

『いいですか高町一等空尉？【これは次元世界の平和を保つ事に必要な事なのです。】一時の感情に任せてしまつては戦いとは【何の關係のない人々】が【“彼”の犠牲になる】のですよ？そう貴方の親友である【彼女】のように…』

なのは彼女の言葉を聞いた瞬間まるでそれが管理局の正義だと思
うようになり自然と口に出した。

なのは

「はい。わかりました。高町一等空尉は亜空間航行実験発表会場に
来た者を全て抹殺します」

???

『それでいいのです。【全ては次元世界の平和の為に】』

彼女はなのはが自分の命令を受諾した事に満足げな表情をすると通
信を切った。

なのは

「そう…。全ては次元世界の平和の為に…」

この時なのはの目からハイライトが消えていた事に気がつく者は誰
一人としていなかった。

それが悲劇への引き金である事とは知らずに…。

第13話「温泉旅行最終日」家に帰る者と仕事をする者と影で動く者」(後書

どうも飛鳥です。

今回で温泉旅行編は終了となります。

次回からこの物語は急速に進んでいくことになります。

次の投稿は番外編となります。

では(・・・)ノシ

番外編／氷精達の冒険／第3話「時空管理局」

チルノ達の武器を製作して1ヶ月が過ぎた

皆が作った武器はどれも大業物と言っても過言ではない出来だがそれによってある弊害が起きた

チルノの武器を狙う不逞の輩が現れるようになったのだ

バルディッシュの話によるとフェイト・テストロツサ・ハオラウンが過去に所属していた組織は現在チルノが使っている武器と同じくらいのレベルの武器や重要な古代遺産を管理という名の下に強盗まがいの事をするような集団らしい

マガシ@クリムゾンで袈裟掛けに斬る

「ふん!!」

管理局員@絶命

「ぎゃあああ!!!!」

マガシ

「大した敵ではないな」

レティ

「そちらも片付いたようね」

アトワイト

『チルノがあん武器を作ってからこういった奴が増えたわね』

フェイト

「ごめんなさい…私達が来たせいで…」

レティ

「別に貴女を攻めている訳ではないわ。でもあれだけやられているのに懲りないわね…」

マガシ

「この死体はあのチルノに見られないように隠すぞ」
レティ

「手伝うわ」

フェイト

「あ。私も手伝います」

今のところチルノに私達がこの賊を殺している所は見られずに済んではいるがやたらと勘の良いあの馬鹿だ…

私達が影で奴ら殺しをしていた事を感付いていたのだろう…

今回は影で私達がしている事に感付いたチルノと管理局の大軍が一斉に押し寄せてきたあの時の戦いの記録だ…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y 番外編

「氷精達の冒険」

第3話「時空管理局」

モトウブ ダグオラ・シティ ガイークの酒場

チルノ達が新しい武器を製作して1週間が過ぎた。

その間にチルノ達は危険度が高い依頼を4つ成功し、成功の報告と新しい依頼の受諾の為にチルノはガイークに依頼の成功の報告をしていた。

チルノ@報告書をガイークに渡す

「今回の依頼も無事に完了したよ」

ガイーク@報告書を受け取る

「わかった。依頼主への報告は俺がしておくぜ」

チルノ

「うん。よろしくね」

チルノから依頼の成功を報告されたガイークはチルノに依頼を出した依頼主に依頼が成功した事を報告しておく事を確認したチルノは新たな依頼が無いか探し始めた。

5分後

チルノ

「うゝん…今のところ新しい依頼は着てないなあ…」

チルノはガイークが戻ってくるまでの間に新しい依頼が無いか探していたが一件も見つからずどうしようかと思考の海に潜りかけるとドアが開く音がしたのでドアのある方向に視線を送ると見慣れない服を着た黒髪の少女が入ってきた。

入ってきた少女は酒場にチルノしかいない事を確認するとチルノに話しかけてきた。

黒髪の少女

「少し尋ねたいことがあるのだからいいか？」

チルノ

「なに？」

チルノは自分に話しかけてきた少女を警戒した。
普段チルノは人を疑うような事はしない…否そこまで長く生きていない為出来ない。

だがチルノは少女からSEEDの気配があり、チルノは自分の目の前にいる少女は普通の人間とは違うと認識した。

右眼は眼帯のせいで見えないが残る左眼は明らかに戦場を駆け抜けてきた者だけが持つ特有の眼である。

そして何よりも彼女の中に誰かがもう1人いるような錯覚を受け、チルノは少女を警戒していた。

一方チルノに警戒されている少女は不思議そうな眼でチルノを見つめていると彼女の相棒である【彼】がチルノに話しかけた。

「????」

『……………もしかしてお嬢ちゃん僕の気配を感じるのかい?』

チルノ

「!やっぱりもう1人いたのね!!」

黒髪の少女

「ワイナールの気配が分かるのか?」

チルノは黒髪の少女以外の声が頭に響いて思わずクラウ・ソウスを抜こうとし、黒髪の少女は自身の相棒の存在を感知できる事に驚いた。

ワイナールと呼ばれた男

『僕はワイナール。この子は…』

ナギサ

「私の名はナギサという。実はこの酒場の依頼を受けているある傭兵に依頼があつてここに着た」

チルノは自分に対して害意が無い事を直感で悟ると黒髪の少女…ナギサへの警戒を解き、自分の名前を名乗る事にした。

チルノ

「あたいはチルノ。さっきは疑つたりしてごめんね」

ナギサ@眼を見開く

「なっ!?!貴女がチルノか?」

チルノ

「?そうだけど」

ワイナール

『ありやりや。まさか一発で会えるとは思わなかったよ』

チルノ

「?となるとナギサとワイナールはあたいに用があるの?」

ナギサはチルノの名前を聞くと目を見開き、ワイナールはいきなりチルノと会える事に驚いていた。

チルノは何故2人が自分と会えた事に驚いているのか分からなかったがこの2人は自分に対して何か要件があると悟って話を促すとワイナールは咳払いをして要件を話し始めた。

ワイナール

『たぶん僕達がここに来ているからある程度察しがついているだろうけど君に依頼があつてきたんだ』

チルノ

「依頼つて？」

ワイナール

『実はというと…』

ナギサ@割つて入る

「ここからは私が話そう」

ワイナール@肩を落とす

『……………わかったよ。ナギサちゃん』

ワイナールはチルノに促されて話そうとするとナギサに遮られて少し落ち込み、ナギサはそんなワイナールをスルーして依頼内容を語り始めた。

ナギサ

「貴女達はとても優秀な傭兵だと噂で聞いた。だから貴女達に私の護衛をしてもらいたい」

チルノ

「護衛…？」

ナギサ@ナノトランサーで黒い石のような物を取り出す

「実は私はあるモノを探し、それを封印して回っている」

チルノ

「なっ！？なんでコレをナギサが持っているの！？」

チルノはナギサが見せた黒い石のような物を見て思わず声を荒げてしまった。

この黒い石のような物は現在グラールにある研究機関が躍起になつて調査をしている物であり、どの研究機関もこの石が一体どんなもののか判明させる事が出来ていない。

だが、チルノはこの石の正体を知っていた。

チルノ

「なんでダークファルスの欠片をナギサが持っているの！？」

ワイナール

『こりゃあ驚いた。まさかこの石の正体を知っているなんてね』

ナギサ

「ッ！？何故チルノがこのいしの正体がわかったんだ！？」

チルノ

「そんなことはどうだっていい！！この石はこのグラールにあつていけないモノなの！！！」

ナギサとワイナールはチルノが黒い石：ダークファルスの欠片だとすぐに分かった事に驚いていたがチルノは鬼気迫る表情でナギサに詰め寄った。

チルノ

「この石は人が触れてはいけないモノなの！！早くそれを渡して！！！」

ナギサ@ステイルハーツを構える

「なっ！？だが私もこれを集めて封印するという使命がある！！そう簡単には渡せない！！！！どうしても欲しいのなら私を倒してから

にしろ！！！！」

チルノ@クラウ・ソウスを構える

「上等！！その石はあたいが封印する！！！！」

チルノはこの欠片の危険性をイヤという程認識している為にナギサに渡すように迫るとナギサも自分の得物であるステイルハーツを展開して構え、チルノもクラウ・ソウスを抜いて戦闘に突入しかけて所で2人を止めた者がいた。

ワイナール@実体化してピコピコンハンマーを展開して2人の頭を叩く

「ストーップ！！」

チルノ・ナギサ

「あいた！！？」

今にも戦闘をしそうになった2人を止めたのはナギサの相棒であるワイナールであった。

ワイナールは一瞬だけ実体化してピコピコハンマーをナギサのナノトランサーから（ナギサには内緒で入れておいた）を展開して2人の頭を叩き、ピコピコハンマー独特の小気味のいい音が酒場に響いた。

ナギサ

「なにをするワイナール！！痛いじゃないか！！」

ワイナール@精神体に戻った

『ナギサちゃんさあ…なに依頼する人に剣を向けるの！？これじゃあ引き受けてくれなくなるかもしれないんだよ！？馬鹿！ナギサちゃん馬鹿！！』

ナギサ

「なっ！？バカといった方がバカなんだぞ！バカ！！」

チルノ@頭が冷えた

「…とりあえずあたい達のアジトで話を聞くよ」

ワイナル@ナギサをスルー

『わるいね。この子も悪い子じゃないんだけど…』

ワイナルのピコハンで頭が冷えたチルノはここで話を続けているとガイークに迷惑がかけると判断してナギサ達を自分達のアジトまで連れていくことにした。

S i d e ナギサ

1時間後

モトウブ ダグオラ・シティ近辺 チルノ達のアジト

チルノにアジトまで案内されたナギサは現在マガシと交渉を行っていた。

マガシ

「ふん。つまり私達にダークファルスの欠片を集める手伝いをしてほしいということだな」

ナギサ

「ああ。場所の見当は付いている。あとはそこに向かって封印すればいいだけだ」

交渉は円滑に進んでいた。が、ここでナギサはある問題が壁となった。

マガシ

「報酬は何を払うつもりだ？」

ナギサ@忘れていた

「あ」

それはこの依頼の報酬であった。

ナギサは自分の使命を優先するばかりで資金稼ぎなどしていなかったため現在手に持っている所持金は0メセタ…つまり無一文の状態である。とてもじゃないがこの依頼の報酬など払えそうにない。

ナギサ

「報酬は…」

マガシ

「私達は慈善事業で傭兵をやっているのではない。報酬が無いなら諦めるんだな」

ナギサ@焦っている

「報酬はこちらで何とかするから少し待ってはくれないだろうか？」
マガシ

「いいだろう…期限は3日後だ」

ナギサ

「わかった。では失礼する」

ナギサはマガシから期間を設けてくれた事に感謝しながらアジトの外へ出た。

5分後

モトウブ ダグオラ・シティ近辺 チルノ達のアジト入口前

ナギサはマガシ達が依頼を受けてくれない事に途方に暮れた。ワイナールはそんなナギサに呆れながら助け船を出した。

ワイナール

『あーナギサちゃん。ちょっといいかい？』

ナギサ

「なんだワイナール…私は報酬をどうしようか悩んでいるんだぞ」

ワイナール

『ナギサちゃんさあ…自分のメセタカードを見た事ある？』

ナギサ

「メセタカード？なんだそれは？」

ワイナール@がつくりとうなだれる

『…ナギサちゃんの世間知らずっぷりもここまでくると逆に清々しいね…』

旧文明人説明中…

ナギサ@ワイナールの説明を受けて自分の持っているメセタカードを見る

「つまりこのカードに書かれている数字が私の持っている所持金になるのか？」

ワイナール@呆れ顔

『ナギサちゃんそれをなんだと書いていたんだい？』

ナギサ@真顔

「今まで私が倒してきた敵の数を記録する物だと思っていた…」

ワイナール@色々と諦めた

『はあ…もう…どうでもいいよ…』

ちなみにナギサのメセタカードに書かれていた所持金は軽く2億を超えており、ワイナールは頭を抱えたのはまた別の話である。

5分後

ナギサ

「失礼する」

マガシ

「ほう…早かったではないか。それで報酬の件はどうなった？」

ナギサ

「このカードに書かれている数字の半分位でいいだろうか？」

マガシはナギサがまさか10分で帰ってきた事に驚きながら報酬を聞くとナギサは自分のメセタカードをマガシに見せた。

マガシ@目を見開く

「1億か…本当に良いのか？」

ナギサ

「ああ。それで…引き受けてくれるだろうか？」

マガシ

「わかった。この依頼、引き受けよう」

ナギサ

「あ、あと」

マガシ

「なんだ？」

ナギサはマガシが依頼を引き受けてくれた事に感謝するともうひとつ要件があつたのでその要件をマガシに話した。

ナギサ

「もしそちらが許してくれるのなら貴方達のチームに入らせてもらいたい」

マガシ@目を瞑って考える

「……………」

ナギサ

「やはり無理だろうか？」

マガシ

「その件はお前の戦闘能力を見てからだ」

ナギサ

「では!？」

マガシ

「あとはお前次第だ」

ナギサ

「ッ!感謝する!!」

マガシにとってナギサはこれ以上とない戦力になるだろうと思っていた。

しかし、人選に関してはチルノが全で一任しているため勝手に増やすわけにはいかないのであくまで一度戦闘を行った後という事にした。

ナギサはそれでもチルノの仲間になれるチャンスを得た事を喜んだのであった。

S i d e o u t

S i d e チルノ

マガシとナギサの交渉が終わってから30分後

モトウブ ダグオラ・シティ近辺 チルノ達のアジト入口前

チルノはマガシとナギサが依頼の交渉をしている間自分がダグオラ・シティに行く際にマガシとレティから感じた違和感について考えていた。

いつもと変わらない3人。だが、何かを隠している。チルノは仲間を疑う事はしなかったが今朝会った時にほんの僅かだが血のしかも人間の血の匂いが3人からした。

なにより違和感を持つ理由になったのがいつも自分と一緒に来てくれているフェイトが今日だけ同行しなかったのである。

バルディッシュは時空管理局っていう組織がいつ自分を襲撃してくるか分からないと言っていた。

そこでチルノが考え付いた答えは1つだった。

恐らく時空管理局はもう自分達に襲撃をしかけてきており、マガシ達が時空管理局と戦闘し、襲撃者を全員殺している。恐らくこれ以上情報が時空管理局に洩れる事の無いようにするために…。そして、自分を守るために殺害をしている事を…。

チルノ

「やっぱりあたいて皆に迷惑かけてばかりだよね…」

チルノは自分が仲間にとって大きな足枷となつていていると思い、自己嫌悪に陥った。

チルノ@目尻にうつすらと涙が浮かぶ

「あたいてホント…」

フェイト

「チルノちゃん…!」

チルノが目尻にうつすらと涙を浮かべながら自嘲の言葉を口に出しかけた所で聞き慣れた声がチルノの耳に入った。

チルノ

「フェイトお姉ちゃん…」

フェイト

「マガシが新しく入った依頼の説明をするから来いって言っていたよ」

チルノ

「わかった。フェイトお姉ちゃんは先に行つてて」

フェイト

「うん。じゃあ先に行っているね」

チルノはフェイトが去っていったのを確認すると目尻に浮かんでいた涙を隠す為に涙を腕で拭い、マガシ達が待っている場所へ向かった。

Side out

フェイトがチルノを呼びに行つて3分後

モトウブ ダグオラ・シティ近辺 チルノ達のアジト

チルノは自分の仲間が集まっている場所に到着するとそこにはいつものメンバーに加え、ナギサが備え付けてある椅子に座っていた。

マガシ

「今回の依頼内容を説明する」

マガシはチルノが入ってきたのを確認すると新しく入った依頼……つまりナギサからの依頼の内容の説明を始めた。

マガシ

「今回我々が向かうエリアはモトウブの雪山地帯の最深部だ」

マガシはナノトランサーにしまつてあつたモトウブの地図を取り出すとここから少し離れた場所にある雪山地帯のある一角に指を刺した。

マガシ

「この場所はまだにも自然環境が過酷すぎ、更にレリクスのような旧文明の遺産があるわけでもない為に人の手がまったく入っていないまさに未開のエリアだ」

フェイト

「でもレリクスが無いと分かっているのなら誰かがこのエリアに足

を踏み入れていてもおかしくない？」

フェイトはマガシの説明に矛盾を感じて指摘するとマガシの代わりにレティが答えた。

レティ

「2年前にこのエリアに立ち入ったガーディアンズの調査隊がこのエリアで消息を断つ前に本部に送られた通信でレリクスが無いって言う報告があったのよ」

フェイト

「じゃあその調査隊の人は…」

レティの説明を聞いたフェイトは自分の考えた予想を口に出そうとするとレティが先に答えた。

レティ

「恐らく死んでいるわ。ガーディアンズは救助隊を送ったけれどそのエリアに入ろうとした直前に大雪崩が発生して進めなくなったのよ」

フェイト

「そんな…」

レティ

「彼らも死ぬ事を覚悟していたから自分達が調査した内容を最後までで本部に送っていたそうよ」

フェイトはレティの説明を聞いて絶句し、説明したレティも力無く笑ったところでナギサが口を開いた。

ナギサ

「依頼内容の説明を続けてもいいか？」

レティ

「え、ええ…お願いするわ」

ナギサ

「実はこのエリア付近に私が探しているモノがある事が分かった。だから私はこのエリアに侵入する。貴方達にはその時の護衛をお願いする」

フエイト

「え…？」

フエイトは非常に危険なこのエリアに侵入する事に思わず変な声を上げ、チルノは何故危険を承知でこのエリアに入る理由に心当たりがあったため、ナギサに尋ねた。

チルノ

「アレがそのエリアにあるんだね？」

ナギサ

「ああ。だから危険なのは承知の上でこのエリアに侵入する」

チルノ

「わかった。護衛はあたい達にまかせて」

ナギサ

「感謝する」

チルノはナギサが探している者が何なのか知っている故に迷いは無かった。

その後、チルノ達はモトウブの雪山地帯にある洞窟へ向かった。

3時間後

モトウブ 雪山地帯 氷結洞窟最深部 未開エリア ブロック1

モトウブ雪山地帯氷結洞窟最深部未開エリア…通称『氷結の魔界』と呼ばれているエリアは2年前のガーディアンズ失踪事件が発生し

てから誰もこの先に進んだ者は1人もいないまさに未開のエリアに
チルノ達は足を踏み入れていた。

当初問題となっていた雪崩によって塞がっていた道はチルノのクラ
ウ・ソウスの一閃によって道を切り開くことができた。
だが…

フェイト@一応ホットドリンクは飲んだ

「やっぱり、寒い…」

それは寒さに弱いフェイトが到着して早くも弱音を吐きだしたので
ある。

ナギサ@雪山地帯に幾度となく来ている為平気

「そんなに寒いかな？」

フェイト

「なんでみんなは、平気なの？」

ナギサ

「慣れた」

レティ

「慣れね」

マガシ

「慣れたな」

チルノ

「慣れたよ。フェイトお姉ちゃん」

アトワイト

『そもそも私に寒さとか暑さとかは関係ないけどね』

周りのメンバーが1人を除いて皆人間ではないので霞んで見えてし
まうが

普通の人間からすれば寒がってはいても何事もなく動いているフェ

イトも十分凄いのだがそれを言う人間はここにはいない。
そして、フェイトが寒がる理由はもう一つあった。

チルノ

「それ以前に多分フェイトお姉ちゃんが展開しているバリアジャケットにも原因があるんじゃない？」

フェイト@バリアジャケットの服装を思い出す

「……………あ」

バルディッシュ@若干涙声

『マスター……………』

フェイトの展開しているバリアジャケットは露出が多い。

ある程度ならバリアジャケットが防いでくれるがあくまで『ある程度』なので氷点下30 以下であるこのエリアではバリアジャケットの保温能力が無効だという事をフェイトは失念していた。

マガシ@冷たい視線

「……………」

レティ@同上

「……………」

アトワイト@同上

『……………』

フェイト

「見ないで！！そんな目で私を見ないでえ！！！」

マガシ達に冷たい視線に耐えきれずフェイトは思わず悲鳴のような声を上げ、チルノはこのままでは話が進まないと悟ってフェイトに助け舟？を出した。

チルノ

「とりあえずバリアジャケットで展開する服装を防寒仕様にした方がいいんじゃない？」

フェイト@防寒服をイメージして防寒服を展開する

「う、うん……」

フェイトが防寒服を展開した事を確認したチルノ達は奥へ進んだ。

1時間後

モトウブ 雪山地帯 氷結洞窟最深部 未開エリア ブロック2

チルノ

「アレの位置は？」

ナギサ

「微かだが感じる……。もっと奥の方だな」

ナギサのナビを頼りに順調に奥へと進んでいたチルノ達だったが異変は唐突に起こった。

デルナディアン×3

「……」

カオスプリンガー×3

「……」

キャリガイン×3

「……」

カオスソーサラー×3

「……」

SEEDヴェナス×3

「……」

チルノ達が先に進もうとした時に大型のSEEDフォーム達が一斉

に現れたのである。

ワイナル

『ありやりや…まさかこんな所にSEEDフォームが居るなんてね』
ナギサ@ステイルハーツを展開する

「……………5対15か」

チルノ@ナギサの前に立つ

「待つて」

ナギサはSEEDフォームを見てすぐに臨戦態勢をとったがチルノはそんなナギサを制し、SEEDフォーム達に武器も展開せずに接近する。

ナギサ

「ッ！チルノ！？」

ワイナル

『ちよつとちよつと！！なんで丸腰の状態でSEEDフォームに近付くの！？』

事情を知らないナギサとワイナルはチルノがとった行動に動揺してチルノを止めようとするがナギサ達の予想とは大きくかけ離れた事態が起きた。

デルナディアン×3@チルノの目の前で跪く

「………」

カオスプリンガー×3@同上

「………」

キヤリガイン×3@同上

「………」

カオスソーサラー×3@同上

「……」
SEEDヴェナス×3 @同上
「……」

SEEDフォーム達はチルノの目の前に立つとまるで騎士が主の前に跪く様にチルノの目の前で跪いた。

ナギサ

「な、なにが起こっている？」

ワイナル

『僕も長い間SEEDを見てきたけどこんな状態は初めて見るよ……』

あまりにも非常識な出来事に思わずナギサ達は呆然としているがチルノはそんな2人を放置してSEEDフォーム達に語りかけた。

チルノ

「そっか、最後に感じていたSEEDの気配はアンタ達だったんだね……」

デルナディアンA（中央に居る）@首を縦に振る

「……」

チルノ

「あたいの同族のせいでこんなに辛い思いをしてごめんね……」

デルナディアンB（Aの左側に居る）

「ソレハチガウ」

チルノはこのSEEDフォーム達も自分の同族のせいでこんな姿になったと思って謝ろうとすると左に居るデルナディアンがそれを否定した。

チルノ

「え？」

デルナディアンC（Aの右側に居る）

「ワタシタチハコノサキニアルラボデヘンナシュウダンシニムリヤ
リコノスガタニサレタ」

チルノ

「ラボ？」

SEEDヴェナスA（中央に居る）

「ココカラスコシサキニアル…」

SEEDヴェナスB（Aの左側に居る）

「ヒトトシテノイシキヲノコシタママSEEDフォームトシテカツ
ドウサセテジブンタチノコウドウノカクレミノニスルタメニ…」

チルノ

「隠れ蓑って… ということ？」

チルノはSEEDフォーム達の情報を聞いて意味が分からなかった
がSEEDフォーム達は知っている情報をチルノに伝えていく

SEEDヴェナスC（Aの右側に居る）

「ヤツラハ2ネンマエカラコノエリアニイテ、チヨウサニキタオレ
タチヲジツケンダイニシタ」

チルノ

「調査？」

デルナディアンA

「ワレワレハ2ネンマエニコノエリアニSEEDガオチテキタコト
ヲサツチシテソノチヨウサノタメニキテイタ」

レテイ

「2年前… 調査… SEEDフォームの数は15隊… 行方不明になっ
た調査隊も丁度15人… もしかして貴方達は！？」

レテイは集まっていく情報を統合していくとある答えに辿り着いた。

チルノ@両手を掲げる

「今…元に戻すね…」

チルノは両手を掲げてSEEDフォーム達にあるD因子を全て取り込むとチルノ達の目に映ったのは白衣を着た男が5人と同じく白衣を着た女性が5人、そしてガーディアンズのエンブレムを着けた男が立っていた。

レティ

「やっぱり貴方達だったのね…」

????

「おひさしぶりですレティ教官。まさかこのような形で再会できるとは思いませんでした」

レティは1人のガーディアン青年に近付くとその青年は照れ臭そうに再会の挨拶をした。

レティ

「ええ。あの報告を聞いた時は死んだと思っていたわ…」

????

「俺もあの時は死んだかと思いましたよ」

レティとレティを教官と呼ぶガーディアンを抱きしめた。

その仕草はまるで母親が子供を抱きしめている様にも見えた。

フェイト

「レティ。この人は？」

レティ

「ああ…。この子は…」

フェイトの質問にレティは自分以外このガーディアンを知る者はいない事を思い、自分が抱きしめているガーディアンの紹介をしようとする。と先にマガシが口を開いた。

マガシ

「ハイネ・ヴェステンフルス…」

ハイネ

「よつ。マガシの旦那。それにチル坊」

チルノ@ハイネに抱きつく

「ハイネ兄ちゃん！」

ハイネ

「おつとつと…相変わらず元気そうだなによりだ」

フェイト・アトワイト@嫉妬の眼差し

「『……………』」

マガシにハイネと呼ばれたガーディアンはマガシとチルノにも再会の挨拶をするとチルノはハイネに抱きついた。

そんなハイネを嫉妬の眼差しで見る1人と1振りをする。ハイネは自分の紹介を始めた。

ハイネ

「俺はハイネ・ヴェステンフルス。ガーディアンズ総合調査部に所属している。レティ教官の生徒の1人だ」

レティ

「あら。私はもうガーディアンズを辞めているのよ？」

ハイネ

「それでも俺の教官にはかわりないですよ」

ハイネの自己紹介にレティは少しツツコミを入れたがハイネはその

ツツコミを華麗に流した。

だがハイネの紹介にあったレティ教官と聞いたチルノは思わず声を上げた。

チルノ

「レティって元々はガーディアンズにいたの!？」

レティ

「ええ。もっとも大した活躍はしていないけどね」

ハイネ

「またまた御謙遜を…立った1人で暴走したルウ達を薙ぎ倒していませんかですか」

レティ

「あれはあいつらが弱かっただけよ」

ハイネ

「そのルウ達に1個大隊が全滅しましたけどね」

フエイト@滝汗

「1個大隊が全滅…?」

レティ

「SUVウエポンを使っている状態なんて隙だらけじゃない。むしろ1個大隊分の戦力を持ってルウ達を止められなかった同盟軍が弱すぎるのよ」

ガーディアン×4

「……あの伝説は本当だったのか…（ガクガクブルブル）」

ハイネ

「まあ俺達の身の上話ここまでにしちゃうや…」

レティ

「そうね」

レティの爆弾発言に他のガーディアン達も震えあがるがこのままだと話が進まないでハイネは話を切り上げ、チルノは気になってい

た事があつたのでハイネに尋ねた。

チルノ

「この奥には何があるの？」

チルノの質問はSEEDフォーム化していたガーディアン達が語った【ラボ】という単語にチルノは引っかけりを覚えていた。

ハイネ

「この先には【時空管理局】って名乗っている奴らが建てた研究所がある」

フエイト

「時空管理局！？」

フエイトはハイネの言った組織名を聞いて思わず声を上げ、チルノとナギサの顔は険しくなった。

チルノ

「そうなるとアレもあいつらに確保されている可能性が高いね…」

ナギサ@時空管理局自体はワイナール経由で知っている

「ああ。一刻も早く侵入しなくては！！」

ハイネ

「チル坊！」

チルノとナギサは一刻も早くダークファルスの欠片を封印するために先へ進もうとするとハイネに呼び止められた。

ハイネ

「俺はあのラボの内装を知っているから俺が案内するぜ」

チルノ

「ホントに!？」

ハイネはこの奥にある研究所のありとあらゆる内装を知っているため研究所の案内を買って出た。

それはチルノにとつて非常にありがたい申し出だったがここでマガシがストップを掛けた。

マガシ

「待て。ハイネ・ヴェステンフルスは問題ないだろうが他の者は正直まともに動く事は出来んだろう」

レティ

「なら私とフェイトはこの子達の面倒をみるわ」

ハイネ

「教官はこう言ってますけど？」

マガシ

「戦力の分散は避けたいが…まあよい…」

ハイネは何事も内容に動いているが他のガーディアンや研究者達は身体を動かす事が儘ならない状態である。

そのような状態の者を守りながら進む事にマガシは反対した。

しかし、マガシの意見に対してレティはフェイト共にここに残って彼らの面倒をみると言ったのでマガシはこれ以上強くは反対しなかった。

ハイネ

「レティ教官。こいつらは任せましたよ」

レティ

「ええ。貴方もチルノの足手纏いにならないようにね」

ハイネ

「勿論ですとも！」

場所にいた。

チルノ

「なっ！？ここは一体何処！？それにおっさん達は！？」

「??？」

「まさかこんな石ころで捕まえられるとは…」

「??？」

「ラクス様の意向に逆らうとどうなるか教えてあげないとねえ…」
「????」

「おまえさんには悪いが…覚悟してもらうぜ？」

チルノは見知らぬ場所に1人だけの状態にパニックになりかけたが聞き慣れない声を耳にして声のする方向に振り向くとそこには時空管理局の服を着た者達がチルノの目の前に居た。

そうチルノはダークファルスの欠片を餌にこの拠点の最深部まで単身転送されたのである。

チルノ

「誰よ！？アンタ達は！？」

「??？」

「性格までオリジナルの性格にそっくりとはねえ」

チルノ

「オリジナル？なに言ってるのよ？」

チルノは眼帯を掛けた女が言っている意味が分からずに呆けていると髪型がリーゼントの男が眼帯を駆けている女に催促をした。

「??？」

「ヒルダ。サツサとこいつを殺っちまおうぜ？」

ヒルダと呼ばれた女

「そうだねえ… さあやるよマーズ！ヘルベルト！！」

マーズと呼ばれた男

「おう！」

ヘルベルト

「おう…」

ヒルダ

「さあ行くよ！野郎共！！ラクス様の為に！！！！」

管理局員×20000

『ラクス様の為に！！！！』

チルノ@クラウ・ソウスを構える

「ッ！来る！！」

ヒルダは自分が従えている管理局員達に号令を掛けると管理局員達はそれぞれの得物を展開してチルノに殺到した。

襲いかかるチルノは管理局員達の目を見て思わず怯んでしまった。そう、チルノに襲いかかる管理局員達の眼は男女問わず狂気に溢れていたのである。

チルノ@クラウ・ソウスで薙ぎ払う

「う、うわああああああああ！！！！！！」

管理局員×5000@身体の下が2つに別れて絶命

『ラクス様！バンザアアアアイ！！！！！！』

チルノ@人を殺してしまった事に気がつく

「あ、ああ…あああ…」

管理局員×19500

『ラクス様の為に！！！！！！』

チルノが咄嗟に行った攻撃で人を殺してしまった事に気がついたチルノは思わず自分の手を見るとチルノの手には先程の攻撃で絶命した管理局員達の血で濡れていた。

チルノ

「あ、あたいは…人の命を…」

管理局員@魔力でできた弾をチルノに放つ

「とつた!!」

チルノ@胸から血の花が咲いた

「え…?」

茫然自失になっていたチルノにある管理局員の放った凶弾が無情にもチルノの心臓を貫いた。

チルノ@倒れる

「カハツ!!!」

ヒルダ@倒れたチルノの頭を踏みつける

「なんだい情けないねえ…まさかこの程度の雑魚とはねえ…」

ヒルダは心臓を貫かれて倒れたチルノの頭を踏みつけながら嘲笑した。

チルノは自分の頭が踏みつけられている事に認識できない状態であり、そのまま意識を闇へ落ちていった。

????

チルノ

「（あれ…?確かあたいはあいつらにやられて…）」

チルノは辺り一面を見回すとそこは黒一色の空間に自分がいる事に気がついた。

チルノは何故自分がこんな空間に居るのかと頭を捻らせていると突然周りの景色が変わった。

チルノ

「（ここは？見た所何かの試験場なのは分かるけど…）」

チルノの目に映ったのは黒髪の少年と紅髪の少女が命の奪い合いをしており、紅髪の女性は黒髪の少年を追い詰めると少年の動きがいきなりよくなり、手に持っていた剣で紅髪の女性の心臓に突き刺した。

チルノ

「（あの傷だとあの人は助からない…）」

チルノは紅髪の女性が黒髪の少年に傷付けられた傷を見て彼女がもう助からない事を悟ってしまった。

黒髪の少年も紅髪の女性に付けた傷を見て紅髪の女性に駆け寄ると黒髪の少年の目からは涙が溢れていた。

紅髪の女性

『ああ………やっと……会えたね……』

黒髪の少年

『あ、ああ……ああ……』

紅髪の女性

『私を……解放……してくれて……ありがとう……』

黒髪の少年

『そんな……俺は……俺は……！！……』

しかし、紅髪の女性は黒髪の少年に殺されたにも拘らず黒髪の少年に礼をいい、安らかな顔をしたまま息絶えた。

チルノ

「（この人…何で殺されたのに安らかな顔をしているの？）」

黒髪の少年の慟哭が見えた瞬間、景色がまた変わった。

次に見えた景色は致命傷を負った青年が銀髪の女の子をあやかしている光景だった。

茶髪の青年

『はは…。どうやら本当にここまで…みたいだね…』

銀髪の女の子

『おとーさま！…！』

茶髪の青年

『……君をここから遠く離れた世界に飛ばすよ…』

銀髪の少女

『いやです！…！——はおとーさまといっしょにいたいです！…！』

茶髪の青年

『ごめんね…でもこのままだと確実に君も——も殺されてしまう…だから…』

茶髪の青年が銀髪の女の子が首にかけているペンダントについていたボタンを押し、前の景色にも居た黒髪の少年に話しかけた。

茶髪の青年

『……』

黒髪の少年

『——さん…俺は…』

茶髪の青年

『いつかはこうなる…運命だったんだよ…。覚悟はしてた…でも思ってたより…早かったなあ…』

黒髪の少年

『俺があの時警戒を解いて無かったら…！』

茶髪の青年の言葉に黒髪の少年は自分の浅はかさを呪うかのような表情をしていると茶髪の青年は黒髪の少年に語りかけた。

茶髪の青年

『……。いいんだよ……。でも……。頼みが……。あるんだ……。』

黒髪の少年

『——さん？』

茶髪の青年は震える手でポケットから懐中時計を渡すと黒髪の少年に渡した。

茶髪の青年

「——が……。立派に……。成長したら……。これを渡して……。ほしいんだ……」

黒髪の少年

「……。わかりました」

茶髪の青年

「頼んだよ……。僕は……。最後の後……。始末を……。しなくちゃ……。いけない……」

黒髪の少年

「……。さようなら……。——さん……」

シンはキラから懐中時計を受け取った後、なにかの装置を起動させて銀髪の女の子の傍によった。

そして、黒髪の少年と銀髪の女の子はこの世界から姿を消した。

茶髪の青年

「さて……。と……」

茶髪の青年は黒髪の少年と銀髪の女の子が旅だったのを確認するとシャトルの自爆シークエンスを起動させた。

茶髪の青年

「まさか…君と同じように…死ぬなんてね…」

茶髪の青年は自嘲気に笑いながら自分が愛した人物の名だと思われる名前を呟いた。

茶髪の青年

「——いま…そっちにいくよ…」

辺り一面に炎が茶髪の青年を包み込んだ瞬間、チルノは元の黒い空間に居た。

黒一色になったと思ったたら目の前に光が現れチルノに語りかけた。

???

「これが貴女のオリジナルにあたる人物が終わりのない戦いへと踏み出したきっかけです」

チルノ@人の死に様を見せられてイラついている

「アンタはあたいになにをしろっていうの？」

チルノはいきなり人の死に様を見せつけられてイラついている状態で声の主であると思われる光に苛立ち交じりに尋ねた。

???

「貴女にお願いがあるのです」

チルノ

「お願い？」

???

「この世界で再び全てを滅ぼそうとする彼を止めてほしいのです」

チルノ

「そのお願いは叶えてあげたいけどあたいはさっき死んだんだよ？」

チルノは自分に語りかけてくる光に自分は死んだと答えると光が徐々に形を成していくと1人の少女になった。

????

「大丈夫です。貴女はまだ生きています」

チルノ

「え？そうなの？」

????

「はい。今は仮死状態になっていますがわたくしの力を使えば問題ありません」

チルノ

「そっか…。わかった。あたい、頑張ってみるよ!!」

????

「ありがとうございます！あともう一つお願いがあるのですがよろしいでしょうか？」

チルノ

「なに？」

????

「貴女のお名前を教えてください」

チルノ

「いいよ。あたいはチルノ！アンタは？」

????

「ラクス…ただの『ラクス』ですわ。チルノ」

チルノ@満面の笑み

「うん！じゃあ行ってくるねラクス!!」

『ラクス』@優雅に手を振る

「ええ。いつてらっしゃいませ。チルノ」

チルノは少女…『ラクス』の見送ってもらい現実世界へと戻るの

あつた。

モトウブ 雪山地帯 時空管理局モトウブ拠点 最深部

ヒルダ@チルノの身体を壁に放り投げる

「さてと…どうトドメを刺してしてやろうかねえ…」

ヒルダはチルノを壁に放り投げて投げ飛ばされたチルノに舌をなめずりながらどうトドメを刺そうと思案しているとチルノが持つていたダークファルスの欠片が突如として輝き、チルノの身体を包みこんだ。

ヒルダ

「チッ！一体なんだっていうんだい！！」

ヒルダはあまりにも出来事に動揺していると輝きの中からまったく服装がまるで騎士王を連想させる甲冑を着たチルノが飛び出してきた。

チルノ

「さっきはよくもやってくれたね」

マーズ

「な、なぜ生きている！？」

チルノ@右手を翳す

「悪いけど…もうアンタ達に手加減はしないよ！！」

動揺するヒルダ達をチルノは無視して右手を翳すとD因子を取り込む光と同じ輝きを持つ光が徐々に剣の形になっていくとチルノはその光の剣の柄を握ると光は霧散していった。

マーズ

「ハッ！なにかと思ったら只のこけおどしじゃないか！」

ヒルダ

「所詮はタダのガキってことさ！！野郎共！やっちまいな！」

管理局員×19500

『ラクス様の為に！！！！』

ヒルダはチルノの手には何も持っていないと勘繰り部下達に突撃命令を出した。

それが破滅への道だとは気が付かずに…。

チルノ@自身のフォトンを持っている剣に集中させる

「手加減は一切しない。一発で終わらせる！！」

ヘルベルト

「（あの手は何かを握っているように見えるが…まさか！？）」

襲いかかる管理局員達にチルノは手にした剣を構え、管理局員達を見据えた。

この時ヘルベルトは一瞬だけチルノの両手が掴んでいるモノが見え、彼の本能が最大級の警鐘を鳴らした。

チルノ

「エクスカリバー 約束された勝利の剣 ……！！」

管理局員×19500

『ぎゃああああああああああ！！！！！！』

チルノが自身のオリジナルである人物が使える最強の技…エクスカリバー（約束された勝利の剣）を発動し、ヒルダ、マーズ、ヘルベルト以外の管理局員を文字通り消滅させた。

マーズ@手に持つ斧を振りかぶる

「コイツ！いい気になるなよ！！！」

ヒルダ@同上

「さつさと死んじまいな！！」

チルノ

「ハッ！！」

ヒルダとマーズは攻撃を終えて動きを止めているチルノを仕留めようとしたが次の瞬間チルノは目にも映らぬ速さで2人の首を斬り飛ばし、2人は自分が殺されたことを理解できないまま絶命した。

ヘルベルト@1人だけ攻撃に参加しなかった

「なんてこった…あれだけいた味方を一瞬で殺っちまいやがった…」

ヘルベルトは目の前で起きた現実を見てただ呆れることしかできなかった。

20003対1で自分以外の見方は全て目の前の少女に殺された。まさに常識はずれである。

チルノ@クラウ・ソウスを構える

「アンタもまだ戦うつもり？」

ヘルベルト@手に持ったバズーカを捨てる

「いや。どうあがいてもお前さんには勝てないようだからな。降参だ」

ヘルベルトはどうあがいてもチルノに勝てないと判断し、手にしていた斧を捨てると両手を上げて降参のポーズをした。

チルノもヘルベルトに抗戦の意思は無いと確認するとクラウ・ソウスを鞘に仕舞い、彼女を包んでいた甲冑もいつもの服装になっていた。

チルノ

「あたいを恨まないの？」

ヘルベルト

「なんだって？」

チルノ@目尻に涙を浮かべている

「あの2人はアンタの仲間だったんでしょ？あたいはアンタの仲間を殺したんだよ？悲しくないの？」

ヘルベルトはチルノのいきなりの質問に目を丸くしたが、チルノは真剣な表情をしていたためキセルで煙草を吸って一息ついた後チルノの問いに答えた。

ヘルベルト

「悲しくないというのなら嘘だ。だがあいつらはおまえさんに対して戦いを挑んで敗れて死んだ。だから俺はおまえさんを恨みはしないさ」

チルノ

「あたいには…よく…分からないや…」

ヘルベルト

「お前さんは大多数を相手にして完勝したんだ。もっと胸を張ってもいいんだぜ。自慢ではないが俺達は時空管理局でもかなり強い部類に入るからな」

チルノ

「でも…」

ヘルベルト@チルノの頭に手を置く

「それよりもあいつらを止めてくれて感謝している」

チルノ

「へ？」

チルノはヘルベルトが感謝していると言われて変な声を上げてしまったがヘルベルトは話を続けた。

ヘルベルト

「あの2人は随分前の任務で負傷してな。その後受けた手術でんな状態になってしまった…」

チルノ

「どうということ?」

ヘルベルト

「要はお上達の都合で自分達に絶対服従を強制されていたってわけだ…」

チルノ

「そんな…」

ヘルベルト

「だから…おまえさんが気に病む必要はない」

チルノ

「……………」

ヘルベルト

「それにおまえさんは泣きそうな顔よりも周りを癒すような笑みが似合うぜ?」

チルノ

「そっかな?」

ヘルベルト

「ああ。だからおまえさんはこれ以上あいつらの為に泣いてくれなくていい」

チルノはヘルベルトの励ましの言葉を聞いて涙を拭くと奥の扉からマガシ達が突入してきた。

ナギサ@鬼の形相

「チルノ！！無事か！！？」

マガシ@同上

「まったく！！無闇に突撃するするでない！！！」

ハイネ

「まあまあチル坊も無事ですし、結果オーライですぜ」

チルノ

「おっさん…それにナギサにハイネ兄ちゃんも…」

チルノは突然入ってきたマガシ達に驚いているとマガシはヘルベルトにクリムゾンを突き付けた。

マガシ

「覚悟は出来ているか？」

ヘルベルト

「ああ。あんたらが来た時点で覚悟は出来ているよ。やってくれ…」

ヘルベルトの返事を聞いたマガシはチルノが何か言う前にクリムゾンを振るうとヘルベルトの着ていた服に取り付けられていた時空管理局のエンブレムのみを斬り裂いた。

チルノ

「へ…？」

マガシ@クリムゾンを仕舞う

「…これで時空管理局に居た貴様は死んだ」

ヘルベルト

「おいおいいいのか？ここで俺を見逃したらまたこの嬢ちゃんを殺すかもしれないんだぜ？」

チルノはマガシの行動に目を点にし、ヘルベルトは予想とはまったくことなる自分の結末に思わず笑ってしまった。

マガシ

「私はあくまでチルノ（このバカ）のチームの一員だ。目の前の敵をどうするかはこいつの判断次第だ」

ヘルベルト

「へえ…で、おまえさんは俺をどうするつもりだ？」

マガシの言葉を聞いたヘルベルトはチルノに改めて自分の処遇を聞くとこれまた彼の予想の斜め上に行く答えが返ってきた。

チルノ

「おっちゃん…名前は？」

ヘルベルト

「ヘルベルト・フォン・ラインハルトだ」

チルノ@満面の笑み

「じゃあ…ヘルベルトのおっちゃんはこれからあたいのチームで働いてもらうね!!」

ヘルベルト@目が点になる

「は？」

マガシ@諦めたように首を横に振る

「はあ…」

ヘルベルトはマガシ以上に自分の予想の斜め上に行く答えに目を点にした後チルノに尋ねた。

ヘルベルト

「……………いいのか？」

チルノ@目尻に涙を浮かべる

「ダメ…？」

ヘルベルト

「う……。わかったわかった俺の負けだ！」

チルノ@天然人たらし

「うん！じゃあこれからよろしくね！！あ、あと……ナギサ！」

ナギサ

「どうした？」

チルノ

「ナギサもあたいと一緒に戦ってくれるかな……？」

ナギサ

「ああ！私でいいのなら共に戦おう！！」

その後、ナギサとヘルベルトという新たな仲間を得たチルノはダークファルスの欠片を回収し、アジトへ戻るのであった……。

3時間後

モトウブ ダグオラ・シティ近辺 チルノのアジト

チルノ

「ただいまー！」

フェイト@マガシの指示で先に帰還していた

「あ。おかえりチルノちゃん」

レティ

「その顔を見るとうまくいったみたいね」

チルノ

「うん！それと新しい仲間も増えたよ！！」

アトワイト

『新しい仲間？』

チルノ

「うん！おっちゃん！ナギサ！入ってきて」

チルノが嬉しそうな顔で帰って来たのを見たフェイト達は安心した

顔でチルノを迎え入れるとチルノは新たな仲間であるナギサとヘルベルトを呼んだ。

ヘルベルト@ポリポリと頬をかく

「あー……ヘルベルト・フォン・ラインハルトだ。これから世話になるぜ」

ナギサ@真顔

「これからは貴女達と共に戦うことになったナギサだ。よろしく頼む」

フェイト・レティ・アトワイト

「『え？えええええええ！！！？』」

その後、フェイト達の声はチルノのアジトに響いたのであった…。

以上が今回の戦いの記録だ

この戦いの後、時空管理局は襲撃してこなくなった

そして、チルノもこの戦いで何か自分の戦いに関する答えが見えたらしいな…

だが気を抜く事は出来ん…

奴らは今回の戦いでチルノの能力に目を付けたようだからな

今は何とかなっているが、あちらは戦力が腐るほどある事に対し、こちらには未だに少数だ。

近いうちに更なる勢力の拡大を行うか同盟を結ばねばならぬな……

番外編「氷精達の冒険」第3話「時空管理局」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は新キャラ2人加入とチルノ無双回でした。そして無駄に長い

(オイ

はい…チルノは遂に人を殺めてしまいました。

賛否はあると思いますが生温かい視線で見ただければ幸いです。

今回はチルノ達とマガシ達が別れて行動するお話になります。

では(・・・)ノシ

番外編〈氷精達の冒険〉第4話「ニューデイズへ…」

時空管理局のモトウブ拠点を攻略して早い事に2週間たった
あの戦いの後私はチルノのチームの一員として迎え入れられた
チームの一員になってからは色々な事をした
チルノと一緒に依頼を受託しに行ったり
フェイトと一緒にアイテムを買いに行ったり
レティとアトワイトから治療の手ほどきを受けたり
ヘルベルトの時空管理局に居た時の話を聞いたり
マガシと模擬戦をして熱くなりすぎて地形を変えてしまつてワイナ
ールに説教されたり
チームのみんなと共に依頼を遂行したり
2週間という短い期間だったが本当に楽しい日々が続いている
けれど…

ナギサ

「暇だな…」

ワイナール

『僕達とチルノちゃん以外は全員依頼で出動しているからねえ』

チルノ@手を振りながら駆け寄ってくる

「ナギサ」

ナギサ

「む。チルノか」

チルノ

「ハイン兄ちゃんがアレのある場所がわかったらしいからクバラ・
シティのジャンク屋L&Kに来てくれって言つてたよ！」

ナギサ

「わかった。すぐに行く」

チルノ@とてとてと走り去っていく

「じゃあ先に入り口で待ってるね！」

ワイナル

『ナギサちゃん…』

ナギサ

「どうしたワイナル？」

ワイナル

『もしかしたらチルノちゃんなら君の願いを叶えてくれると思うよ』
ナギサ

「そうか…」

時折怖くなる事がある

この何気ない日常が消え去ってしまいたくない…

この日常を忘れたくないと考えてしまっている…

私の使命が終わった時は私の死が含まれているのだから…

今回はチルノ達がチームを2つに分け、私とチルノがニューデイズ
に行くことになり、マガシ達がモトウブに残るという話だ…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y 番外編

～氷精達の冒険～

第4話「ニューデイズへ…」

モトウブ クバラ・シティ ジャンク屋L&K

時空管理局のモトウブ拠点を制圧してから2週間がたったある日。

チルノ達は救出したガーディアンであるハイネの連絡でクバラ・シ
ティにある行きつけの店である『ジャンク屋L&K』を訪れていた。

チルノ

「こんにちは」

キサト

「いらっしやい。チルノちゃん」

ロウ

「よう！チルノの嬢ちゃん！ハイネなら工房の中に居るぜ」

チルノ@奥へ走っていく

「ありがとう！」

ナギサ

「失礼する」

ロウはチルノ達が工房に入っていくのを確認した後、店のシャッターを閉めた。

ハイネ

「おっ来たかチル坊」

チルノ

「お待たせ！」

ナギサ

「失礼する」

ハイネ

「まあ2人共座ってくれ。少し話が長くなるからな」

チルノとナギサが工房の中に入るとそこにはガーディアンズの制服を着たハイネが椅子に座って待っていた。

チルノとナギサはハイネに促されて椅子に座るとハイネは懷から何かのカードを取り出すと壁にあるディスプレイのカード挿入口に持っているカードを挿入した。

ハイネの持っているカードが挿入されるとディスプレイに光が宿るとディスプレイにはニューデイズの全体図が映し出された。

ハイネ

「俺の方の伝手で手に入った情報だがニューデイズの亜空間航行実験発表会場でチル坊が言っている石と思われる石が発見されたらし

い」

チルノ

「亜空間航行って今グラールで注目されている？」

ハイネ

「ああ。突然現れたもんだから施設に居たスタッフも混乱したらしい」

チルノ

「そりゃ目の前にいきなり現れたらびっくりするよね…」

ハイネはチルノと他愛もない会話を続けながら端末を操作すると次はモトウブが映し出された。

ハイネ

「モトウブの方の発見報告はないらしい。どうやらおまえさん達が確保したのが最後の1個だったんだろうな」

ナギサ@思案顔

「そうなるとモトウブで欠片を捜す意味は無くなってしまったな…」

チルノ

「そういえばあの欠片はどれだけ集めたっけ？」

ナギサはこれ以上モトウブで搜索する理由が無くなった今、どうやってニューデイズに行くかを思案しているとチルノが何か思い出したかのように尋ねてきた。

ナギサ

「全108個のうち私が持っている欠片は105個だ」

チルノ

「ナギサが持っていない3個のうち1個はあたいが持っているから…」

ナギサ

「あと2個だな」

今、自分達が持っているダークファルスの欠片はナギサの集めた欠片は105個でチルノは1個である。

つまりあと2個集めればナギサの使命が果たせるのである。

だがチルノはナギサが使命を果たした時、彼女がどうなるのかはワイナルの表情で勘付いていた。

ナギサが使命を果たした時、彼女に待っているのは死である。だが、更に厄介な事が起こっている事をハイネから伝えられた。

ハイネ

「あの時空管理局っていう奴らの拠点がググ砂漠の地下にある事がわかった」

チルノ

「なっ!？」

ハイネ

「今まで動きが無かったのは1週間後に行われる亜空間航行実験成果発表会に発表会場を襲撃するために戦力をニューデイズに集結させるつもりだと俺は読んでいる」

チルノ

「そうなるとあたい達もニューデイズに行った方がいいよね？」

ハイネ

「ああ。だからチル坊とそこのお嬢さんは俺と一緒にニューデイズに来てほしい」

ナギサ

「どうする?この事はマガシに話を通しておいた方がいいと思うが...」

チルノ達はハイネの話を聞いてすぐにでもニューデイズに行きたいと思っていたがモトウブにある時空管理局の拠点を放っておくことは出来ないと頭を悩ませているとハイネの一言でその問題は解消さ

れた。

ハイネ

「実はチル坊達をニューデイズに連れて行ってほしいとマガシの旦那から依頼されたんだよ」

チルノ

「え？おっさんが？」

ハイネ@頭を掻く

「ああ。理由を聞いたら『チルノの奴の面倒ばかり見ていては私が暴れられる時間が取れない。だから貴様はチルノとナギサをニューデイズまで連れて行け』って言われてな…」

チルノ

「あはは…おっさんらしいや…」

ナギサ

「では出発はいつになるんだ？」

チルノとナギサはマガシから頼まれたとハイネに聞くと自分達の憂いを断ってくれたマガシに感謝し、いつニューデイズに出発するのか尋ねた。

ハイネ

「俺の武器の修理をロウに任せていてな。修理が完了するのは3日後だから3日後にニューデイズに行くぜ」

チルノ

「うん。わかった」

ナギサ

「わかった」

チルノ

「じゃああたい達は…」

ロウ@作業服

「ちょっと待った！」

チルノ

「ロウ兄ちゃん」

チルノはハイネから出発の日時を聞いた後、店から去ろうとするとそこに作業服を着たロウがやってきた。

ロウ

「マガシの旦那がチルノの嬢ちゃんが作った武器の点検を頼まれてな。それでチルノの嬢ちゃんもここに残ってもらっけだけどいいか？」

チルノ

「おっさん……」

ナギサ

「なら私も自分の得物を点検したいのだが構わないだろうか？」

ロウ

「ああいいぜ。この工房は貸出無料だから自分が納得するまで点検していいぜ」

ナギサ

「感謝する」

チルノ@ピースメーカーをロウに渡す

「じゃあよろしくね。ロウ兄ちゃん」

ロウ@ピースメーカーを受け取る

「おう！最高の出来にしてやるからな！楽しみにしてくれよ！」

チルノ

「うん！」

その後、チルノはマガシに3日間ロウの店に泊まると伝え、ロウに武器の点検を依頼して自身も依頼の遂行する際に最も使用するクラウ・ソウスの刀身を磨くのであった。

3日後

モトウブ ダグオラ・シティ PPTシャトル

チルノ

「じゃあおっさん、おっちゃん行ってくるね！」

ナギサ

「では行ってくる」

ヘルベルト

「おう。気をつけて行って来いよ」

マガシ

「ハイネ・ヴェステンフルス。この2人を頼むぞ」

ハイネ

「了解です。ガーディアンズ復帰の最初の依頼…こなしてみせますよ」

チルノとナギサはマガシとヘルベルトに見送られ、ハイネと共にこのモトウブを旅立ったのであった。

30分後

PPTシャトル内

チルノ

「うわぁこれがニューデイズ…映像では何度も見ているけど実際に見るのは初めて！」

ナギサ

「ああ。私も生で見るのは初めてだ」

ワイナール

『正確には見る機会があったけど興味が無かったただけどね…』
ナギサ@少し顔を赤くする

「うるさいぞワイナール」

ハイネ

「2人共そろそろ大気圏に突入するからシートベルトを締めておけよ」

チルノ

「はい」

ナギサ

「わかった」

チルノ達を乗せたシャトルは何のトラブルもなくニューデイズに着し、シャトルを降りたチルノ達はGフライヤーで目的地である亜空間航行実験成果発表会場へ向かったのであった…。

これが今回の話の内容だ

残り2個のダークファアルスの欠片のうちの1つがあるニューデイズに私とチルノがやってきた

ここで私達はある人物と出会い、共に戦う事になった…

ダークファアルスのオリジナルであり、ワイナールが言っていた最強の戦士…

シン・アスカという男に…

番外編〈氷精達の冒険〉第4話「ニューデイズへ…」（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は残る2つのダークファルスの欠片のうちの1つがある場所ニューデイズへ行くお話です。

前話に比べると5分の1以下という少ない…（汗

今回はキャラ設定を投稿します。

では（．．）ノシ

番外編〈氷精たちの冒険〉キャラ設定+@2（前書き）

番外編〈氷精たちの冒険〉の3話〜4話に登場するキャラクターなどの設定と何故SEEDフォームが現れた理由が記述されたネタバレとなっています。

苦手な方は閲覧しないことを推奨します。

番外編〈氷精たちの冒険〉キャラ設定+@2

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y 番外編

〈氷精達の冒険〉

キャラ設定+@2

キャラ設定

ヘルベルト・フォン・ラインハルト（31）

元は時空管理局次元航行部隊に3年間所属、階級は一等空尉。

フェイトとはJS事件前から面識があり、JS事件の時は機動六課に所属し、過度の練習をしていたティアナを止めたり、エリオとキヤロの相談役になったり、育児に悩むフェイトとなのはの（父親的な視点での）相談役になったりヴィヴィオの救出をしたのはいいが力を使い果たして閉じ込められたのはとヴィヴィオを救出したりと縁の下の力持ちとして機動六課を助けていたため機動六課の殆どの面子は彼に頭が上がらなかったりする（はやてが一番頭が上がらなかった）。

元は元帥に忠誠を持っていたが2年ぶりに再会した仲間の急変に不信感を持つようになり、はやてが時空管理局を脱走する際に次元航行艦の奪取の手引をし、はやてと別れる際に自分が管理を任されていたロストギア『サイコウオンド』を彼女に渡した。

その後、事態を知った元帥によって懲罰の意味も兼ねてチルノと彼女の持つ3振りの剣の鹵獲を命令された。

C・Eに居た時のチームの仲間であるヒルダ・ハーケン、マーズ・シメオンと共にチルノをあと一步まで追い詰めるがチルノの持っていたダークファルスの欠片に封印されていた人格の手助けによってチルノが覚醒し、ヘルベルトを除く時空管理局のメンバーは全滅、これ以上戦っても勝てないことと時空管理局：ひいては現在の元帥

に不信感を持っていたため投降した。

その後チルノにスカウト（という名をお願い）でチルノのチームに所属することになる。

チームでの役割は作戦の方針をある程度形にする役割とチルノの相談役である。

煙草はキセルで吸うという拘りがある。

使用武器はグッレ・バズッカとブッリツフェンダー、カリバーン

趣味：グレネード集め

嫌いな人物像：子供を泣かせる奴

悩み事：1人で辛さを抱え込んでいるチルノ

ナギサ・アーデルハイト・ハウザー（18歳）

現在グラールでは発見されていない第5の種族『デューマン』の少女。

ダークファルスの欠片を集める為にグラール中を駆け巡り、108個あるうちの104個を集めた。

チルノに接触した理由は1人では攻略不可能な場所にダークファルスの欠片が保管されており、ダークファルスの欠片を確保するために現在モトウブで最強と名高い傭兵チームであるチルノの助力を借りるためである。

時空管理局のモトウブ拠点を攻略した後はチルノのチームに所属することになり、依頼を受けるついでにダークファルスの欠片を1個確保した。

チームでの役割は専らチルノの護衛である。

好きな食べ物：プリン

苦手な事：頭脳労働全般@要は脳筋

悩み事：チルノと一緒に居る時に感じる嫉妬の眼差し

ワイナール（27歳）

ナギサに宿る旧文明人。

ナギサがチルノのチームに入るまでの話相手であり、やたらと暴走するナギサのストッパー役である。

元は科学者でありパルムには彼の作った巨大船が存在する。

カムハーンとの仲はシンが旧文明時代のグラールに訪れるまでは犬猿の仲であったがシンの仲介で友人となる。

最近はナノトランサーの技術を応用して一瞬だけなら実体化するという離れ業でナギサの暴走を止めている。

また、ダークファルスの正体を知る数少ない人物である。

尚、服装はナギサに変な服装だと言われて以降白いT・シャツとジーパンという服装をしており、T・シャツはその時の気分によって模様が変わっている。

趣味：ナギサちゃんいじり

苦手な人物：シン（色々と頭が上がらないため）

悩み事：日に日にエスカレートしていくナギサの暴走癖

ハイン・ヴェステンフルス（27歳）

ガーディアンズ総合調査部所属のガーディアン。

C・Eでガイアガンダムของทีมライフルから放たれるチームからシンを庇い戦死したと思われたが爆発のショックでグラールに飛ばされ、ルカイム・ネーヴに保護される。

保護された後はネーヴの勧めでガーディアンズの養成学校に入学して首席で卒業し、総合調査部の所属となった。

ガーディアンとなった後は地道に成果を残し、彼の实力を評価したガーディアンズ本部の命令でカレンの教官となった。

SEED事変時はヴィヴィアンの教育係を務めたり、ライアの右腕として活躍し、彼女の養父であるオーベル・ダルガンの殉職後は彼女の支えとなりながらルミアの教官もこなし、ガーディアンズ機動

警護部隊長となってリュクロスに突入してルウの身体を借りたヴィアンとヘルガに取り込まれても反撃の機会をうかがっていたマガシと共にイルミナスの長であり、SEED事変の主犯格と思われるカル・フリードリヒ・ハウザーを打倒し、ダークファルスの最終決戦に勝利してダークファルスに取り込まれていたルミアを救出した。

SEED事変後は軌道警護部隊長の座をルミアの父であるオルソン・ウェーバーに譲って自身は元の鞘である総合調査部に戻った。

SEED事変が終わってから2年後にモトウブの雪山地帯に発見されたイルミナスのモノと思われる施設を調査する調査隊の護衛として問題の施設に向かうがハイネを含む調査隊は全員施設の人間に捕えられ、D因子を強制的に打ち込まれてSEEDフォームにされた。それから更に2年後にダークファルスの欠片を回収しに来たチルノ達と再会、チルノの力で無事に人の姿に戻り、ガーディアンズに復隊した。

復隊後はチルノ達のダークファルスの欠片に協力している。

ちなみにチルノとはSEED事変後にマガシの紹介で知り合い、チルノはすぐにハイネに懐いてハイネの事を『ハイネ兄ちゃん』と呼び、ハイネも親しみを込めて『チル坊』と呼んでいる。

レティとは教官と生徒の間柄であり、レティはSEED事変後にガーディアンズを辞めたがハイネは尊敬の意味を込めて『レティ教官』と呼んでいる。

尚、SEEDフォームになった際にダークファルスの正体を知っており、チルノがSEEDフォームの亜種ということも知っている。使用武器はカン・ウーと邪鞭ウロボロス、ガルド。

趣味：バンド

飲み仲間：レオ、イーサン

苦手な物：女の子の涙

ヒルダ・ハーケン（享年27歳）

時空管理局次元航行部隊所属の三等空佐。

元々現在の時空管理局元帥に忠誠を誓っていたが2年前に任務に失敗した際に致命傷を負って集中治療をされた後はまるで狂信者とも言わんばかりの状態になり、ヘルベルトが時空管理局に不信感を抱かせる原因となった。

チルノと彼女の持つ3振りの剣の鹵獲の命令を受けてチルノを追いつめるが覚醒した彼女の一閃によって首を刎ねられ、殉職する。

マーズ・シメオン（享年31歳）

時空管理局次元航行部隊所属の一等空尉

元々現在の時空管理局元帥に忠誠を誓っていたが2年前に任務に失敗した際に致命傷を負って集中治療をされた後はまるで狂信者とも言わんばかりの状態になり、ヘルベルトが時空管理局に不信感を抱かせる原因となった。

チルノと彼女の持つ3振りの剣の鹵獲の命令を受けてチルノを追いつめるが覚醒した彼女の一閃によって首を刎ねられ、殉職する。

『ラクス』（年齢不明）

ダークファアルスの欠片の中に封印されていた少女の人格。

非常に温厚で戦いを好まない性格の持ち主である。

何もできない自分の代わりにチルノに『彼』を止めてほしいと願い、彼女の持つ能力を解放した。

声と姿はメサイア戦役を終結に導いた英雄ラクス・クラインと酷似している。

チルノの使った能力

エクスカリバー 約束された勝利の剣

チルノの中に眠っていたSEEDの力が解放された時にチルノが自

分の身体のフォトンを形成し、目の前の敵にそのエネルギー全てを叩きこんだ技。

非常に強力な技だがチルノのオリジナルである人物の技と比べると破壊力はチルノに軍配が上がる。

ただしチルノのオリジナルは威力が調整可能で使用可能回数は無制限なのに対し、チルノは威力の調整ができず回数は1回のみのため使い所が限られる。

剣の形は Fate / stay night に登場するキャラクター『セイバー』の持つ聖剣『エクスカリバー』と同じ形である。

騎士王の甲冑

エクスカリバー 約束された勝利の剣 が発動した際にチルノの展開されていた甲冑。

非常に高い防御能力を持ち、エクスカリバー 約束された勝利の剣の余波を受けてもびくともしない程の防御力を誇る。

尚、この甲冑は任意のタイミングで展開できる。

甲冑の形は Fate / stay night に登場するキャラクター『セイバー』が身に着けている甲冑と形である。

チルノのオリジナルの人物について＊本編のネタバレ注意

彼女のオリジナルの人物は本編の主人公の1人であるシン・アスカ。

番外編く氷精たちの冒険くキャラ設定+@2（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は番外編の設定集となっております。

ダークファルスの正体については察している方もいらっしゃると思いますが本編の亜空間航行実験発表会防衛回終了後に本編の設定集に書きます。

次の投稿はスクリーンチャット集と外伝となります。

では（・・）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3834n/>

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

2011年12月25日15時49分発行